横　江

－県営ほ場整備事業郷地区に係る発掘調査報告書－

1992

石川県立埋蔵文化財センター

横　　江

－県営ほ場整備事業郷地区に係る発掘調査報告書－

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は石川県松任市横江町地内に所在する横江ゴクラクジ遺跡・横江Ｅ遺跡・横江Ｃ遺跡・横江荘遺跡・横江Ａ遺跡・横江Ｂ遺跡・横江古屋敷遺跡・横江館跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．これらの遺跡の発掘調査は、石川県農林水産部耕地整備課施工の県営ほ場整備事業郷地区に関して同課の依頼により、石川県立埋蔵文化財センターが事前の発掘調査を実施したものである。発掘調査および報告書刊行に係る費用は、石川県教育委員会・石川県立埋蔵文化財センターとの協議に基づく石川県耕地整備課の費用負担と、文化庁の補助による。また事前協議および調査の実施に関して、石川県耕地整備課、石川県松任土地改良事務所、地元工区長はもとより、地元町民の御協力を得た。記して深く感謝したい。

3．埋蔵文化財の発掘調査は、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の保存に影響が生じる工事箇所に限定してその対象とした。具体的には排水路設置箇所を対象とし、田面部に存在する埋蔵文化財については、石川県立埋蔵文化財センターが実施した事前の分布調査の結果をもとに盛土工法の措置をとって埋蔵文化財の現状保存を図っている。

4．各遺跡の発掘調査機関、担当者は次のとおりであり、横山貴広・安宅　努・広岡吉紀・西谷昌司・藤重　啓（調査員）の補助を得た。

昭和61年度調査	昭和61年11月15日～12月５日	小嶋芳孝・三浦純夫
昭和62年度調査	昭和62年７月３日～８月13日	藤田邦雄
昭和63年度調査	昭和63年８月２日～11月30日	田嶋明人・鳥越　浩
平成元年度調査	平成元年11月１日～12月15日	鳥越・川畑　誠
平成２年度調査	平成２年10月22日～11月５日	安　英樹・川畑

5．出土遺物の整理作業は、平成２年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。

6．本書の編集は川畑が担当し、次のように分担して執筆した。また、図版作成等については広岡吉紀、藤重　啓、田畑　弘、松田英博、藤田美和子、長谷川啓子、大藪智子、宮下与真の各氏の御協力・御教示を得た。

第１章　川畑
第２章　川畑
第３章　三浦
第４章　藤田
第５章　木立　雅朗
第６章　川畑
第７章　川畑

7．本書における挿図中の方位は真北を示しており、水平基準の数値は海抜高である。また、分

担執筆としたため、用語等の統一は図っていない。

8．発掘調査で得られた遺構・遺物の実測図、写真、出土遺物等の資料は石川県立埋蔵文化財センターが一括保管している。

目　　次

第１章　位置と環境……1
　第１節　地理的環境……1
　第２節　歴史的環境……1
第２章　調査に至る経緯と経過……5
　第１節　調査に至る経緯……5
　第２節　調査の経過……5
第３章　昭和61年度調査（横江ゴクラクジ遺跡）……9
　第１節　概要……9
　第２節　各節……9
　第３節　若干の所見……13
第４章　昭和62年度調査（横江Ｅ遺跡）……15
　第１節　調査の概要……15
　第２節　遺構と遺物……16
第５章　昭和63年度調査（横江Ｃ遺跡、横江荘遺跡範囲確認調査）…31
　第１節　はじめに……31
　第２節　横江Ｃ遺跡の発掘調査……31
　第３節　横江荘遺跡の範囲確認調査……52
第６章　平成元年度調査（横江Ａ遺跡、横江Ｂ遺跡、
横江古屋敷遺跡、横江館跡）……73
　第１節　調査の概要……73
　第２節　西トレンチ（横江Ａ遺跡）……73
　第３節　東トレンチ（横江Ｂ遺跡、横江古屋敷遺跡）……76
　第４節　南トレンチ（横江館跡）……122
第７章　平成２年度調査（横江館跡）……131
　第１節　調査の概要……131
　第２節　遺構……131
　第３節　小結……135

第１章　位置と環境

第１節　地理的環境

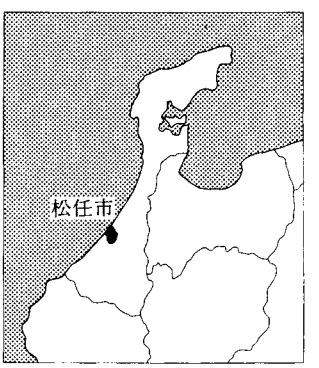
本書で報告する遺跡は石川県松任市横江町地内に所在する。横江町は松任市の市街地中心部より約３～４km北東側に位置し、東側で安原川を挟んで金沢市上荒屋および野々市町長池地内に接する。横江町を含む松任平野は全国的に早場米の産地として知られ、一面に美田が広がるその中に集落が点在し、散村的な農村風景を色濃く残している。しかし、近年は横江工業団地に代表される企業の進出、また金沢市のベットタウンとしての市街地の拡大等により急速にその姿を変えつつある。

遺跡周辺は、「白き神々の座」といわれる霊峰白山を源とする県下最大の河川、手取川の形成した扇径約12km、開角約110°の扇状地扇端部北辺に位置し、北西側に緩やかな傾斜を示す。水田面での標高は９～12mを測る。また北西側約2.5kmには海岸砂丘が発達し、その西側に日本海が広がっている。現在、遺跡周辺は平坦な水田が広がるが、それは明治時代以降に施行された耕地整理後の姿といえる。『横江史』[1]によれば耕地整理以前の地形は「地勢概シテ平坦ナルモ、自然ノ傾斜ハ総テ南ヨリ北ニ向ヒ、東西ニハ軽少ノ波状ヲ呈ス」とあり、本来は第５章で復元されるような南北方向に微高地と微低地が複雑に連なる微地形を呈していたと考えられる。これらの地形は旧手取川の分流およびその氾濫によるものといわれ、現在でも遺跡周辺には旧河道の痕跡と考えられる郷用水等の用水が網の目のように走っている。また遺跡周辺（特に北側）は地下水面が高く、「ショウズ」と呼称される地下水の季節的自噴が近年まで確認されていた。なお、藤則雄氏によれば[2]、横江町周辺は礫層の上に表土が90cm以上堆積している。手取川が古い時期に南側に移動し、氾濫の被害を被る可能性がより低くなったことを考え合わせれば、比較的安定した地域といえる。このことは第２節で述べるように松任平野の中でも古くから人間の定住が確認されていることからも明らかである。

第２節　歴史的環境

横江町を含む手取川扇状地扇端部北側から海岸砂丘にかけての地域は、県下でも有数の遺跡集中地帯として知られている。

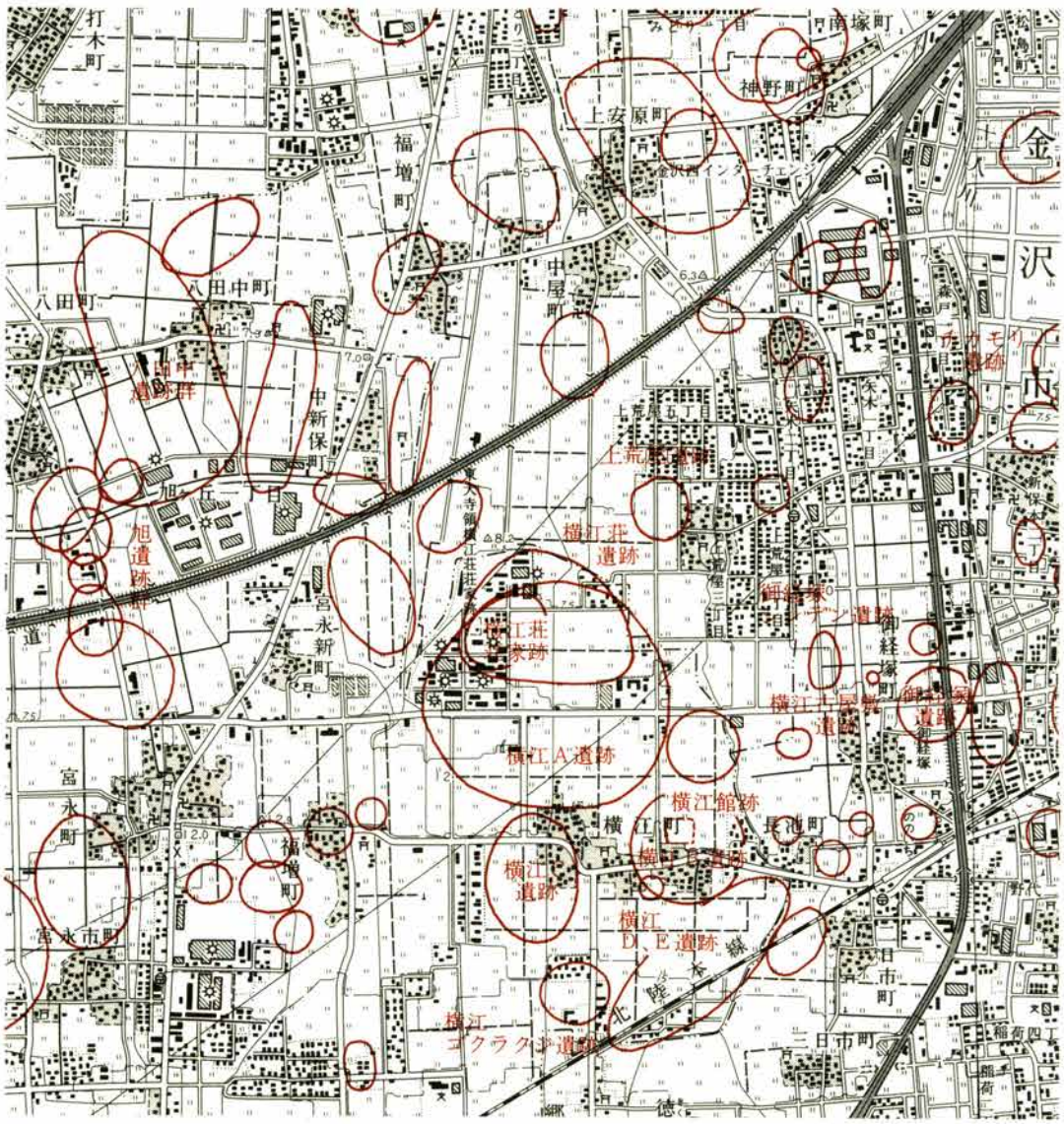
同地域に人間の定住が確認できるのは縄文時代後期以降である。例えば、巨大環状木柱列で有名な新保本町チカモリ遺跡（国指定史跡）、県下最大級の集落遺跡である御経塚遺跡（国指定史跡）、中屋遺跡などは中核的な集落と考えられるし、他に横江Ａ遺跡、横江ゴクラクジ遺跡、上荒屋遺跡なども存在する。これらの集落遺跡は地下水の自噴地帯の微低地に互いに近接して存在し、松任平野においては数少ない採集経済をおこなえる条件を満たしていた地域だった



第１図　松任市の位置

と考えられる。

このことは弥生時代中期に属する集落遺跡が縄文時代晩期の遺跡の分布域にほぼオーバーラップすることと決して無縁ではないと思われる。弥生時代中期前半の土器の出現イコール稲作農耕の定着を示すか否かは議論の分かれるところであるが、少なくとも中期後半には新しい文化に移行、定着させる基盤が準備されていたと思われる。横江町周辺の遺跡としては、今回報告する横江C遺跡、横江荘遺跡（横江荘遺跡範囲確認調査）、横江古屋敷遺跡や、また八田中遺跡、矢木ジワリ遺跡、上荒屋遺跡等が確認されている。弥生時代後期に入ると松任平野扇端部北側（扇央稜線である徳光町以北）の広い範囲にわたり、手取川のつくる微高地（島状地形）をブロックとし、



第２図　周辺の遺跡（S＝1/25000）

集落遺跡の分布が拡大していく[3]。横江町周辺では御経塚ツカダ遺跡、方形周溝墓が検出された横江Ａ遺跡、また今回の報告にある横江荘遺跡、横江古屋敷遺跡等が確認されている。弥生時代終末になると島状地形に立地、後期に存続した「中核的な」集落を軸として、広範囲にわたり「短期間・小規模」な集落が爆発的に増加・拡散する状況を示す。これについて吉岡康暢氏[4]は大規模集落が解体し、経営規模が縮小したためと考えられている。同地域でも、後期からの集落遺跡である横江Ａ遺跡、横江古屋敷遺跡に加え、横江Ｅ遺跡等が出現する。

古墳時代になると「現象的に」同地域の遺跡数は減少し、集落の規模、構成に何らかの大きな変化があったと考えられる。近年の発掘調査の成果から少しづつではあるがその様相が明らかとなりつつあり、例えば上荒屋敷遺跡[5]では古墳時代前期に属する77棟の建物が確認されている。担当者は倉庫の割合が高いことから、「一般的な集落ではなく、在地首長層に関係した大集落」と考えており、時期的に並行する御経塚シンデン遺跡で検出された古墳群との関係を指摘している。また横江Ａ遺跡、横江Ｃ遺跡、横江荘遺跡でも古墳時代前期の遺物が出土している。墓域については御経塚シンデン遺跡で、４世紀中頃の首長墓と思われる前方後円墳（全長約33m）を含む約10基の古墳群が確認され、今回の報告にあるように、明確ではないが古墳時代前期と思われる方墳の周溝の一部が横江荘遺跡、横江古屋敷遺跡で検出されている。このような在り方は弥生時代後期以降継続的に集落遺跡が確認される旭遺跡群で、島状地形を単位として墓域と集落がセットとなる様相に類似する。横江周辺でも似たような展開を想定することが可能と考えられる。つまり古墳時代前期には一度拡散した集落が、各島状地形を単位として、弥生時代後期以降の「中核な」集落に「集約」されていく状況が現出した可能性が高い。また、その際の集落の立地は、前代までとはやや異なった地点となっているようだ。古墳時代後期の調査例は少ないが、やはり各島状地形を単位とするブロック毎に集落が展開していくと思われる。横江町周辺では横江Ａ遺跡、横江荘遺跡で同時期の遺物が出土している。また前述の旭遺跡群においても一塚オオミナクチ遺跡が確認されている。

奈良・平安時代になると横江町周辺は当初越前国、引仁14（823年）の加賀立国後は加賀国石川郡に属する。10世紀前半に編纂された『和名類聚抄』によれば、石川郡の郷として中村、富樫、笠間、掠部、三馬、拝師、井手、味知の八郷があるが、横江町周辺はどの郷に属するか不明瞭な位置関係にある。また横江町周辺の遺跡の分布は７世紀後半～８世紀前半代にかけては明瞭に確認できず、ちょうど遺跡の空白域のような様相を呈する。それに対して、同じ安原川水系で約３km南側の扇央部、野々市町末松周辺には大規模な集落（寺院を含む）の展開が認められ、好対照をなす。

このような状況下で、８世紀後半代に初期荘園である横江荘遺跡（国指定史跡）、上荒屋遺跡が出現する。横江荘遺跡は昭和45年の発掘調査で荘屋跡と考えられる掘建柱建物跡群が検出され、引仁９年（812年）に桓武天皇の皇女の朝原内親王から東大寺に施入された東大寺領横江荘に比定されている。松任市教委の数次にわたる調査により[6]、遺跡の範囲は約６万㎡におよび、荘屋跡の東側には整然と並ぶ倉庫群が確認されている。また上荒屋遺跡は金沢市教委の調査により、河川で一町四方に画された範囲に掘建柱建物跡群が展開し、約700点の墨書土器、55点の木簡、祭祀

遺物が出土した。墨書土器には「庄」「東庄」等の文字がみえ、やはり東大寺領横江荘の一部を構成したと考えられる。これらの調査により、次第に初期荘園の構造が明らかとなりつつある。

この東大寺領横江荘の出現については、今回の調査を含めて横江町周辺の遺跡の分布が7世紀後半～8世紀前半代にかけて希薄なこと、また横江荘遺跡で8世紀前半に遡る遺物が出土しないこと等から、集落の存在しない「空閑地・荒廃地」を「国家的」に「開発」したものと説明されてきた。しかし上荒屋遺跡の調査で8世紀第四半期に位置付けられる「綾庄」と判読できる墨書土器の出土から今後再考が望まれよう[7]。それは和銅年間（708～715年）の平城京出土木簡に「越前国香ゞ郡綾部里」という文字がみえ、「綾庄」は「綾部里（郷）」に設置された荘園の可能性をもつことである[8]。従来、『和名類聚抄』にある郷名により当期の集落遺跡の郷比定がおこなわれてきた。ただし『和名類聚抄』の編纂年代を考慮すれば、どの時代まで遡るか十分な検討が必要であろう。また横江町周辺では7世紀後半～8世紀前半代の明確な集落遺跡は確認されていないが、傍証的ではあるが第5章第2節に述べられたとおり8世紀前半代の遺物も少量ながら確認されつつある。このようなことから横江町周辺は前述のように縄文時代後期以降、人間が定住する条件を十分に備えた地域であり、「空閑地・荒廃地」とは考えにくく、あくまで見通しではあるが『和名類聚抄』時には廃絶または吸収された郷が存在した可能性をもつと思われる。今後、調査が進む中で再検討していく必要があろう。なお横江町周辺の律令期の遺跡としては、横江A遺跡、横江C遺跡、中屋ヘシタ遺跡、御経塚ボンサンマイ遺跡等が存在する。

中世については、今回の報告にある横江ゴクラクジ遺跡、横江館跡、横江B、C遺跡や長池キタバジ遺跡等が存在する。横江ゴクラクジ遺跡は14世紀代の館跡に類する遺跡の堀跡、横江館跡は14世紀後半～16世紀の館跡に類する遺跡の堀跡と考えられる。また横江館跡は林氏第四代の林六郎光明が五男の横江七郎基光の住んだ跡との伝をもつ[9]。中世の集落については今回の調査を含めて、確認例が少ないことから現在の集落と重複して所在する可能性が高い。

註

(1) 清水隆久『横江史』石川県松任市字横江町　1961

(2) 藤　則雄「自然環境」『松任市史』現代編上巻　1981

(3) 前田清彦氏によれば、弥生時代から古墳時代の遺跡は旭遺跡群、竹松遺跡群、福増遺跡群、横江遺跡群、御経塚遺跡群と大規模な遺跡が一定の間隔をおいて微高地上にブロックで存在している。（前田清彦『旭遺跡群発掘調査概報』松任市教育委員会　1990）

(4) 吉岡康暢ほか『東大寺領横江庄遺跡』石川考古学研究会・松任市教育委員会　1983

(5) 出越昌志ほか『金沢市上荒屋遺跡概報』金沢市教育委員会・上荒屋西部土地区画整理組合　1990

(6) 金山弘明『横江荘遺跡―倉庫群の発見―』松任市教育委員会　1990

(7) 註(5)文献に同じ。

(8) 註(5)文献に同じ。

(9) 註(1)文献に同じ。

第２章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

県営ほ場整備事業郷地区は松任市北東部の横江町地内に位置し、受益面積約75haを対象として昭和61年度に計画策定がなされた。事業の主管は石川県農林水産部耕地整備課であり、担当は石川県松任土地改良事務所である。事業対象地区は明治44年から昭和初期にかけて一筆標準８ａに区画整理がおこなわれている。今回、現況の水田を一筆30ａに区画を大型化し、用排水路の分離、農道の整備をおこない、大型機械の導入を図るとともに農業経営の近代化を推進する目的で事業が実施された。

石川県立埋蔵文化財センターは県内の県営ほ場整備事業に関する埋蔵文化財の保護に対して、事前に分布調査を実施、埋蔵文化財が確認された区域では基本的に田面を盛土施工とし埋蔵文化財が保護されるよう関係機関と協議を進め、やむを得ず埋蔵文化財が影響を受ける排水路等について発掘調査を実施することで対応してきた。今回の事業対象地区周辺は国指定史跡東大寺領横江荘遺跡に代表される周知の遺跡が多く所在し、上記の協議・対応の結果、田面は盛土施行により埋蔵文化財の保護を図り、本書に報告するように排水路等についてのみ発掘調査を実施した。

第２節　調査の経過

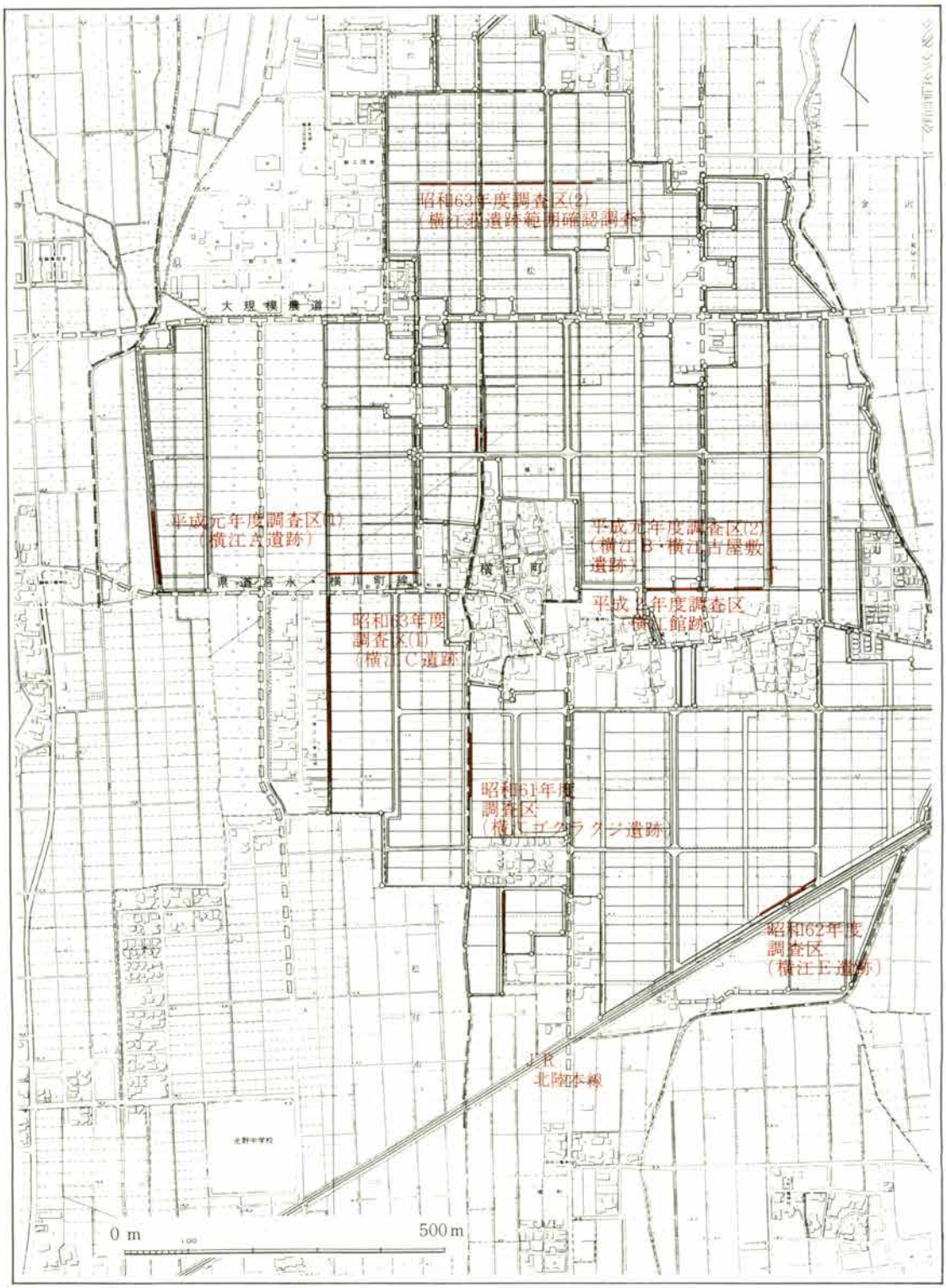
１．昭和61年度調査（横江ゴクラクジ遺跡）

横江ゴクラクジ遺跡は松任市横江町の南西側の水田に位置し、縄文時代の遺跡として知られていた。昭和60年度に試掘および踏査の方法で分布調査を実施した。その結果をもとに協議を進め、田面は盛土施工により保護を図るとともに、排水路部分約380㎡を対象に昭和61年11月15日から同年12月５日にかけて発掘調査を実施した。調査担当は小嶋芳孝、三浦純夫である。それにより中世の集落遺跡の一部と考えられる大規模な溝等を検出した。以下、調査参加者を記す。

職　員　　小嶋芳孝、三浦純夫
調査員　　横山貴広
作業員　　宮本直哉、村本愛子、本村文子、横山一枝、山岸郁子
（敬称略、順不同。以下同じ）

２．昭和62年度調査（横江Ｅ遺跡）

横江Ｅ遺跡は松任市横江町の南側の水田に位置し、過去に須恵器、珠洲焼等が採取され、その存在が知られていた遺跡である。昭和61年度秋に次年度事業対策地区約25haについて試掘および踏査の方法で分布調査を実施し、地区全域で弥生時代後期から古墳時代前期の良好な遺跡を確認した。その結果をもとに協議を進め、田面は盛土施行により保護を図るとともに排水部部分約160㎡について昭和62年７月３日から同年８月13日にかけて発掘調査を実施した。調査担当は藤田邦



第3図　調査地区配置図（S＝1/10000）

雄である。それにより弥生時代後期および中世の集落遺跡を検出した。以下、調査参加者を記す。

職　員　　藤田邦雄

調査員　　安宅　務、広岡吉紀

作業員　　江田重成、大藪仁政、大藪次政、大藪誠一、木村文子
清水スズ、成清暁道、宮子　寛、宮下清作、村本愛子
森山英子、山岸郁子

3．昭和63年度調査（横江C遺跡、横江荘遺跡範囲確認調査）

横江C遺跡は松任市横江町の西側の水田に位置し、昭和57、58年度に石川県立埋蔵文化財センターが一部発掘調査を実施、縄文～中世の複合遺跡であることが判明していた遺跡である。昭和62年度秋に次年度事業対象地区約20haを試掘および踏査の方法で分布調査を実施し、ほぼ全域で良好な包含層を確認した。それによれば遺跡の範囲は従来の推定範囲より大幅に南側に拡がり、また弥生、奈良～平安、中世の集落遺跡であることがわかった。この結果をもとに協議をおこない、田面は盛土施行により保護を図るとともに排水路部分約1,010㎡を対象に昭和63年8月2日から9月27日にかけて発掘調査を実施した。調査担当は田嶋明人、鳥越浩（現在　県立飯田高校教諭）である。調査により弥生時代後期、平安時代の集落遺跡を検出した。

次に横江荘遺跡範囲確認調査は大規模農道より北側の県営ほ場整備地区を対象に、近接する国指定史跡横江荘遺跡の範囲推定の目的で実施された。調査は昭和63年10月31日に重機による試掘、同年11月1日～11月30日にかけて人力による排水路部分のトレンチ調査をおこなった。それにより弥生時代中～後期および平安時代の遺構を検出した。特に平安時代の遺構は横江荘遺跡との関連で注目される。以下、調査参加者を記す。

（横江C遺跡）

職　員　　田嶋明人、鳥越　浩

調査員　　西谷昌司、広岡吉紀

作業員　　江田重成、大藪仁政、大藪次政、大藪智子、清水義一、
清水スズ、成清暁道、長戸正子、西野真智子、西本百合子、
西村美代子、宮子　寛、宮下清作、横山一枝

（横江荘遺跡範囲確認調査）

職　員　　田嶋明人、鳥越　浩、北野博司、橋場和彦（辰口町研修生）

調査員　　西谷昌司、広岡吉紀

作業員　　上田外茂治、宇田川光治、大藪次政、大藪智子、木下弘子
作田信吉、示野嘉蔵、鶴井外男、東田司郎、西田長次、
長戸正子、西村美代子、林　孝二、林　次男、平野豊次、
藤田勇蔵、町川清久、和沢吉次

4．平成元年度調査（横江Ａ遺跡、横江Ｂ遺跡、横江古屋敷跡、横江館跡）

横江Ａ遺跡、横江Ｂ遺跡、横江古屋敷遺跡、横江館跡は松任市横江町の水田に位置する。昭和63年度秋に次年度事業対象地区約22haで試掘および踏査の方法で分布調査を実施、ほぼ全域で遺跡を確認した。それによれば対象地区北側は弥生時代後期～終末、南側で中世の遺構が存在する。分布調査の結果をもとに協議を進め、田面は盛土施行により保護を図るとともに排水路部分約1,200㎡を対象として発掘調査を実施した。調査は平成元年11月１日から同年12月15日にかけておこなった。担当は鳥越浩、川畑誠である。調査により横江古屋敷遺跡では竪穴住居跡に付随する溝、土坑および古墳等を検出し、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の集落遺跡であることが、また横江館跡では現況の排水路と重複して堀跡を検出、中世館跡に類する遺跡の一部であることが明らかとなった。

なお本遺跡は分布調査以降、「横江Ａ遺跡」と称してきた。本報告書をまとめるあたり資料や遺物整理を進めたところ、本来「横江Ａ遺跡」とされた遺跡とは大きく距離が離れ、また遺跡の性格も異なることから別個の遺跡であり、弥生時代後期～古墳時代初頭の集落遺跡の範囲を「横江古屋敷遺跡」、中世の遺跡範囲を「横江館跡」「横江Ｂ遺跡」と称するのが妥当であるとの結論に至った。前者の名称は『横江史』中の付近の字名から、また「横江館跡」は周知の遺跡と位置的に重複し、性格も一致することによる。本報告書では、この名称で呼称したい。以下、調査参加者を記す。

職　員　　鳥越　浩、川畑　誠、芝田　悟、北野博司

調査員　　藤重　啓

作業員　　上田外茂治、宇田川輝、宇田川光治、大西英徳、大藪智子
川崎勝美、神保正美、竹西正則、鶴井外男、東田司郎
得田菊麿、得田　隆、得田余三、長戸正子、成清暁道
西尾富士子、蓮田一雄、藤田美和子、町川清久、安江八十八
横川美代、横川達子、坂田進午、坂井かず子、高崎春子
宮田ハル、村上勝次、最里健太郎

5．平成２年度調査（横江館跡）

横江館跡は横江町の北側の水田に位置する。前年度発掘調査未了部分約280㎡を対象に平成２年10月22日から11月５日にかけて発掘調査を実施した。調査担当は川畑誠、安英樹である。調査により前年度に確認された堀跡の西端部分等を検出した。以下、調査参加者を記す。

職　員　　川畑　誠、安　英樹、福島正実

調査員　　藤重　啓

作業員　　打木喜美江、東　陽子、藤本春枝、山　静子、山　信子

第３章　昭和61年度調査（横江ゴクラクジ遺跡）

第１節　調査の概要

本遺跡は松任市横江町地内に所在する。調査は県営ほ場整備事業郷地区に係わるもので、昭和60年度の分布調査の結果をうけて、同61年度に実施した。現地調査は、昭和61年11月15日から同年12月５日まで行った。分布調査により、第４図に示したように２ヶ所に遺跡の広がりが認められたので、南調査区、北調査区と呼称することとした。南調査区は延長90ｍ、北調査は100ｍである。幅２ｍの調査であるので、面積は380㎡となる。

検出した遺構は、南調査区で土坑１基、溝５条、北調査区で溝１条である。出土遺物は整理用コンテナ１箱で、図化しえたものは土器１点である。

土層は、図中第１層とした耕土があり、その下に褐色粘質土の床土が存在する場合が多い。遺構面はこの層の下面で形成されている。

第２節　各　説

前述のように遺構は南調査区に集中している。ここで土坑ないし溝と名づけたものについては、調査区の制約により全容をはかりがたいので、便宜的な呼称と理解されたい。遺物は第１号溝より土師質土器が出土しているほかは、すべて細片である。

第１号土坑（第７図）

南調査区の南端部で検出された。全容は不明であるが、円形もしくは楕円形を呈するものと思われる。現存幅145cm、深さ50cmを測る。覆土は、第７図で示した第３層が１層目で、褐灰色粘質土層である。その下は濁灰褐色粘質土層、最下層には黄褐色粘質土層が堆積する。

第１号溝（第６図）

南調査区の北端部にある。最初に幅の広い溝が築かれて、これが埋まった段階で、断面Ｖ字の溝が掘られている。図の第１層は耕土で、第２層・第３層が新しい溝の覆土である。第２層は褐灰色強粘質土層、第３層・第６層が古い溝の覆土である。第５層は灰褐色粘質土層、第６層は濁暗灰色粘質土層である。第６層より次に述べる土器が出土した。

遺　物（第８図）

土師質土器の小皿である。口径8.1cm、器高1.4cm、座径7.1cmを測る。浅い小皿で、内外面ともヨコナデを施している。微砂粒を含み、内外面ともに橙色を呈する。14世紀代の所産とみられる。

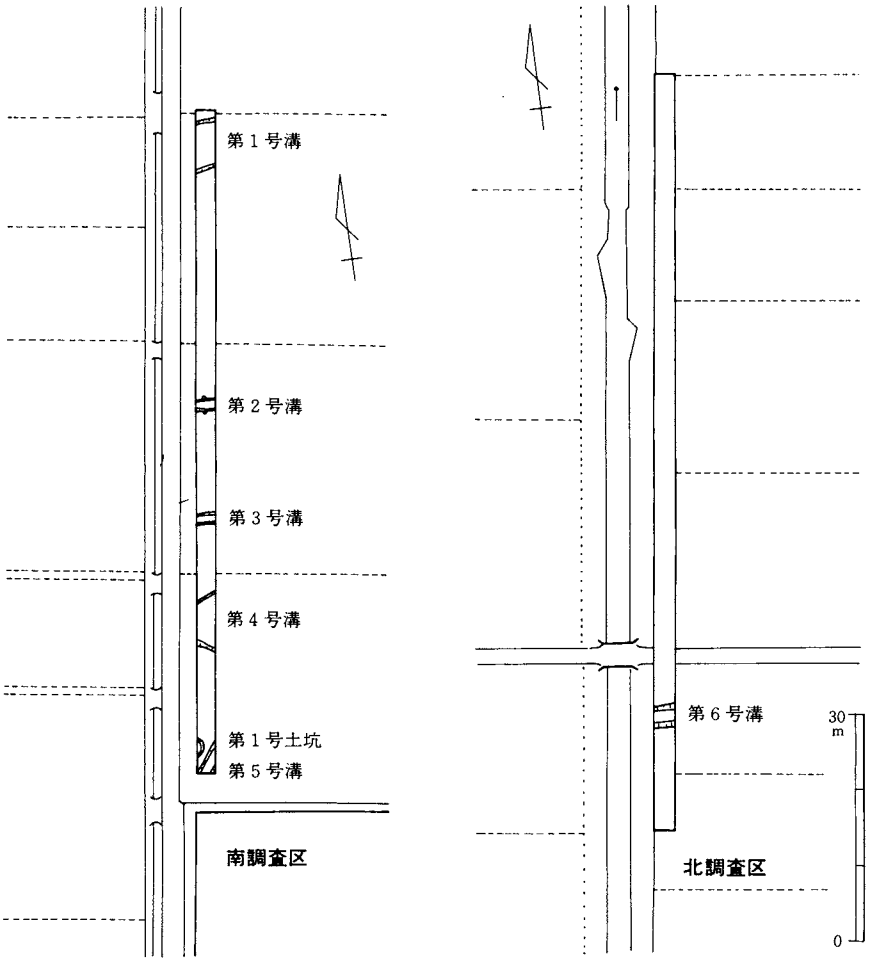
第２号溝（第６図、図版２）

幅130cm、深さ15cm、下幅95cmを測る。覆土は単一で、黄褐色粘質土層である。両肩にピットが穿たれる。

第３号溝（第６図）

幅160cm、深さ90cm、下幅100cmを測る。覆土は３層（第６図４～６）よりなり、最上層は黄褐

第4図　調査区位置図（S＝1/3000）



第５図　調査区全体図（Ｓ＝１/1000）

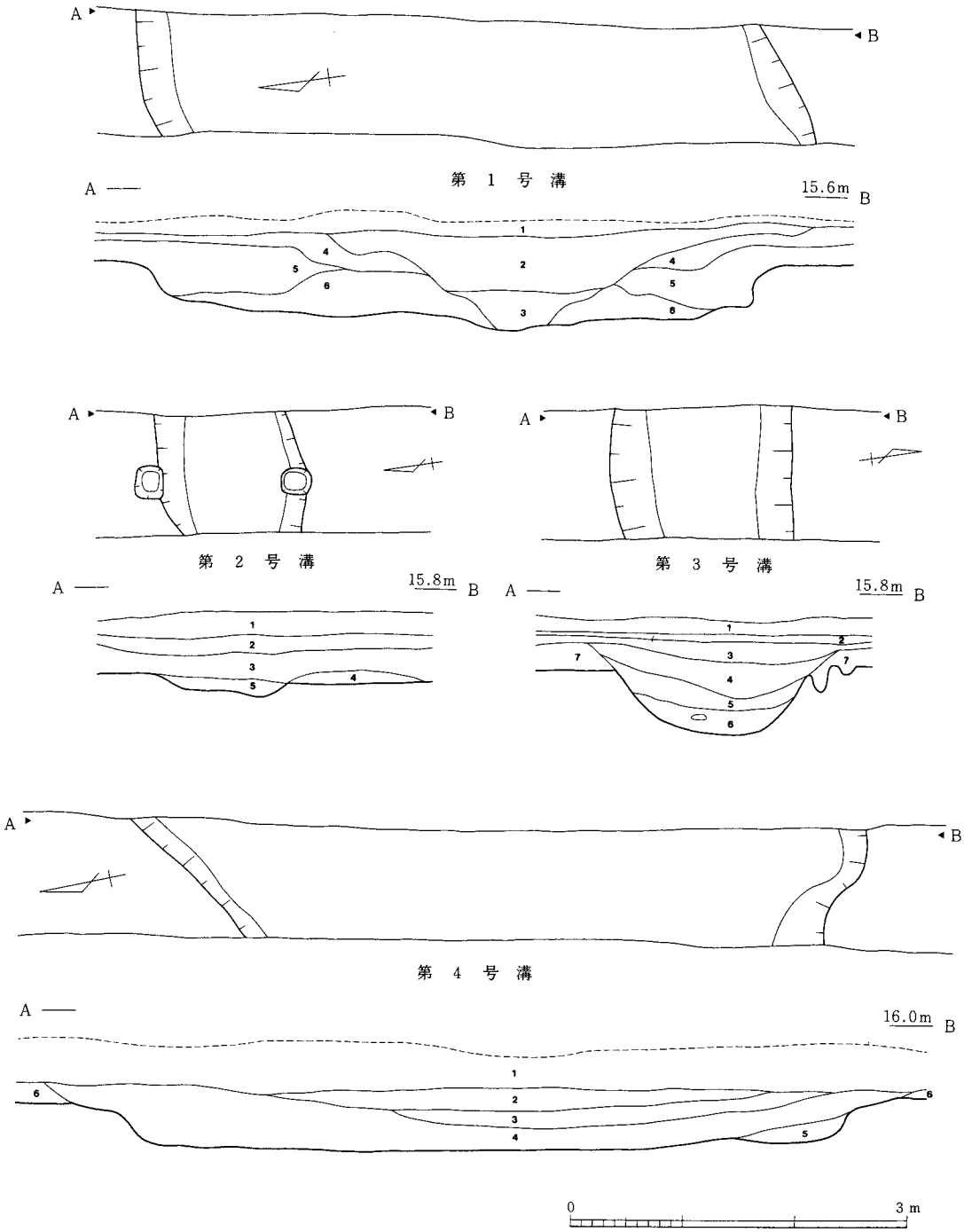
色土層で、少量の土器を含む。中層は暗茶褐色土層、最下層は暗褐色粘質土層である。

第４号溝（第６図、図版２）

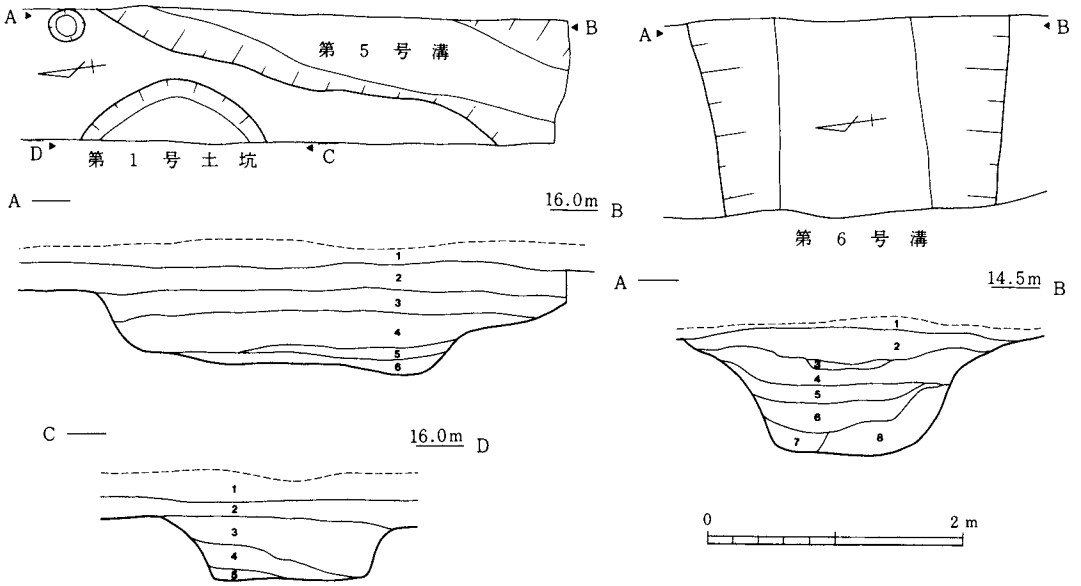
溝として報告するが、北側肩部は北東にのび、南側肩部は南東にのびている。東壁での幅660cm、下幅610cm、西壁側では520cm、下幅450cmを測る。深さは55cmを測る。覆土は４層（第６図２～５）よりなっている。最上層は濁暗褐色粘質土層、その下は灰褐色粘質土層、溝底には暗灰色粘質土層が堆積し、南側には淡黄褐色粘質土が一部みえる。

第５号溝（第７図）

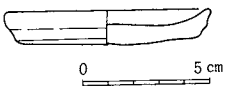
南調査区の南端にあって、第１号土坑の東に接する。南西から北東への走行がうかがえ、幅110cm、深さ60cm、下端60cmを測る。覆土は４層（第７図３～６）からなっている。最上層は濁灰色粘質土層、その下は濁暗灰色粘質土層、そしてその下に灰色粘質土層が薄く堆積し、溝底にはオリーブ灰色粘質土層がみられる。



第６図　遺構実測図(1)(Ｓ＝１/60)



第 7 図　遺構実測図(2)(S = 1 /60)



第 8 図　第 1 号溝出土土器(S = 1 / 3)

第 6 号溝（第 7 図）

北調査区の南側で検出した。幅250cm、深さ100cm、下幅110cmを測る。図の第 2 層以下が覆土である。第 2 層は暗灰色粘質土層、第 3 層は淡灰黄色粘質土層、第 4 層は淡褐灰色粘質土層、第 5 層は淡褐色粘質土層、第 6 層は黄灰色粘質土層、第 7 層は淡黄色粘質土層、第 8 層は黄褐色粘質土層である。

第 3 節　若干の所見

本遺跡の調査で土坑 1 基と溝 6 条が明らかになった。しかし、時期を推定できる資料を出土したのは第 1 号溝のみである。14世紀とみられる土器は溝の構築時期と大きく異なることはないと思われるが、他の遺構については、不明とせざるを得ない。

手取川扇状地、とりわけ松任平野に多い中世の溝を持つ遺構については、調査面積の狭さから性格解明の困難性が指摘されている。これらは中世前期から後期まで存在するようで、もとよりその性格も一様に規定することはできない。

石川県内では本遺跡の他に、石川郡野々市町の長池キタバシ遺跡、松任市の宮永保治川遺跡、小川遺跡、横江館跡、笠間賢徳寺遺跡、宮保館跡、宮保光明寺遺跡、小松市の白江梯川遺跡、佐々木ノテウラ遺跡、佐々木アサバタケ遺跡が溝をもつ中世遺跡として知られる。

これらは、橋口定志氏の指摘されるように、多様な性格をもつものと考えられ、遺構・遺物の検討から解明に迫る議論の待たれるところである。

写真１　横江ゴクラクジ遺跡遠景（西から）

註

(1) 藤田邦雄氏の御教示による。

(2) 橋口定志・広瀬和雄・峰岸純夫「鼎談・中世居館」『自然と文化』30　観光資源保護財団　1990　東京。

第４章　昭和62年度の調査（横江Ｅ遺跡）

第１節　調査の概要

横江Ｅ遺跡の発掘調査は昭和62年（1987）の７～８月に実施されている。県営ほ場整備事業郷地区の排水路工事に伴うものであり、調査面積は約160㎡である。幅約２ｍの調査区は、西から東に１～11区と設定し、８～10区にかけては水路に沿ってクランクしている（第９・10図）。グリッドは10ｍを基本とする。なお４、５区では住居跡が検出されたため調査幅を4.5ｍに拡張した。遺構は現地表面から60～80㎝の深さで確認できることが多く、地山面は黄色系、遺構覆土は褐色系の粘質土である。遺構面の標高は14.2ｍ前後でほぼ一定しているが、10、11区と北方向へ移動すると13.8ｍ前後と若干低くなる。遺構は５区の住居跡を中心に３～８区に集中しており、当然遺物量もそれに伴い豊富である。ただし10区の包含層中からは、甕を主体とした残りの良好な製品が十数個体出土している。

遺物の出土した遺構については１区より順に番号を付していった。１・２区は１号溝、３区は２～４号溝、ピット１・２、４区は５～７号溝、ピット３～５、５区は８号溝、１号住居跡、ピット10、６区は９・10号溝、ピット６、７区は11・12号溝、１号土坑、ピット７～９、８区は12号溝が検出されており、全体としては１～12号溝、１号土坑、１号住居跡、ピット１～10となる。溝状遺構の多くは南北方向に伸びるようであり、掘立柱建物の存在は不明。遺物はパンケースに六箱出土しており、時期的には弥生時代が大半を占め、鎌倉、室町時代のものも少量含まれ

写真２　調査区内作業風景

第９図　調査位置図

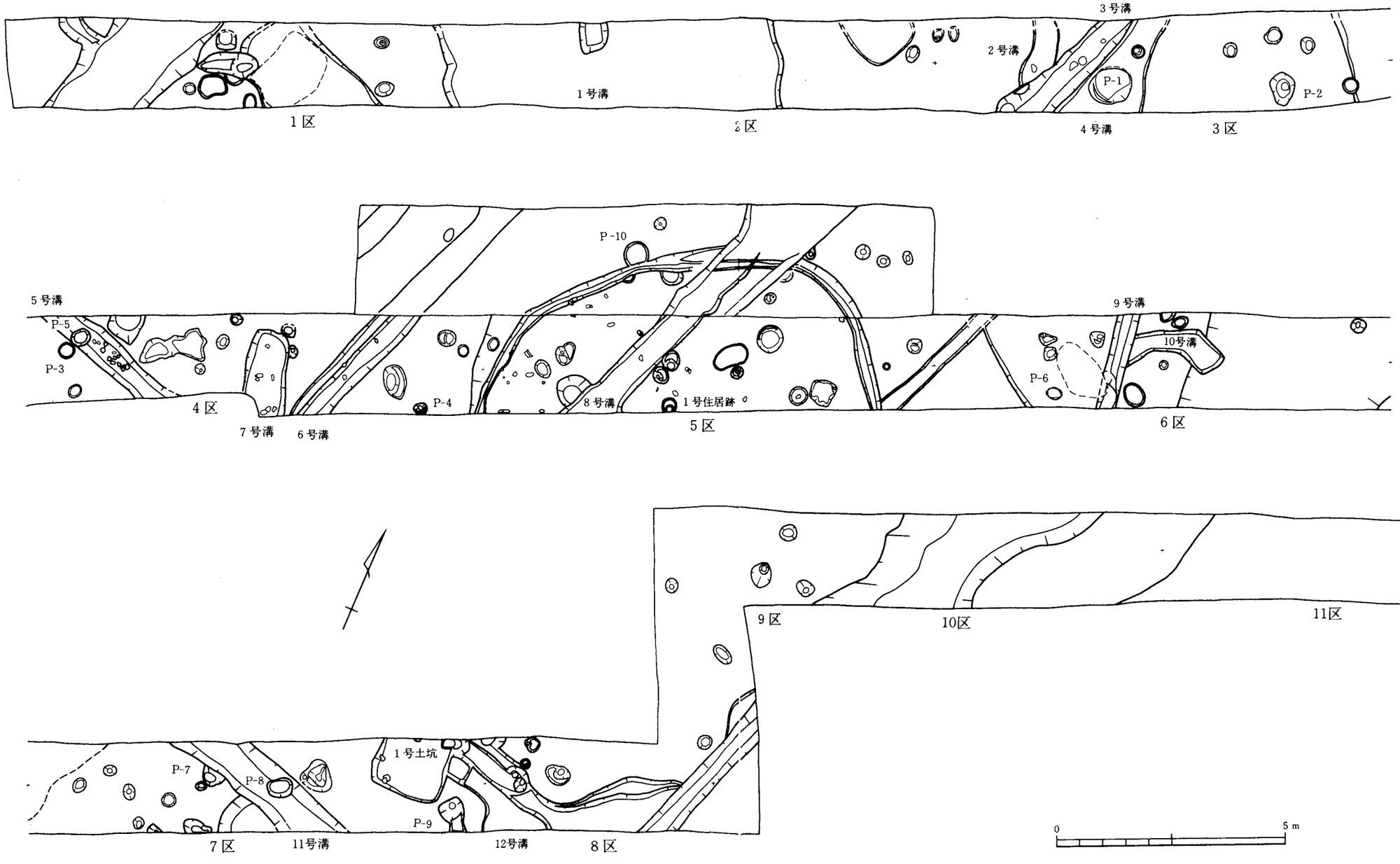
第２節　遺構と遺物

遺構、遺物は各調査区別に溝、土坑、住居跡、ピット、包含層の順で記述する。

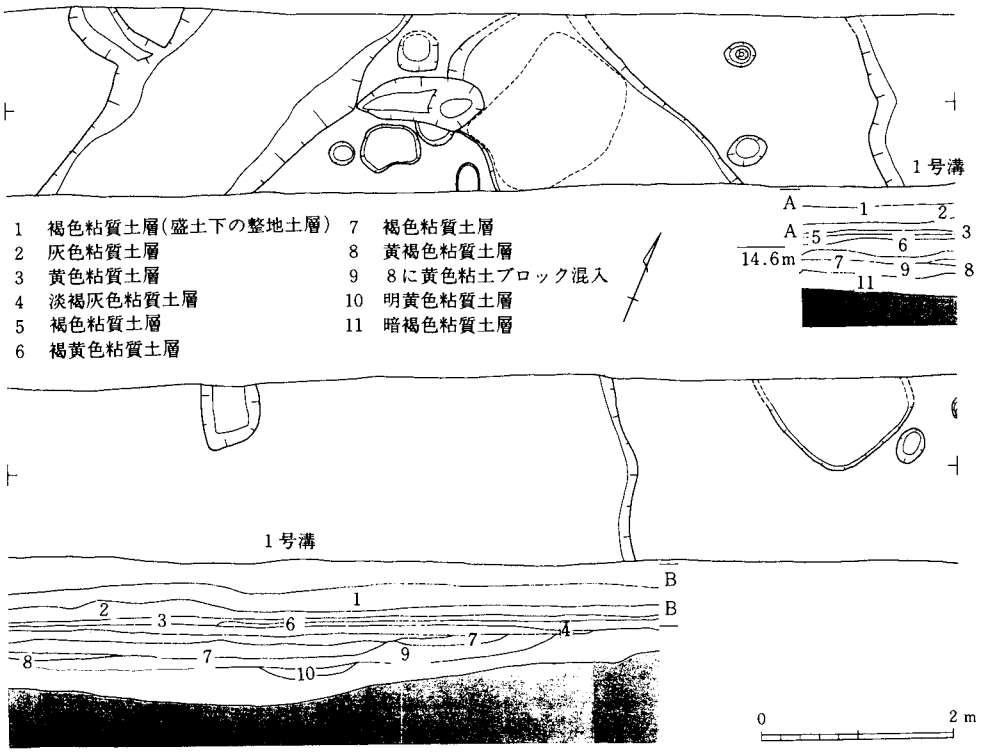
１・２区

１号溝（第11、18－１図）　幅約7.5ｍで中央に緩やかに下がる溝状遺構である。覆土は包含層の暗褐色粘質土と区別できないため、地形の窪みかもしれない。最深部は55cmである。１は口唇部を断面三角形状につまみ上げた甕である。外面にハケ調整が僅かに認められる。１号溝からの遺物量はそう多くなく、有段の甕口縁部片１点、壺口縁部片１点、脚部片１点、器種不明の土師器片26点が出土している。

包含層（第19－11図）　15点の甕口縁部片が確認されている。擬凹線を施したものが多く、「く」の字口縁片はその内の１点である。壺は５点見られる。11は頸部に刺突文を持つ有段口縁の壺である。口縁部は鋭角的に急角度で立ち上がる。他に器種不明の土師器片が112点出土している。



第10図　遺構全体図(S＝1/100)



第11図　1・2区遺構実測図(S＝1/80)

3区

2号溝（第12図）　3号溝に切られる。幅50cm、深さ5cm足らずの不明瞭な溝状遺構である。一部に土器の集まりが見られたためP－1として取り上げたが同一個体ではなく、擬凹線を持つ口縁部片1点と23点の細片であった。

3号溝（第12、18－2図）　幅70cm、深さ40cm程度の溝である。断面は台形状で、覆土上層には炭粒の多い灰褐色粘質土が堆積している。擬凹線有段口縁3点を含む甕口縁部片5点、高杯棒状脚部1点、中世の14世紀代と思われる土師器皿が出土している。2は壺の底部であろうか。全体に摩耗しており、砂粒は少ない。他には器種不明の56点がある。

4号溝（第12図）　3号溝に並ぶ深さ5cm前後の不明瞭な溝状遺構である。2点の「く」の字口縁甕片と24点の細片が出土している。

ピット1・2（第12図）　それぞれ70cm、19cmの深さを持つ。ピット内からの数点の土器片はいずれも器種不明である。

包含層　甕口縁部片5点、高杯脚上部片1点、結合器台片1点、脚部片1点、器種不明83点が出土している。

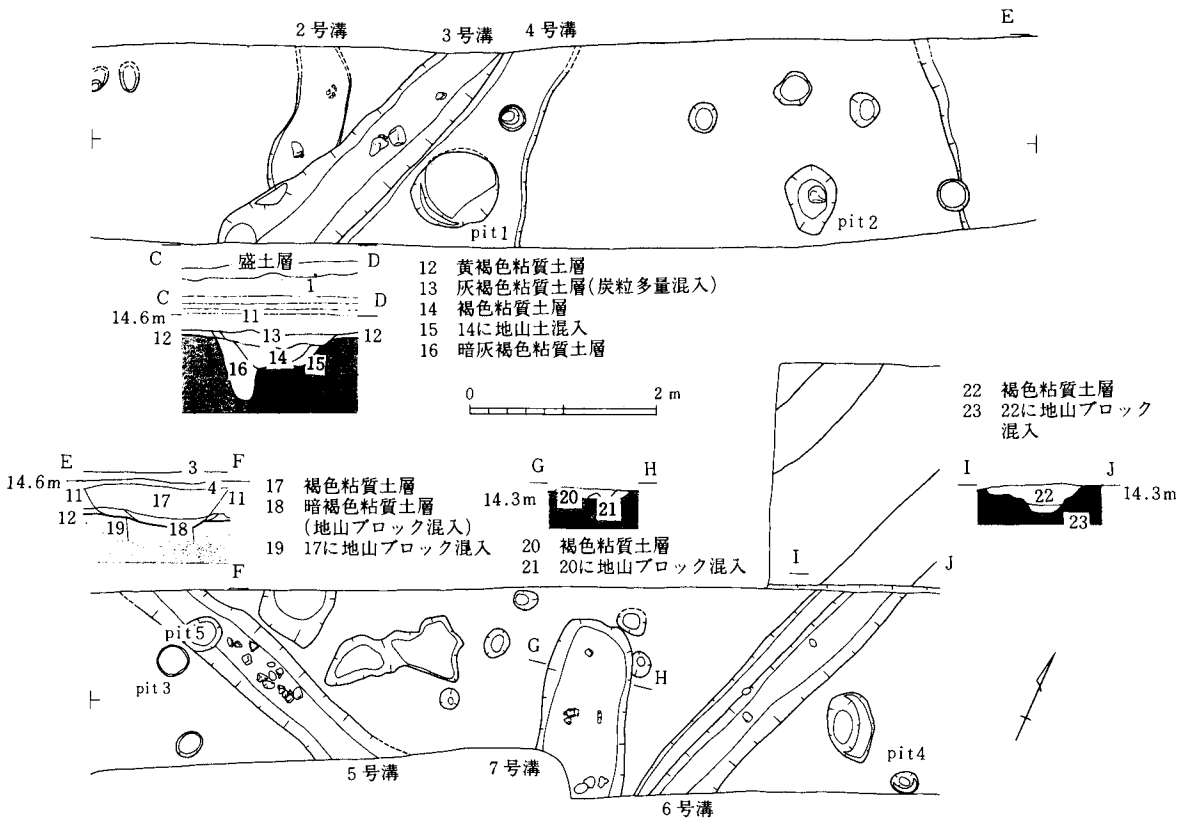
4区

5号溝（第12、18－3図）　東西方向に伸びる数少ない溝の一つである。幅60cm、深さ40cm前後であり、弥生時代の包含層を切り込んで造られている。溝中には拳大の石が多く見られる。3は加賀焼の擂鉢である。外面には粘土帯の継ぎ跡と縦方向のケズリナデ調整が観察される。内面に卸し目は認められない。砂粒の含みは少ない。他には中世陶器の器種不明品1点、結合器台片1点、土師器細片21点が出土している。

6号溝（第12図）　幅約70cmの二段掘りの溝である。拡張区内ではプランのみ検出し、完掘はしなかった。深さは深い側で30cm、浅い側で10cmとなる。遺物としては、擬凹線を持つ甕口縁部片2点、高杯片2点、器台片2点、内面に赤彩のある鉢片1点、器種不明38点が出土している。

7号溝（第12、18－4図）　一方が調査区内でおさまる幅90cm、深さ10cmの溝状遺構である。浅い割りに遺物量が多く、P－1～6に分けて取り上げている。4は有段口縁に擬凹線を施した甕である。弱く外反する口縁部内面には指頭圧痕が見られ、胎土中には海綿骨片が観察される。他には擬凹線有段口縁6点を含む甕口縁部片9点、高杯片3点、器種不明74点が認められる。

ピット3～5（第12図）　それぞれ14cm、22cm、45cmの深さを持つ。ピット3からは脚部片が1点、それ以外からは器種不明の土師器細片が1点ずつ出土している。



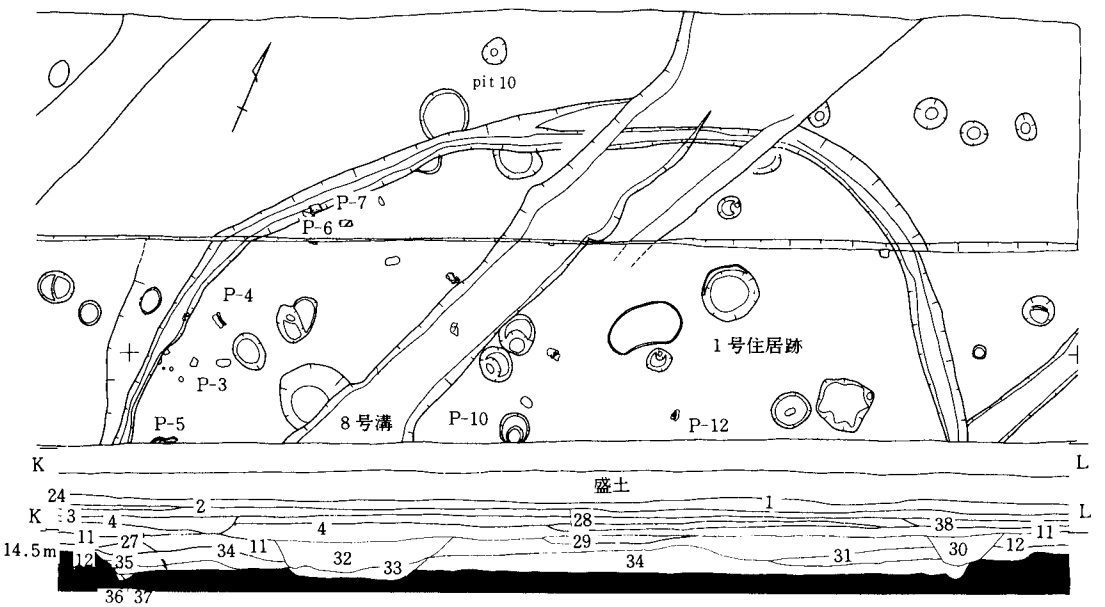
第12図　3・4区遺構実測図（S＝1/80）

包含層（第20－22、28図）　擬凹線有段口縁10点を含む甕口縁部片20点、高杯４点が見られる。22は器台の棒状脚部分である。外面は粗いミガキ調整で、脚部は有段となる。器種不明土師器片は172点出土している。28は珠洲焼の擂鉢である。内外面にロクロ目、底部外面に静止糸切痕を残す。内面は良く使用されており、すべすべしている。胎土中には海綿骨片が観察される。他に加賀焼の擂鉢片２点、褐釉の天目茶碗片１点が見られるが、加賀焼擂鉢片は５号溝出土のものと同一個体と思われる。

５区

８号溝（第13図）　１号住居跡が機能を失った後に作られている。遺構確認面は４区の５号溝と同様上位にあるが、中世の遺物は見られず方向も異なっている。幅70cm、深さ40cmのしっかりとした溝である。遺物は擬凹線有段口縁７点を含む甕口縁部片９点、高杯片１点、鉢片１点、器種不明68点が見られるが、１号住居跡からの混入も考えられる。

１号住居跡（第13、14－１～10図）　当初は幅の広い落ち込みと考え調査を進めていたが、土器の量が多く、床面と思われるやや固い面や周溝を確認したため住居跡と判断し、北側へ約2.5m拡張した。ちょうど肝心な箇所が調査区のつなぎめであったり、溝に切られているためはっきりとはしないが、平面形は多角形とは言えないまでもやや不整形となっている。調査区内で知り

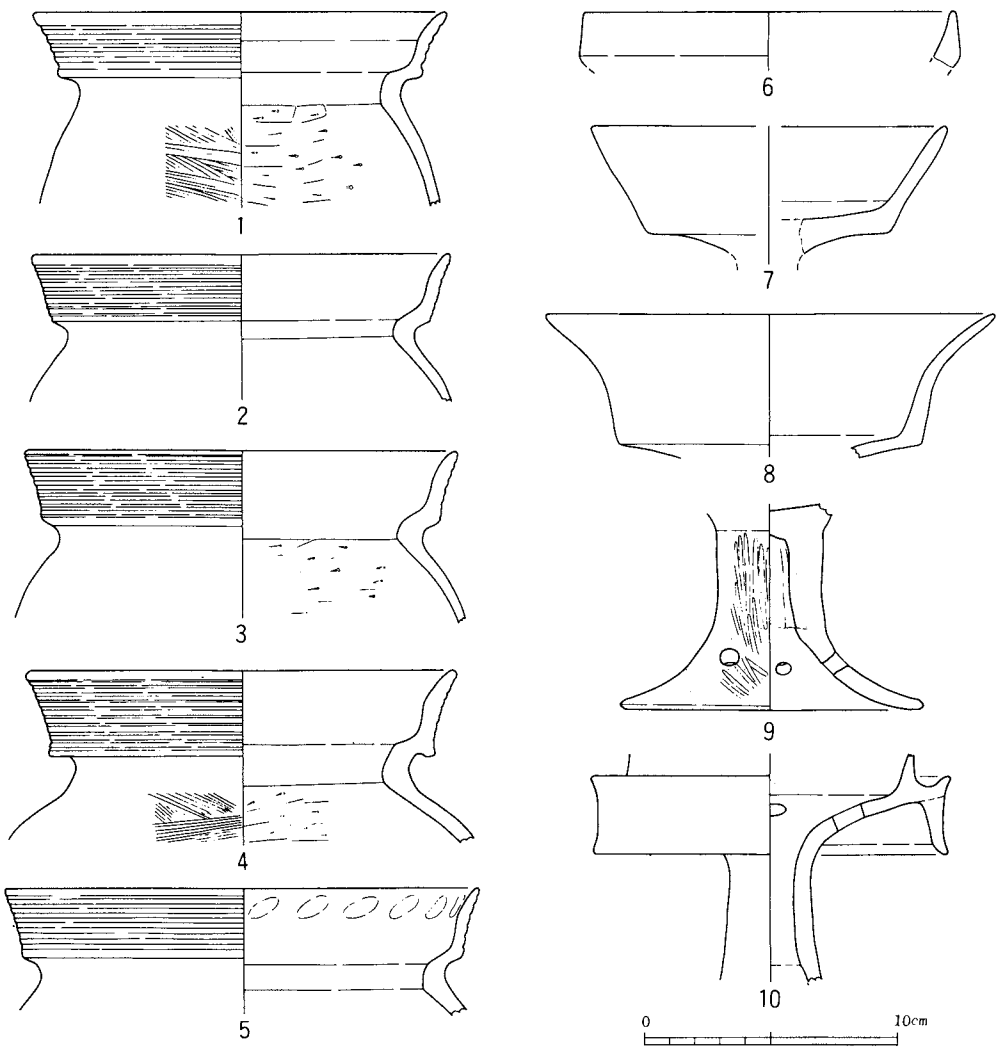


11　黒褐色粘質土層
24　黄色粘質土層
25　灰黄色粘質土層
26　27に地山ブロック混入
27　褐色粘質土層
28　淡黄灰色砂質土層
29　暗灰褐色粘質土層
30　灰黄褐色粘質土層
31　褐色粘質土層
32　灰褐色粘質土層
33　暗褐色粘質土層(地山ブロック混入)
34　淡褐色粘質土層
35　34に地山ブロック混入
36　黄褐色粘質土層
37　36に地山土混入

0　2 m

第13図　５区遺構実測図（S＝1/80）

得る最大径は9.3mである。主柱穴は８号溝に切られている半円形状のピットと、そこから4.6m北東側の円形状のピットになると思われ、それぞれの深さは16cm、22cmである。また住居跡の深さは遺構確認面から20cm前後である。遺物中の主要なものはＰ－１～12の番号を付けて取り上げた。形の分かる遺物としては擬凹線を持つ有段口縁の甕が最も多く、実測したものも含め28点が認められる。１はＰ－12、２は上層、３はＰ－４、４はＰ－５、５は下層床面である。いずれも幅の広いやや外反する口縁帯を持つ。１には中程度、その他には極く稀に海綿骨片が認められる。６は壺の口縁部片であろうか。精選された土を用いており、胎土中に砂粒はほとんど見られない。７は小型高杯。屈曲した杯部は直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。色調は内外面共に橙色である。８は高杯の杯部である。杯底部は鋭角的に屈曲し、口縁部は大きく外反する。調整は摩耗のため不明。９は脚部に五個の透かし穴を持つ。裾は八の字状に広がり、外面にはヘラミガキ調整が残る。高杯片は他にも４点認められる。10は結合器台の受部下方である。受端部に添付



第14図　１号住居跡出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

する垂下帯は下に長く、棒状脚脇の受底部には四個の透かし穴がある。6は上層、7はP－3、8はP－6・7・10、9はP－1、10は床面である。これ以外には脚部片2点、鉢片1点、器種不明464点が出土している。

ピット10（第13、18－8図）　拡張区に位置し、住居跡周溝に一部を切られる。径50cm、深さ17cmである。8は高杯の杯端部片であろうか。口唇部に面を取り肥厚させる。

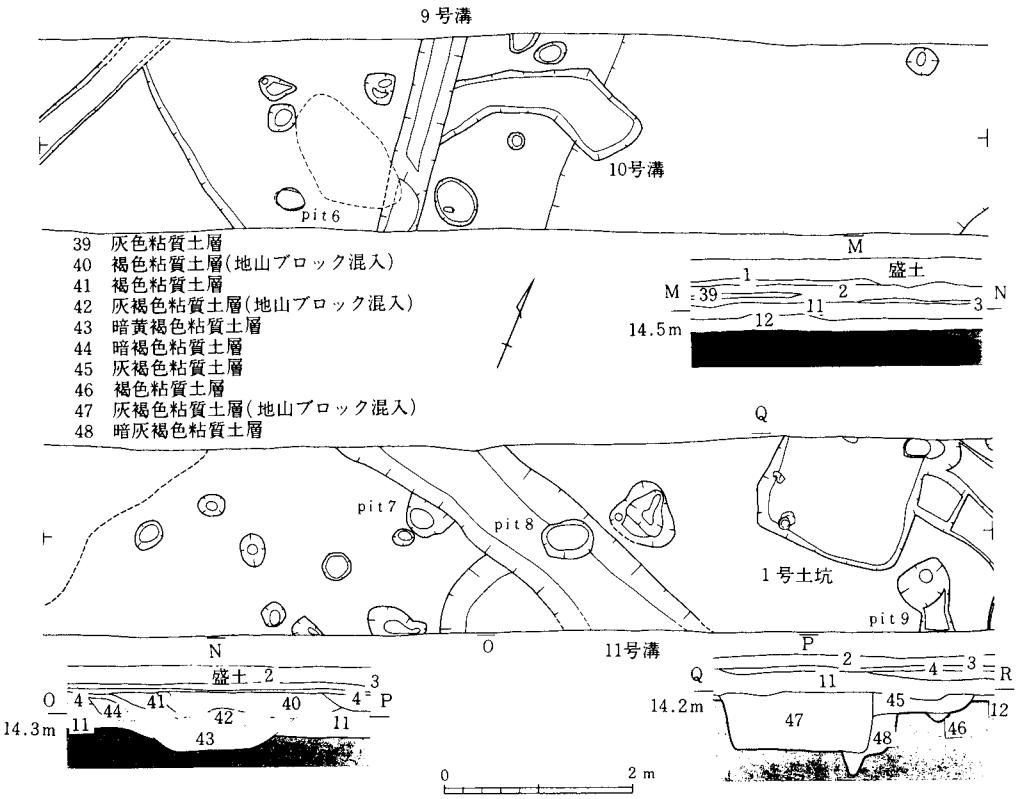
包含層（第19－14、20－26図）　14は小型製品の脚部か。全体に厚く、外底部はアーチ状となる。胎土中には多くの海綿骨片が見られる。26は小型器台の脚部である。端部はやや面取り気味に丸くおさめる。他には甕口縁部片3点、高杯片1点、鉢片1点、器種不明49点が出土している。

6区

9号溝（第15、18－5図）　幅40cm、深さ10cm前後の浅い溝である。西側の一部を礫に切られている。5の口縁帯は短く直立し、肩部には刺突文が施される。内面には縦位のケズリ調整が見られる。他に甕口縁部片1点、器種不明5点が出土している。

10号溝（第15図）　9号溝に切られる深さ5cm前後の湾曲した溝状遺構である。器種不明の土師器片が1点出土している。

ピット6（第15図）　礫の脇に位置する径30cm、深さ20cmのピットである。器種不明の土師器片が2点出土している。



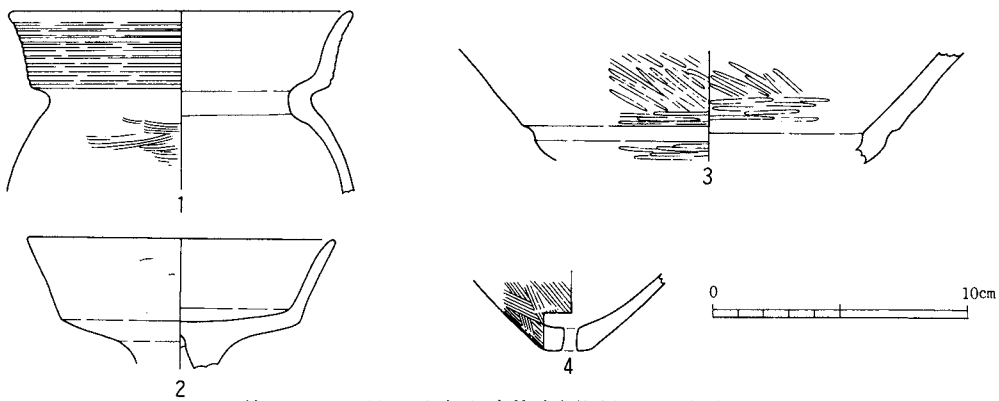
第15図　6・7区遺構実測図（S＝1/80）

包含層（第19－15図）　擬凹線有段口縁10点を含む甕16点が最も多い。15は全形は分からぬが、突帯を持つ鉢であろうか。内外面共に丁寧なヘラミガキ調整を施し、突帯部には二本の沈線とキザミ目が認められる。胎土中の海綿骨片の量は多い。他には高杯片１点、脚部片４点、器種不明204点が出土している。

７区

11号溝（第15図）　東西方向に伸びる幅100cm、深さ60cmのしっかりとした溝である。盛土層下の地表面近くから掘り込まれているため、新しい時期のものと思われる。しかし遺物は擬凹線有段口縁甕片１点、器種不明土師器片14点以外は確認されていない。

１号土坑（第15、16－１～４図）　断面が方形となる立ち上がりの明瞭な土坑である。調査区内での最大幅は165cm、深さは65cm、覆土は単層で灰褐色粘質土である。１は幅広の口縁帯を持つ甕である。外面には横位のハケ調整が観察される。同様の甕口縁部片が他にも３点ある。２は１号住居跡でも見られた小型高杯。杯部は薄手で口縁はやや外反する。３は有段の杯部を持つ高杯である。内外面にヘラミガキ調整、胎土中には少量の海綿骨片が認められる。４は底部有孔の鉢である。外底部周辺を除き煤で覆われている。他に脚部片１点、器種不明77点が出土している。



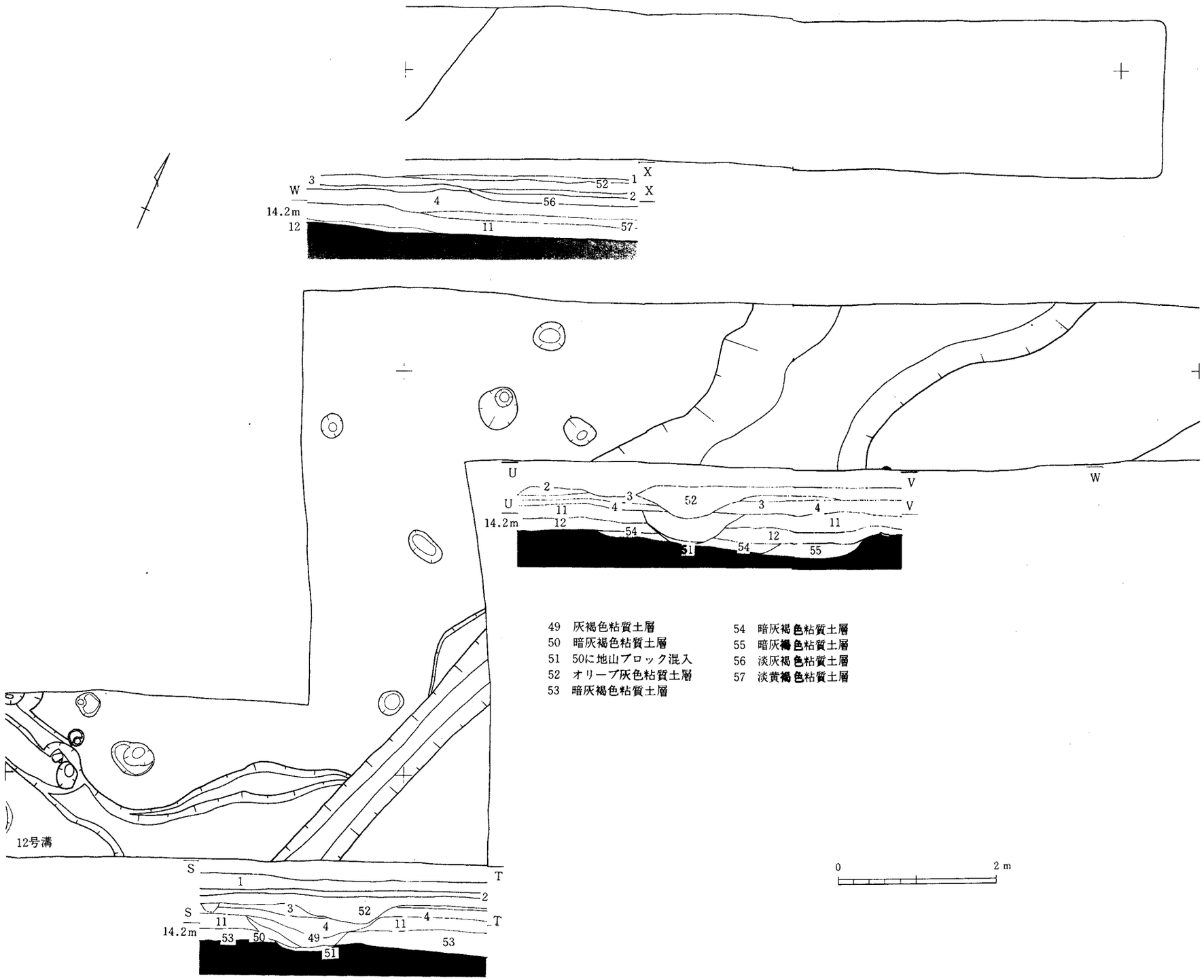
第16図　１号土坑出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

ピット７～９（第15図）　ピット７、８は11号溝に接し、ピット９は１号土坑南に位置する。それぞれの深さは43cm、47cm、66cmで、器種不明の土師器片が６点、３点、３点と出土している。

包含層（第19－17、20－18、23図）　17は鉢の口縁部片か。砂粒の含みは少なく、丁寧なナデ調整が見られる。18も鉢の一部と思われる。口縁部内面には弱い指頭圧痕が観察される。外面は特に丁寧に磨かれている。23は器台の棒状脚部分である。海綿骨片が極く稀に認められる。他には有段の甕口縁部片３点、脚部片１点、器種不明184点が出土している。

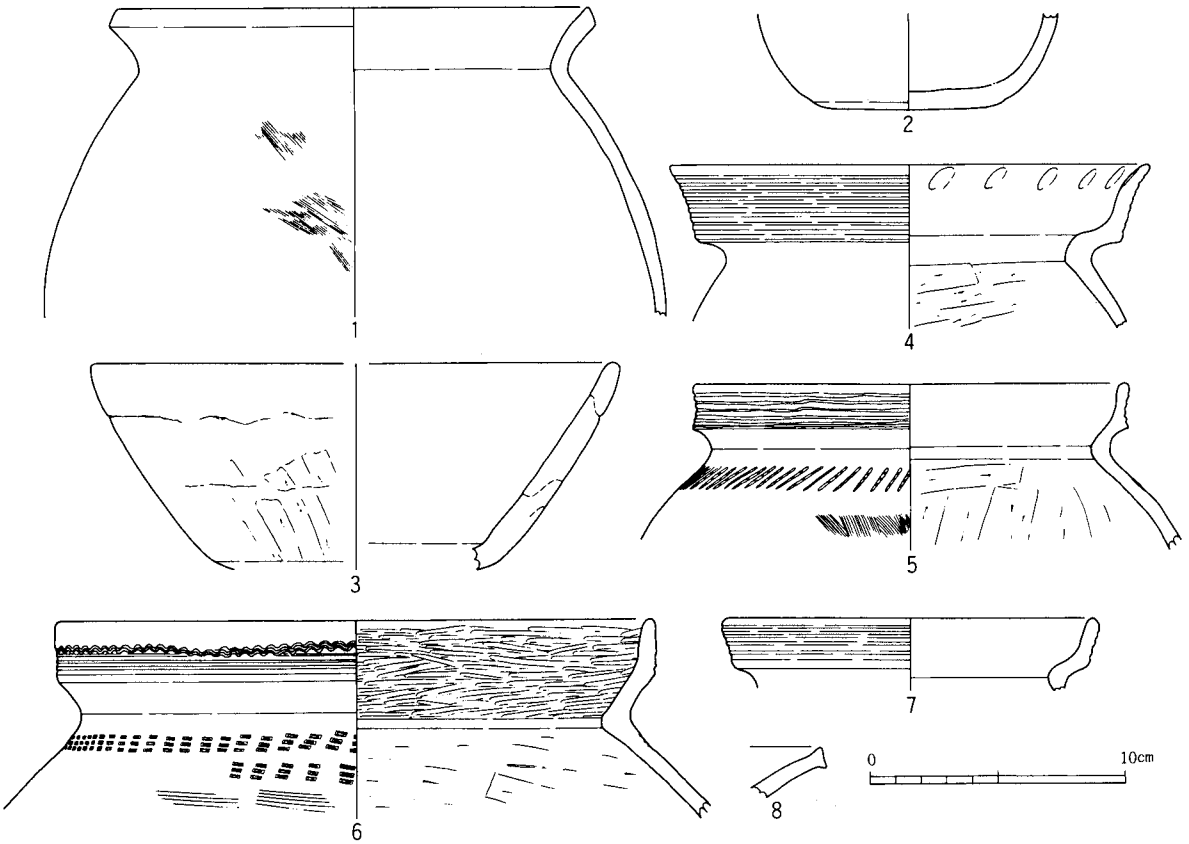
８区

12号溝（第15、17、18－６、７図）　７区より続いており、１号土坑に切られている。東西方向の伸びを持つ幅40cm、深さ５cm程度の溝である。６は口縁部に擬凹線、波状文、肩部に刺突文を持つ甕である。口縁部および頸部内面にはヘラミガキ調整が施されている。７は口縁帯が短く、器壁の厚い甕口縁部である。胎土中には多量の海綿骨片が認められる。他には鉢片１点、器種不明33点が見られる。



49　灰褐色粘質土層
50　暗灰褐色粘質土層
51　50に地山ブロック混入
52　オリーブ灰色粘質土層
53　暗灰褐色粘質土層
54　暗灰褐色粘質土層
55　暗灰褐色粘質土層
56　淡灰褐色粘質土層
57　淡黄褐色粘質土層

第17図　8～11区遺構実測図（S＝1/60）



第18図　溝・ピット出土遺物実測図（S＝1／3）

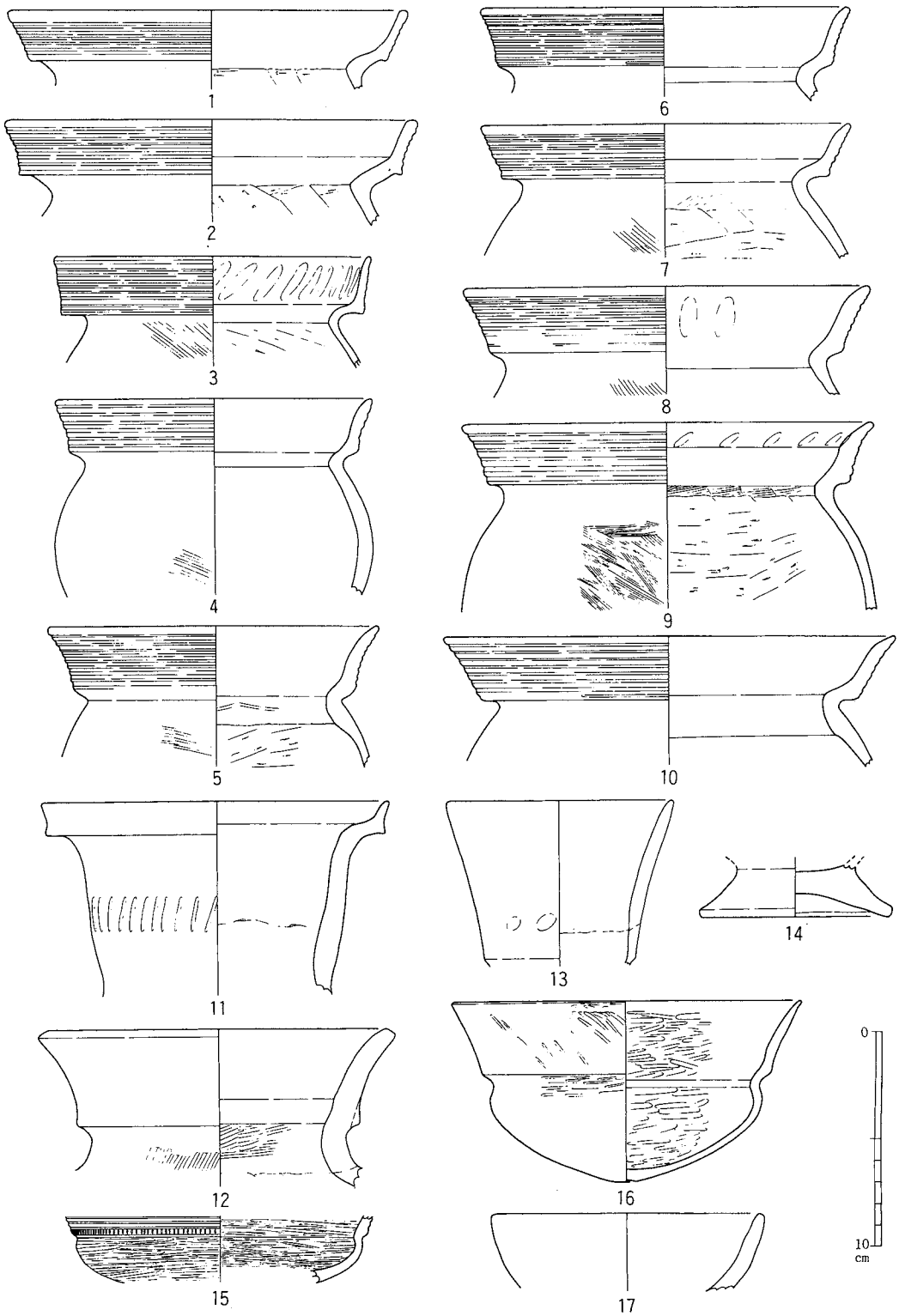
包含層（第19－1～3、9、20－25図）　1、2の口縁帯は直線的に伸び、端部は先細りにならずに丸くおさめる。3の器壁は薄く、口縁部は直角に立ち上がる。内面には等間隔に圧痕が並ぶ。9は外面に煤の付着する擬凹有段口縁甕である。25は透かし穴を四個持つ脚部である。端部は面取りされやや肥厚する。他に甕口縁部片4点、器種不明127点が出土している。

9区

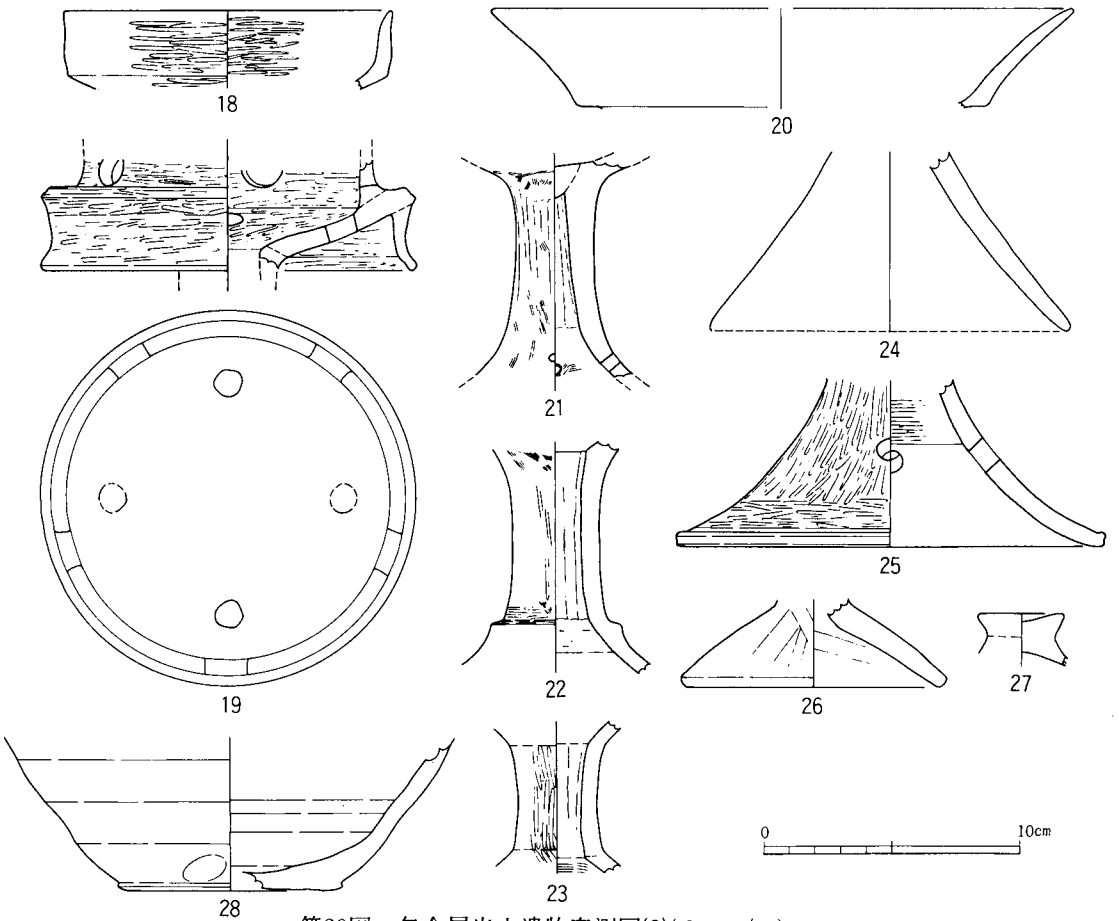
包含層（第20－27図）　調査区の屈曲部分であり溝は一条掘られているが、遺構内から遺物は出土していない。27は鈕上部がやや窪み端部を丸くおさめる蓋である。全体の遺物量は少なく、他には高杯片1点、器種不明10点が出土している。

10・11区

包含層（第19－4～8、10、12、13、16、19－19～21、24図）　遺構内からの遺物は確認できなかったが、10区の溝と11区の落ち込みとの間から残り具合の良好な遺物が出土している。その部分で遺構が検出されなかったため包含層として扱った。4～8、10は法量、色調は多少異なるが、同様の器形を持つ擬凹線有段口縁甕である。5の胎土中には僅かに海綿骨片が認められる。12は有段口縁壺である。口縁下端部には断面三角形の粘土紐が添付されている。13は細頸有段口縁壺である。器表面は摩耗しており調整は不明。16は器壁の薄い作りの丁寧な有段口縁鉢である。



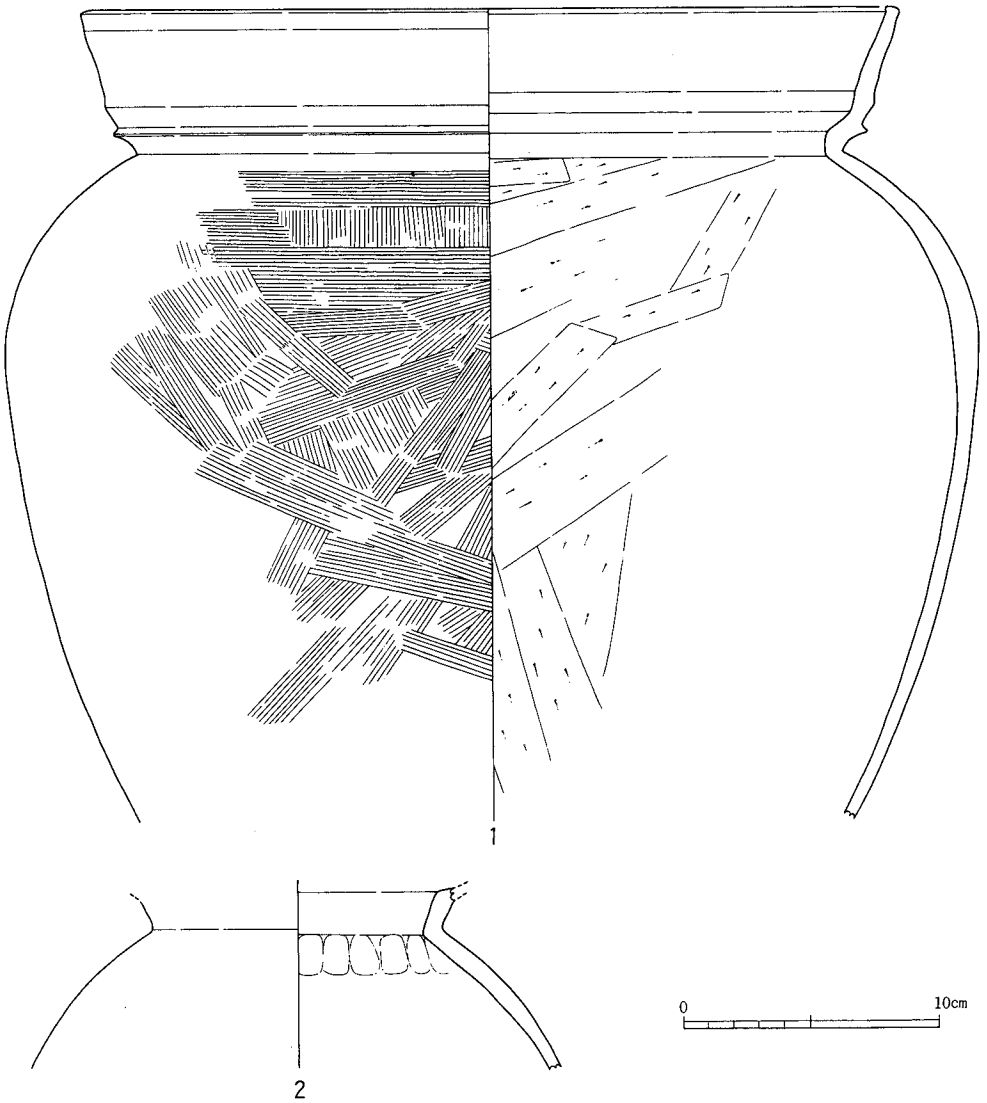
第19図　包合層出土遺物実測図(1)(S = 1 / 3)



第20図　包合層出土遺物実測図(2)(Ｓ＝１／３)

砂粒の含みは非常に少なく、内外面はヘラミガキ調整。胎土中には僅かに海綿骨片が認められる。19は垂下帯上端部に面を持つ結合器台である。体部に五箇所、受底部に四箇透かし穴が確認できる。20は有段の高杯であろうか。胎土中に少量の海綿骨片が見られる。21は高杯の棒状脚部である。裾部には外から中へ突き刺した痕跡の残る径の小さな四個の透かし穴がある。24は脚部片である。端部は面を持たず先細りとなる。他に擬凹線有段口縁甕片７点、器種不明85点が出土している。

全体の点数としては甕片152点（6.93％）の内、擬凹線有段口縁部片109点（4.97％）、「く」の字口縁部片６点（0.27％）、壺片11点（0.53％）、鉢片10点（0.45％）、高杯片26点（1.18％）、器台片９点（0.41％）、脚部片14点（0.63％）、蓋片１点（0.04％）、器種不明1970点（89.83％）、計2193点（100.00％）である。また器種不明と脚部片を除いた比率は甕片72.7％（擬凹線有段口縁部片52.1％、「く」の字口縁部片2.9％、他17.7％）、壺片5.3％、鉢片4.8％、高杯片12.4％、器台片4.3％、蓋0.5％である。なお遺跡の時期は出土遺物から見ると弥生時代終末に主体があると言える。その中にあって１・９・12号溝、ピット10はやや古く弥生時代後期後半と推定される。５号溝は中世の遺構と思われるが、それを支持するように３・４区からのみ中世の遺物が出土している。



第21図　遺跡周辺出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

第５章　昭和63年度調査(横江Ｃ遺跡、横江荘遺跡範囲確認調査)

第１節　はじめに

本年度は横江Ｃ遺跡の発掘調査と、横江荘遺跡の範囲確認調査を行った。横江Ｃ遺跡は８月２日～９月27日まで、横江荘遺跡範囲確認調査は10月31日～11月30日まで調査を行った。発掘調査は、ともに田嶋明人（当時、当センター専門員。現在、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会)、鳥越浩（当時、当センター主事。現在、県立飯田高校教諭）が担当し、横江荘遺跡調査の一部を北野博司（当センター主事）が補助した。

遺物整理・トレースなどは平成２年度に川畑誠（当センター主事）が担当して、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して行った。

報告書の執筆・作成は、田嶋明人、北野博司、川畑誠の指導を受けて、平成３年度に木立雅朗（当センター主事）が担当して行った。遺物写真撮影は大藤雅男（当センター調査員）が行った。

担当者の転出・移動、および変更で不十分な部分があると思われる。報告者の力量不足で整理しきれなかったことをお許し願いたい。

なお、横江Ｃ遺跡は、「横江Ａ遺跡」として発掘調査を行ったが、別遺跡として捉えるべきであるため、報告に際して名称を変更した。

第２節　横江Ｃ遺跡の発掘調査

１．調査位置と微地形

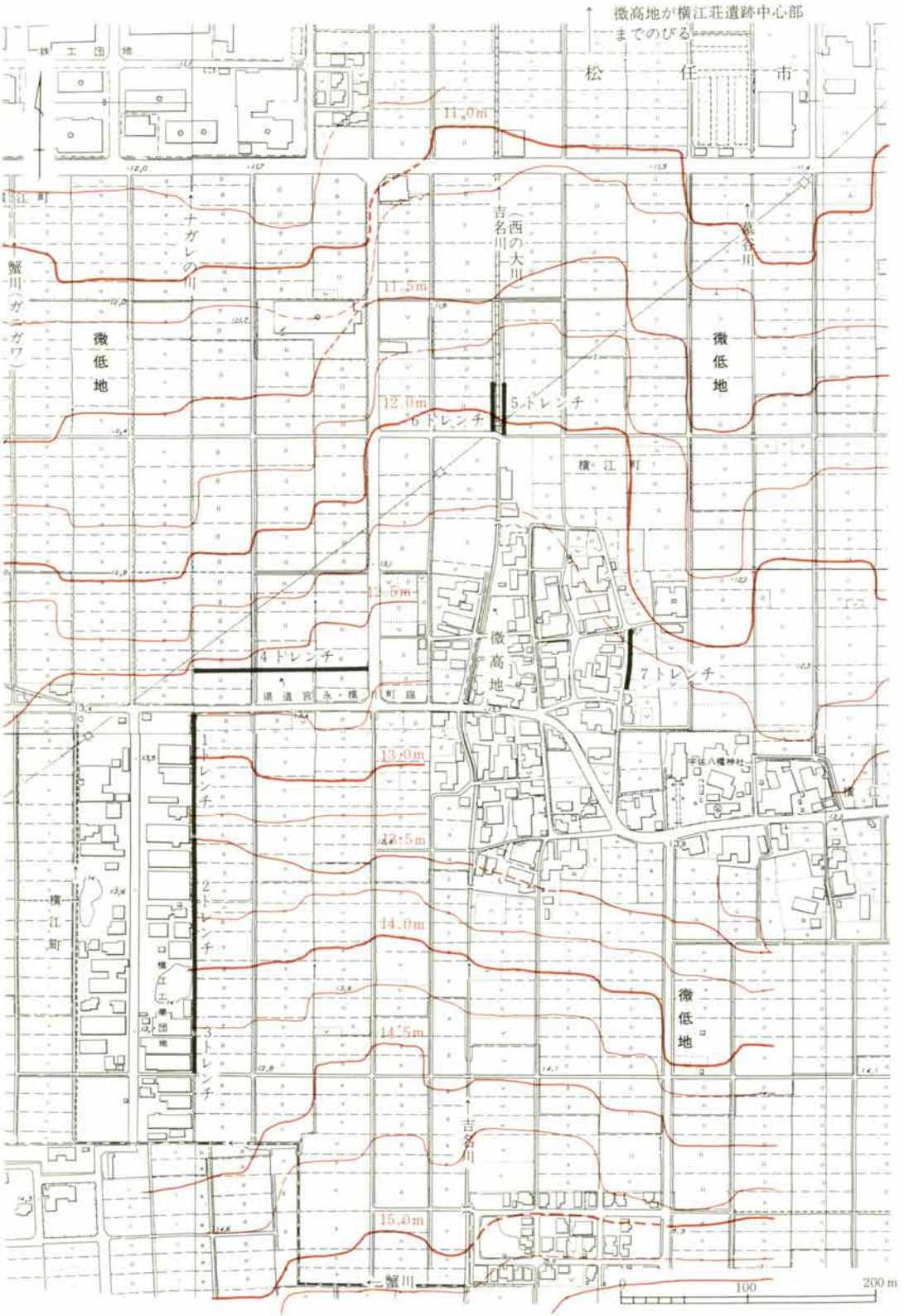
第22図に示したように７本のトレンチを設けた。幅はいずれも約２ｍである。１～３トレンチは１本のトレンチの途中２か所を掘り残して３本のトレンチとしたもので、直線で約300ｍを測る。１～３トレンチは同一の地区割りだが、それ以外はそれぞれ任意の地区割りを行った。任意の原点から10ｍごとに１区、２区と呼んでいるが、杭名は任意の原点からのメートル数で名付けた。遺構名は１～３トレンチは通し番号で付けたが、４・５トレンチは発掘現場でそれぞれ個別の番号を付けたため、そのまま踏襲した。また、発掘現場で遺構番号を付けていない遺構の中に、報告に際して新たに番号を付けたものがある。

なお、６・７トレンチは遺構が確認されなかったため、表土を掘削しただけで調査を終え、実測などは行っていない。なお、６トレンチでは旧河道が確認されている。

調査区周辺の微地形を第２図に示した。横江の集落がちょうど微高地上にのっており、その両脇に墓谷川、ナガレの川と蟹川による微低地が形成されている。この付近では吉名川が微高地の真上を流れているのは極めて不自然である。用水として流路を変更されているのではないだろうか。

１～３トレンチは、ちょうどナガレの川に沿った調査区であるが、等高線からは微高地の縁辺部近くにあたり、横江工業団地とその西側付近が微低地になるものと推定される。３トレンチで

第22図　横江Ｃ遺跡調査位置と小字名（小字名は『横江史』より。（　）付は宮下与真氏御教示　Ｓ＝1/5000）



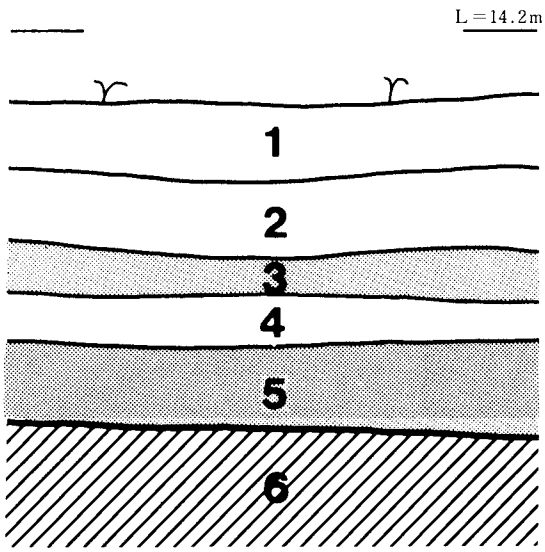
第23図　横江C遺跡調査位置と周辺の微地形（県営ほ場整備事業郷地区平面図および都市計画基本図を改変。S＝1/5000）

は遺構がほとんど確認できなかったが、蟹川による微低地に近いためと思われる。4・7トレンチも微高地の縁辺部にあたる。

5・6トレンチは微高地のもっとも高い部分にあたる。しかもその微高地は横江荘遺跡に連続している。この微高地の北端は第2節で報告する横江荘遺跡1～6トレンチにあたる。5トレンチからは後述するように奈良時代の掘立柱建物が検出されており、横江荘遺跡の延長である可能性が高い。

2．地層

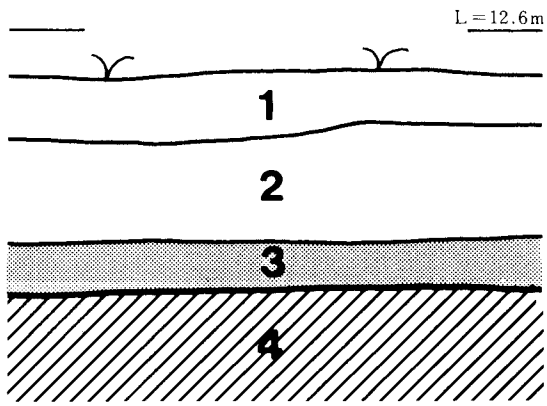
当調査区の基本土層を第24・25図に示した。1～3トレンチはほぼ同じ土層で、間層をはさんで2層の包含層が確認される（第24図）。ただし、3層は須恵器を含むが、遺構は少なかった。地山に類似した間層（4層）をはさんで、5層があり、遺物の大半がこの層から出土している。3



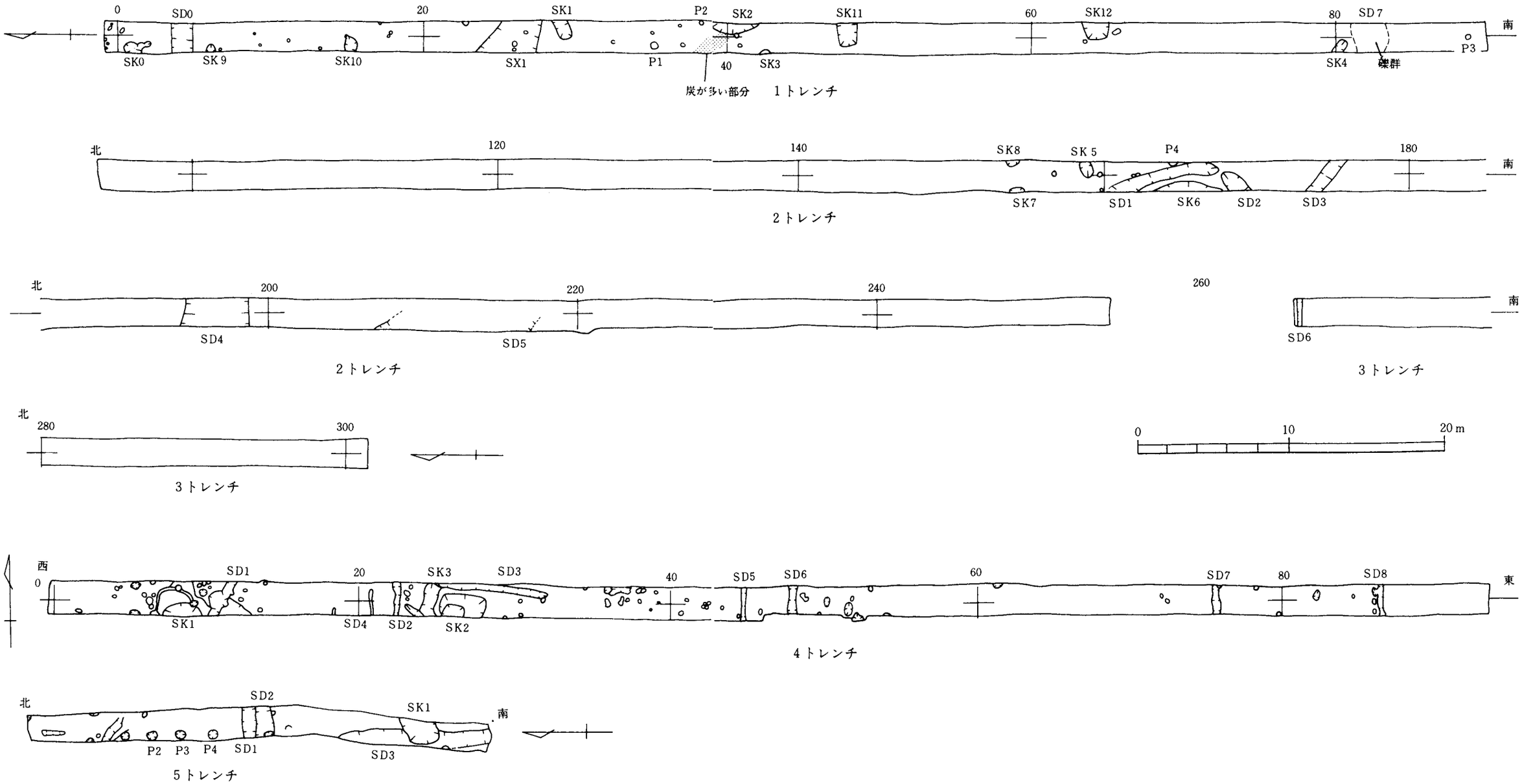
1　耕作土
2　黄灰色砂質シルト（床土）
3　淡灰色砂質シルト（須恵器包含層）
4　濁淡黄灰色シルト（間層）
5　暗灰褐色シルト（弥生土器包含層）
6　淡黄灰色粘質土

第24図　横江C遺跡1～3トレンチの基本土層（2トレ95区付近。S＝1/20）

1　耕作土
2　黄灰色砂質シルト（粗砂・小石含む）
3　暗褐色シルト
（黒色シルトブロック混入。炭含む。包含層）
4　淡黄灰色砂質シルト（砂質強い）



第25図　横江C遺跡4トレンチの基本土層（83区付近。S＝1/20）



第26図　横江C遺跡(1988年度調査)各トレンチ平面図（S＝1/300）

層が古代の包含層、５層が弥生時代の包含層であろう。手取川扇状地では一般的に古代の包含層は黒色シルトであり、当調査区はその中にあって、やや異質であろう。間層である４層は古墳時代前後に堆積したと推定される。６層は手取川扇状地に普遍的に認められる地山層である。最近、この地山層に極めて近似した土層に縄文晩期～弥生時代前期の土器が含まれることが松任市乾遺跡で確認されているが、一般的には縄文時代晩期以降の地山層で、この地層の下層にかなり厚い礫層が存在する。

４トレンチでは包含層は１層しか確認できなかった（第25図）。

５トレンチでは耕作土直下に地山層（６層）が検出された。微高地では耕作土直下に地山が確認されることが多く、それらの大半は遺跡の立地に適した地点である。また、地山の黄灰色土の下層には礫層が確認されるが、ここではその礫がかなり高くまであがっており、黄灰色土の厚さが薄く、礫が混入していた。

３．遺構

１トレンチ

ＳＸ１　幅約2.6～3.8m、深さ約0.2mの溝状の浅い落ち込み。

ＳＫ０　長辺約1.1m、短辺約0.8m以上、深さ約0.15mを測る。南側に小さな溝が延びている。

ＳＫ１　幅約1.1m、長さ1.4m以上、深さ約0.3mを測る長方形の土坑。形からの溝の端である可能性もある。

ＳＫ２　大半が調査区の外に延びるため形は不明確である。一辺約3.2m以上、深さ約0.1～0.25mを測る。

ＳＫ３　幅約0.7m以上、深さ0.2mを測る。大半が調査区の外に延びており、形は不明。ピットの可能性もある。

ＳＫ４　幅約0.6m、長さ1.0m以上、深さ約0.2mを測る長方形の土坑。形から溝の端である可能性もある。

ＳＫ９　幅約0.6m、長さ0.5m以上、深さ約0.1mあまりを測る長方形の土坑。

ＳＫ10　短辺約0.9m、長辺1.0m以上を測る楕円形の土坑。ほぼ垂直に掘り込んでいる。電信柱の跡か。

ＳＫ11　幅約1.4m、長さ1.35m以上、深さ約0.3m以上を測る長方形の土坑。覆土などの状況から、ＳＫ12とともに新しい時期の遺構と思われる。

ＳＫ12　幅約1.7m、長さ1.0m以上、深さ約0.1m以上を測る長方形の土坑。

ＳＤ０　幅約1.3m、深さ約0.95mを測る。２層を切って掘り込まれている近現代の溝である。

ＳＤ７　幅約3.0m、深さ約0.4mを測る。古代の包含層（４層）から切り込んでいるため、古代の遺構であることが分かる。平面形を十分にとらえられなかったが、一番深い部分では地山下層の礫層まで掘り下げていた。

２トレンチ

100区から150区付近は遺構が確認できなかった。遺構は150～180区の間に集中する。また、180

区より南の地点では遺構密度が著しく低かった。

ＳＸ２　６号土坑のまわりを約0.5m離れてＳＤ１・ＳＤ２が巡っている。６号土坑の大半が調査区の外に延びているため、これらの遺構間の関係は不明確だが、一連の遺構である可能性が高い。平地式住居などの一部に６号土坑が切り合っている可能性も否定できない。取り合えず、不明遺構として捉えて起きたい。

ＳＫ５　幅約0.7m以上、長さ約1.3m前後、深さ0.3mを測る楕円形の土坑。

ＳＫ６　幅約0.6m以上、深さ約0.5mを測る溝状の遺構。大半が調査区の外に延びている。

ＳＫ７　径約1.0mの円形の土坑。深さ約0.4mを測る。

ＳＫ８　幅約0.9m以上、深さ0.1mを測る土坑。大半が調査区の外に延びており、形は不明。

ＳＤ１　幅約0.8m、深さ約0.4～0.2m、延長７m以上の溝状遺構。ＳＤ２とは約0.3m離れて接している。ＳＤ１とＳＤ２は円形に近い形でＳＫ６の周りを回っている。

ＳＤ２　幅約1.1m、深さ約0.5m、延長２m以上の溝状遺構。

ＳＤ３　幅約0.8m、深さ約0.3m、延長３m以上の溝。

ＳＤ４　幅約4.5m、深さ約1.5mを測る溝。２層中から切りこんでおり、近現代の旧水路であることが分かる。

ＳＤ５　幅７m前後、深さ1.1m以上の溝。３層中、もしくはその下面から切りこんでいる。完掘していないが、トレンチに対して斜めに走っている。ほぼ南北・東西の方向をとる現在の水路や地区割りとは方向が違っており、耕地整理以前の水路であると推定される。

３トレンチ

当トレンチでは東西方向の溝（ＳＤ６）が１本確認されただけで、それ以外の遺構を検出できなかった。

４トレンチ

ＳＫ１　径2.8m以上の略円形の土坑。深さ約0.3mを測る。土坑の外側には深さ0.05～0.1mの浅い落ち込み（ＳＫ１’）がある。ＳＫ１と一連の遺構であった可能性もあるが、断面観察ではＳＫ１に切られている。ＳＫ１の中とＳＫ１’の上面には多量の石、および石製品が廃棄されていた。

ＳＫ２　東西3.0m、南北1.5m以上の方形の土坑。深さ約0.2mを測る。底は二段掘りのようになっており、一辺1.2mの方形で深さ約0.1mの掘り込み（ＳＫ２’）がある。

ＳＫ３　幅約0.8m、長さ2.0m程度、深さ約0.2mを測る溝状土坑。南端はさらに同様の落ち込み（ＳＫ３’）が調査区の外側に延びている。

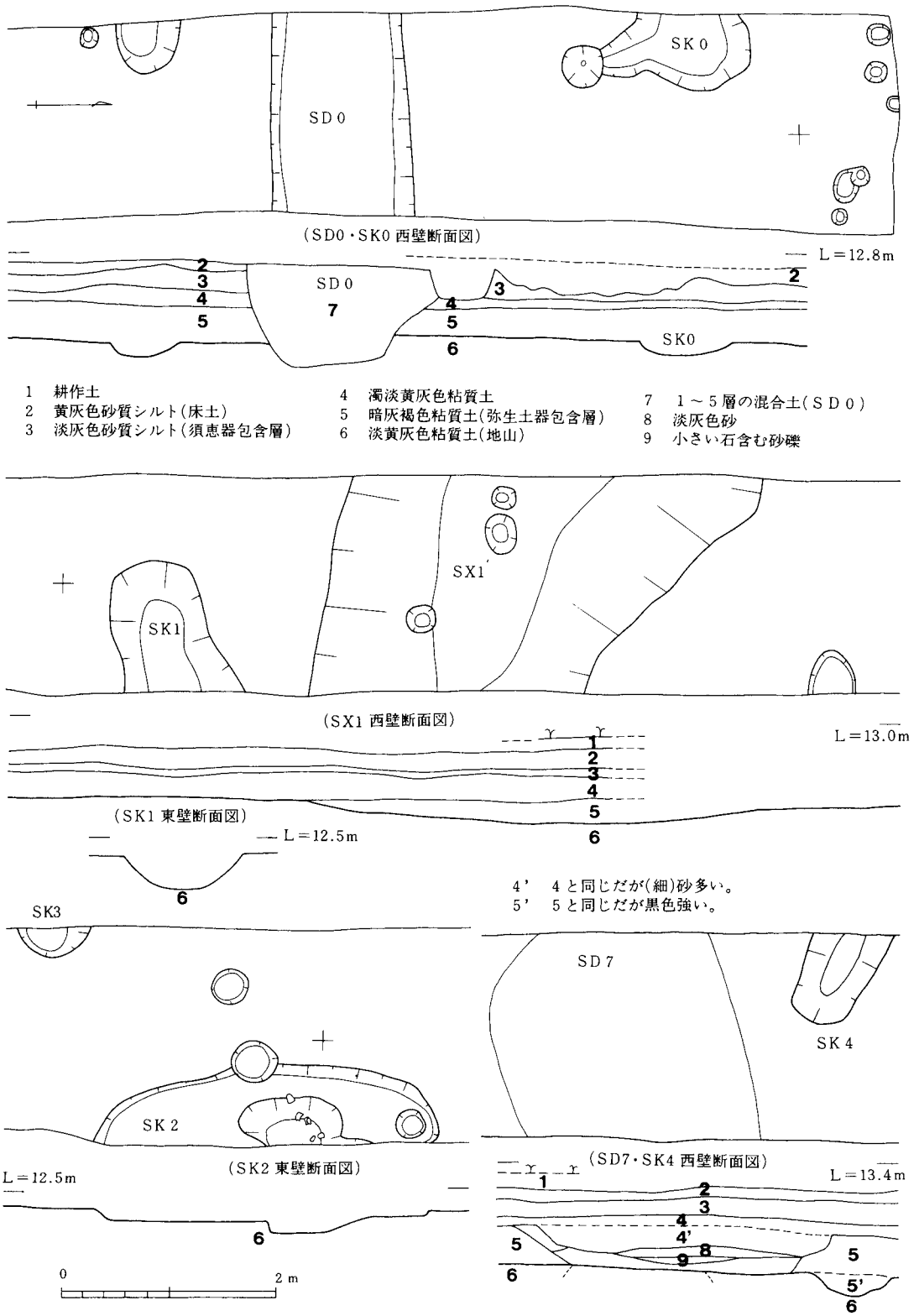
ＳＫ４　幅約1.6m以上、長さ2.8m以上、深さ約0.02～0.08mを測る溝状土坑。ＳＤ１に切られる。

ＳＤ１　幅約0.5～0.8m、深さ約0.3～0.4mを測る。ＳＫ１’、ＳＫ４を切っている。

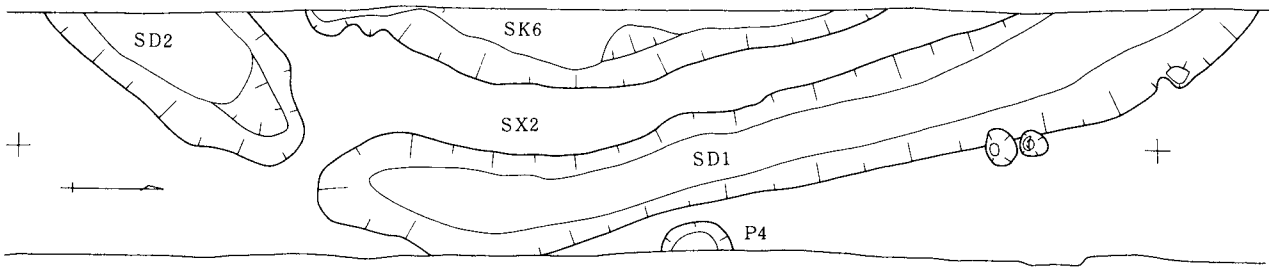
ＳＤ２　幅約0.35m、深さ約0.15mを測る。ほぼ南北方向の溝。

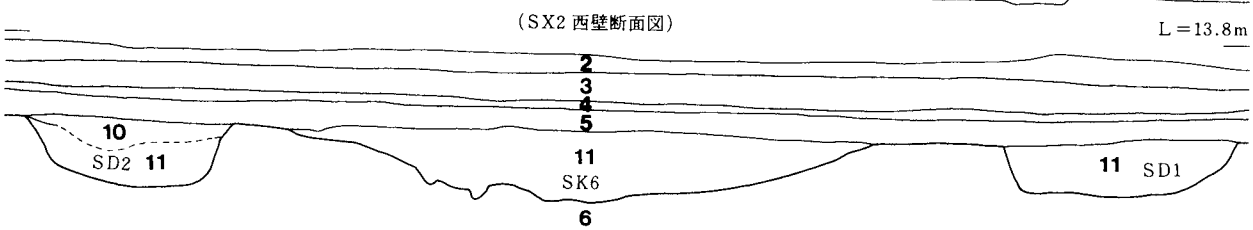
ＳＤ３　幅約0.4m、深さ約0.15mを測る。

ＳＤ４　幅約0.15m、深さ約0.03～0.04mを測る。ほぼ南北方向の溝。

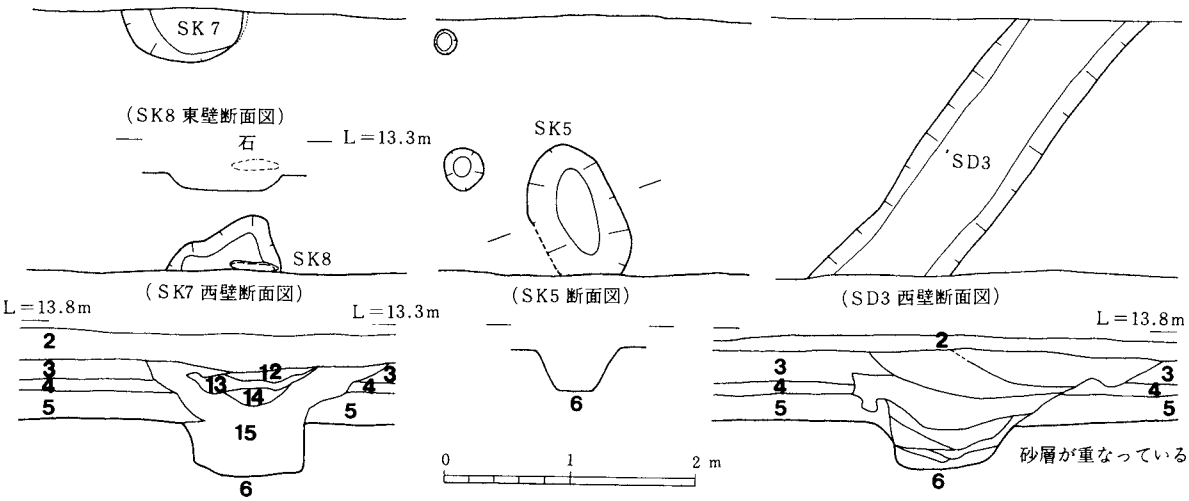


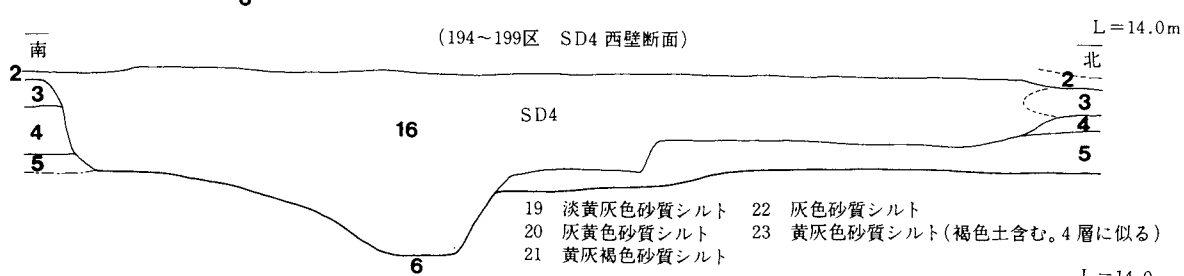
第27図　横江C遺跡1トレンチ遺構実測図(S＝1/60)



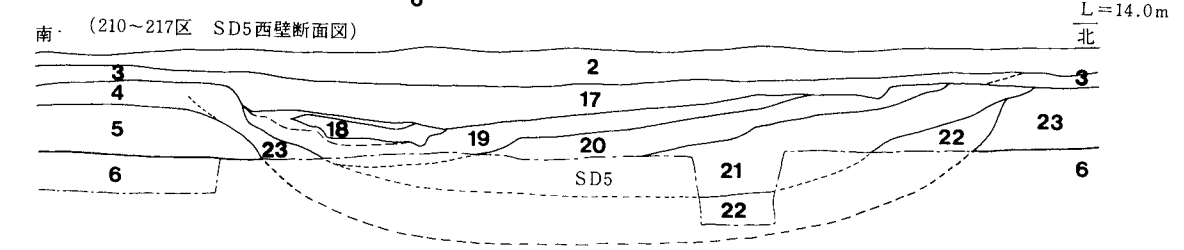


10　黒色砂質土まじり暗褐色砂質土
11　暗褐色砂質土(砂質強い。細砂)
12　暗灰色砂質シルト
13　明黄色砂質シルト(淡灰色土混入)
14　12と同じ
15　暗褐色砂質シルト(細砂質)
16　黄褐色砂質シルト(SD4)
17　淡灰褐色シルト(黄褐色ブロック少し含む)
18　灰色砂

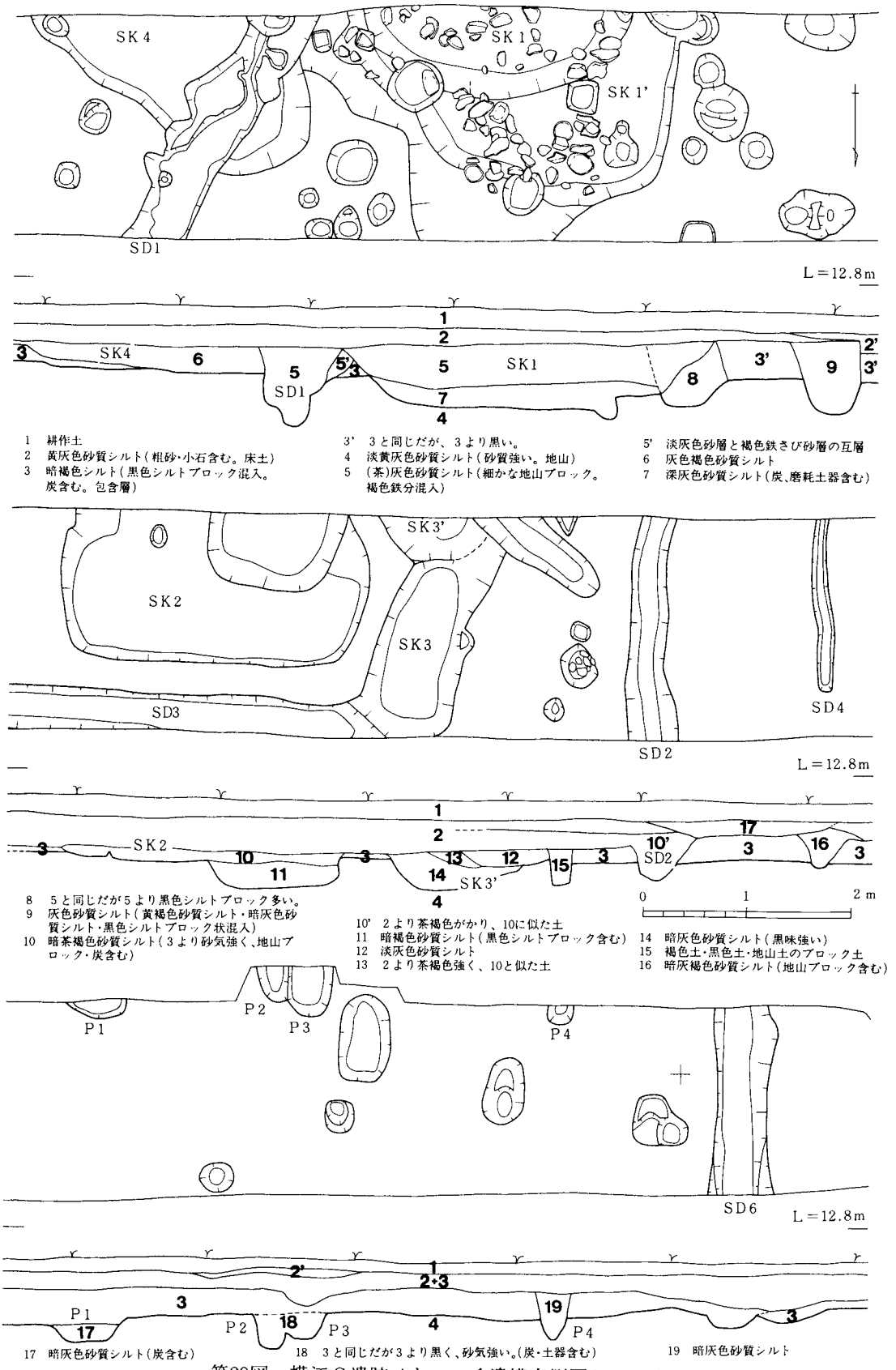




19　淡黄灰色砂質シルト
20　灰黄色砂質シルト
21　黄灰褐色砂質シルト
22　灰色砂質シルト
23　黄灰色砂質シルト(褐色土含む。4層に似る)

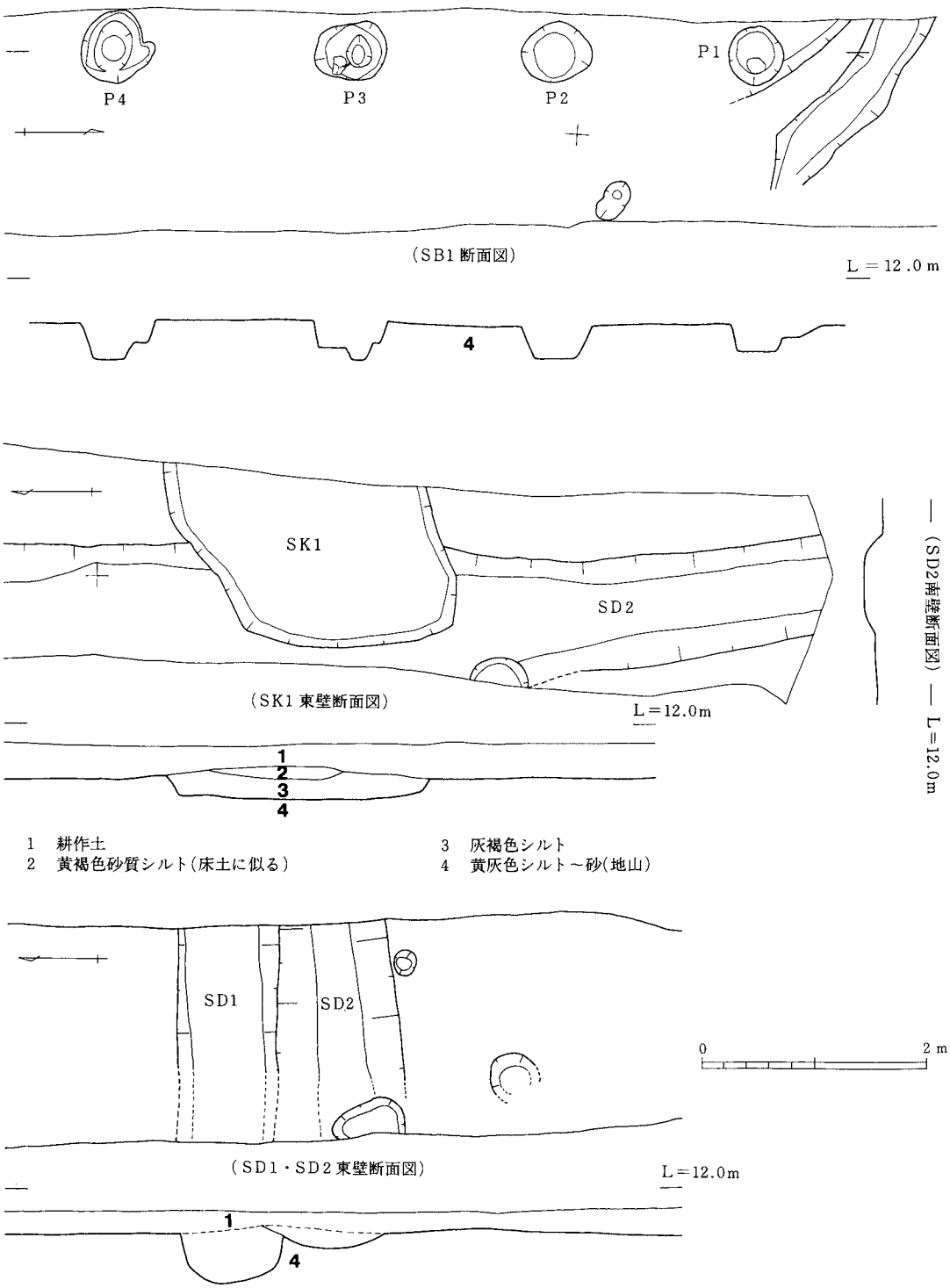


第28図　横江C遺跡2トレンチ遺構実測図(S＝1/60)

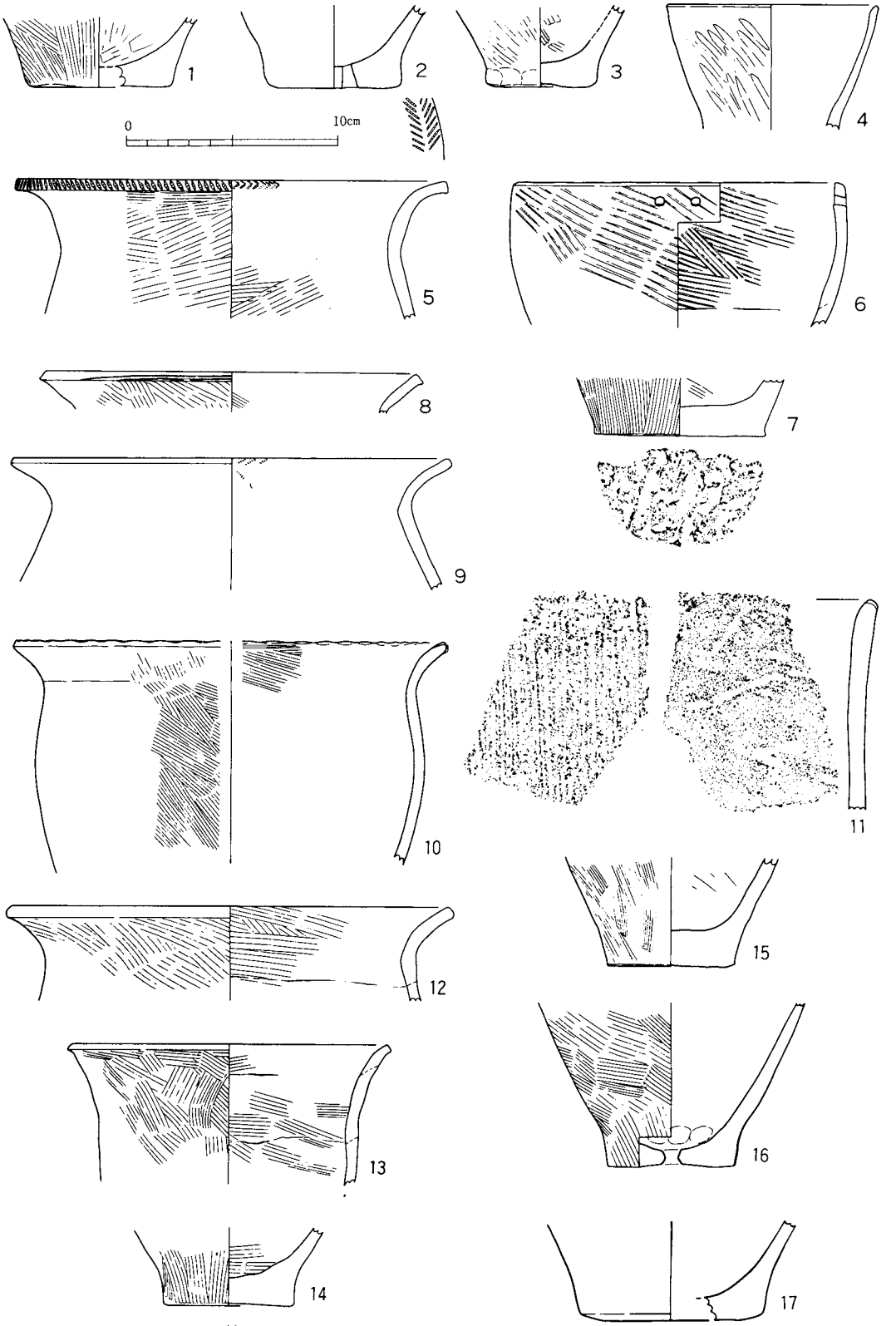


1 耕作土
2 黄灰色砂質シルト(粗砂・小石含む。床土)
3 暗褐色シルト(黒色シルトブロック混入。炭含む。包含層)
3' 3と同じだが、3より黒い。
4 淡黄灰色砂質シルト(砂質強い。地山)
5 (茶)灰色砂質シルト(細かな地山ブロック。褐色鉄分混入)
5' 淡灰色砂層と褐色鉄さび砂層の互層
6 灰色褐色砂質シルト
7 深灰色砂質シルト(炭、磨耗土器含む)
8 5と同じだが5より黒色シルトブロック多い。
9 灰色砂質シルト(黄褐色砂質シルト・暗灰色砂質シルト・黒色シルトブロック状混入)
10 暗茶褐色砂質シルト(3より砂気強く、地山ブロック・炭含む)
10' 2より茶褐色がかり、10に似た土
11 暗褐色砂質シルト(黒色シルトブロック含む)
12 淡灰色砂質シルト
13 2より茶褐色強く、10と似た土
14 暗灰色砂質シルト(黒味強い)
15 褐色土・黒色土・地山土のブロック土
16 暗灰褐色砂質シルト(地山ブロック含む)
17 暗灰色砂質シルト(炭含む)
18 3と同じだが3より黒く、砂気強い。(炭・土器含む)
19 暗灰色砂質シルト

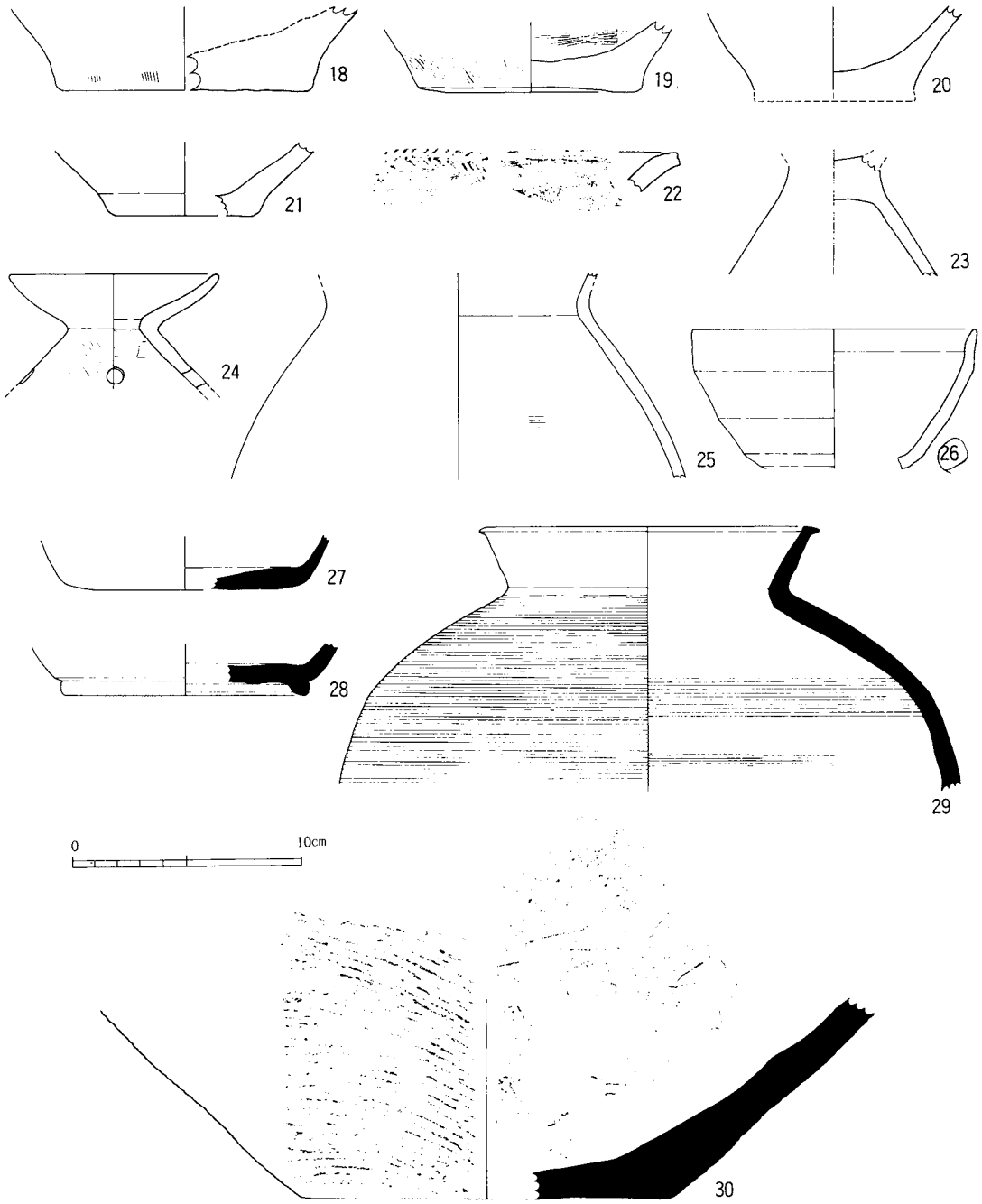
第29図　横江C遺跡4トレンチ遺構実測図(S=1/60)



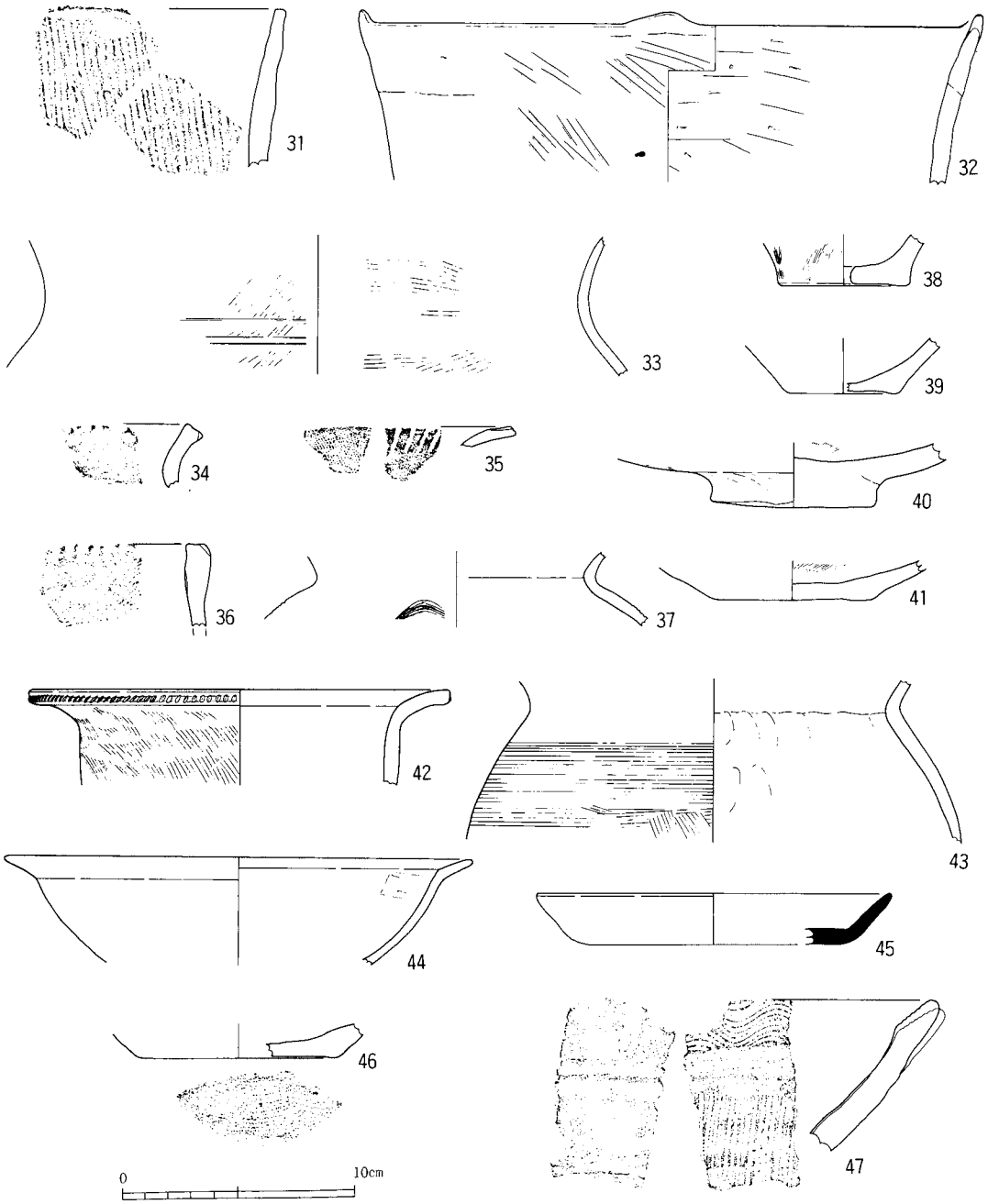
第30図　横江C遺跡 5トレンチ遺構実測図(S＝1/60)



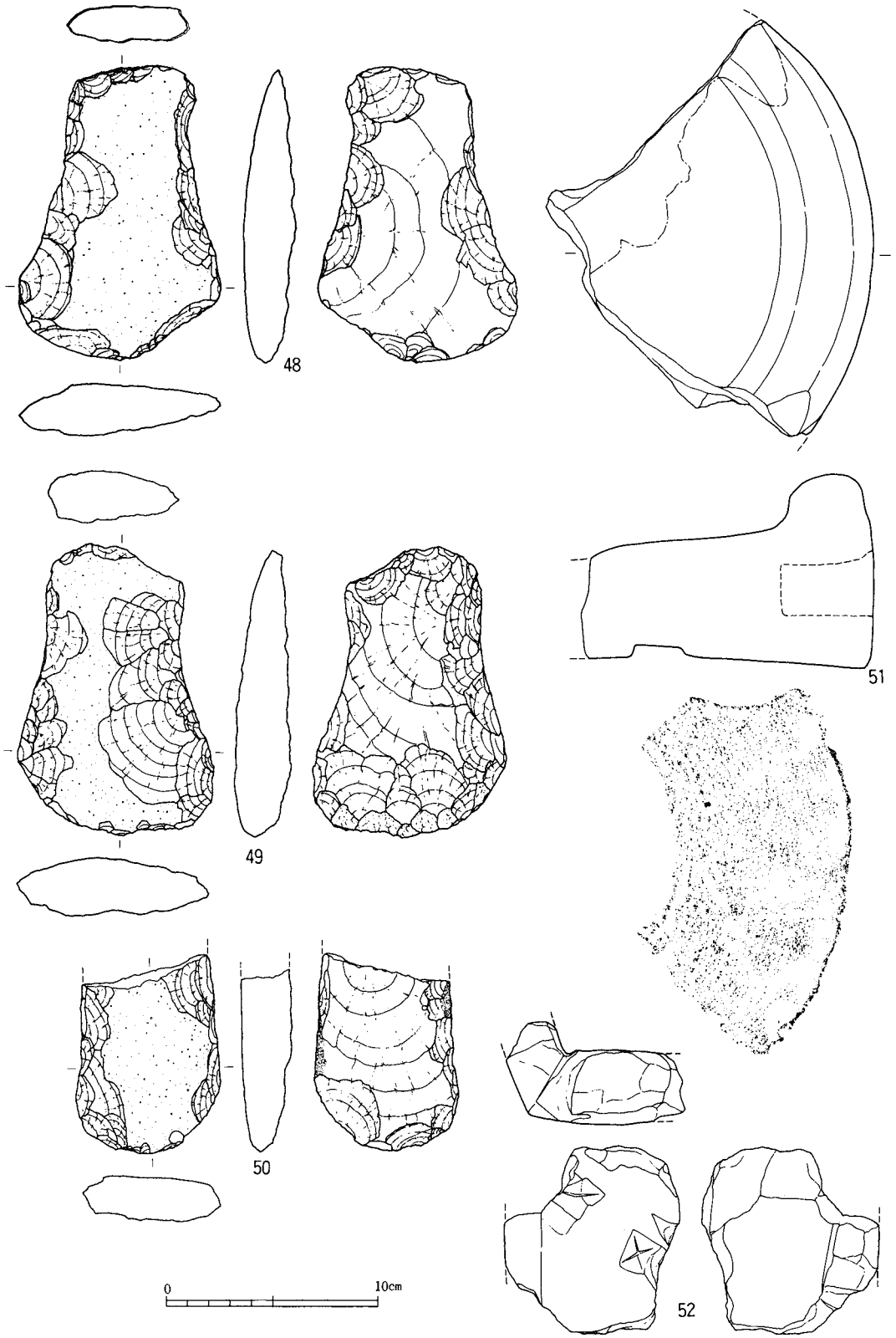
第31図　横江Ｃ遺跡出土遺物実測図(1)（Ｓ＝1/3）



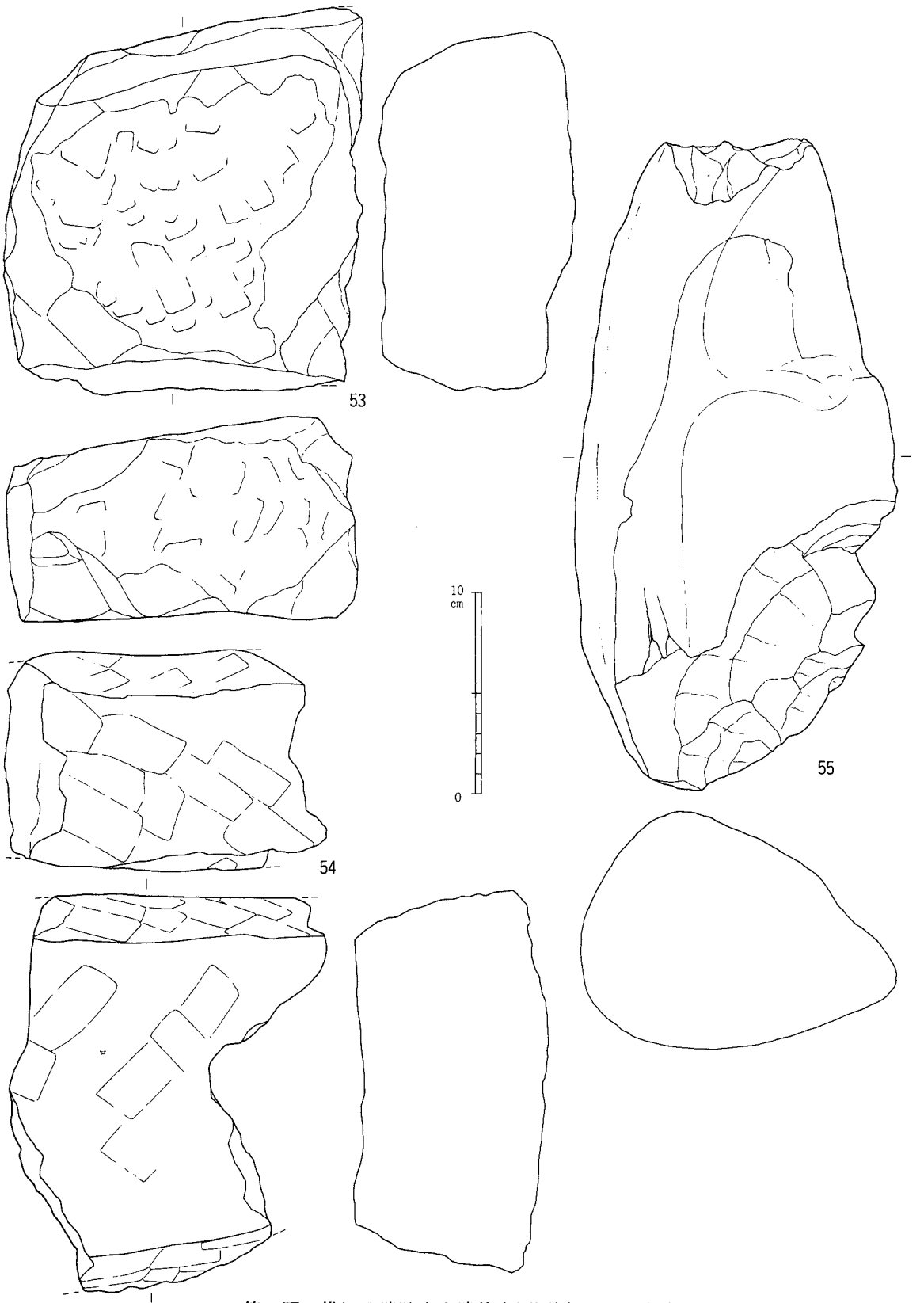
第32図　横江Ｃ遺跡出土遺物実測図(2)　（Ｓ＝１／３）



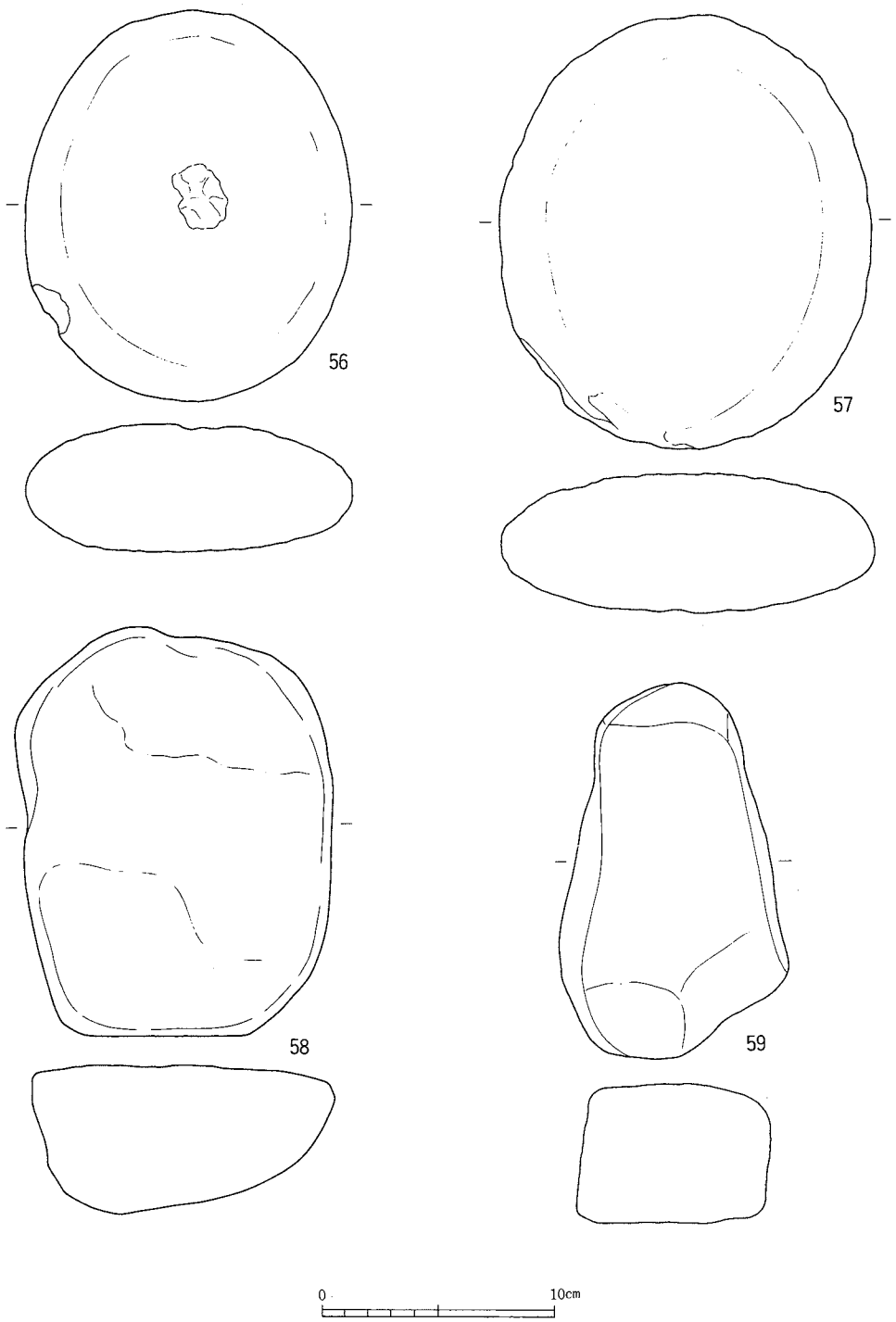
第33図　横江Ｃ遺跡出土遺物実測図(3)（Ｓ＝１／３）



第34図　横江Ｃ遺跡出土遺物実測図(4)（Ｓ＝１／３）



第35図　横江Ｃ遺跡出土遺物実測図(5)（Ｓ＝１／３）



第36図　横江Ｃ遺跡出土遺物実測図(6)（Ｓ＝１／３）

ＳＤ５　幅約0.3m、深さ約0.05～0.1mを測る。ほぼ南北方向の溝。

ＳＤ６　幅約0.5m、深さ約0.1～0.2mを測る。ほぼ南北方向の溝。　ＳＤ７　幅約0.5m、深さ約0.05mを測る。ほぼ南北方向の溝。

ＳＤ８　幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。ほぼ南北方向の溝。

５トレンチ

当トレンチは微高地上にあり、耕作土直下が地山層で包含層～地山層そのものが削平を受けていると思われる。そのため、切り込む面から遺構の新旧を決定することができない。

ＳＢ１　掘立柱建物の一部が確認できた。径0.5～６m、深さ約0.3mの柱穴がほぼ南北方向に４つ並んで検出できた。建物が東西のどちら側に広がっているのか、限られた調査区内では確認できなかったが、東側であれば掘り方の一部がトレンチ東端にかかる可能性が高いので、西側に延びていたと想定される。柱間はＰ５～Ｐ２、Ｐ２～Ｐ３の間は、ほぼ1.8mであったが、Ｐ３～Ｐ４の間は2.2mと広い。

ＳＫ１　幅約2.4m、長さ２m以上、深さ0.2mを測る。

ＳＤ１　幅約0.9m、深さ約0.5mを測る東西方向の溝。ＳＤ２に切られている。

ＳＤ２　幅約1.1m、深さ約0.15mを測る東西方向の溝。ＳＤ２を切っている。

ＳＤ３　幅約1.0m、深さ約0.1～0.15mの南北方向の溝。北端では西側に曲がっていく。

４．遺物

ＳＫ１（１）　弥生土器の底部が出土した。

ＳＫ２（２～６）　２・３は弥生土器の底部で、２には底部に焼成前の穿孔が認められる。６は壺の口縁部で、外面に磨きの痕跡が認められる。６は内外面に粗いハケ調整を施す無頸壺で、口縁端部付近に紐穴が二つ一対で穿孔されている。４は弥生時代後期のものと考えられるが、５・

４トレＳＫ２出土アンカ
（実測図なし）

５トレ出土打製石斧
（実測図なし）

第37図　横江Ｃ遺跡出土石製品

6はいずれも弥生時代中期、いわゆる小松式の時期に比定できる。

ＳＫ５（８）　弥生土器の底部が出土している。底部外面には籾圧痕が確認できる。

ＳＫ６（７・９）　７の口縁端部には凹線に近い沈線状の痕跡がある。９は口縁部内面に矢羽状の刺突文が施されている。小松式の時期に比定できるだろう。

ＳＤ１（10～16）　11はバケツ型の甕（もしくは深鉢）で外面に縦方向の条痕文を施している。10は口縁端部がわずかに波型を呈する。16は焼成前に底部穿孔されている。

18～21は２トレンチ出土、22～26は４トレンチ出土、27～30は５トレンチ出土である。29は掘立柱建物のピット３から出土した須恵器短頸壺である。30は「攪乱土坑」（遺物ラベルの注記。ＳＫ１のことか）から出土している。中世珠洲焼の大甕底部と思われる。５トレンチは８世紀後半～９世紀前半の須恵器（27～29）がややまとまって確認される。掘立柱建物の時期もこの時期に比定できるだろう。この時期はちょうど、横江荘遺跡の最盛期にかさなる。この地点が、その南端を示す可能性もあり、極めて重要である。

31～45、47は１トレンチから出土した。31～33は弥生時代前期の甕・壺類である。34～42、45は弥生時代中期の甕・壺類であろう。43は弥生時代末～古墳時代初め頃の鉢と思われる。44は平安時代末頃の土師器椀の底部である。46は出土地点不明の表採資料であるが、８世紀末～９世紀初頭頃の須恵器皿である。47は中世珠洲焼のすり鉢で吉岡編年のⅥ期に比定される。

１～３トレンチ遠景（北東から）

１～３トレンチの現況（北から）

４トレンチの現況（西から）

５トレンチの現況（南から）

写真３　横江Ｃ遺跡調査地点の現況（1992年２月撮影）

48～50は打製石斧で、48は３トレンチのＳＤ６の上層の包含層から出土、49は５トレンチ、50は１トレンチから出土した。また、図化できなかったが、これらとは別に完形に近い打製石斧が５トレンチから出土している（第37図参照）。51～59は、４トレンチのＳＫ２から出土した石製品である。51は石臼で、下面に溝状の彫り込みが確認される。側面には把手を挿入する穴が確認される。推定で直径が約28.5cmを測る。52はアンカの破片で、これとは別に図化できなかったアンカの底部片がある（第37図参照）。53･54は梯川中・上流域周辺で産出する凝灰岩を加工して立方体にしたもので、カマドなどを構築する部材であると思われる。表面は煤などで黒変している。55～59は一部が焼けている石で、形や大きさは様々である。ＳＫ２から出土した石のほとんどがこのように用途がわからない、一定の形をしていない自然の石であった。

５．小結

１～３トレンチでは弥生時代（前期～）中期の遺構、土器が確認され、４トレンチでは弥生時代中期、古墳時代前期、中世の遺構、遺物が確認された。５トレンチでは８・９世紀、中世の遺構、遺物が確認された。８・９世紀の遺構は近接する横江荘遺跡の延長である可能性が高く、極めて重要な知見であった。また、１～４トレンチの中でも３トレンチは遺跡の縁辺部にあたる。１・２トレンチには弥生時代前・中期の遺構が集中し、４トレンチには弥生時代の遺物は少なく、古墳時代前期と中世の遺構が加わっている。時代ごとに集中地点が異なっていたと思われる。

１～４トレンチのひとまとまりの遺構密集地区と５トレンチは別遺跡になる可能性が高い。手取川扇状地特有の島状地形が発達していた当地区では、遺跡は微高地に集中し、微低地・低地には空白地帯、もしくは耕作地帯が広がっていたのであろう。

第３節　横江荘遺跡の範囲確認調査

１．調査区の位置と調査方法

県営圃場整備の設計資料を作成して横江荘遺跡の保存を図るため、その範囲確認調査を行った。調査は松任市教育委員会と協力して地区の分担を行い、石川県立埋蔵文化財センターは第38図に示した調査区を設けた。当初、遺跡の南側の広がりを確認するため、さらに南側へ調査区を拡張する予定であった。しかし、水田を復旧しなければならないにもかかわらず、天候不順などのために調査が遅れ、当初の目的を果たせないまま、取り合えず昭和63年度の調査を終えた。

その後、県耕地整備課からの打診がなかったが、当地区はほ場整備の範囲から除外されることになった。そのため、当地区南側の範囲確認調査は中断したまま残されている。周辺の地価高騰と開発の絡みから、早急な対応が求められている。

調査区は幅約３ｍ、全長約285ｍの東西方向のトレンチであるが、水路、畦道などの関係で途中を掘り残し、東から西へ順に１トレンチ、２トレンチ、…と名付けた。地区割りは、当時隣接して発掘調査を行っていた松任市教育委員会の調査杭を使用して行った。２トレンチの東端に当たるＥ415ｍ－Ｓ81ｍ地点を原点とし、発掘現場では地区名を原点から西方向に何ｍかと言う距離で名付けた。ただし、報告に際しては松任市教育委員会と同じ方法で地区名を呼び変えている。なお、松任市教育委員会の地区割りについては、［西野・滋井　1983］に明記されている。

本調査は横江荘遺跡の保存を前提とした調査であるため、原則として遺構の掘り下げを行わず、遺構検出にとどめた。そのため、部分的に遺構面まで下げていない地点も存在する。また、調査後も遺構面の保存をはかるため、砂で埋め戻した。

遺構を掘り下げていないため発掘現場では遺構番号を付けなかったが、報告にさいして便宜的に遺構番号を付けた。本来ならば横江荘遺跡全体を通した遺構番号を付すべきであろうが、そうした作業が行われていないため当調査区個別の番号を仮に付けた。

なお、発掘調査は1988年10月31日から同年11月30日まで延べ16日間行い、埋め戻し作業を12月８日から12月12日まで延べ３日間行った。また、1989年３月23日には調査地点の畦や道などの修復作業を行った。

なお、調査から報告書刊行に至る作業にあたっては、松任市教育委員会および金山弘明氏から様々な便宜を計って頂いた。記して感謝の意を表します。

２．微地形

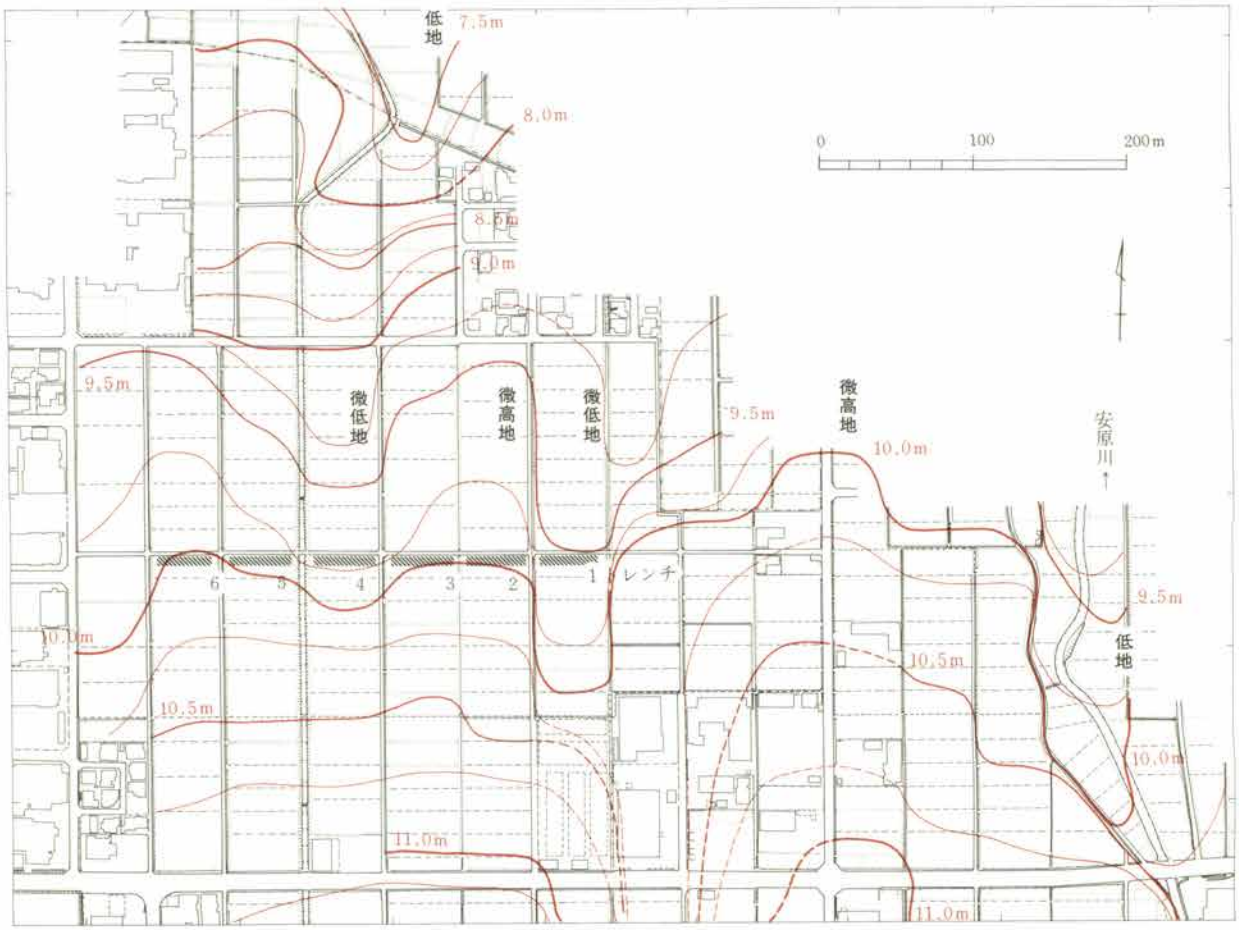
調査区周辺の微地形を第39図に、第１～６トレンチの横断図を第40図に示した。調査区の現地表面の標高は約9.6ｍ～10.0ｍを測る。第２～３トレンチと第６トレンチは微高地にあたり、第４トレンチの西端～第５トレンチの東側は自然河川により開析されている。この地点は現在でも南北に水路が走っている。また、第１トレンチはそれよりも低いが、この部分にも水路が走っている。さらに東は安原川によって急に落ち込んでいる。

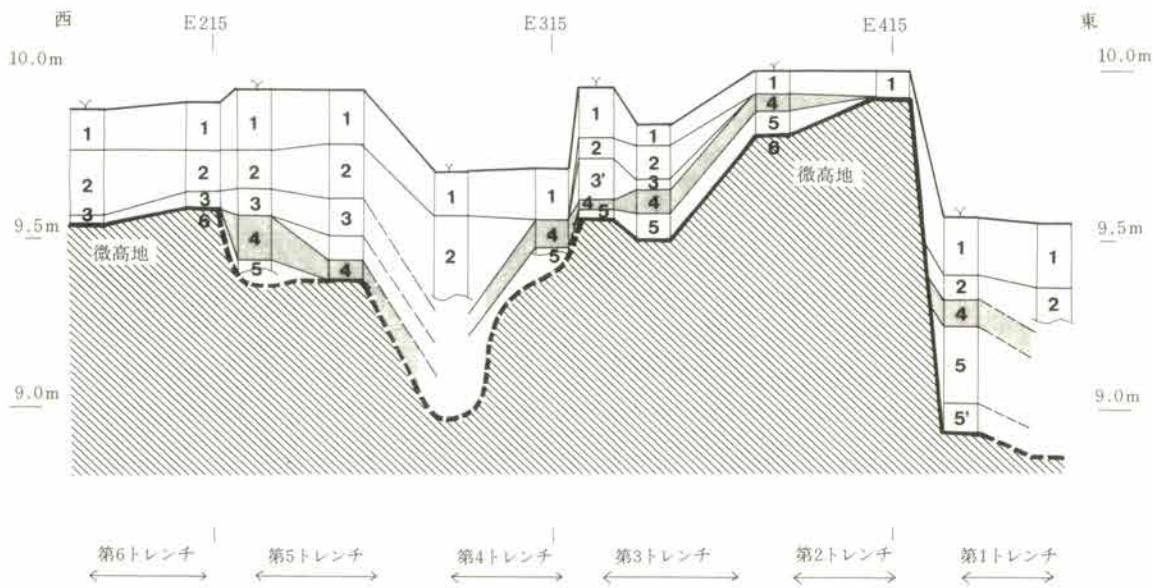
このように、周辺は微低地（低地）と微高地の連続で、やせ尾根状の微高地が南北に細長く続いている。調査区より西側でも数本の自然河川による落ち込み（微低地）が平行して確認され、一帯全域が同様の地形を成していることがわかる。典型的な手取扇状地の地形と言えよう。

このような微低地を流れる川を東から順番に上げると、安原川、墓谷川、西の大川（吉名川）、ナガレの川、蟹川、福増川と呼ばれる川が上げられるが、安原川、福増川以外は小さな流れにすぎず、安原川と福増川が作り出す低地によって横江荘遺跡の立地する地区の地形が大きく区切られている。そうした中に小さな流れの河川が100～200m間隔に平行して南へ流れて微低地を作り出している。安原川・福増川は自然流路の状態をかなり残していると思われるが、その間に流れる墓谷川以下の小河川はほぼ真北方向に向いている。この方向は現在の水田区画の方向とも一致する。当地区の等高線がほぼ東西方向にむいていることも一因として考えられるが、おそらく人為的に流路を設定されていると推定される。

なお横江在住の宮下与真氏のご教授によると、かつてはこうした微低地から「ショウズ」が湧き出しており、湿地を作っていた（墓谷川の小字「ウアエダ」、「イワクラ」付近や、ナガレの川の「テンコダ」、「マツキノハシ」、「ツブラダ」、「アブラダ」付近など）。「ショウズ」の湧く付近

第38図　横江荘遺跡調査区の位置と小字名（小字は『横江史』による S＝1/5000）





第40図　横江荘遺跡調査区横断図

は水が冷たいため、水田としては不適当であったと言う。現在、地下水の汲み上げなどで手取川扇状地の伏流水はほとんど見られなくなったが、近代以前の当地域の景観を知る上で貴重な情報である。また、宮下氏によると河川改修で小字「シタンダ」付近から土器が沢山出土したことがある。「ジョウガンジ」付近は耕作土の直下から石が沢山でており、墓谷川沿いでは土器も沢山でた。「サンタンダ」の東側は少し小高くなっており、柱が出土したことがあると言う。

3．地層

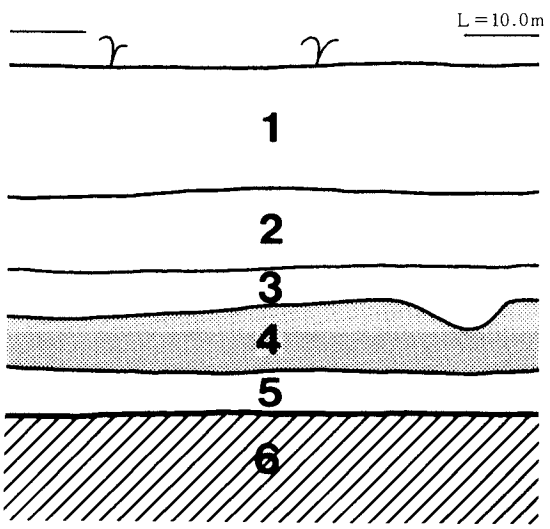
当調査区の基本的な土層を第41図に示した。

1・2層は水田耕作土とその床土である。2層は部分的に耕地整理の盛土・整地土も含んでいると思われる。

3層は、後述する4層の年代や、周辺の調査状況から判断して中世以降に堆積した地層であると推定されるが、松任市周辺で認められる灰色を呈する中世の包含層とは異なるので、2層直前の床土・整地土である可能性もある。

4層は黒色の粘質土層で、手取川扇状地に普遍的に確認できる。この土層中に古代の遺物が含まれることから、古代の包含層と判断される。このことは周辺の調査でも認められ、中世遺構はこの黒色土の上から切り込み、弥生時代の遺構はこの土層の下面かその下層から切り込んでいることが確認されている。

5層は6層との漸移層的な色調・土質であるが、弥生（～古墳）時代の遺物を含んでいる。6層は4層と同じく手取川扇状地に普遍的に認められる。周辺の調査状況から少なくとも縄文時代後・晩期以前に堆積した地層であることが判明している。6層の下層には礫層が厚く堆積している。



1　耕作土
2　黄灰色砂質土(客土・床土)
3　暗灰褐色砂質土(中世以降包含層)
4　黒色粘質土(古代包含層。下面に細かな凹凸多い)
5　黄灰褐色砂質土(弥生～古墳時代包含層)
6　黄灰色砂質土(地山)

第41図　横江荘遺跡基本土層図（第3トレンチ77区　S＝1/10）

4．遺構

前述のように原則として遺構を掘っていないため、深さなど不明な点が多く残されている。遺構検出した状態で遺構上場の平面実測を行っているが、その図を第57図に示した。トレンチの北壁では部分的に断ち割りを行い、遺構の深さや出土遺物の採集に努めた。断ち割りを行っていない遺構については、どの層から切り込んでいるか不明なものが多く、時期も特定できないことが多い。

1トレンチ

水田面から50～60cm掘り下げたが、トレンチ全体が旧河道（墓谷川）の落ち込みにあたるため、ほとんどの部分で2層の途中で止まっている。そのためトレンチ内で遺構の有無を確認できなかった。トレンチ西端で部分的に包含層の延長を確認するにとどまった。しかし、旧河道を埋め立てる客土（2層）のなかには多量の土器片を含んでいた。なお、図化しなかったがトレンチ中央にトレンチと同じ方向に暗渠排水のためと思われる土管が埋設されていた。

2トレンチ

ピット複数、土坑状遺構3、溝状遺構3、性格不明遺構1（古墳周溝か）が検出された。調査区の中央付近、E395付近に近代の溝と思われる南北方向のＳＤ１とそれに切られる同じく近代と思われるＳＤ２が確認された。

ＳＤ３はＳＤ２に切られるが北壁断面では幅約7.5m、深さ約0.8mを測る。ただし、ＳＤ３は北西方向に傾いているため、トレンチに対してやや斜めになっており、本来の幅はこれより狭いはずである。溝の断ち割りから古墳時代の土師器高杯が出土しており、古墳時代の遺構である可能性が高い。

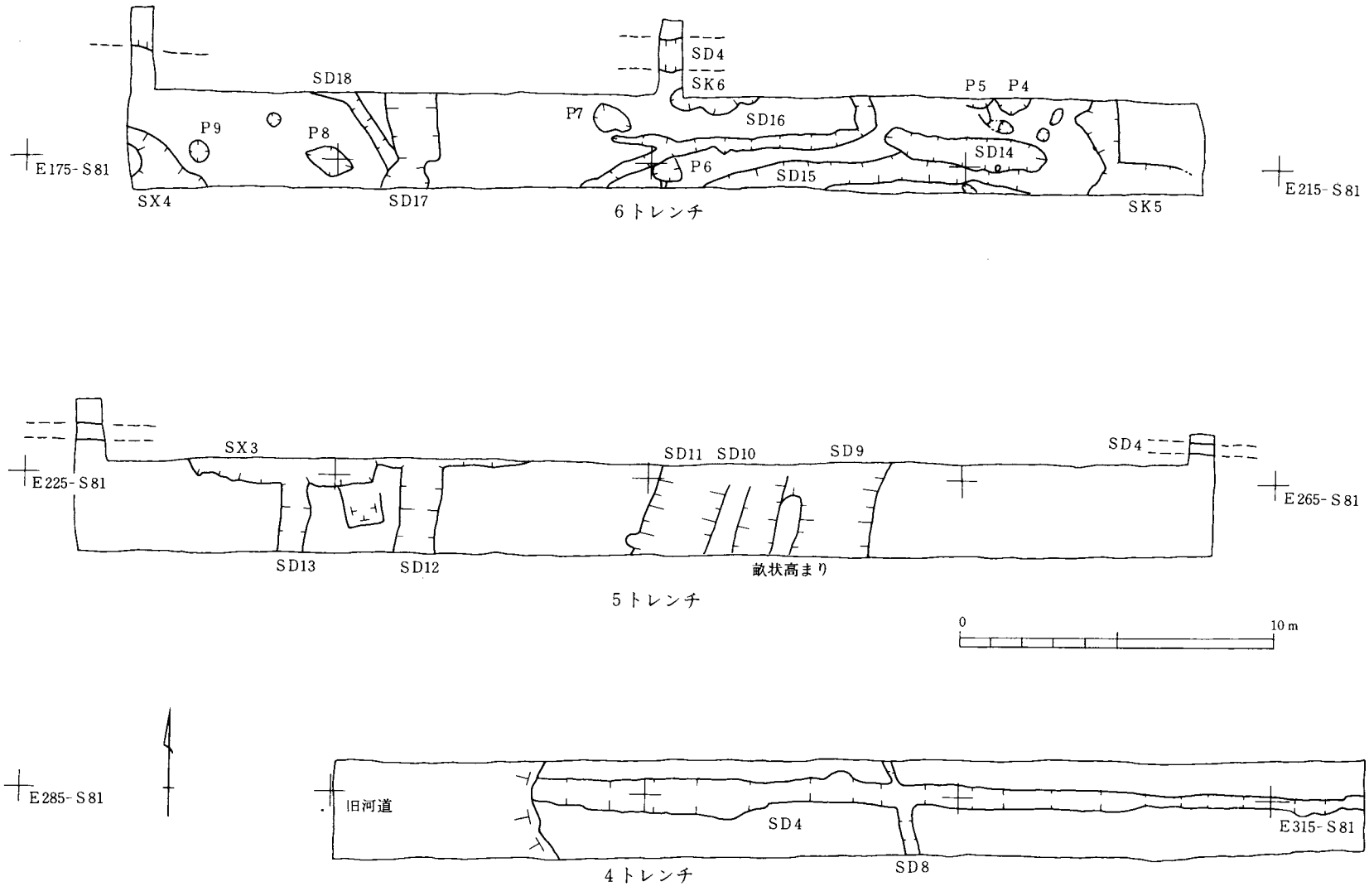
トレンチ東端では円形に巡る溝状遺構（ＳＸ１）が確認された。古墳の周溝の可能性があるが、断ち割りを行っておらず、遺物は確認できなかった。北壁断面では5層が遺構内に落ち込んでおり、弥生～古墳時代の遺構であることが確認できる。

3トレンチ

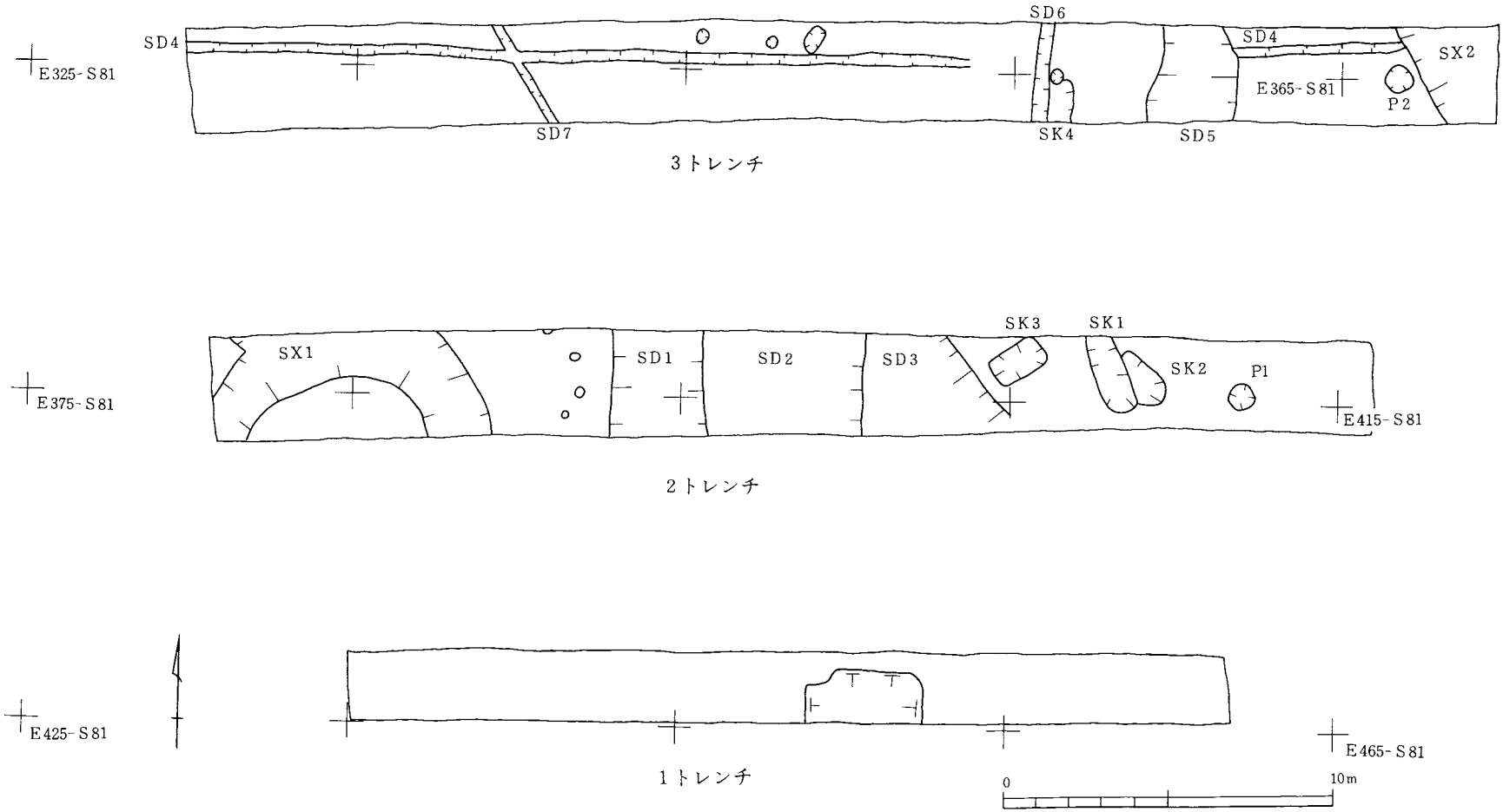
ピット複数、土坑状遺構1、溝状遺構5、性格不明落ち込み1が確認できた。トレンチに平行して走るＳＤ４は幅約30cmで、3トレンチから6トレンチまで約190m続いていることが確認できた。4層から切り込んでおり、明らかに古代の遺構である。4トレンチでは部分的に幅が広くなっており、6トレンチ西側拡張区では幅がさらに広がっている。もしくは別遺構と切り合っていると推定される。6トレンチ東側拡張区の断ち割りでは幅約60cm、深さ約20cmを測る。ほぼ東西方向に走っており、何らかの地割りに規制された溝である可能性が高い。

このＳＤ４に交差するＳＤ７との切り合い関係は確認できなかった。併存した可能性も否定できないが、北壁断面ではＳＤ６・ＳＤ７ともに5層から切り込んでおり、弥生～古墳時代の遺構である可能性が高い。

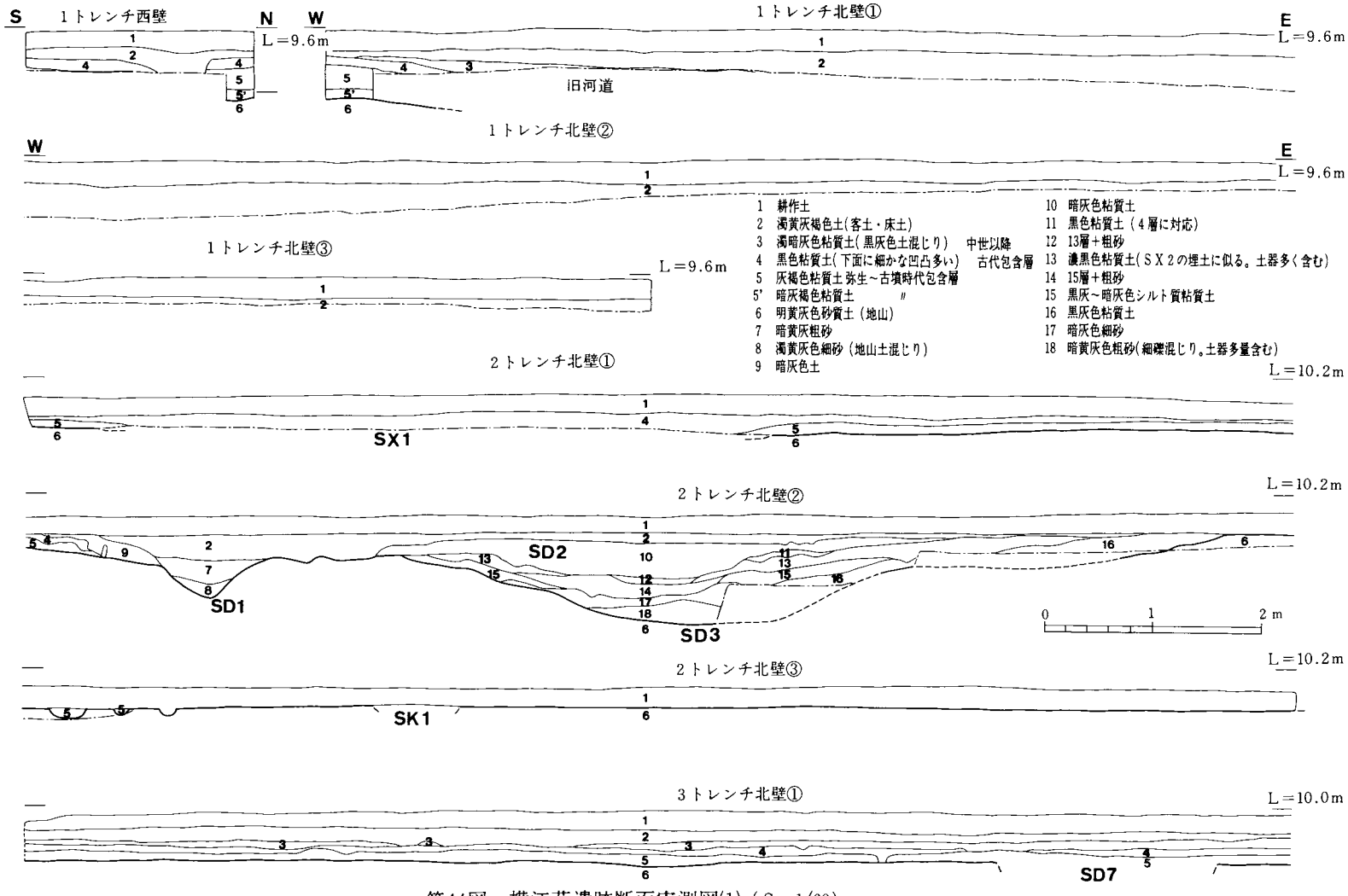
また、ほぼ南北方向に走るＳＤ５・ＳＤ６は本来ならばＳＤ４と直交していたと思われるが、この部分では削平をうけた為かＳＤ４は確認できなかった。ＳＤ６は、北壁断面では5層から切り込んでおり、弥生～古墳時代の遺構である可能性が高い。とすれば、ＳＤ６に切られるＳＫ４



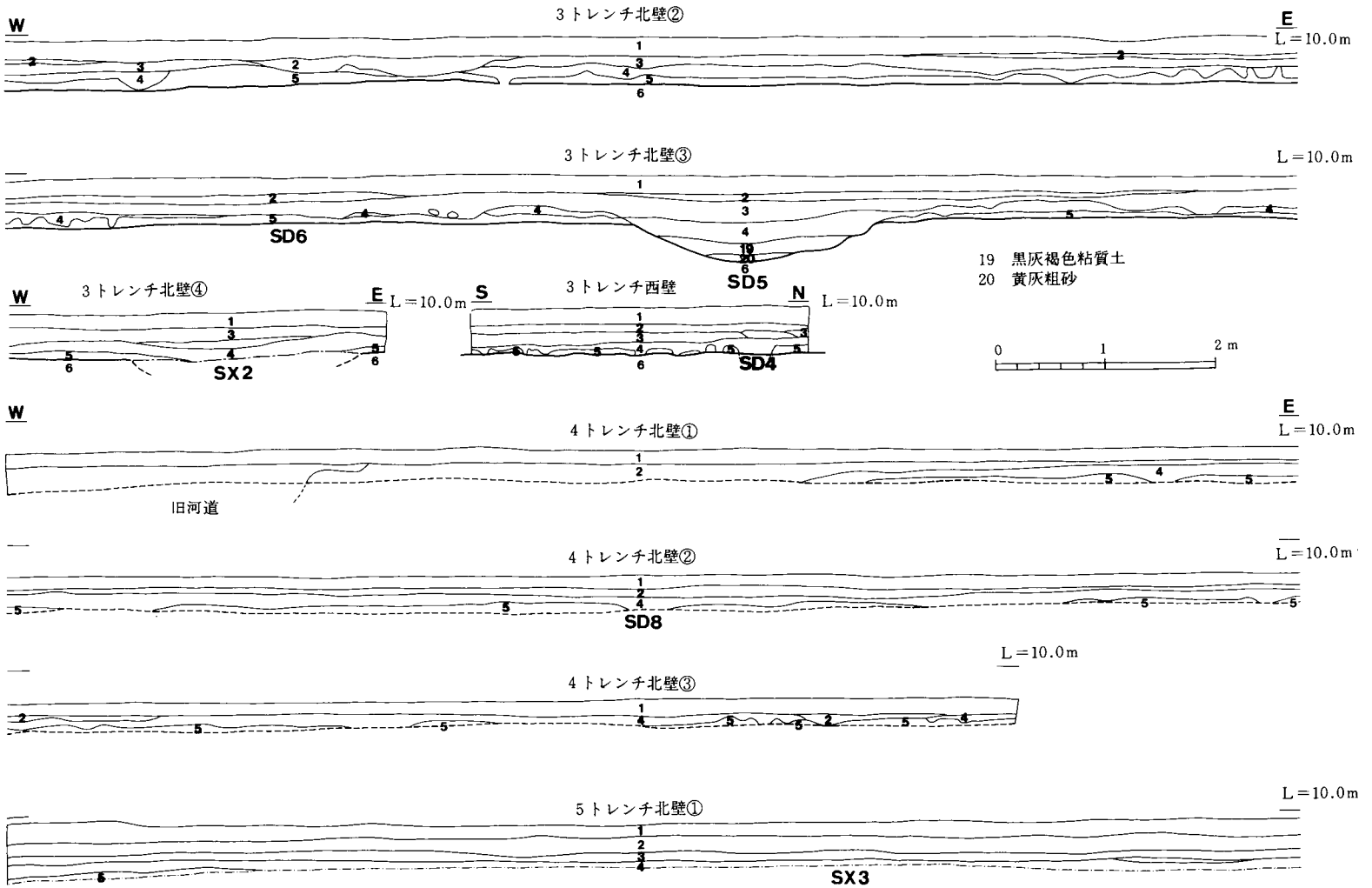
第42図　横江荘遺跡６～４トレンチ平面図（S＝1/200）



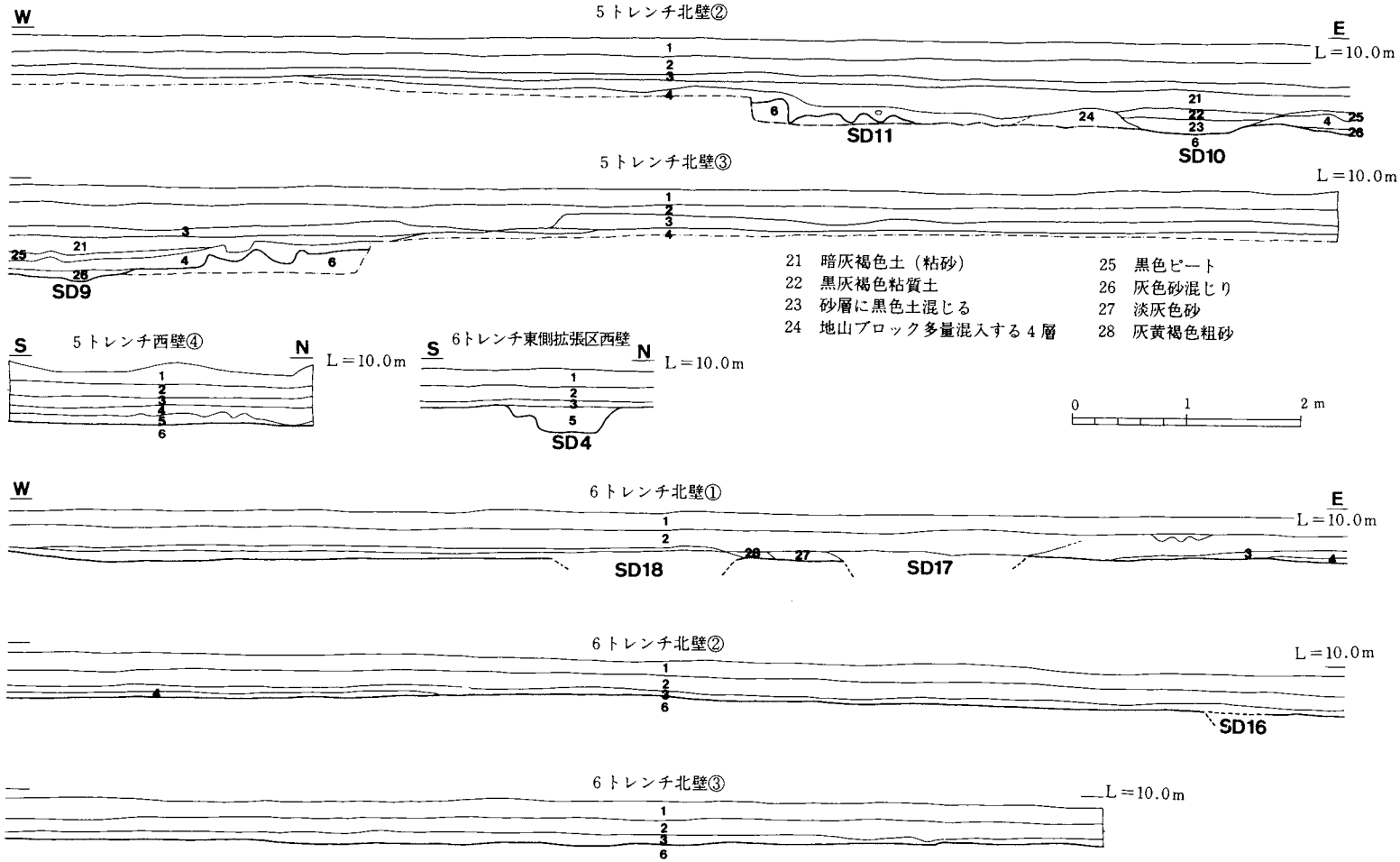
第43図　横江荘遺跡３～１トレンチ平面図（Ｓ＝1/200）



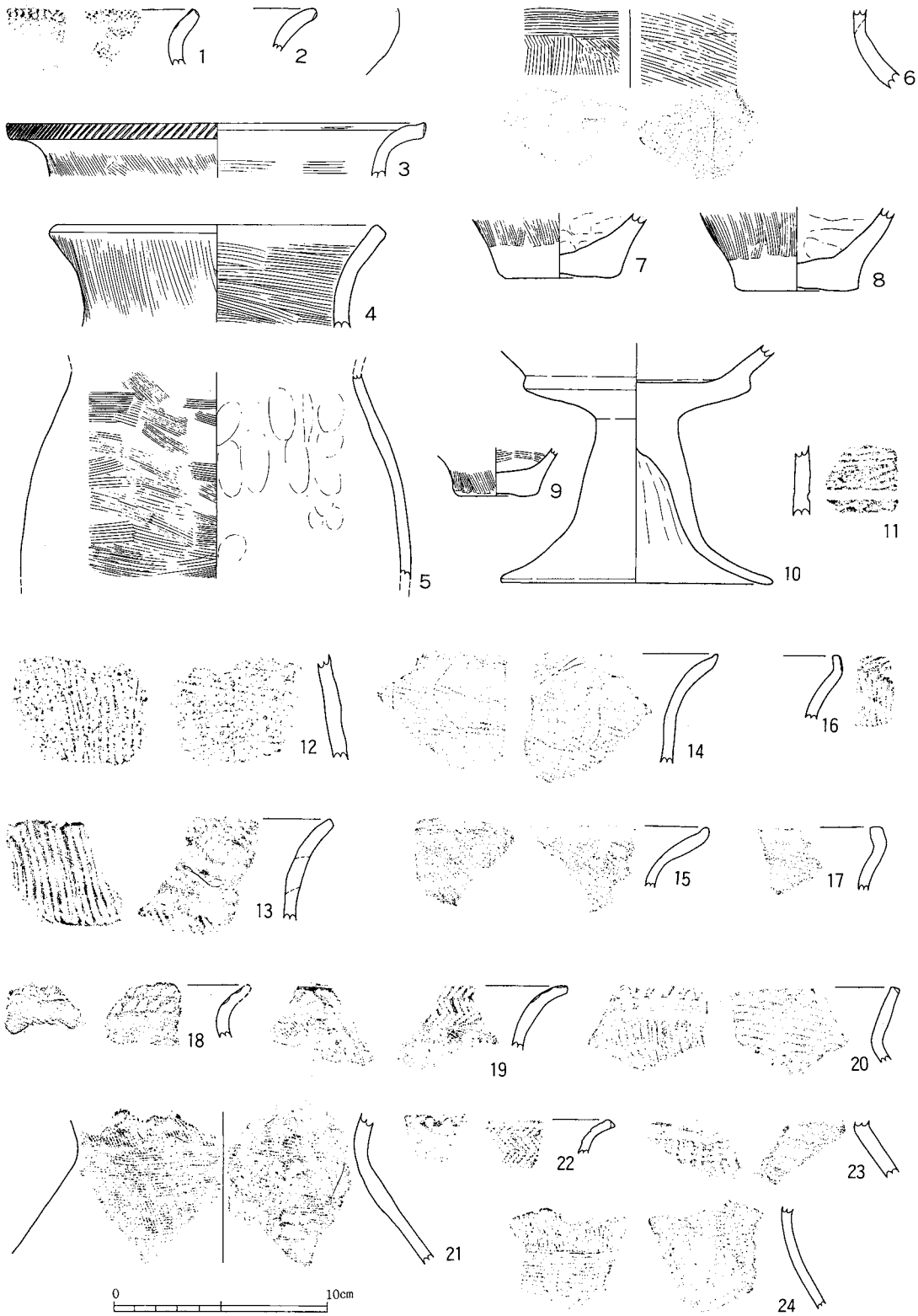
第44図　横江荘遺跡断面実測図(1)（S＝1/60）



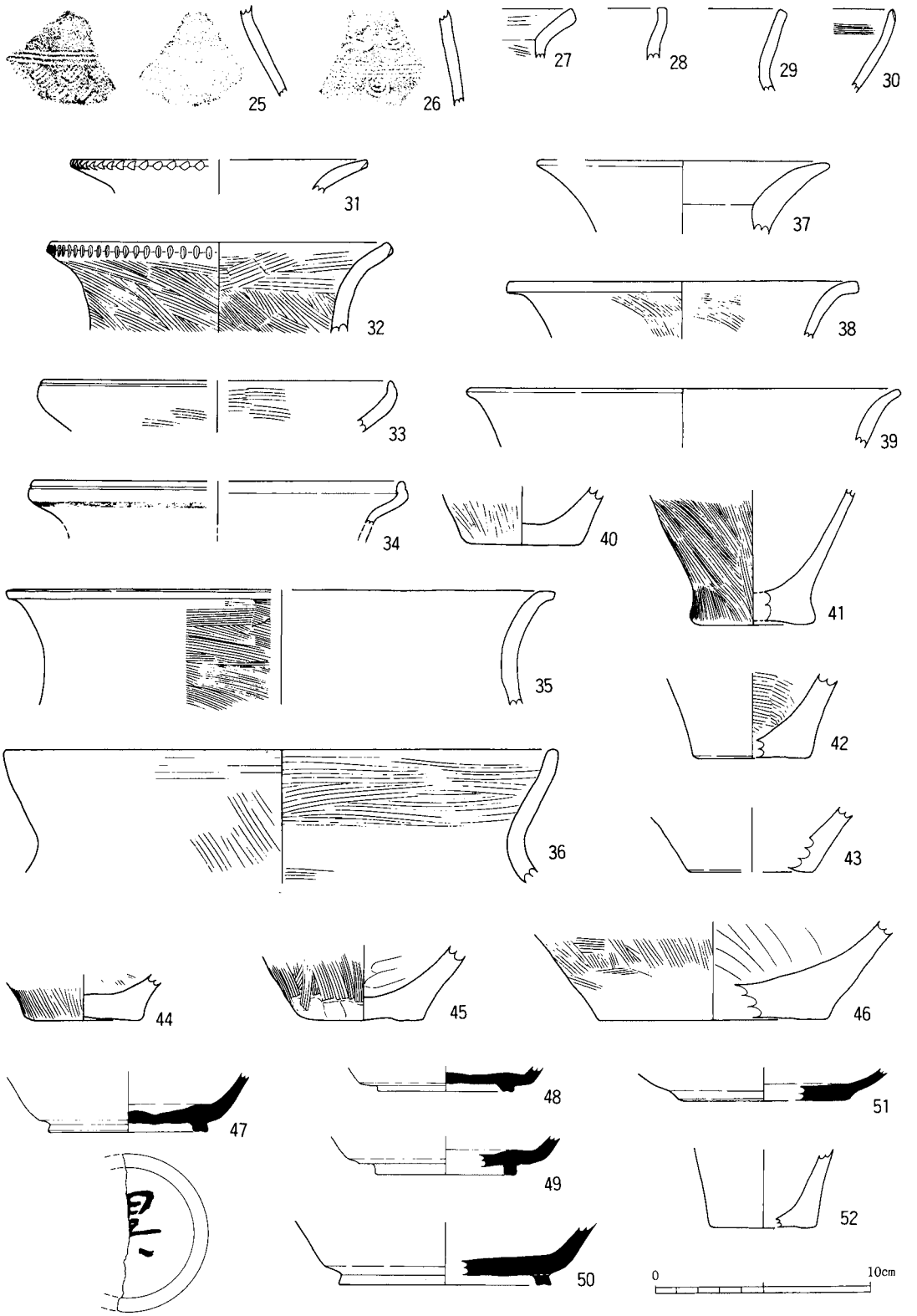
第45図　横江荘遺跡断面実測図(2)（S＝1/60）



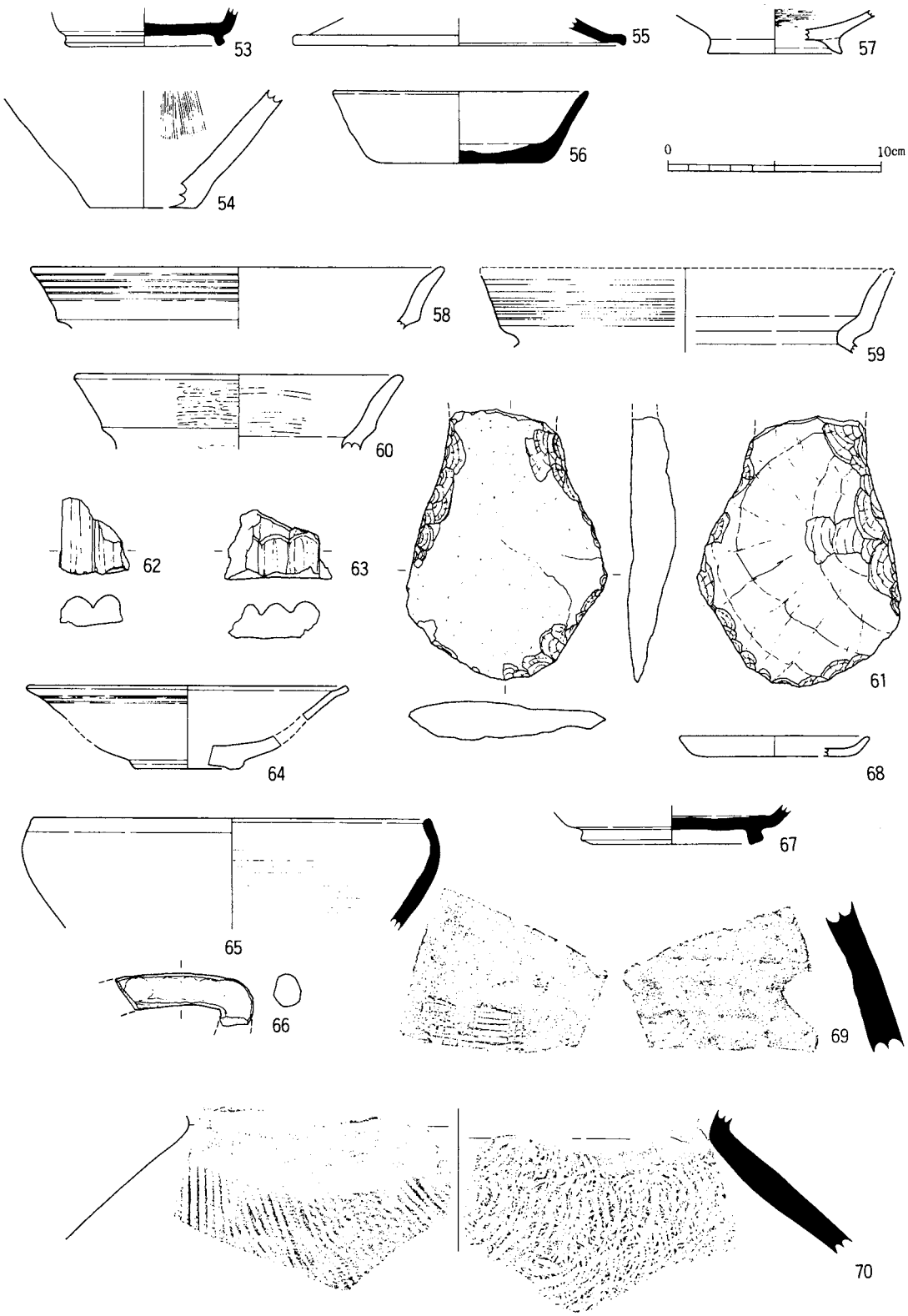
第46図　横江荘遺跡断面実測図(3)（S＝1/60）



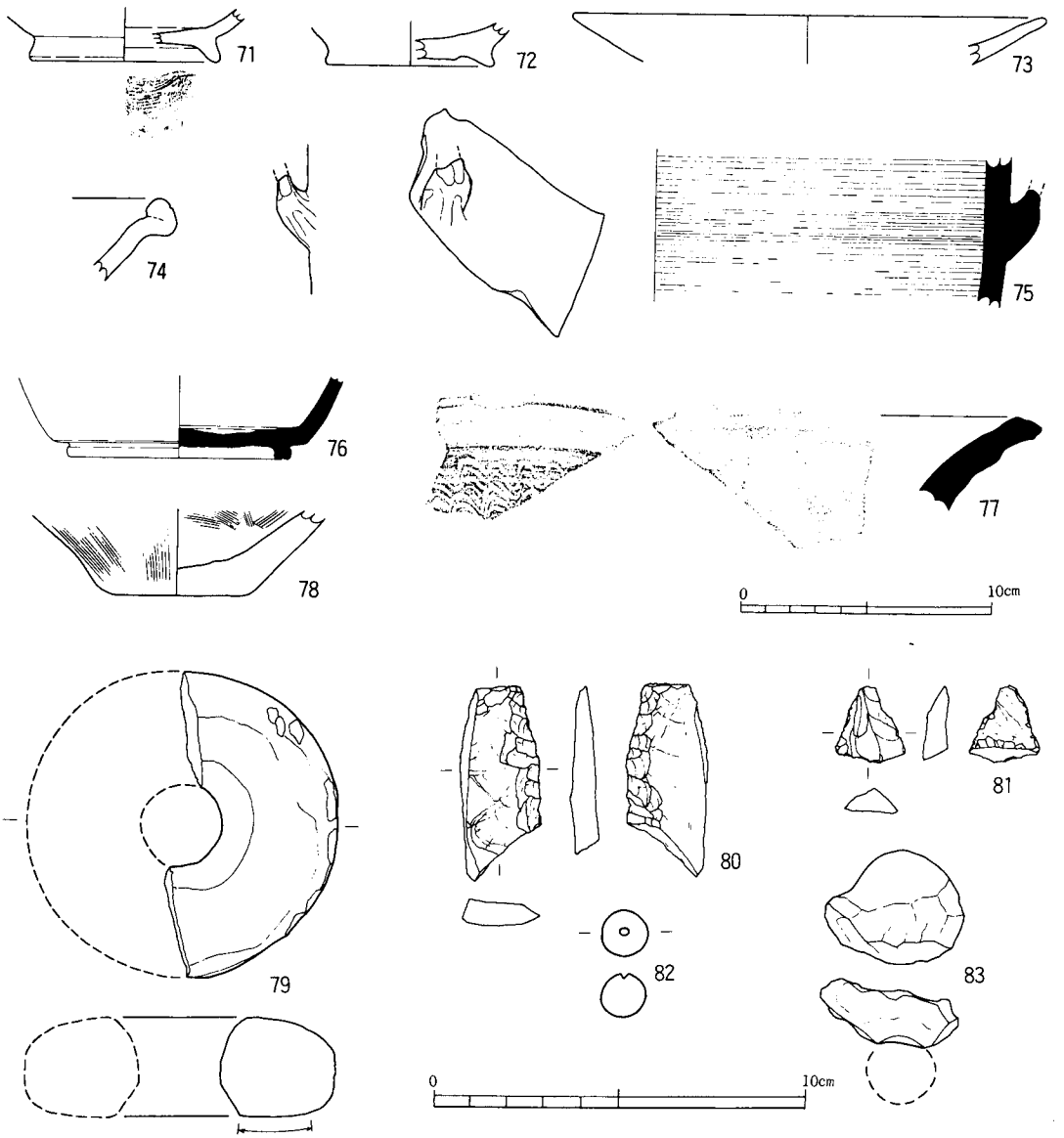
第47図　横江荘遺跡出土遺物実測図(1)（S＝1／3）



第48図　横江荘遺跡出土遺物実測図(2)（S＝1／3）



第49図　横江荘遺跡出土遺物実測図(3)（S＝1／3）



第50図　横江荘遺跡出土遺物実測図(4)

も弥生～古墳時代の遺構であろう。

ＳＤ５は北壁の断ち割りでは、幅約2.7m、深さ約0.45mを測り、墨書須恵器が出土している。４層から切り込んでいることと出土遺物から古代の遺構であることが確認できる。ＳＸ２は溝状の遺構であるが、北壁断面では５層が遺構内に落ち込んでいることから弥生～古墳時代の遺構であると推定される。

４トレンチ

溝２、旧河道１が確認できた。ＳＤ８は４層から切り込んでおり、古代の遺構であることが確認できたが、ＳＤ４との切り合い関係は確認できなかった。トレンチ東端部分は現在も流れる

「西の大川」（吉名川）の旧河道（近現代）が確認された。この旧河道により、ＳＤ４は削平されていた。

５トレンチ

溝状遺構６、性格不明落ち込み１が確認できた。溝の方向はやや北東に傾くＳＤ９・ＳＤ10と、南北方向のＳＤ12・ＳＤ13に分けられる。平行して流れるＳＤ９とＳＤ10の間には畦状の高まりが確認された。

ＳＤ10は４層を削平していることから古代以降の遺構であると推定されるが、ＳＤ９、ＳＤ11は４層から切り込んでおり、古代の遺構であると推定される。ＳＸ３、ＳＤ12、ＳＤ13は掘り下げ不足のためどの層から切り込んでいるか明確ではない。また、ＳＸ３はＳＤ12・13と切り合うが、その前後関係は確認できなかった。溝、もしくは竪穴状の遺構である可能性がある。

６トレンチ

ピット複数、土坑状遺構２、溝状遺構６、性格不明落ち込み１が確認できた。２トレンチと並び、微高地で遺構立地のためにはもっとも条件のよい地形である。検出できた遺構がもっとも多く、遺構密度ももっとも高い。当トレンチでは５トレンチと同じくＳＤ４がトレンチ北側にあるため、部分的にトレンチを拡張してその延長を確認した。トレンチ中央部の拡張区では幅約１ｍ、深さ約0.25ｍを測るが、トレンチ西隅拡張区では、溝の北肩を検出できなかった。この部分で溝の幅が広がっているか、別の古代遺構と切り合っている可能性がある。

５．遺物

原則として遺構内を掘り下げていないため、ほとんどの遺物が包含層から出土したものである。弥生時代前・中期、古墳時代中期、奈良・平安時代、近世の土器・石器・陶器が出土している。

１トレンチ

弥生土器、土師器、須恵器が少量出土しているが、図化できるものがほとんど無かった。

２トレンチ

１～11はいずれも細片であり、当トレンチ出土土器のほとんどが弥生式土器であった。１・２は口縁部の細片で、２の口縁端部外面には刻み目が施されている。３・４は壺の口縁部片、５は甕の胴部、６は壺の胴部片であろう。７～９は甕・壺類の底部である。１～９はほとんどが、広義の「小松式土器」に含まれる時期のものであろう。10は土師器高杯で、杯部に稜線をもち、漆町編年の12～13群に比定できる。11は磨耗で判別が難しいが、外面に沈線を一条もち、わずかに条痕のような調整痕を残している。１～９よりも明らかに古い様相を帯びている。

79は環状石器で、半分欠損している。穴の内面は調整の痕跡を残すが、それ以外の部分は良く磨かれている。また、穴の内面は他の面と異なり、黒く変色している。中に通した木の棒が焼けたためであろうか。平面図をとった面の裏側はやや平坦で特に良く擦れている。側辺部はあばた状に欠けているが、おそらく敲打による使用痕であろう。灰色を呈し、石質は細粒砂岩と思われる。

80はスクレイパー状のもので、片側に刃部を持っている。石質は流紋岩であろう。灰色の玻璃

質で自形の石英の斑晶が確認される。小松周辺、とくに梯川流域で普遍的に認められる石材で、通常は手取川扇状地では見られないものである。搬入品である可能性が高い。

3トレンチ

12は内外面に条痕を施した甕・壺類の胴部片で、広義の「柴山出村式土器」の時期に含まれる可能性が高い。14～46、52はほとんどが「小松式土器」の甕・壺類と思われる。いずれも小片である。16～17は口縁端部が直立する。25・26は壺の胴部片で外面に櫛描文が施されている。

47～51は須恵器で、47は底部外面に墨書が認められる。文字は半分欠けているため判読が難しいが、出越茂和・小西昌志両氏の御教授によると、上荒屋遺跡（横江荘遺跡上荒屋地区）では出土していないパターンであると言う。47～50は田嶋編年Ⅴ期に、51は田嶋編年Ⅵ期に比定されるだろう。

81は鉄石英の剝片である。

4トレンチ

53は須恵器の蓋杯の底部である。田嶋編年Ⅳ－2新期に比定されるだろう。

5トレンチ

54平底の甕・壺類の底部であるが、磨耗が著しい。おそらく弥生時代中期頃のものであろう。

55は須恵器蓋杯の蓋、56は須恵器杯である。57は黒色土師器の有台椀底部である。内面は磨き調整と黒色処理が認めれる。

82は玉状の土製品で、穿孔しかけたような浅く小さな穴が認められるが、貫通していない。土師器質で焼成は良好である。

6トレンチ

58～60は甕口縁部である。61は打製石斧で淡い緑色を呈している。

62・63は瓦塔の屋根軒先部分の破片で63の裏側には垂木の表現が残っている。62は瓦が3.5cm以上と長く表現されているのに対して、また、63は1.5cm程度と短く表現されている。62は焼成がやや甘く灰色であるのに対し、63は焼成堅緻で青灰色を呈している。62と63は同一個体でないか、もしくは同一個体でも層の違う破片であると考えられる。

64は口縁端部に段を持つ唐津の皿。淡いモスグリーンの釉薬が掛けられている。17世紀初頭頃の製品であろう。65は鉄鉢形の須恵器で、内面に降灰が認められる。66は須恵器の把手の破片。67は蓋杯の底部。69は加賀焼（もしくは越前焼）の大甕片で、外面に縦方向の刷毛状調整と刻印が認められる。灰色を呈し、焼成は良好である。外面に淡い緑色の自然釉が認められる。68はてずくね成形の中世土師器の細片である。78は弥生式土器の底部片である。

なお、図化できなかったが、当トレンチから軟質の縁釉陶器細片が出土している。釉薬は厚く、胎土に細砂粒を大量に含んでいる。（図版25参照）。

その他（出土トレンチ不明）

71・72は黒色土師器の有台椀底部である。71の底部外面には回転糸切り痕が認められる。74は堝の口縁部片で、端部が屈曲して折れ曲がっている。73は硬質の縁釉陶器皿である。外面の縁釉は部分的に失われている。75は須恵器瓶の胴部片で、外面に把手が付いている。76は須恵器蓋杯

の底部。77は須恵器大甕の口縁部片で外面に波状文が施されている。

［須恵器・瓦塔の産地について］

3トレンチでは、47～51まですべて高松・押水窯跡群産。4トレンチの53は辰口窯跡群産。5トレンチの55は末窯跡群産、56は高松・押水窯跡群産。6トレンチでは65・66・67とも辰口窯跡群産。70は末窯跡群産。出土トレンチ不明の遺物では、75～77ともに高松・押水窯跡群産と推定される。

瓦塔は62が高松・押水窯跡群産、63は特徴が明瞭ではないが同じく高松・押水窯跡群産であると推定される。

以上のように、須恵器は高松・押水窯跡群産を主体としており、その中に辰口、末の各窯跡群の製品が若干認められる。出土量が少ないためであるが、図化した遺物のなかでは明らかに小松丘陵窯跡群（南加賀古窯跡群）産と推定できる製品は確認されなかった。時期は8世紀末～9世紀代にわたっている。

6．小結

今回の発掘調査の目的は、横江荘遺跡の南限を確認し、保存・活用のための基礎資料を得ることであった。今回の調査区内で何らかの地割に規制された可能性がある小溝が確認されたこと、奈良・平安時代の遺物・遺構が確認されたことから、遺跡がさらに南に広がっていることが確認された。前節で報告したように広域農道のさらに南側まで広がる可能性も高い。ただし、荘屋地区や倉庫群地区のように掘建柱建物が集中することはない可能性がある。また、弥生時代中期の遺構・遺物も良好な形で残っていること、古墳状の遺構が存在することが確認された。

弥生・古墳時代の遺跡の広がりは、圃場整備に係る試掘調査でかなりの広がりを持つことが確認されている。しかし、古代に限定した遺跡の範囲確認は不十分であり、今後とも継続して行かねばならない。また、松任市教育委員会、および金沢市教育委員会の努力によって荘屋関係遺構の確認は進んでいるものの、荘園が経営したであろう広大な水田遺跡の所在はほとんど不明のままである。横江荘遺跡の解明にはさらなる調査が必要とされている。

7．横江荘遺跡出現の意義について

横江荘遺跡は8世紀後半に出現し、9世紀代に盛期をむかえたことが確認されている［吉岡1983･小西1991］。浅香年木氏は文献史学の立場から、当遺跡を「『空閑地荒廃地の国家的開発』の促進を目的にして拡大されたとされる勅旨田・賜田」であったと指摘しているが、その指摘の一部は考古学的にも裏付けされると考える。横江荘遺跡の立地する手取川扇状地の遺跡群の動態については吉岡康暢氏の先駆的な研究〔吉岡1967〕があり、それに導かれながら、その後の知見を加えて「横江荘」出現の意義について考えてみたい。吉岡康暢氏は『加賀三浦遺跡の研究』の「総括」で、三浦下層・中層・上層の各層の時期の遺跡分布について考察している。研究史上重要であるため、以下にその概略を紹介する。

下層（弥生時代末～古墳時代初め）の時期には大規模集落が解体し、経営規模が縮小するとと

もに、小規模な遺跡が急激に増加・拡散する。これらの小規模遺跡は、扇端部分に止まらず扇央から扇頂部分にも広がるが、「不安定な小氾濫原の低湿地」を耕地化したにすぎず、「恒常的に管理する労働力の投入を想定することは困難」であると考えた。

三浦中層（奈良時代末～平安時代初め）の段階には新たに扇央部や倉ケ岳西麓に遺跡が広がり、この段階になって初めて本格的に「高燥地」が開発されたと考えた。この開発は、律令国家の公権を背景として在地豪族主導で行われた条里制水田の開発と言う形をとったと推定している。しかし、文献史学の立場から浅香年木氏が国家的開発は７世紀に遡ることを主張している点と、そうした考古学の成果が食い違うことを今後の課題として上げている。

三浦上層（平安時代末）の時期は条里制水田の再開発、中世的開発の芽生えの時期と考えた。

吉岡氏の見解で重要な点は、当初開発容易な扇端部に遺跡が集中するが、８・９世紀になって国家的開発によって初めて扇央部にも集落が広がったとするものである。以下に、吉岡氏の考察以後の知見を加えて横江荘遺跡出現の意義について考えてみたい。

第13図に、７世紀前半代から10･11世紀代まで連綿と存続する集落遺跡の広がりを示した。これらはかなり広い範囲に及び、大きな遺跡群として捉えられるが、一定の領域の中に連綿とした生活が営まれたことをもって、古代の拠点的集落と考えておきたい。曖昧な定義であるが、それ以外の周辺の集落遺跡が比較的短期間に廃絶し、遺跡の範囲も狭いことからすると、極めて特異な地区として捉えられる。これらの遺跡群は７世紀前半代からはじまるが、当初は小規模な集落であり、７世紀後半～末に拡大する傾向が発掘調査から判明している。

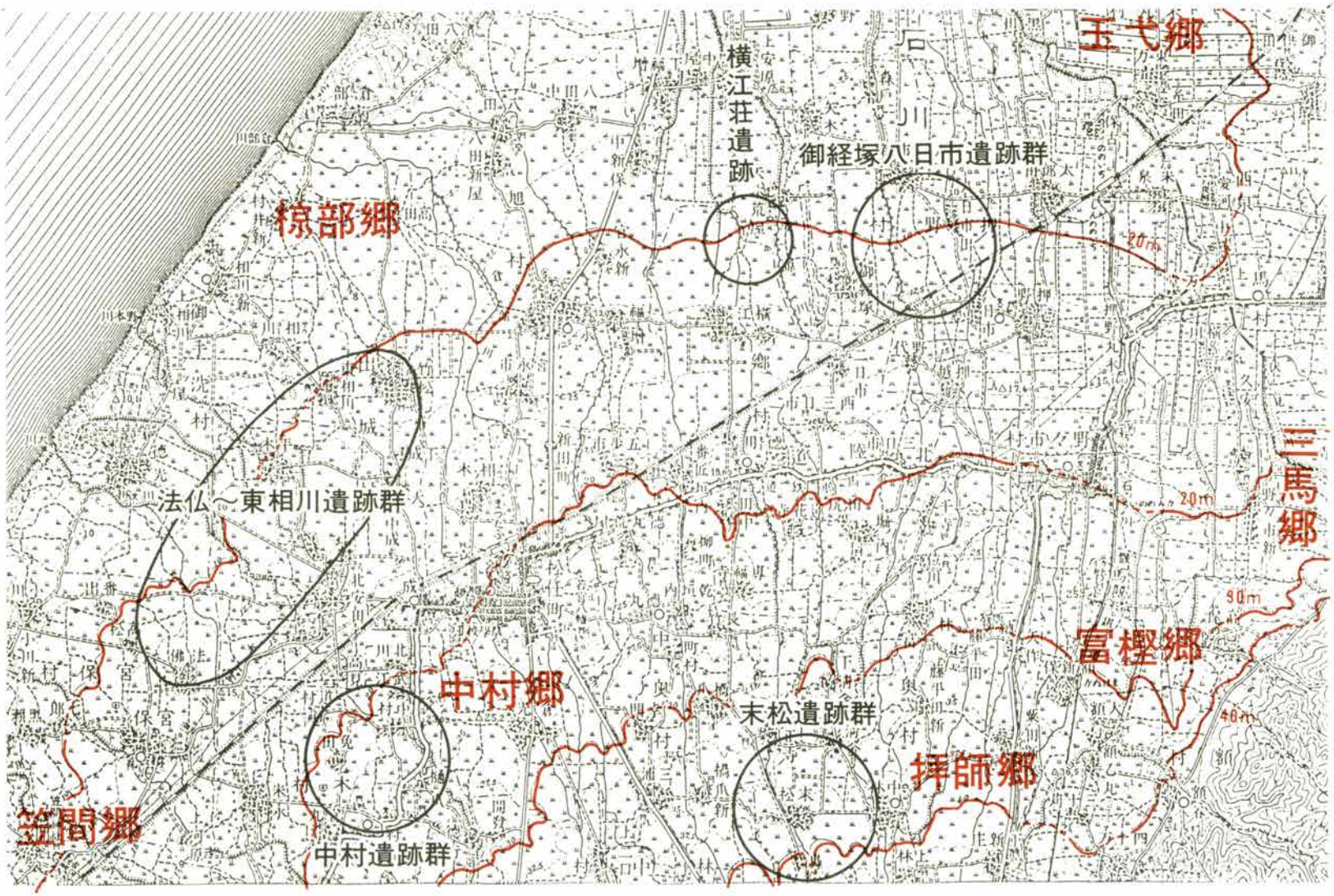
法仏～東相川遺跡群はもっとも範囲が広いが、この中にはかなりの遺跡空白地がある。集落は痩せ尾根状の小規模な微高地に立地しており、同一地点に長期間定住するのではなく、微高地から微高地へと一定の領域内を移動しているかのような分布傾向を示している。法仏遺跡、北安田北遺跡、平木遺跡、東相川遺跡、竹松遺跡など多数の遺跡が発掘調査によって確認されている。

中村遺跡群は発掘例が少なく、不明確な点が多いが、米永古屋敷遺跡〔川畑ほか　1991〕、中村ゴウデン遺跡、道村遺跡〔木田　1989〕などが上げられる。

御経塚・八日市遺跡群は、御経塚遺跡〔高堀ほか　1983〕、御経塚ツカダ遺跡〔吉田　1984〕、八日市Ｂ遺跡〔増山　1988〕、八日市サカイマツ遺跡〔南　1990〕などがあげられる。

これらの遺跡群は７世紀の前半からはじまり、７世紀後半～８世紀初頭に急激に盛期を迎える。８世紀末～９世紀前半に再び盛期を迎え、10･11世紀まで存続する。

５・６世紀代の遺跡は現在の北陸高速道路沿いの標高５ｍから10ｍの地点に帯状に広がっている。それに対して７世紀以降の遺跡群は一部重なりながらも標高がやや高くなり、分布地域を異にしている。７世紀前半以降、標高10～15ｍ付近の法仏～東相川遺跡群、御経塚・八日市遺跡群、および標高30～40ｍ付近の末松遺跡群に集中している。標高10～15ｍ付近を扇端グループ、標高30～40ｍ付近を扇央～山裾グループというように分けられる。この二つの地帯は遺跡の集中度や立地から見て、古代において生活適地であったことが充分に想定できる。特に扇端グループは標高が近似することから、手取川扇状地の伏流水が自噴するなどの条件が整っていたと思われる。なお、垣内光次郎氏の御教授によると、扇端部や扇央部に比べて中村遺跡群周辺は遺跡群の空白



第51図　横江荘遺跡周辺の古代遺跡群と和名抄郷推定地（大正８年大日本帝国陸地測量部発行を改変。郷名は浅香1967を参考にした。S＝1/50000）

地帯のように思えるが、地層の状態から遺構の検出が難しいこと、発掘件数が少ないことが原因であり、本来はより多くの遺跡が存在した可能性があるという。調査がさらに進めば、これらの遺跡群どうしが重複しあい、群の区切りが難しくなる可能性もある。ここで延べたのは、あくまで現在の筆者が知りえた状況をまとめた結果にすぎず、今後の調査の進展を見守る必要がある。

ところで、浅香年木氏は和名抄に記載されている郷名の比定を行っているが、それによると横江荘遺跡周辺では第51図のように「椋部・中村・笠間・拝師・富樫・三馬」などの郷が比定されている〔浅香　1967〕。いずれも何らかの形で現在までその地名が残されている。

浅香氏の比定した郷名とこれらの遺跡群を対比すると、末松遺跡群が拝師郷、法仏～東相川遺跡群が笠間郷、中村郷、および椋部郷に対応する可能性が高い。多ければ3つ、少なくとも2つの郷を含む可能性が高いが、現在の調査状況からは識別が困難である。御経塚・八日市遺跡群は玉戈郷と三馬郷がもっとも近いが、他の遺跡群に比べて対応させることが難しい。三馬郷、富樫郷比定地付近の調査が遅れているが、周辺に古代の遺跡群が存在する可能性は高いだろう。これらは末松遺跡群と標高が近似し、扇央～山裾グループとして扇端グループに匹敵する規模の遺跡群として捉えられる可能性がある。

このような状況のなかで、横江荘遺跡は8世紀後半に出現した。松任市教育委員会の発掘調査でも8世紀前半に遡る資料は確認されておらず〔金山　1990〕、出越茂和氏の御教授によると大量の土器を出土した金沢市教育委員会の上荒屋地区発掘調査でも8世紀中葉を遡る土器は確認されていない。ちょうど、扇端グループの隙間に出現しており、「空閑地荒廃地」の開発と言う文献史学の指摘と一致する。なお、横江荘遺跡周辺で6世紀代の遺物が少量確認されているが、少なくとも7世紀後半から8世紀半ば頃までの約1世紀の間、空白期間がある。

ただし、松任市教育委員会の発掘調査で7世紀～8世紀前半代に遡る須恵器甕が確認されている〔金山　1990〕。少量ではあるが、注意が必要である。また、田嶋明人氏の御教授によると1988年度に圃場整備を行っていた小字「ゴクメン」から「クワガラ」付近で8世紀前半に遡る可能性のある土器が散布していたと言う。この地点の発掘調査が進めば、ここで考えた結論がくつがえる可能性も残されているが、今のところ積極的に否定する事実は確認されていない。

横江荘遺跡は御経塚・八日市遺跡群に近く、その拡大とも受け取れるが、水系は末松遺跡群と同じ安原川の水系である。双方との関係が良好でなければ、この地点の大規模開発は難しかったであろう。

なお、先に見た拠点的集落以外の古代遺跡の多くは「奈良末～平安時代初め」として遺跡地図に記載される例が多い。前述のように吉岡康暢氏は遺跡の分布からこの時期に国家権力による高燥地の開発がなされたとして重視している。当時、開発容易な扇端部から困難な扇央部へと開発が進行したと図式的に考えたわけだが、その後の発掘調査によって、扇央部であっても7世紀代から開発が進行していることが判明している。「開発困難」な扇央部が取り残されていたわけではなく、当初から平行して開発が進められたことは間違いないだろう。

しかし、この時期が遺跡増加の時期であることはその後の発掘調査でも確認されている。それらの多くは短期間で終了する小規模の遺跡と推定されるが、横江荘遺跡や、「東大寺領幡生庄」に

比定される能美郡辰口町・辰口西部遺跡郡では先に見た拠点的な集落に匹敵、もしくは凌駕するほどの規模を持っており、様々なランク・規模の遺跡群が錯綜している状況を想定させる。その全体像については今後の課題であろう。

また、横江荘遺跡以外にも多くの荘園比定遺跡があり、ここで見た荘園出現の有り方はその中の一つパターンにすぎない可能性がある。今後、それらとの比較を通して当時期の遺跡群の動向を研究する必要がある。

引用・参考文献

吉岡康暢　1967　「総括　三浦遺跡調査の意義」『加賀三浦遺跡の研究』石川考古学研究会

浅香年木　1967　「平安期における手取扇状地の開発と領主」『加賀三浦遺跡の研究』石川考古学研究会

吉岡康暢ほか　1983　『東大寺領横江荘遺跡』石川考古学研究会・松任市教育委員会

高堀勝喜ほか　1983　『野々市町御経塚遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

浅香年木　1983　「賜田系庄田に関する覚書」『東大寺領横江荘遺跡』石川考古学研究会・松任市教育委員会

西野秀和・滋井真　1983　「第1部第3章第2節　昭和52年度の調査」『東大寺領横江荘遺跡』石川考古学研究会・松任市教育委員会

吉田淳　1984　『野々市町御経塚ツカダ遺跡（御経塚B）発掘調査報告書1』野々市町教育委員会

増山仁　1988　『金沢市八日市B遺跡』金沢市教育委員会・金沢市八日市第二土地区画整理組合

木田清　1989　『松任市中村ゴウデン遺跡』松任市教育委員会

南久和　1990　『金沢市八日市サカイマツ遺跡』金沢市教育委員会・金沢市八日市第二土地区画整理組合

金山弘明　1990　『横江荘遺跡－倉庫群の発見－』松任市教育委員会

小西昌志ほか　1991　『金沢市上荒屋遺跡概報』金沢市教育委員会・上荒屋西部土地区画整理組合

川畑誠ほか　1991　『宮丸遺跡・村井北遺跡・北出遺跡・村井キヒダ遺跡・米永古屋敷遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

1～4トレンチ遠景（北から。右端は西の大川）

5・6トレンチ遠景（北から）

5・6トレンチ遠景（北から。中央は西の大川）

6～4トレンチ現況（西から）

写真4　横江荘遺跡調査地点の現況（1992年2月撮影）

第６章　平成元年度調査
（横江Ａ遺跡、横江Ｂ遺跡、横江古屋敷遺跡、横江館跡）

第１節　調査の概要

平成元年度調査は、同年度事業実施範囲内で埋蔵文化財が影響を受ける排水路予定部分３ヶ所を対象におこなった。調査は対象面積約1,200㎡（幅約２ｍ×延べ長さ約600ｍ）を測り、平成元年11月１日～12月15日にかけて実施した。事業実施範囲内３ヶ所に設定された調査区は、その位置からそれぞれ西トレンチ、東トレンチ、南トレンチと呼称している（第52、55図）。

西トレンチは事業地区西端にあたり、県道宮永・横川線の北側で福増町と接した水田部分に位置し、調査面積約220㎡を測る。調査の結果、地山面を含めて過去にかなり削平を受けており、明確な遺構は検出できなかった。ただし、耕土、包含層より弥生末～近･現代に至る遺物が出土し、調査区北東に位置する横江Ａ遺跡の一部と考えられる。

東トレンチ、南トレンチは事業地区北東側にあたり、横江町の集落北東側で大規模農道との間の水田部分に位置する。また安原川を挟んで金沢市上荒屋、野々市町長池地内に接し、調査面積は約880㎡を測る。現況の農道や水路等で掘り残した部分を目安に、東トレンチは南からＡ～Ｇ区に、また南トレンチは東からＡ～Ｄ区に順次細分している。

調査により、東トレンチＧ区では弥生時代後期～古墳時代初頭の集落遺跡、南トレンチでは中世の館跡に類する遺跡を検出した。従来、横江Ａ遺跡の名称で代表させてきたが、第２章で述べたように本報告ではそれぞれ横江Ｂ遺跡、横江古屋敷遺跡、横江館跡と呼称する。

東トレンチＧ区で検出された横江古屋敷遺跡は南北を大溝で画された弥生時代終末を中心とする居住域、そしてその北側に古墳時代初頭と考えられる方墳が展開し、同時期の良好な集落形態を示している。なお平成元年、２年度に調査区東側で松任市教育委員会が発掘調査を実施、本遺跡の様相がより明瞭に判明し、本報告作成にも多大な御協力を得た。記して感謝したい。

次に横江館跡では、平成２年度の調査を加味すると、中世の館跡に付随する長さ約70ｍの堀跡を検出した。近年、松任平野を中心に確認されている中世の館跡に類する遺跡を考える上で大変興味深い。また、横江Ｂ遺跡は横江館跡の東側に位置し、出土遺物からほぼ同時期の集落遺跡と考えられる。

なお、トレンチの配置、周辺の地形、土層層序等については各トレンチ毎に述べる。

第２節　西トレンチ（横江Ａ遺跡）

１．調査の概要

調査区は県道宮永・横川線北側の福増町に接する排水路予定部分に設定した（第52図）。調査区の基点は新設の排水路中心線上で県道北側路肩より12.53ｍ北側の地点においた。また調査区主軸線は新設の排水路中心線と一致し、Ｎ－４°－Ｗを測る。調査区は長さ約110ｍ、幅約２ｍ（総

面積約220㎡）を測り、南側から20m毎に1～6区に細分している。

基本土層層序は上層から第1層耕土、第2層包含層（茶褐色粘質土）、第3層地山（濁黄褐色粘質土）となり、第2層は薄く、部分的にしか存在しない。これは過去の耕地整理等で地山面も含め、かなり削平を受けたためと考えられる。また現水田面で標高12.4～11.8mを測り、南側から北側に緩やかに傾斜する。

調査の結果、溝2条、落ちこみ状遺構2基、水溜め1基、ピット多数を検出したが、時期を特定できる遺構はなかった。ただし、先述の理由により耕土中に弥生末～近･現代までの細かい遺物が確認され、本調査区は調査区北東側に位置する横江A遺跡の一部と考えて大過ないと思われる。なお、『横江史』[1]によれば付近の小字名としては「モリノコシ」「ミヤシタ」が存在する。

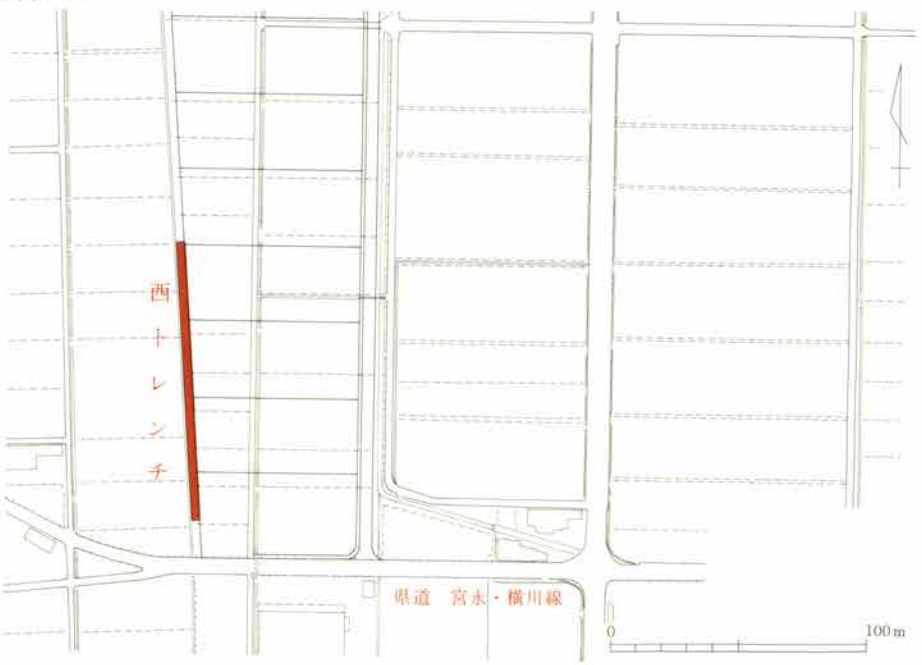
2．遺構（第53図）

1号溝　現在まで排水路として使用されており、幅約90cmを測る。覆土は上層より灰色粘質土、灰色砂が堆積し、溝底より磨耗した弥生末～近･現代の遺物が出土した。

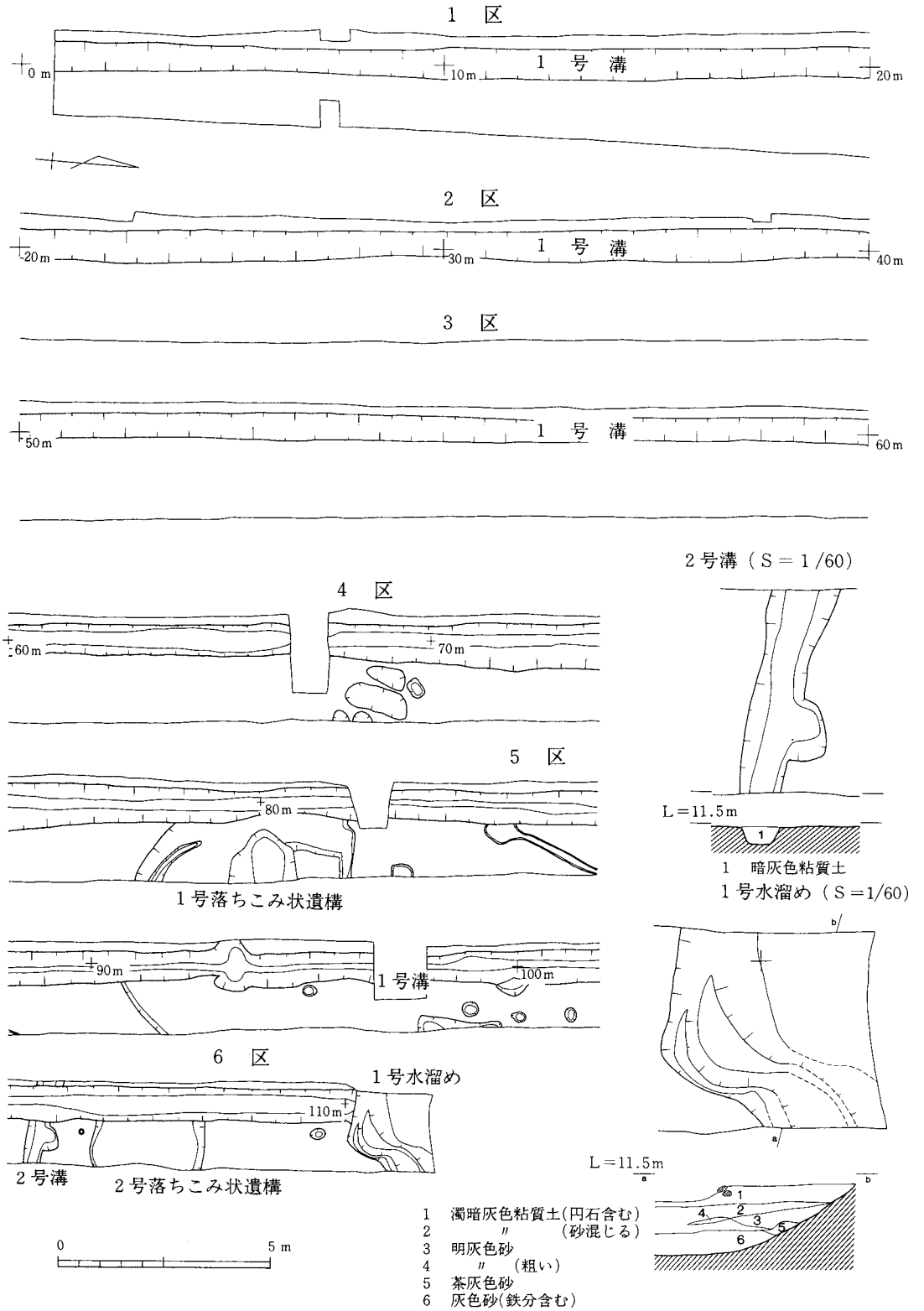
2号溝　1号溝に直交し、西側に流れる。幅40～60cm、深さ30～45cmを測り、覆土は炭化物を含む暗灰色粘質土である。出土遺物なし。

1号落ちこみ状遺構　不定形な落ちこみで1号溝に切られる。80m付近でさらに一段深くなり、最深部で深さ約30cmを測る。覆土は炭化物を含む濁灰色粘質土で底面近くは若干暗くなる。出土遺物なし。

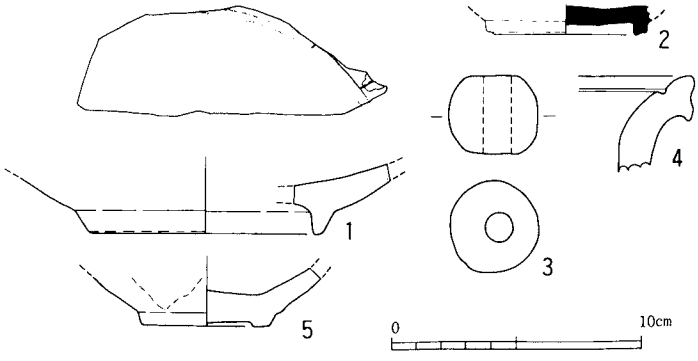
2号落ちこみ状遺構　やや崩れた円形を呈し、1号溝に切られる。南北方向で幅約260cm、深さ15～30cmを測り、底面は平担である。覆土は2号溝と似た炭化物を含む暗灰色粘質土である。出土遺物なし。



第52図　西トレンチ位置図（S＝1/3000）



第53図　西トレンチ遺構実測図



第54図　西トレンチ包含層出土遺物実測図（S＝1/3）

1号水溜め　調査区北端で検出し、1号溝に付随した水を堰止める施設と考えられる。深さ約60cmを測り、水の流れによる川砂が複雑に堆積した後、濁暗灰色粘質土で埋められている。出土遺物はない。

3．遺物（第54図）

1号溝覆土、包含層を中心に磨耗した弥生時代末から近・現代までの遺物が出土した。1は近世の染付碗である。底部内面に目砂が残り、素地はややバサついた印象を受ける。2は須恵器有台杯で台部やや内屈する。底部内面に使用痕が残る。南加賀産と考えられる。3は管状土錘でにぶい淡黄橙色を呈する。長さ3.6cm、孔径1.1cm、重さ37ｇを測る。4は加賀焼甕口縁部である。那谷ダイテンノウダニ1号窯出土遺物に類例がみられる。5は瀬戸焼灰釉平碗で台部は目立たない。15世紀前葉～中葉に位置づけられる。

第3節　東トレンチ（横江Ｂ遺跡、横江古屋敷遺跡）

1．調査概要

調査区は横江町の集落北東側の水田部分に南北方向に設置される排水路予定部分であり（第55図）、調査区東側を流れる安原川を挟んで金沢市、野々市町に近接する。現在の水田面で標高12.60～11.45mを測り、周辺の地形は調査区にほぼ並行して北東方向にのびる微高地が存在、北側および安原川に向う東側に緩やかに傾斜していく。両遺跡とも微高地上に位置すると考えられる。

調査区の主軸線は排水路中心線と一致しN－0°を測り、農道等の掘り残しで区分、南からA～Gトレンチを設定した。またGトレンチは南からG－1区～G－6区に細分している。基点は排水路主軸線の南側延長上で現況の排水路（コンクリート製）中心線より1.24m北側に設定した。

基本土層層序は上層から第1層ほ場整備事業により敷設された農道の盛土、第2層旧耕土、第3層床土、第4層灰オリーブ色砂質シルト、第5層中世包含層（暗灰色砂質土）、第6層弥生時代包含層（濁灰茶色粘質～砂質土）、第7層地山（濁黄灰色砂質土）となる。地山面までの土層の堆積は調査区南端（A区）が最も厚く、第2層から地山面まで厚さ約80cmを測る。そして北側に向うに従い土層の堆積は薄くなる。たとえば、E区では第4層は確認できず、第5、6層も次第にその分別が困難となり、G区に至り第6層が耕土直下に存在する（厚さ20cm前後）。また地山面の標高は11.7～10.9mを測り、B区およびG－2、3区付近は多少高くなる。なおB区22m付近からD区118m付近にかけては地山面が大きく下がり、調査区幅の制約から底面まで検出していないものの、その規模から河川跡の存在を想定したい。[2] この部分では第6層は地山面と同じくレベルが下がるのに対して、第5層は河川跡が明灰色粘質土で埋まった後にほぼ同じレベルで堆積して

第55図　東・南トレンチ配置図（S＝1/4000）

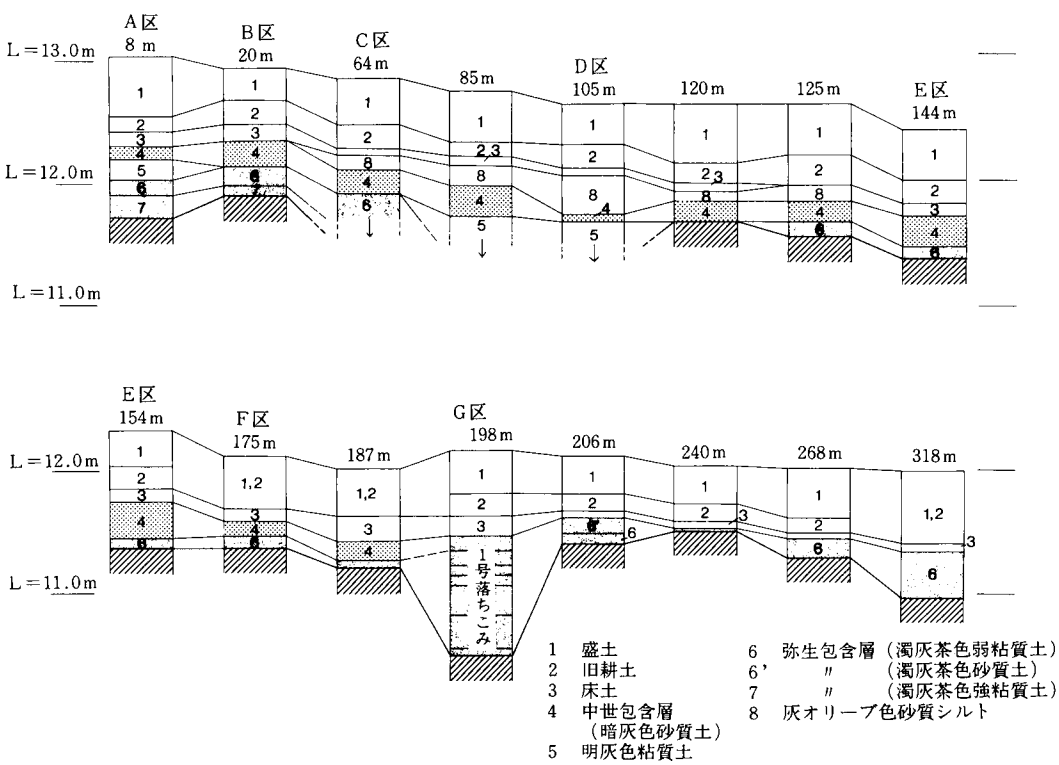
いる。すなわち河川跡は横江Ｂ遺跡が存在した時期には機能していないと考えられる。

調査の結果、Ａ～Ｃ区で室状遺構１基、溝５条を検出し、14～15世紀に位置づけられる遺物が出土している。Ｄ～Ｆ区では遺構、遺物ともに確認されておらず、横江Ｂ遺跡の中心部から離れていくものと考えられる。またＧ区（横江古屋敷遺跡）では大溝４条、溝24条、土坑３基、ピット等を検出し、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物が多数出土している。溝の大半は住居跡に付随する周溝に、また大溝は集落の南北を画する大溝および方墳の周溝と考えられる。なおＡ～Ｃ区では部分的に、Ｄ～Ｅ区では全面で弥生時代の地山面まで遺構検出をおこなった。その結果、弥生時代の包含層の続きと考えられる土層は確認できるものの明確な遺構は検出できず、ごく少量の遺物がＢ区で出土したにとどまる。すなわち良好な集落景観を示す横江古屋敷跡の南限はＦ区とＧ区の間にあると考えられる。

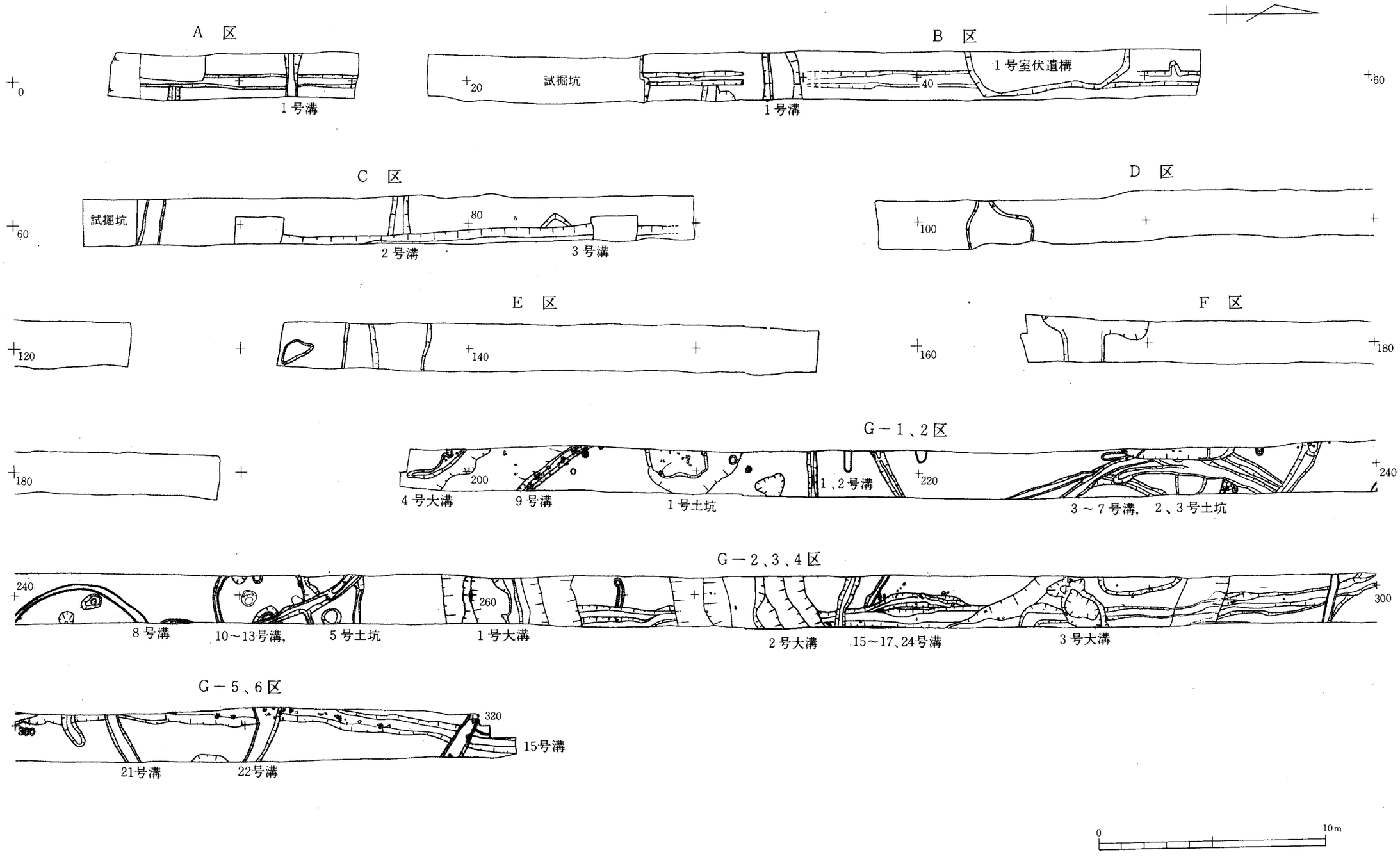
２．Ａ～Ｆ区

(1) 遺構（第57～59図）

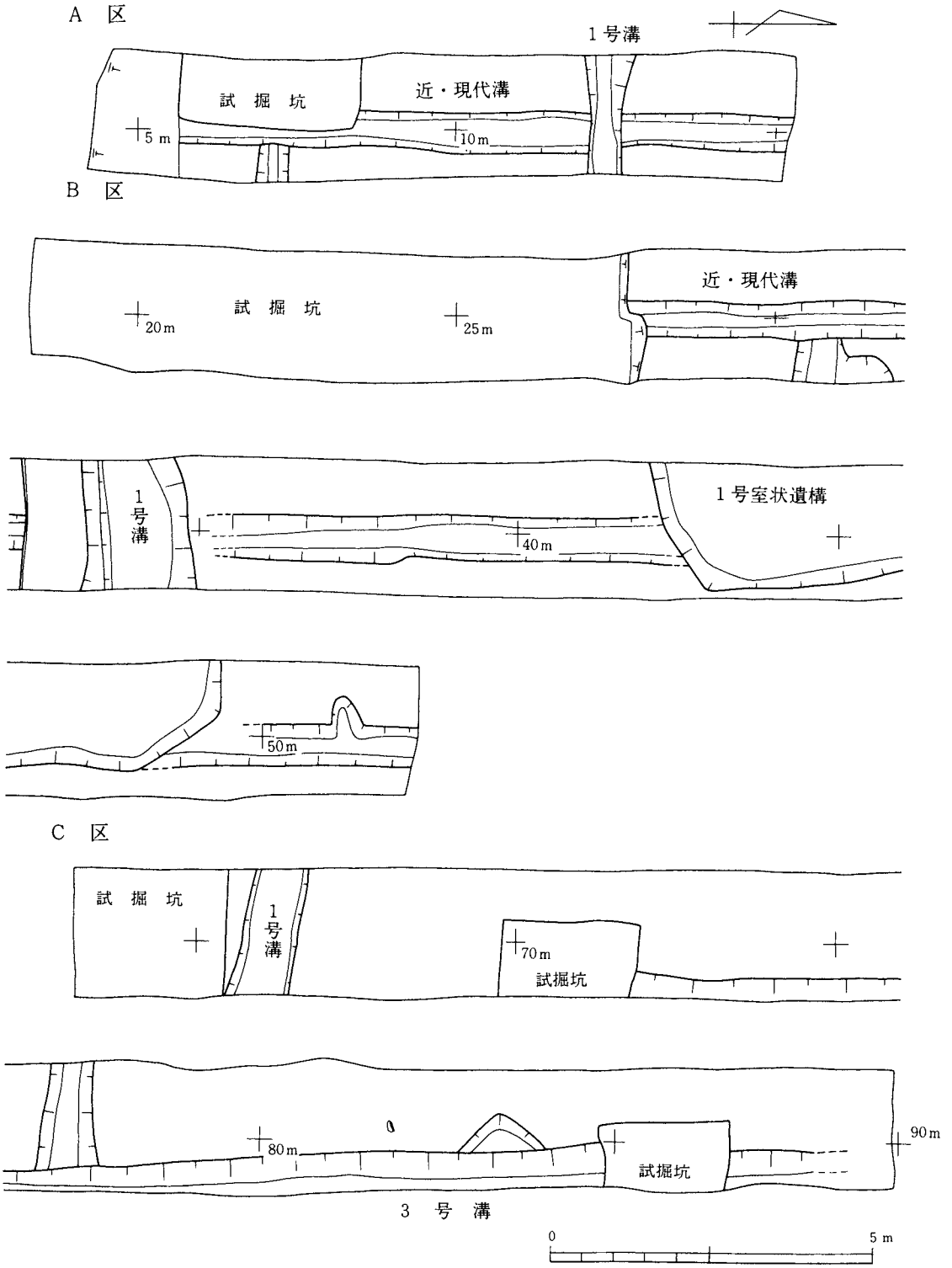
上面（中世以降）より溝５条、室状遺構１基を検出した。先述のとおりＡ～Ｃ区は包含層が上下２層存在し、下層（弥生時代後期～終末）は試掘坑を部分的に設定することで検出をおこなった。下層では明確な遺構は確認できず、Ｂ区で湿地状の強い粘性を帯びた包含層と地山面との境から少量の遺物が出土したにとどまる。なおＡ、Ｂ区を北側に向けて流れる近・現代溝は調査前まで排水路として利用されている。



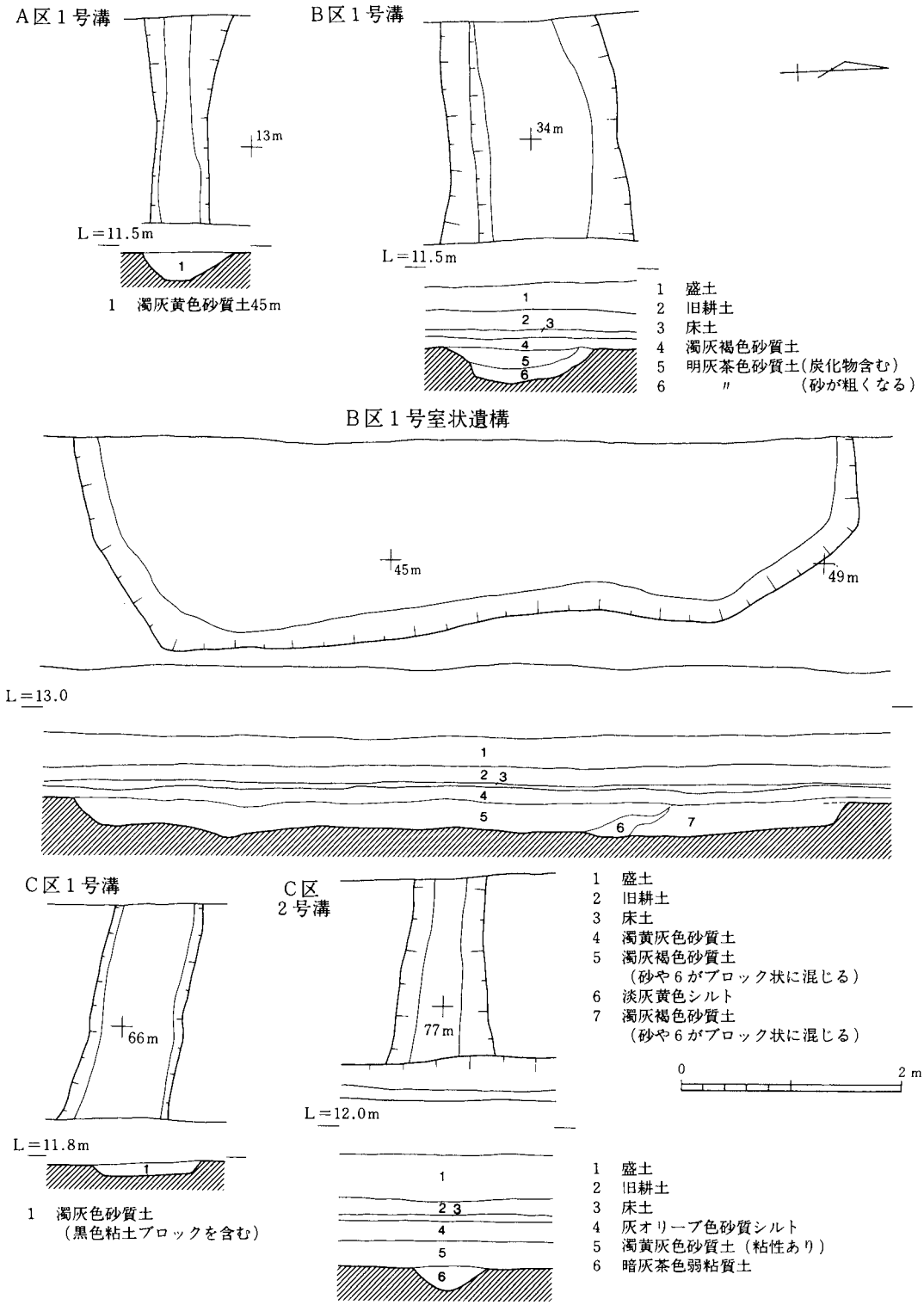
第56図　東トレンチ西壁土層柱状図



第57図　東トレンチ全体図（S＝1/200）



第58図　東トレンチA～C区遺構実測図(1)(S = 1 /100)



第59図　東トレンチA～C区遺構実測図(2)（S＝1/60）

A区１号溝　東西方向に主軸をとり、幅50～80cm、深さ約25cmを測る。覆土は濁灰黄色砂質土で旧耕土直下まで立ち上がる。出土遺物はないが比較的新しい時代の遺構と考えられる。

B区１号溝　中世の溝と考えられる。東西方向に主軸をとり、幅150～180cm、深さ20～25cmを測る。覆土は炭化物を含む明灰茶色砂質土で底面近くは粗い砂質土となる。出土遺物なし。

B区１号室状遺構　B区北側で検出した中世の遺構で性格は不明である。やや崩れた隅丸方形または長方形を呈すると考えらえ、調査区西側壁面で幅約730cm、深さ20～30cmを測る。底面は平担で北側がやや深くなる。覆土は淡灰黄色シルトや砂をブロック状に含む濁灰褐色砂質土で、北側から埋められている。出土遺物なし。

C区１号溝　ほぼ東西方向に主軸をとり、幅80～90cm、深さ10cm弱を測る。覆土は黒色粘土ブロックを含む濁灰色砂質土で旧耕土直下まで立ち上がる。覆土中より越前焼甕胴部片が出土した。A区１号溝と同時代の遺構と考えられる。

C区２号溝　ほぼ東西方向に主軸をとる中世の溝で幅70～90cm、深さ約20cmを測る。覆土は暗灰茶色弱粘質土で、出土遺物なし。

C区３号溝　ほぼ南北方向に主軸をとる中世の溝で深さ約40cmを測る。覆土は暗灰色弱粘質土。

D区　先述した河川跡北側肩部が118m付近で検出された。第56図土層６の上に堆積した明灰色砂（川底の砂）中より漆椀が出土した（図版28）。

E、F区　地山面に若干の起伏があるものの、遺構は検出できなかった。また包含層から遺物は出土していない。

(2)　遺物（第60図）

６、７はB区下層包含層と地山面との境から出土した。６は浅黄橙色を呈した丹後系の弥生土器器台で、口縁帯外面に擬凹線状のヨコナデ調整を施し、下端は稜をもつ。体部上端に把手、下方に穿孔が認められるが数は不明である。[3] 体部外面にミガキ調整を施し、口縁部に赤彩がわずかに残る。胎土は他の遺物とは印象が異なる。７は砂岩系の磨製石斧である。幅5.7cm、厚さ3.4cmを測る。先端部に打撃痕を残す。８はC区上層包含層より出土した珠洲焼甕で口径約40cmを測る。灰黄色を呈し、肥厚した口縁部は外側に折れる。破片割口に漆状の補修痕が残る。珠洲Ⅴ期に位置づけられる。９はD区上層包含層より出土した厚手の漆椀で底径5.2cmを測る。外面黒漆、内面朱漆を塗り、外面に朱漆で文様を加える。なおA～D区包含層からは図化できなかったが15～16世紀の土師質皿、珠洲焼、加賀焼、瀬戸焼灰釉、青磁、白磁等が出土した。

３．G区遺構（第61～69図）

G区を任意に設定した木杭により南から順にG－１区～G－６区と細分をおこなった（第61、62図）。G－１区は東トレンチ基点より197～222m、G－２区は222～243.5m、G－３区は243.5～267m、G－４区は267～287m、G－５区は287～309m、G－６区は309～322mとなる。また地山は濁黄灰色砂質土である。検出面の標高は約11.0～11.4mを測り、南側から北側に緩やかに傾斜する。

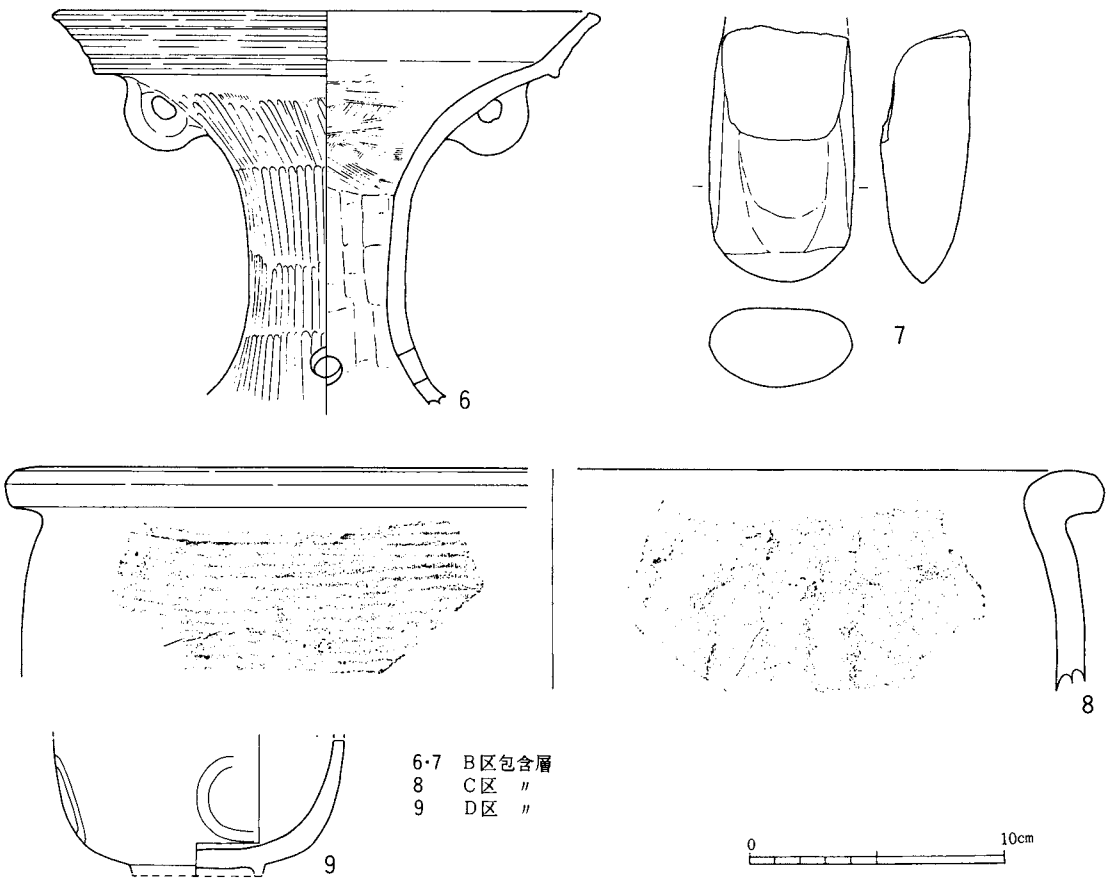
調査の結果、大溝４条、土坑５基、溝24条等を確認した。G－１区南端４号大溝とG－３区１号

大溝の間で平地式住居跡の周溝となる環状の溝を検出しており、1、4号大溝は集落の南北を画する大溝と考えられる。4号大溝以南および1号大溝以北では住居跡等は確認していない。また、1号大溝北側に位置する2、3号大溝は古墳時代初頭の方墳の周溝の一辺になると考えられる。1号大溝、9、15号溝を中心に出土した遺物から、これらの遺構は弥生時代後期～古墳時代初頭のものと考えられる。また、少量だが弥生時代中期の柴山出村式に比定できる遺物も出土した。

以降、G-1区から順に述べていくが調査区幅が狭いため、G-2区のように遺構相互の新旧が不明確な遺構が少なからず存在することを先に断っておきたい。それ故、各遺構毎の時期的関係も本報告では詳しく触れることができず、大まかな流れを追うにとどまった。

(1)G-1区（第63図）

4号大溝　G-1区南端に位置し、先述のとおりこの大溝を挟んで遺構の展開に大きな違いがあることから集落の南側を画する大溝と考えたい。大溝北側肩部は緩やかに傾斜し、幅4m以上、深さ約0.9mを測る。肩部に明確な掘り方は存在せず、自然の河川を利用した可能性をもつ。覆土は灰白色粘質土を挟んで、黒灰～暗灰色粘質土が自然堆積している。覆土中より小片だが多数の遺物が出土し、第63図土層5～8に含まれたものを上層遺物、土層8より下層に含まれたものを下層遺物として取り上げている。下層では大溝底面より約10cm上のレベルで集中して遺物が出土



第60図　東トレンチA～D区包含層出土遺物実測図（S＝1/3）

した。なお、大溝南側肩部は調査時の誤認により調査していない。出土遺物は弥生時代終末を中心とする。

1号溝　東西方向に主軸をとり、幅約40cm、深さ15～20cmを測る。覆土は黒色粘質土をブロック状に含む明灰茶色砂質土である。少量の遺物が出土した。

2号溝　幅40～60cm、深さは西側で約20cmを測り、南西方向に流れると考えられる。覆土は1号溝と同じである。少量の遺物が出土した。

9号溝　4号大溝と並行して流れ、何らかの関連をもつと考えられる。幅50～60cm、調査区東壁断面で深さ約20cmを測り、覆土は濁暗灰色砂質土である。覆土と包含層の境付近より多数の遺物が出土したが、溝底面につく遺物はない。遺物の出土状況は15号溝と似ている。

1号土坑　やや崩れた円形を呈すると考えられ、中央部が一段深くなる。南北方向で最大幅約420cm、深さ約30cmを測る。覆土は上層より濁灰茶色粘質土、濁灰オリーブ色砂質土で、上層より弥生時代中期と後期～終末の遺物が混在して出土した。

(2)G-2区（第64・65図）

2号土坑　4、6号溝に切られており、明確にプランを検出できなかった。調査区外西側に中心をもつ平地式住居跡の周溝の可能性をもつ。調査区西壁断面で深さ約40cmを測る。覆土は炭化物を含む灰茶色砂質土で、底面近くに暗灰色粘質土が薄く堆積している。覆土中より遺物が出土した。

3号土坑　5号溝に切られており、崩れた楕円形を呈する。深さ約28cmを測り、覆土は底面近くで炭片を多く含む。覆土中より周辺の他の遺構よりも古い様相をもつ遺物が出土した。

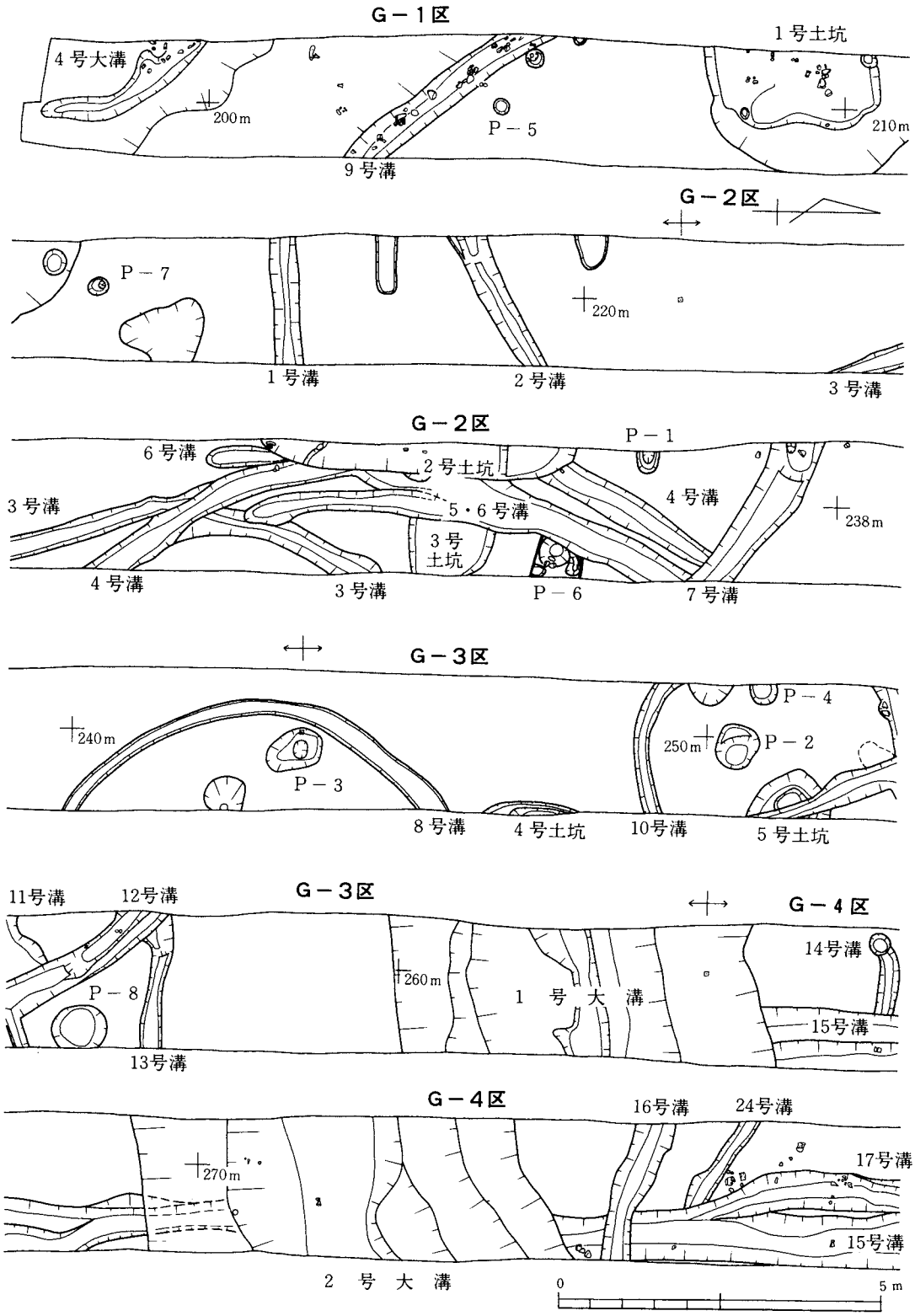
3号溝　4、5号溝に切られる。調査区内で環状を呈し、直径約11mの規模をもつ平地式住居跡に伴う周溝と考えられる。幅30～40cm、深さ15～20cmを測り、覆土は炭化物を含む灰茶色粘質砂の単層である。覆土中より少量の遺物が出土した。

4号溝　5号溝と同心円を描き、同じ中心点をもつ平地式住居跡に伴う周溝と考えられる。直径約14mに復元できる。幅40～45m、深さ10～20cmを測り、北側が若干浅くなる。覆土は土層c－dラインで上層より暗灰色粘質土、地山をブロック状に含む暗灰色砂質土となり、覆土中より少量の遺物が出土した。

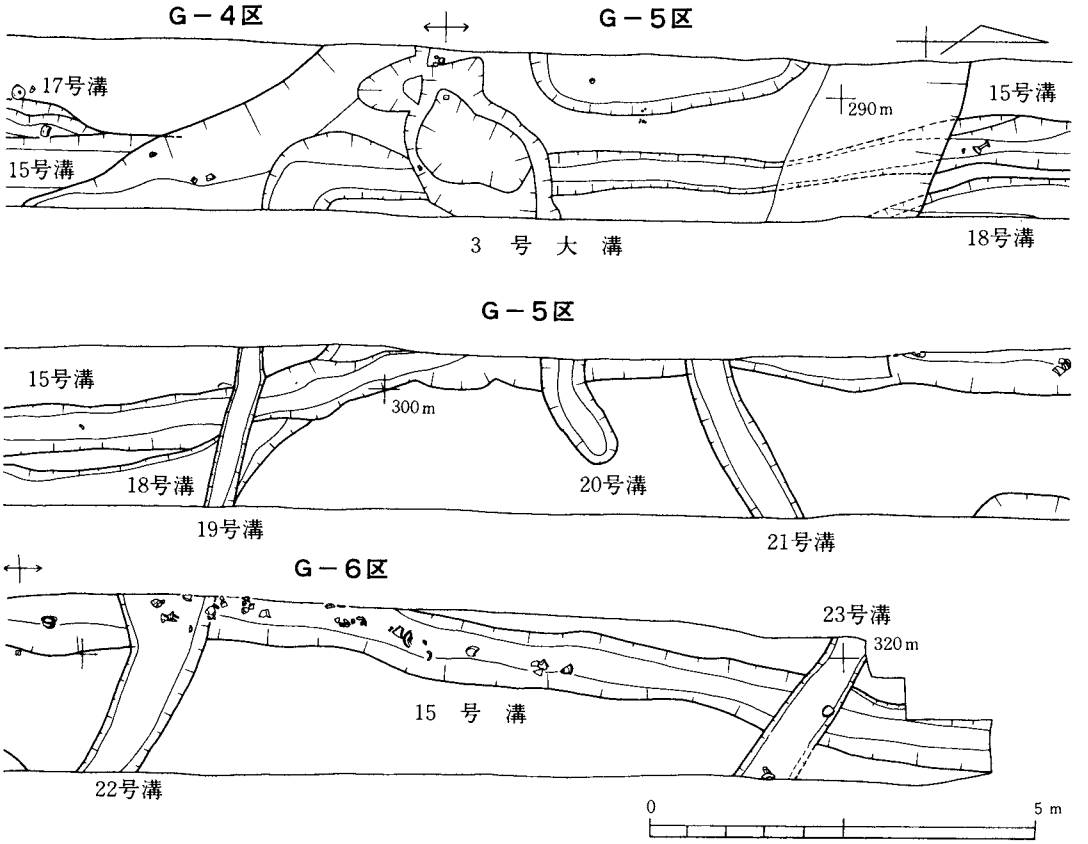
5号溝　新旧関係は不明だが4号溝と同心円を描き、直径約12.6mを測る平地式住居跡に伴う周溝と考えられる。4号溝より浅く幅30～60cm、深さ5～10cmを測り、3号溝と交差する付近では検出できず、周溝の開口部が存在すると考えられる。覆土は炭化物を含む濁灰色粘質砂で、少量の遺物が出土した。

6号溝　他の遺構との重複により明確に検出できなかったが、環状を呈し、調査区外西側に中心をもつ平地式住居跡に伴う周溝と考えられる。調査区西壁断面で幅約60cm弱、深さ約25cmを測り、覆土は暗灰色粘質砂である。

7号溝　4、5号溝を切り、西側で一段深くなる。幅50～80cm、深さは調査区東壁で約2cm、調査区主軸線上で約10cm、調査区東端で約40cmを測る。覆土は炭化物を含む灰褐色粘質砂で、覆



第61図　東トレンチG－1～4区遺構実測図（S＝1/100）



第62図　東トレンチG－4～6区遺構実測図（S＝1/100）

土中より少量の遺物が出土した。

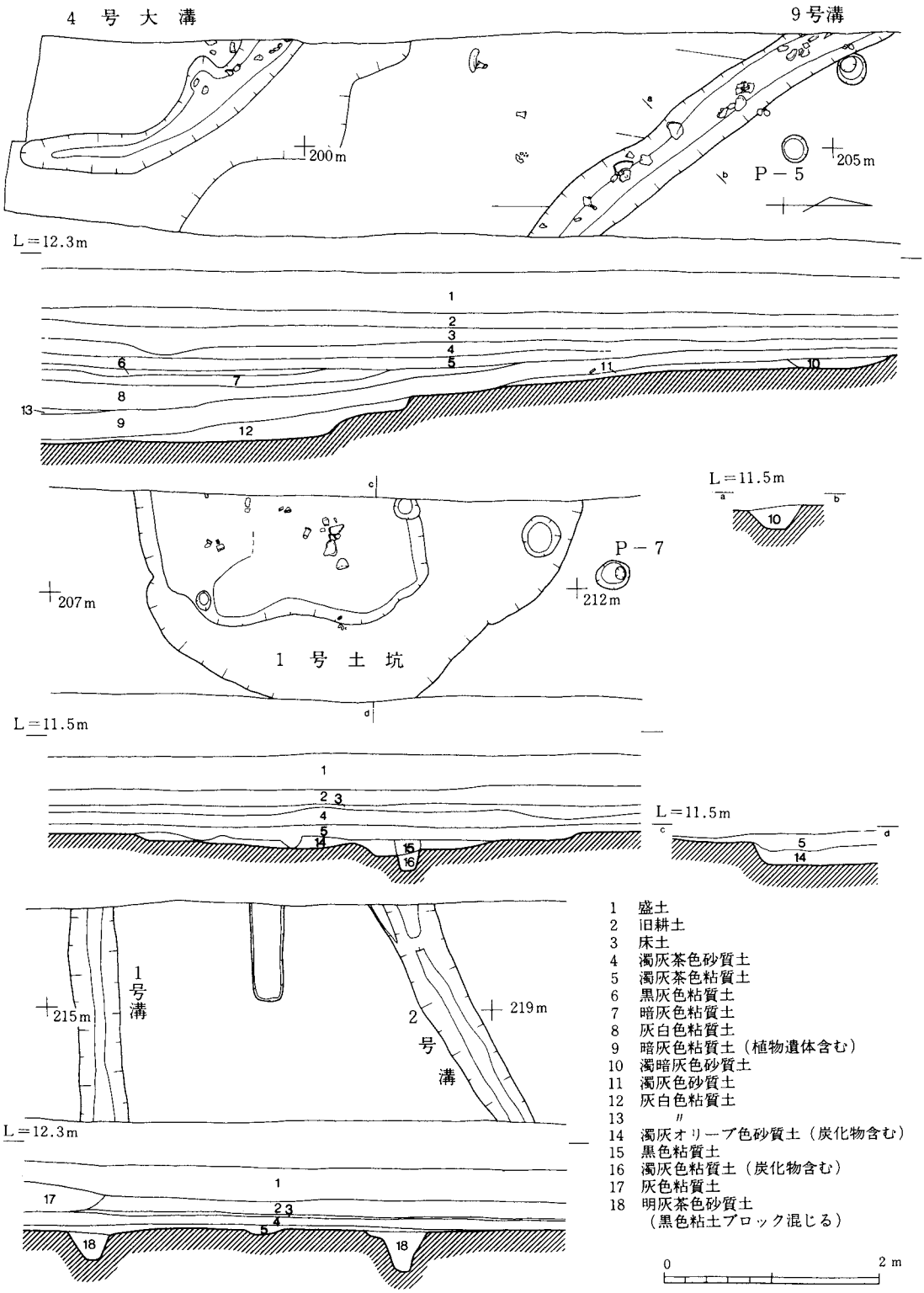
8号溝　調査区外東側に中心をもつ直径約7mの平地式住居跡に伴う周溝と考えられる。幅20～40cm、深さ10～15cmを測り、覆土は地山をブロック状に含む濁淡灰色粘質砂である。円弧内のピットは、住居跡に付随する柱穴を含むと思われる。覆土中より少量の遺物が出土した。

(3)G-3区（第65～66図）

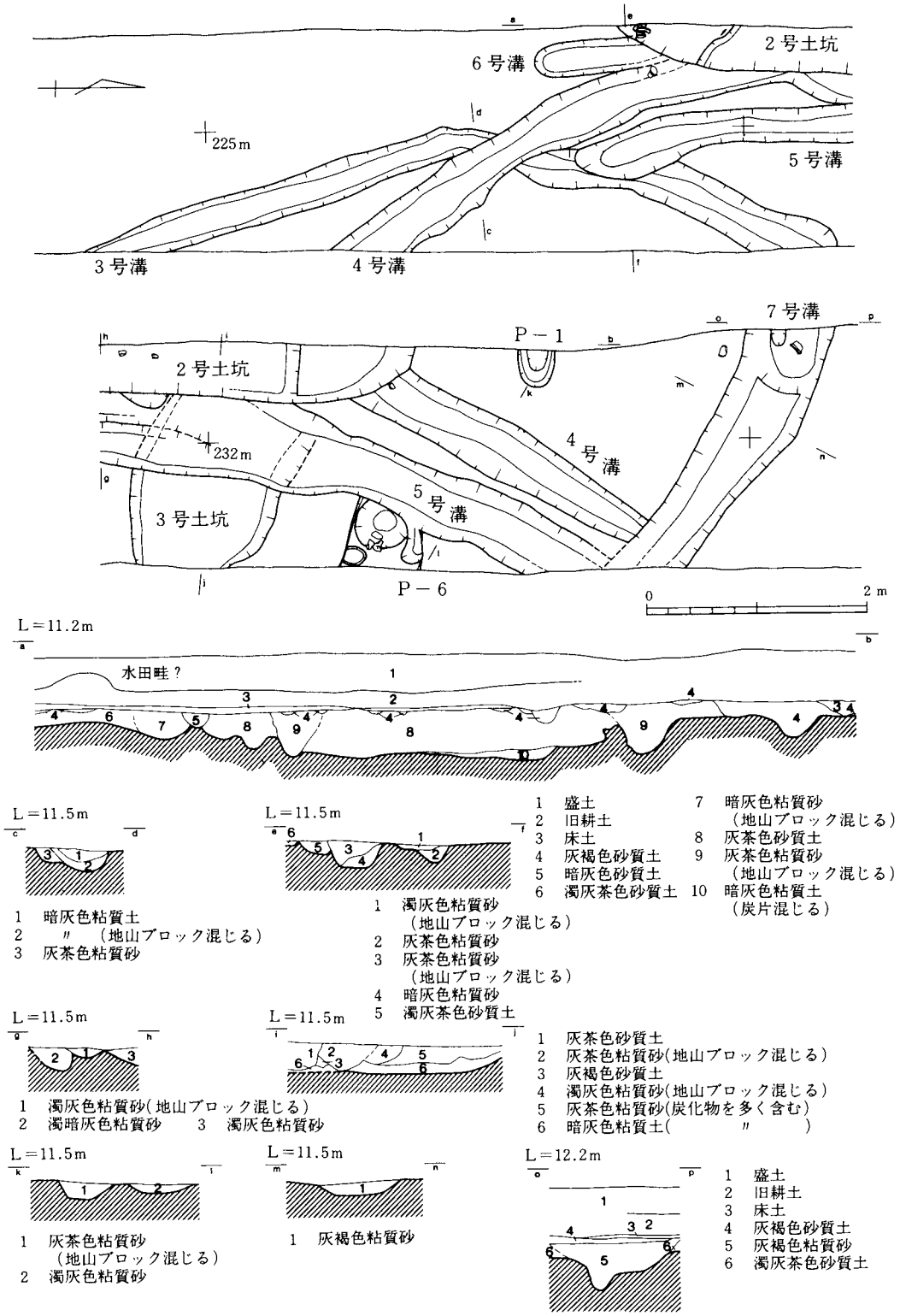
4号土坑　8号溝北側で検出し、調査区外東側にのびる。2段に掘りこまれており、調査区東壁断面で幅約160cm、深さ約30cmを測る。覆土は炭化物を含む濁灰茶色砂質土。覆土中より少量の遺物が出土した。

5号土坑　12号溝に切られる。周辺の他のピットと同様に10・13号溝のつくる平地式住居跡に付随する柱穴の可能性をもつ。円形を呈し、調査区東壁断面で幅約120cm。また中央部付近が最も深くなり、深さ約50cmを測る。覆土は炭化物を含む濁灰茶色砂質土である。覆土中より少量の遺物が出土した。

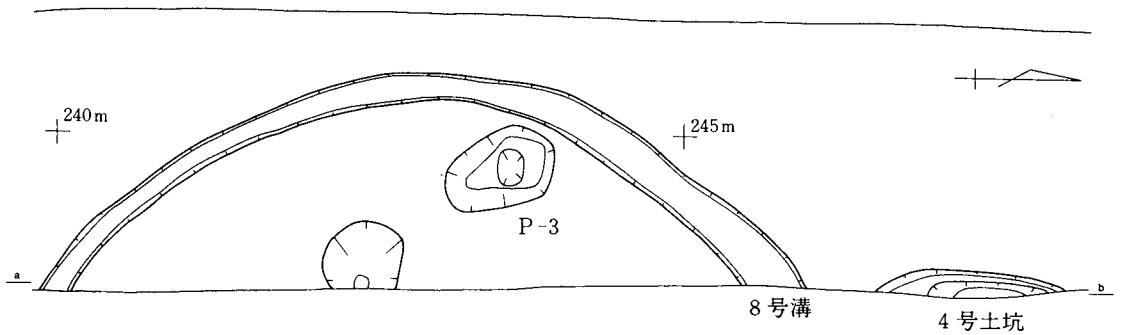
10・13号溝　平地式住居跡に伴う周溝と考えられ、やや崩れた環状を呈する。直径約6.4m、溝幅20～30cm、溝の深さ約8cmを測り、覆土は炭化物を含む濁灰褐色粘質砂である。また基点より

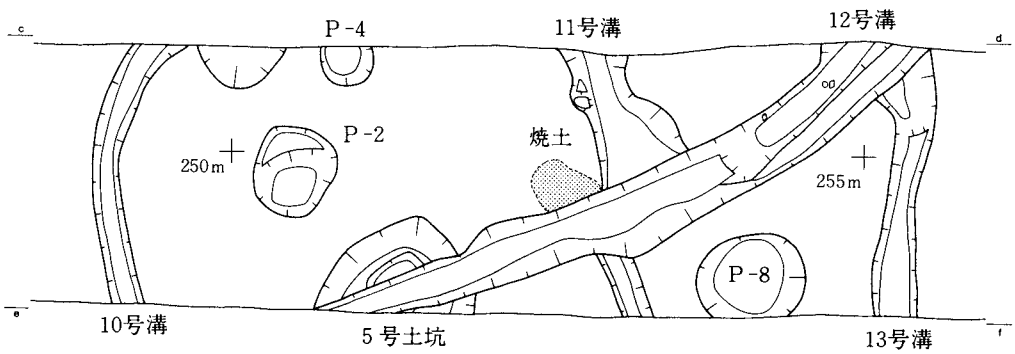


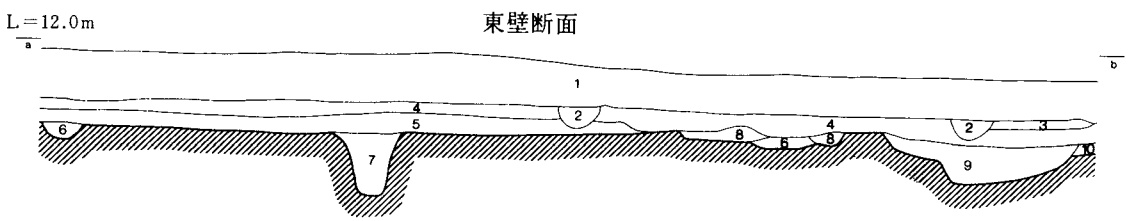
第63図　東トレンチG－1区遺構実測図（S＝1/60）

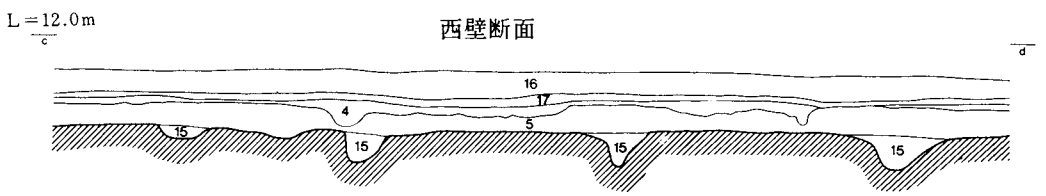


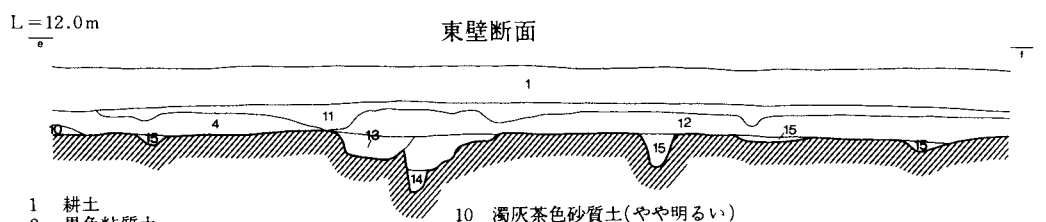
第64図　東トレンチＧ－２区遺構実測図（Ｓ＝1/60）











1 耕土
2 黒色粘質土
3 2と4の混合土
4 濁灰褐色粘質砂
5 〃 (やや暗い)
6 濁淡灰色粘質砂(炭化物含む)
7 〃 (粘性強くなる)
8 濁淡灰色粘質砂(地山ブロック含む)
9 濁灰茶色砂質土(炭化物含む)
10 濁灰茶色砂質土(やや明るい)
11 濁灰褐色粘質砂(やや暗い)
12 濁灰色粘質砂(黄色帯びる)
13 濁灰色粘質砂(12より明るい)
14 濁灰茶色粘質砂(砂っぽい)
15 濁灰褐色粘質砂
16 旧耕土
17 床土

0 2m

第65図 東トレンチG-2・3区遺構実測図 (S=1/60)

252.5m付近で検出された焼土はこの平地式住居跡の中心付近に位置し、地床炉の可能性をもつ。覆土中より少量の遺物が出土した。

11号溝　12号溝に切られる。東側が浅くなることから南西方向に流れると考えられる。西側で幅が広くなり、幅40～60cm、深さ約25cmを測る。覆土は濁灰褐色粘質砂の単層で、少量の遺物が出土した。

12号溝　5号土坑、11号溝を切る。北西方向に湾曲しながら流れ、幅約50cm、深さ20～30cmを測る。覆土は11号溝とよく似ている。少量の遺物が出土した。

1号大溝　4号大溝と対になり、G-2、3区を中心に展開する集落の北側を画する大溝となる。形状から人工的に造成されたと考えられ、東西方向に主軸をとる。幅約580cm、深さ約100cmを測り、溝中央部付近が水の流れ等の理由で幅40～70cm、深さ約50cmに一段深くなる。[4] 溝肩部は中途で傾斜が緩やかとなり、また底面はしっかりとしているため4号大溝と異なる印象を受ける。覆土は上層から暗灰～淡灰色シルト（第66図土層4～7）、灰色粘土（同8）、灰白色粘質土（同9）が自然堆積し、以下は遺物を多く含み、水の流れで堆積した灰～灰黄褐色の土層（同10～12）となる。遺物は上、中、下層に分けて取り上げており、中層より下で多くの遺物が出土している。上層（第66図土層4）からは中世の遺物、中層（同5～9）からは弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物、中層と下層の間層（同10、一部11、12を含む）および下層（同11、12）からは中層と同じ時期の多数の遺物が出土した。なお、1号大溝以北では住居跡に復元できる遺構は検出できなかった。

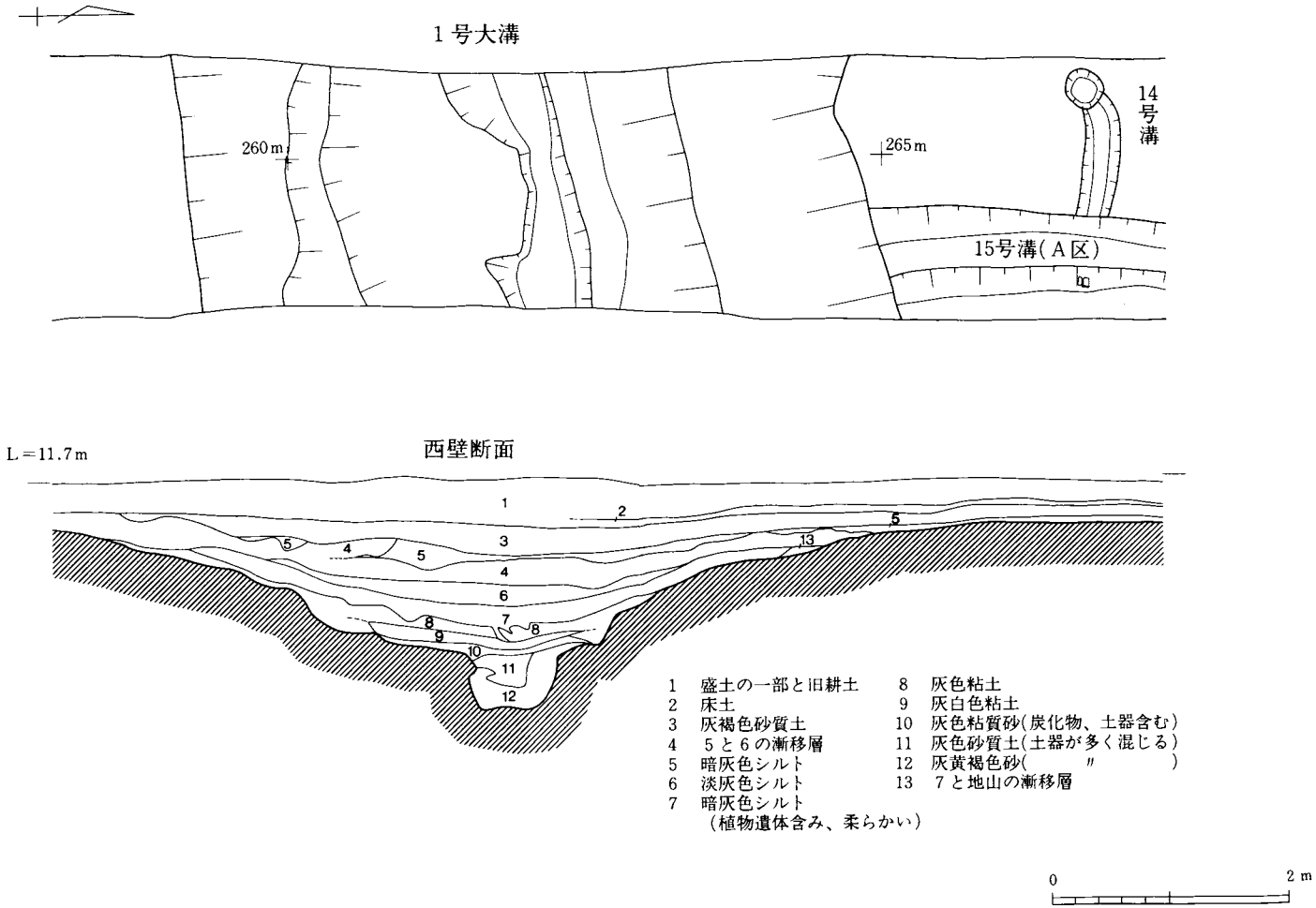
P－8　円形を呈し、径約80cm、深さ約15cmを測る。覆土は濁灰褐色砂質砂で少量の遺物が出土した。

(4)G-4区（第67図）

14号溝　15号溝に切られる浅い溝である。幅約30cm、深さ約5cmを測り、覆土は濁灰褐色粘質土である。出土遺物なし。

15号溝　1号大溝以北から南北方向に屈曲しながら調査区北端まで流れる。また1号大溝以南では検出できない。[5] 2、3号大溝に切られており、3号大溝底面で15号溝から水が流れた痕跡が残ることから、2、3号大溝掘削後も、しばらくは機能したと思われる。幅60～80cm、深さ50～60cmを測る。覆土は268m付近（第67図土層c－dライン）、280m付近（同図g－hライン）296m付近（第68図土層c－dライン）で上層より炭化物を含む濁灰褐色砂質土（埋土）、灰褐色砂質土、300m付近（第69図土層c－dライン）および314m付近（同図e－fライン）で上層より暗灰褐色砂質土（自然堆積）、濁灰褐色～濁淡灰褐色砂質土（埋土）、濁灰褐色～灰褐色砂質土（一部埋土）となる。図版37で見るように埋土を中心として完形に復元できる個体を含むまとまった遺物が出土したが、溝底面直上の遺物はほとんどなく、大部分は溝を埋める際に廃棄されたものと考えられる。なお、遺物は南からA～P区に細分して取り上げている。弥生時代後期の遺物を中心として、居住域出土遺物より古い様相を示す。

16号溝　15号溝を切り、東西方向に流れる。幅40～60cm、深さ約40cmを測り、覆土は濁灰褐色



第66図　東トレンチG-3・4区1号大溝実測図(S=1/60)

砂質土の単層である。覆土中より少量の遺物が出土した。

17号溝　279～282m付近で15号溝と分岐するように流れ、15号溝より前に掘削されたと考えられる。幅40～60cm、深さ約40cmを測り、15号溝より規模は小さい。覆土は灰褐色～濁灰褐色の砂質土で、覆土中より遺物が出土した。

24号溝　16号溝とほぼ並行して流れる浅い溝である。15号溝との切り合い関係は不明。幅25～40cm、深さ約10cmを測り、覆土は粘性を帯びた濁灰褐色砂質土である。出土遺物はない。

280m土器集中地点　遺構としては把握できなかったが、18号溝廃絶後、278～281mにかけて地山面が若干下がる地点で、地山面直上につぶれた状態で遺物が出土した。

2号大溝　G-5区3号大溝とともに古墳時代初頭の方墳の周溝になると考えられる。15号溝を切っており、調査区西壁で幅約600cm、東壁で幅約680cmを測り、東側が少し広がる。深さは約90cmを測る。覆土は3号大溝と似た形成を考えられ、上層から暗灰色粘質土（自然堆積）、黄色粘質土をブロック状に含む濁灰褐色粘質砂（埋土？）と続き、その下層に灰白色強粘質土、暗灰褐色～濁黄灰色粘質土が自然に堆積している。大溝底面から15～20cm上のレベルより少量の弥生時代後期後半の細片となった遺物が出土した。

(5)G-5・6区（第69図）

18号溝　15号溝に切られる。調査区東側で南方向に屈曲するためか幅が広くなる。調査区西壁断面で幅約60cm、深さ約30cmを測り、覆土は上層より黄灰褐色砂質土、地山をブロック状に含む淡灰褐色砂質土となる。覆土中より少量の遺物が出土した。

19号溝　15号溝廃絶後、弥生時代後期～終末の包含層をベース面とし掘られる。20・21号溝と同様に若干時期が下るものと考えられる。幅約30～35cm、深さ約14cmを測り、覆土は灰色粘質砂の単層である。出土遺物はない。

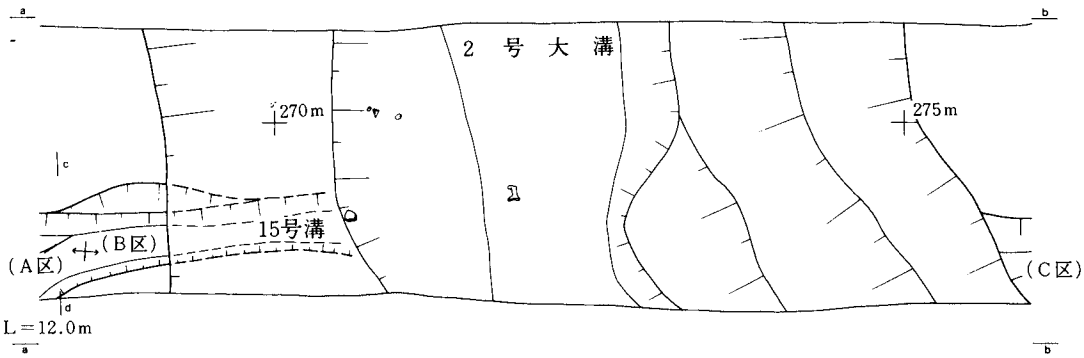
20号溝　幅約60cm、深さ約10cmを測り、覆土は灰色砂質土である。出土遺物はないが、土層断面より19号溝とほぼ同時期の溝と考えられる。

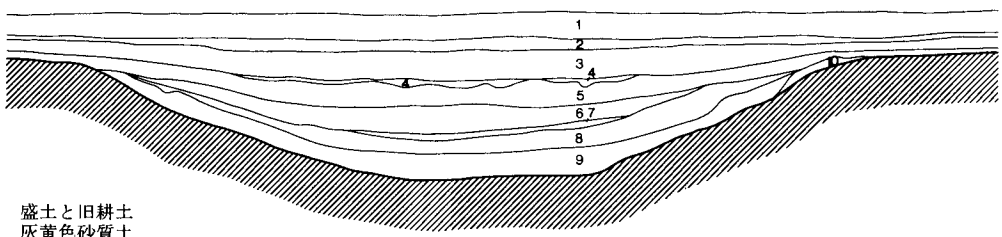
21号溝　幅約60cm、深さ約20cmを測り、覆土は19号溝覆土とほぼ同質の灰色粘質砂の単層である。出土遺物はないが、土層断面より19号溝とほぼ同じ時期の溝と考えられる。

22号溝　15号溝廃絶以後、19～21号溝以前に掘られている。調査区西側で幅が広くなり、調査区西壁断面で幅約130cm、深さ約20cmを測る。覆土は濁灰褐色砂質土の単層で、明確な出土遺物はない。

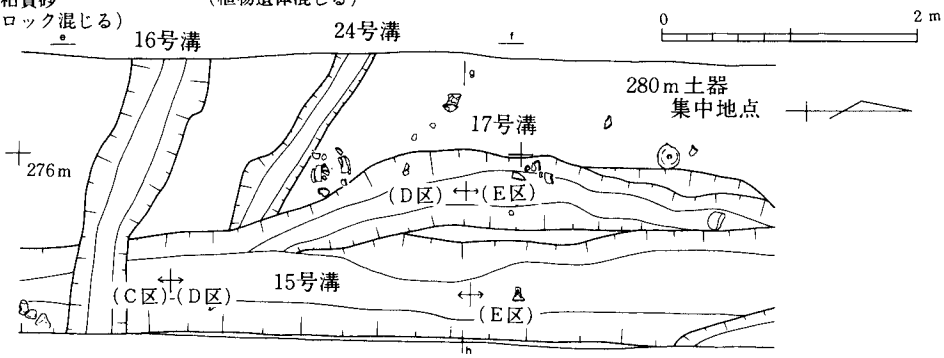
23号溝　第69図中では15号溝に切られているが、土層断面図から15号溝廃絶後（22号溝と同時期）に掘られている。調査区東側で幅が広がり、東側断面で幅約90cm、深さ約16cmを測る。覆土は灰褐色粘質砂の単層で、覆土中より弥生時代後期～終末の遺物が出土した。

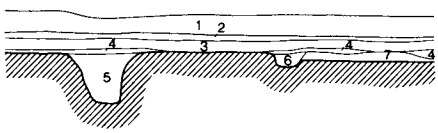
3号大溝　北西方向に主軸を取り、G-4区2号大溝とともに古墳時代初頭の方墳の周溝になると考えられる。15号溝の溝底部が残っており、大溝底面中央部付近に最深部で約20cm前後の深さを測る。また調査区西側でも一段深くなる。[6] 3号大溝は上幅約770cm、深さ約70cmを測り、覆土は2号大溝とよく似ている。上層より暗灰色粘質土（自然堆積）、黄色粘質土をブロック状に含む



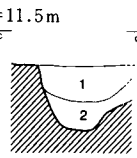


1　盛土と旧耕土
2　灰黄色砂質土
3　灰褐色粘質砂
　（炭化物、土器混じる）
4　暗灰色粘質土
5　濁灰褐色粘質砂
　（粘土ブロック混じる）
6　灰白色強粘質土
7　6と7の漸移層
8　暗灰色粘質土
　（植物遺体混じる）
9　濁黄灰色粘質土
10　濁黄茶色粘質土

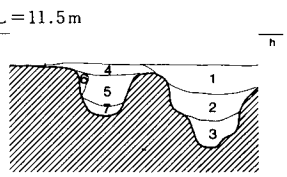




1　旧耕土
2　床土
3　灰黄色砂質土
4　濁灰褐色砂質土
5　〃　（粘性帯びる）
6　5と同質
7　濁灰褐色砂質土

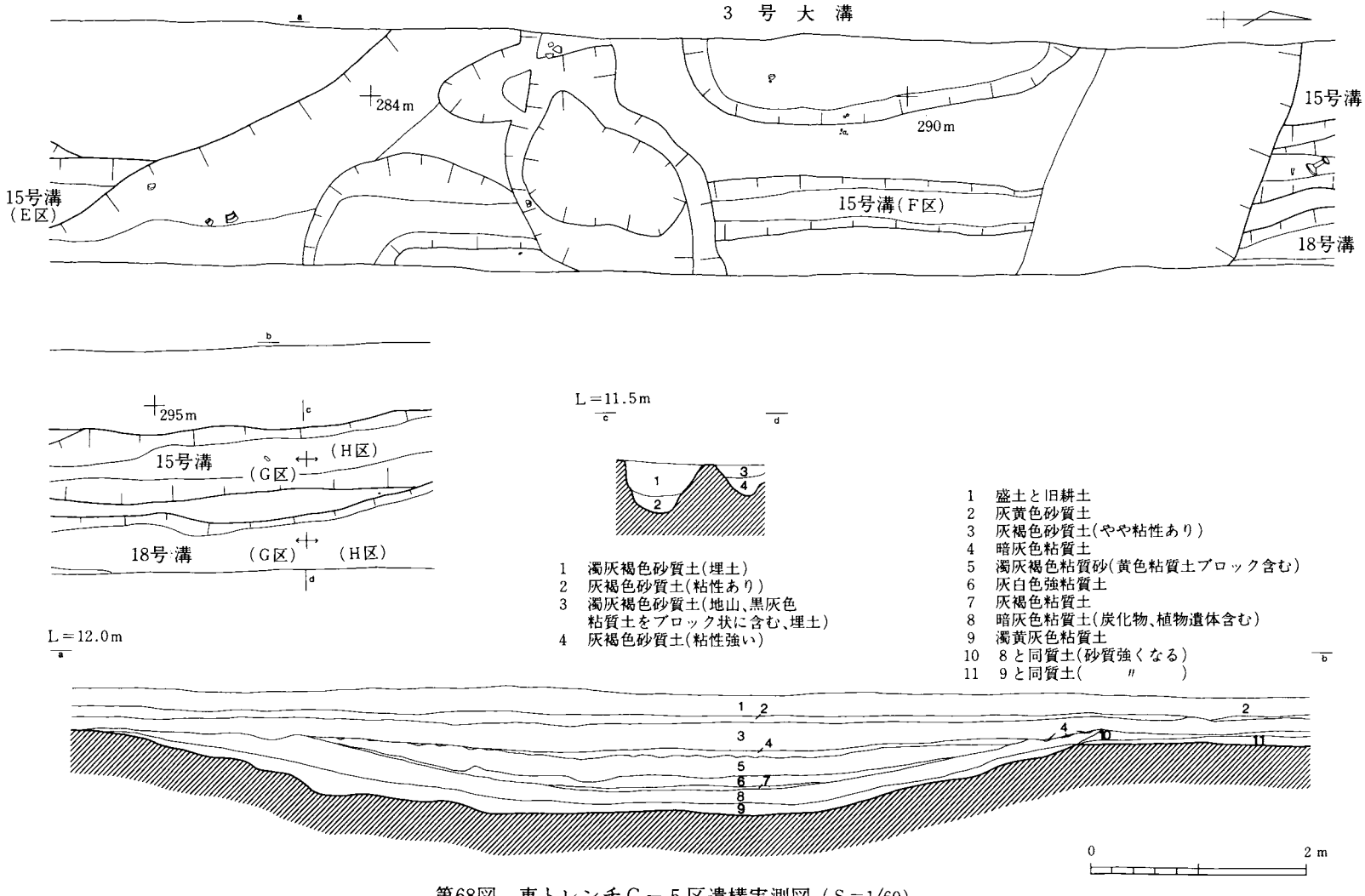


1　濁灰褐色砂質土
　（炭化物多く含む）
2　灰褐色砂質土
　（炭化物多く含む）

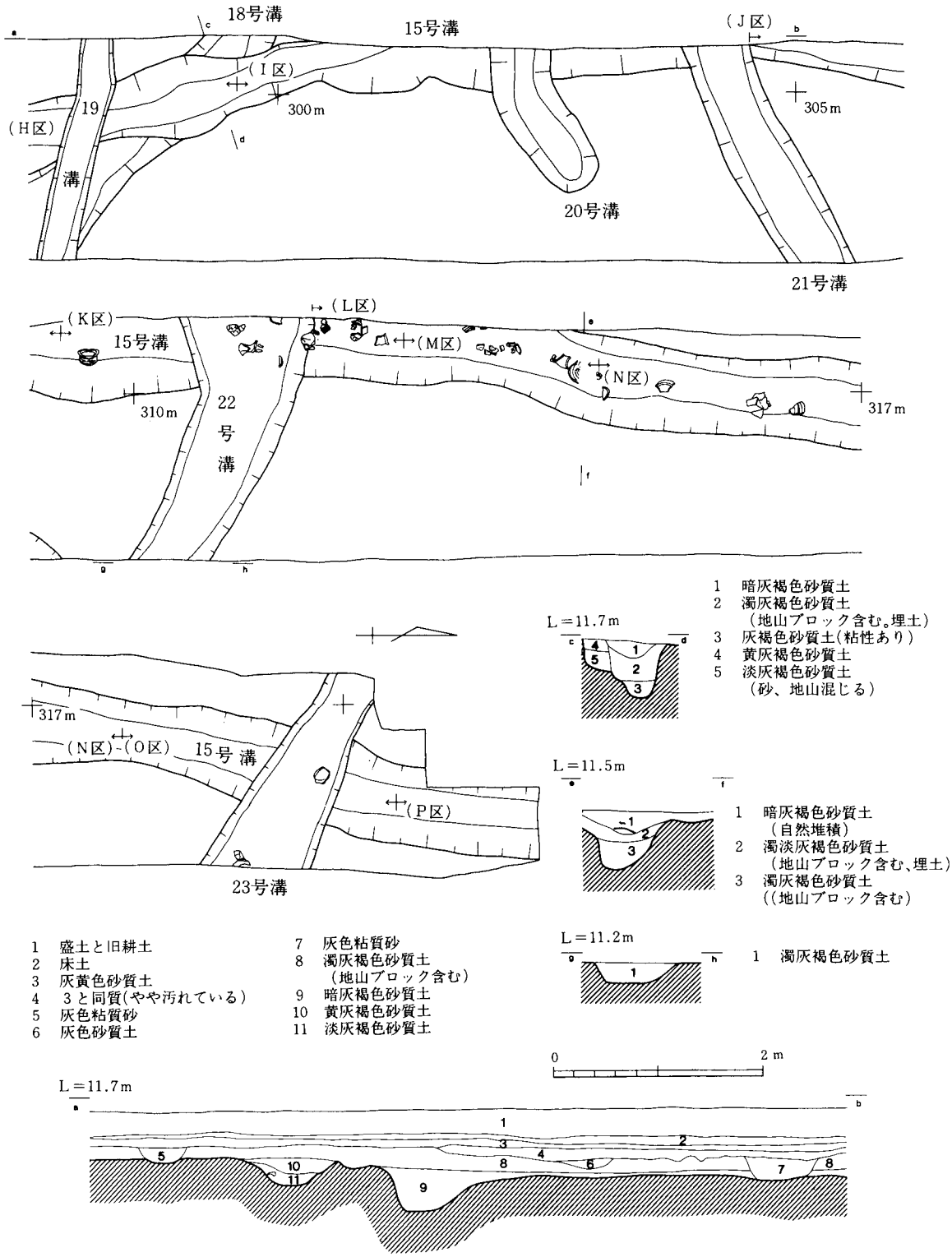


1　濁灰褐色砂質土(炭化物含む、埋土)
2　灰褐色砂質土（　〃　、粘性あり）
3　　〃　　（　〃　、地山ブロック含む）
4　濁淡灰褐色砂質土(大粒の炭化物含む)
5　濁灰褐色砂質土(　　〃　　)
6　地山崩壊土
7　灰褐色砂質土(細砂混じる)

第67図　東トレンチG－4区遺構実測図（S＝1/60）



第68図　東トレンチG－5区遺構実測図（S＝1/60）



第69図　東トレンチG－5・6区遺構実測図（S＝1/60）

濁灰褐色粘質土砂（埋土？）と続き、その下層に灰白色強粘質土、灰褐色～濁黄灰色粘質土が自然に堆積している。底面から10～20cm上のレベルの覆土中より少量の弥生時代後期後半の遺物が出土した。

4．G区出土遺物

1号大溝、9・15号溝を中心として、弥生時代中期および、後期～終末に位置づけられる遺物が出土した。なお、以降の東トレンチ出土遺物の記述は特に断らない限り弥生土器である。

(1) G-1区

1号土坑（第70図）

10～12は柴山出村式と考えられる。10は茶褐色を呈した甕で口径30.7cmを測る。口縁端部を小さく上方につまみあげ、口縁部外面下端にヨコ方向の指ナデを施す。2mm大の粗い石英質の砂粒を多く含む。11は甕底部であり、底径8.2cmを測る。外面にタテ方向のナデをおこなう。胎土は10と極似する。12は甕胴部で外面に粗い条痕文を施す。内面はナデ調整と思われる。胎土中に海綿骨片を含む。13は橙色を呈した蓋である。調整不明。14は鉢と思われ、口径約9cmを測る。口縁部外綿に2条の沈線を加える。胎土中に赤色粒を含む。15は器台で口縁部直立し、幅2cm弱の口縁帯をもつ。小片のため径に不安をもつ。16は浅黄橙色の壺類底部で、外面ハケ調整を施す。粗い砂粒を含む。

9号溝（第70～71図）

17～24は有段口縁の甕である。17は口径19.7cmを測り、口縁部外反する。口縁帯外面に8条程度の擬凹線を施し、胎土中に海綿骨片を含む。18は口径25cm前後を測り、口縁部大きく外反する。粗い砂粒を含む。19は口径18.7cmを測り、口縁部大きく外反する。口縁帯外面に8条の擬凹線を施す。口縁部外面に煤付着。20は口径16.5cmを測る。口縁部直立気味で胴部は卵形を呈すると思われる。口縁帯外面に12条の擬凹線を施し、内面に指頭圧痕が残る。粗い砂粗を多く含む。21は口径18.0cmを測る。口縁部大きく外反し、胴部ややナデ肩となる。口縁帯外面に10条の擬凹線を施し、内面に指頭圧痕が顕著に残る。22は口径16.7cmを測る。口縁部はあまり外反しない。23は器肉が厚く、口縁部直立する。口縁帯外面にかすかに擬凹線が残る。24は口径17.3cmを測る。口縁部は大きく外反し、口縁帯外面に8条の擬凹線が残る。25は浅黄橙色を呈した壺である。口縁部は外反し、外面にかすかに擬凹線が残る。粗い砂粒を含む。26は黄橙色を呈した壺で、口径9.7cmを測り、口縁端部はやや内湾気味に仕上げる。外面タテハケ調整、内面ケズリ調整を施す。27～29は高杯杯部である。27は灰黄橙色を呈し、口径31.6cmを測る。口縁端部を平担に仕上げ、内外面ミガキ調整を施す。海綿骨片を含む。28は浅黄橙色を呈し、口径25.8cmを測る。杯底部から湾曲しながら立ち上がり、体中部で肥厚、外反する口縁部に至る。外面はミガキ調整を施すが内面は磨耗のため不明。二次加熱を受けている。29は黄橙色を呈し、口径26.4cmを測る。口縁端部は外側で面をもち、内外面ミガキ調整を施す。30は高杯もしくは器台の脚部で、脚部はゆるやかに開き、端部を平担に仕上げる。四ケ所に穿孔をおこない、外面ミガキ調整を施す。31は浅黄橙

色の鉢で口径16.1cmを測る。口縁部直立し、腰の張る印象を受ける。磨耗が激しく調整不明。焼土粒を含む。32は蓋で口径10.7cm、器高4.4cmを測り、体部は直接的に開く。磨耗のため調整不明。

4号大溝（第72図）

33～35は覆土上層、36～45は下層より出土した。33は甕で口径30cm前後を測る。口縁部内面および外面は煮沸によるヨゴレで暗褐色を呈する。細かい砂粒を多く含む。34は甕で口径17.4cmを測る。口縁部やや外傾し、内面の屈曲は明瞭である。口縁帯外面に8条の擬凹線、内面に指頭圧痕が認められる。35は甕の底部で胴部外面ハケの後、下端近くにタテ方向のケズリを加える。海綿骨片を含む。36は橙色を呈した小型の壺で口径11.0cmを測る。器壁は薄く、口縁部直立する。口縁部内外面にミガキ調整を施し、胎土中に赤色粒を含む。37は甕で口径12.0cmを測り、胎土中に赤色粒を含む。38は黄橙色を呈した壺で、有段口縁状に口縁部下端に稜がめぐる。胴部外面ハケ調整、内面ケズリ調整を施す。39は有段口縁の甕で、口径26.0cmを測る。口縁部外反し、口縁帯外面に9条の擬凹線を施す。胴部外面タテハケ調整の後、一部ヨコナデ調整を加える。40は甕で口径21.9cmを測る。器肉は厚く、口縁部は短く外傾しながら立ち上がる。口縁帯外面に5条の擬凹線を施し、内面に指頭圧痕が残る。胴部内面にハケ状の細かい単位のケズリ調整を施す。海綿骨片を含む。41は甕で口径15.4cmを測る。口縁端部を内屈気味に上方につまみあげる。赤色粒を含む。42は甕と思われ、口縁部大きく外側に開く。口径15.0cmを測る。43も甕と思われる。頸部と口縁部の境の屈曲は明瞭であり、口縁端部は丸く仕上げる。外綿に煤付着。44は浅黄橙色を呈した鉢である。口径11.4cmを測り、内外面ミガキ調整を施す。45はにぶい黄橙色を呈したカップ状の鉢で、口径8.3cmを測る。背が高い印象を受け、体部内湾する。内外面ミガキ調整を施す。

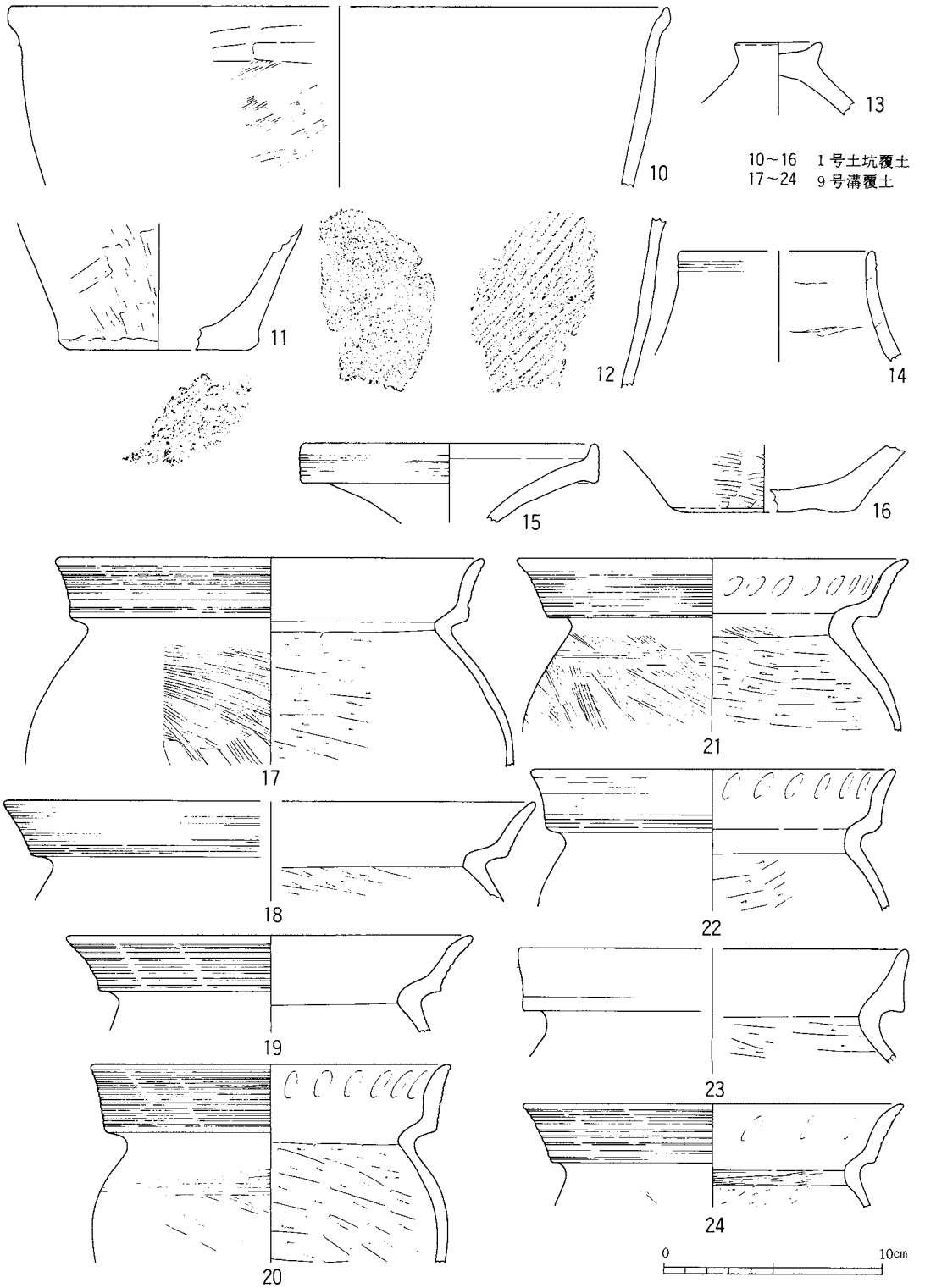
包含層出土遺物（第72図）

46は丹後系の器台である。外面ミガキ調整を施し、部分的に赤彩が残る。脚部は段をもち、段より上は沈線のみを加えるのに対して段より下はタテハケ調整の後、沈線を加える。色調は浅黄橙色である。47は甕で口径15.1cmを測り、口縁部は短く直立する。外面に煤が付着。48は甕底部である。外面タテハケ調整を施し、底部近くはタテ方向ナデを加える。海綿骨片、赤色粒を含む。

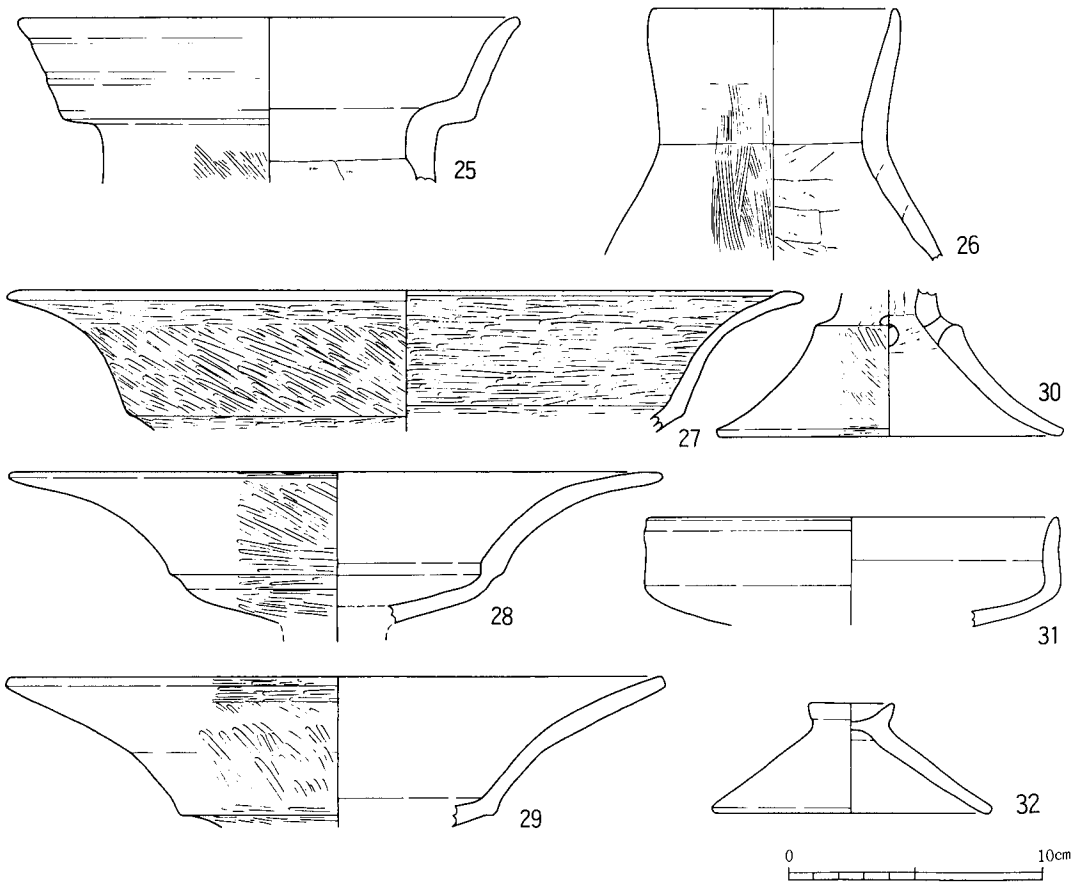
(2) G－2区

2号土坑（第73図）

49～54は覆土中より出土し、5・6号溝遺物も含むと考えられる。49･50は有段口縁の甕である。49は口縁部直立し、胴部は張り出した印象を受ける。口径16.4cmを測り、胴部外面にヨコハケ調整、内面にヨコ方向のケズリ調整を施す。胴部外面下半に煤付着。50は口径19.6cmを測り、口縁帯外面に10条の擬凹線を施す。胎土中に粗い砂粒を含む。51は浅黄橙色を呈した壺で口径22.4cmを測り、口縁部は外傾しながら直線的にのびる。内外面ミガキ調整を施す。52は甕で口径19.4cmを測る。口縁部直立し、端部をやや外反させる。赤色粒を含む。53は甕底部である。内面に煮沸の痕跡が残る。54は砂岩系の砥石である。かなり磨滅している。



第70図　東トレンチＧ－１区出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）



第71図　G－1区9号溝出土遺物実測図（S＝1/3）

3号土坑（第73図）

いずれも覆土中より出土した。55は甕底部で胴部は外側に大きく開く。内外面ハケ調整を施し、外面に煤付着。56はにぶい黄褐色を呈した甕で口径22.4cmを測る。口縁部外面に幅の狭い面をもち、2条の沈線を加える。内外面ハケ調整を施す。外面に煤が付着する。

3・4号溝（第73図）

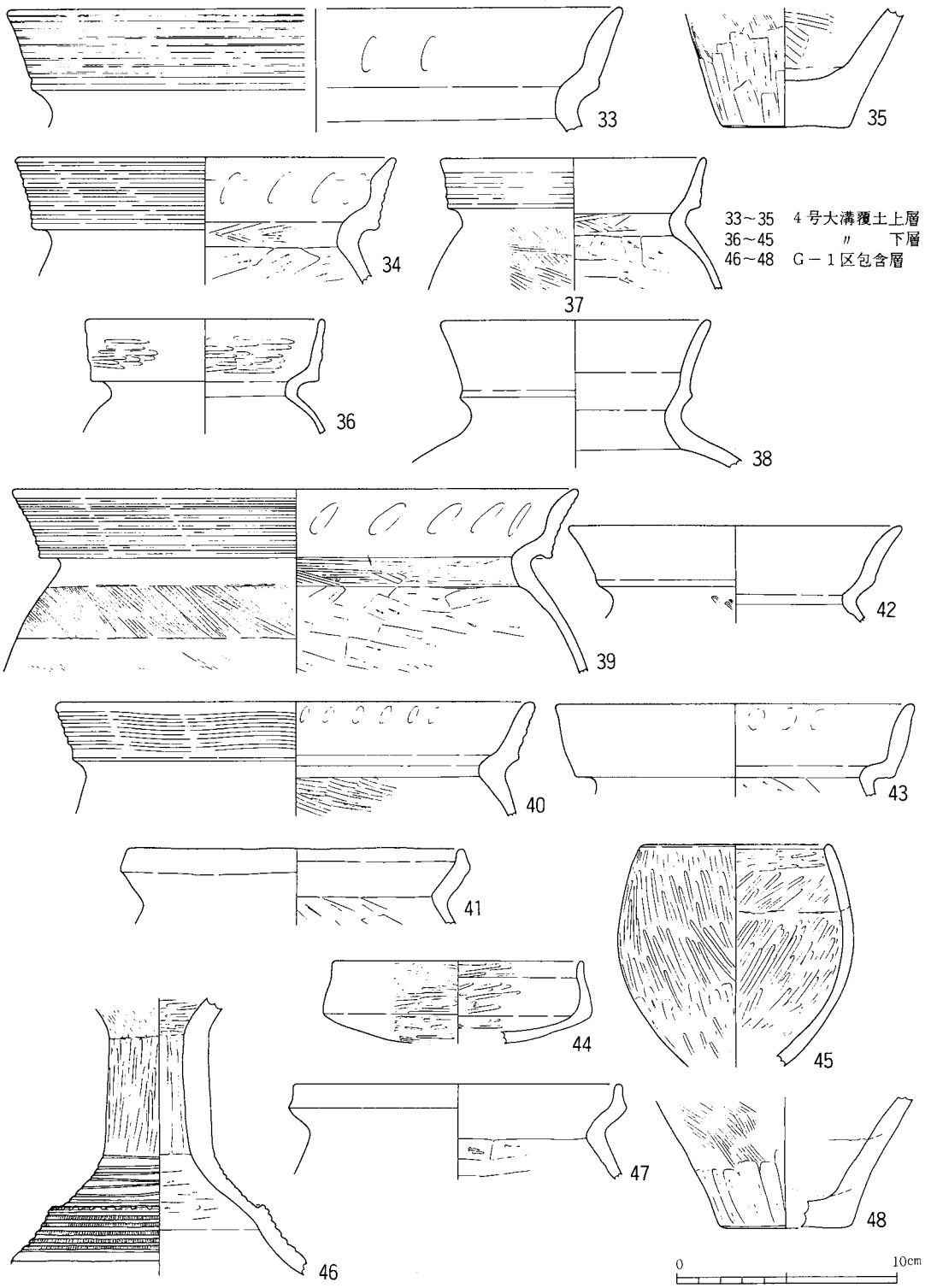
3・4号溝が交わる部分の覆土中より出土した。57は有段口縁の甕で口径16.6cmを測り、口縁部はゆるやかに屈曲する。磨耗が著しくはっきりしないが口縁帯外面に擬凹線がかすかに認められる。胎土中に赤色粒を多く含む。

4号溝（第73図）

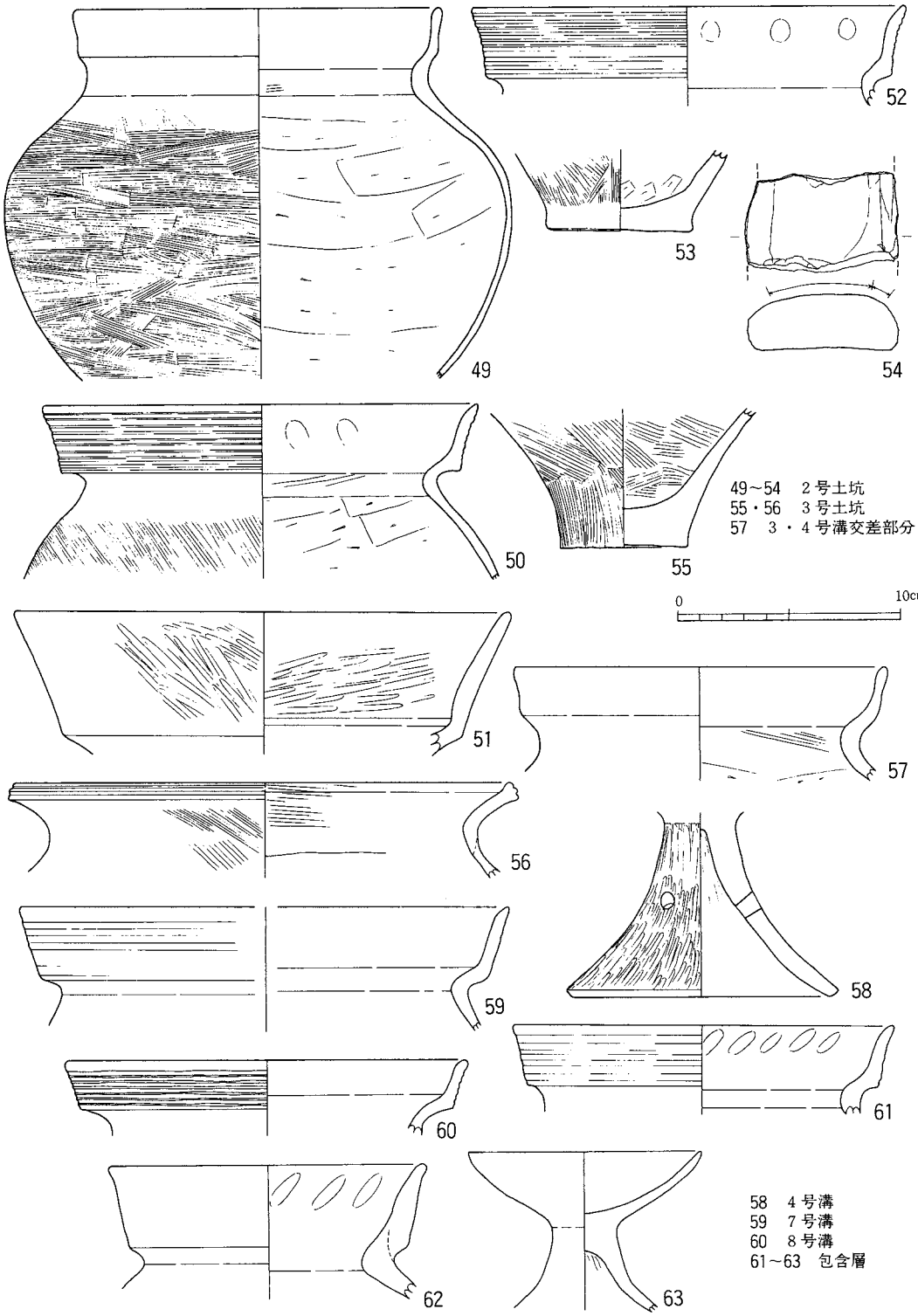
58は覆土中より出土した高杯である。裾部はなだらかに開き、端部を平坦に仕上げる。三ケ所に穿孔をおこない、外面にタテ方向のミガキ調整を施す。

7号溝（第73図）

59は覆土中より出土した薄手の甕である。口縁部外傾し、端部は内側で面を取る。胎土中に粗い砂粒を含む。



第72図　東トレンチG－1区出土遺物実測図（S＝1/3）



第73図　東トレンチG－2区出土遺物実測図（S＝1/3）

8号溝（第73図）

60は覆土中より出土した甕で口径18.0cmを測る。口縁部は短く外傾しながら立ち上がり、口縁帯外面に6条の擬凹線を施す。胎土中に赤色粒と粗い砂粒を含む。

包含層出土遺物（第73図）

61は口径17.0cmを測る甕である。口縁帯内面上方に指頭圧痕が残る。胎土中に粗い砂粒と海綿骨片を含む。外面に煤付着。62は浅黄橙色の壺で口径14.0cmを測る。口縁帯内面に指頭圧痕が残る。胎土中に赤色粒を多く含む。63は黄橙色を呈した高杯である。口径10.5cmを測り、体部内湾しながら、ゆるやかに立ち上がる。磨耗のため調整不明。

(3) G-3区

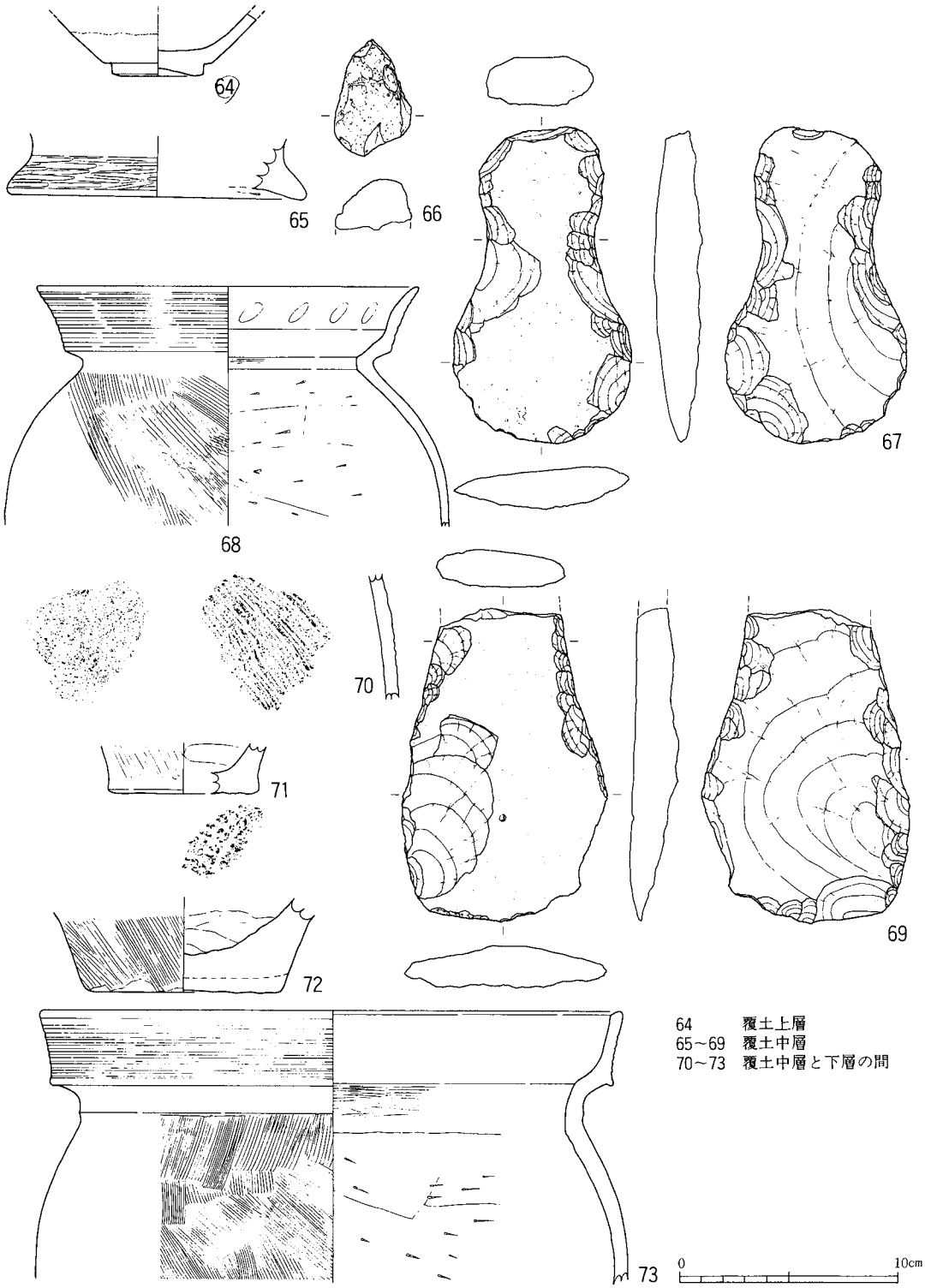
1号大溝（第74～77図）

64は覆土上層（第66図土層4）、65～69は覆土中層（同5～9）、70～110は覆土中層と下層の間（同10、一部11、12を含む）、111～128は覆土下層（同11、12）から出土した。そのうち、覆土中層と下層の間の遺物は取り上げ状況等から大部分が覆土下層に含まれる可能性が高い。

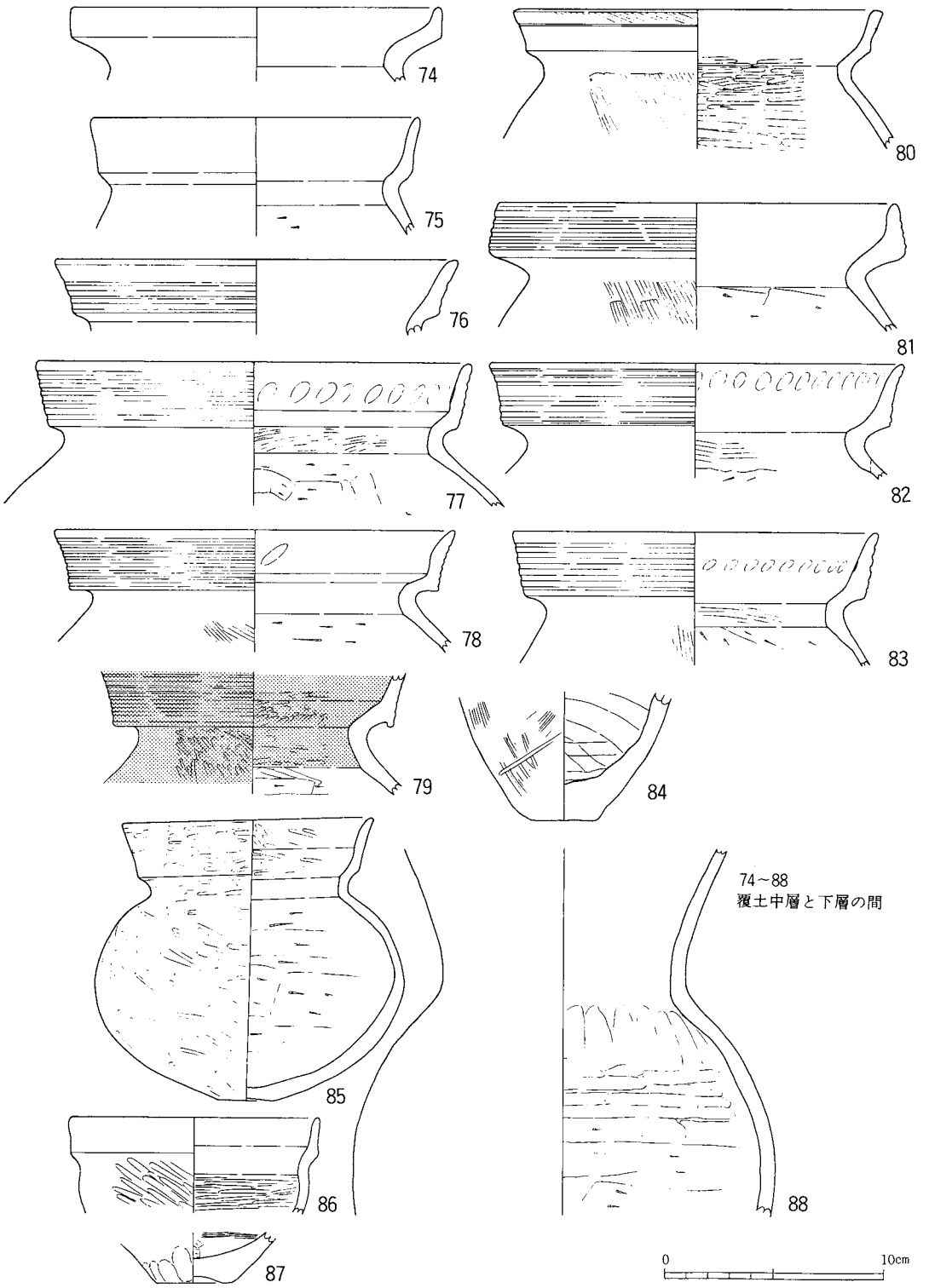
64は瀬戸焼天目茶碗で底径4.2cmを測る。黒色の釉がかけられ、15世紀代の所産と考えられる。素地は淡灰色で緻密。また上層からは図化しなかったが加賀焼甕胴部片が出土した。

65は台付鉢の台部と思われる。台部外面にミガキ調整を施す。粗い砂粒を含む。66は軽石である。淡灰色を呈し、器面に磨滅がみられることから砥石に使用したと考えられる。残存重量11.3gを測る。67は撥形の打製石斧である。石材は火山礫凝灰岩で長さ14.7cm、幅8.3cm、厚さ2.3cm、重量318.9gを測る。68は甕で口径17.5cmを測り、口縁部大きく外側に開く。口縁帯外面に8条の擬凹線を施す。外面に煤付着。69はにぶい緑灰色を呈する打製石斧。石質は玢岩で幅9.5cm、厚さ2.0cm、残存重量359gを測る。撥形を呈し、刃部に打撃痕が残る。

70はにぶい黄褐色を呈した甕胴部である。柴山出村式と思われ、外面に粗い条痕文、内面にナデ調整を施す。海綿骨片と粗い砂粒を多く含む。71・72は甕底部である。71は外面に条痕文状の粗いハケ調整を施す。底部外面に編物の上に置いた痕跡が残る。胎土は70と類似する。72は底径9.0cmを測り、胴部外面に粗いハケ調整を施す。砂粒を多く含む。73は有段口縁の甕で口径26.8cmを測る。口縁部は直立し、下端を稜状に鋭くつくる。また口縁端部はやや内傾した平坦面をもつ。胎土は粘質な印象を受ける。外面に煤付着。74～78は有段口縁の甕である。74は口径17.0cmを測る。口縁部大きく外側に開き、端部が直立するため、受け口状を呈する。2mm前後の粗い砂粒を含む。75は口径15.0cmを測り、口縁部やや外傾、口縁帯下端は丸味をもつ。外面に煤付着。76は口径18.6cmを測り、内面は頸部から口縁部にゆるやかに移る。外面に煤が付着する。77は口径20.0cmを測り、口縁部はやや外傾し、端部を丸く仕上げる。口縁帯外面に6条の擬凹線、内面に指頭圧痕が残る。78は口径17.8cmを測る。口縁端部やや外反し、口縁帯外面に8条の擬凹線を施す。79は壺と思われ、内外面赤彩しミガキ調整を施す。80～83は有段口縁の甕である。80は口径16.5cmを測り、口縁部外傾し、端部を平坦に仕上げる。また口縁帯外面上部にハケ調整を施し、下部に1条の沈線を加える。胴部内面は一見ミガキ調整に思える細かい単位のヨコ方向のケズリ調整



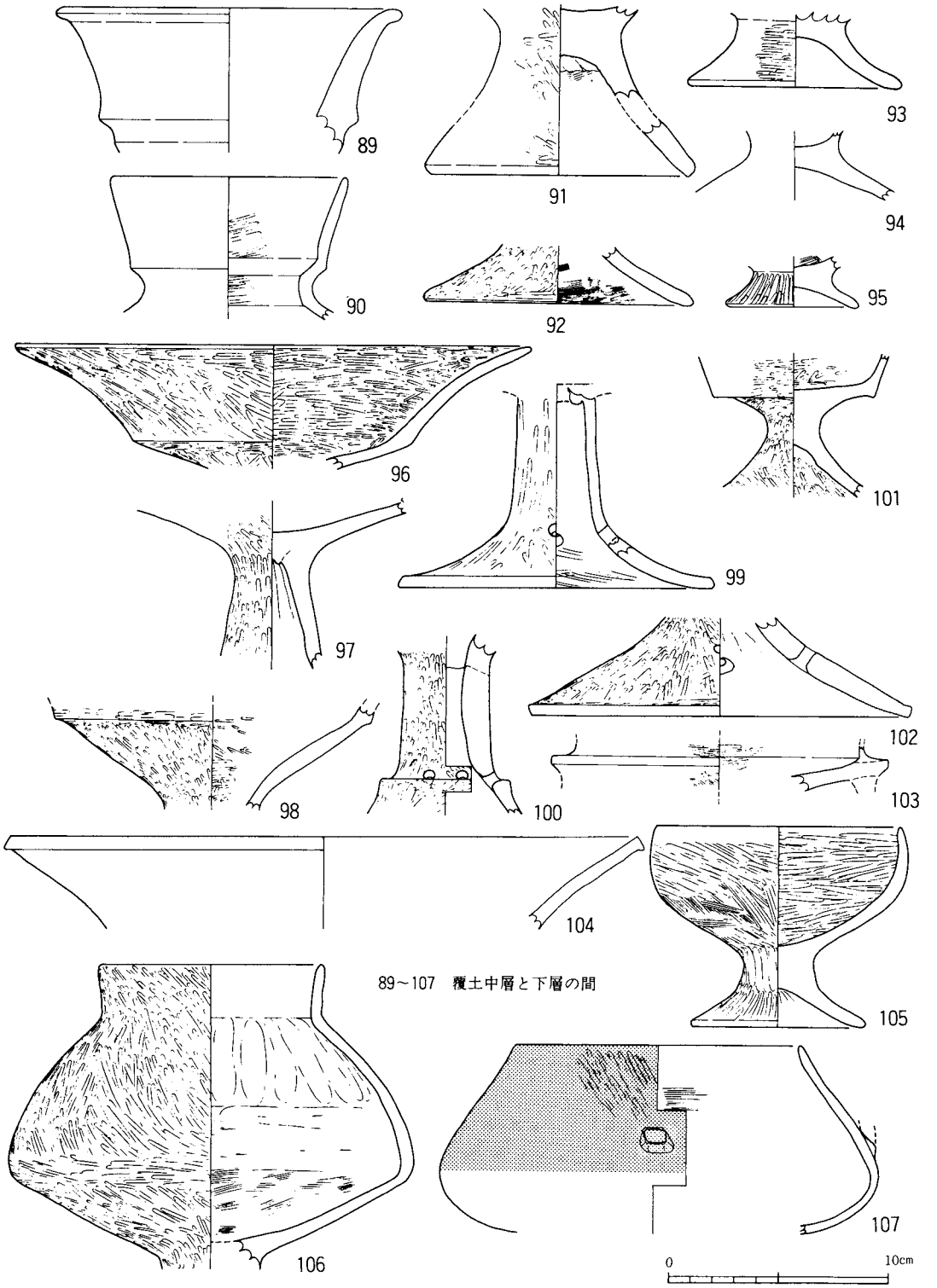
第74図　東トレンチＧ－３区１号大溝出土遺物実測図(1)（Ｓ＝1/3）



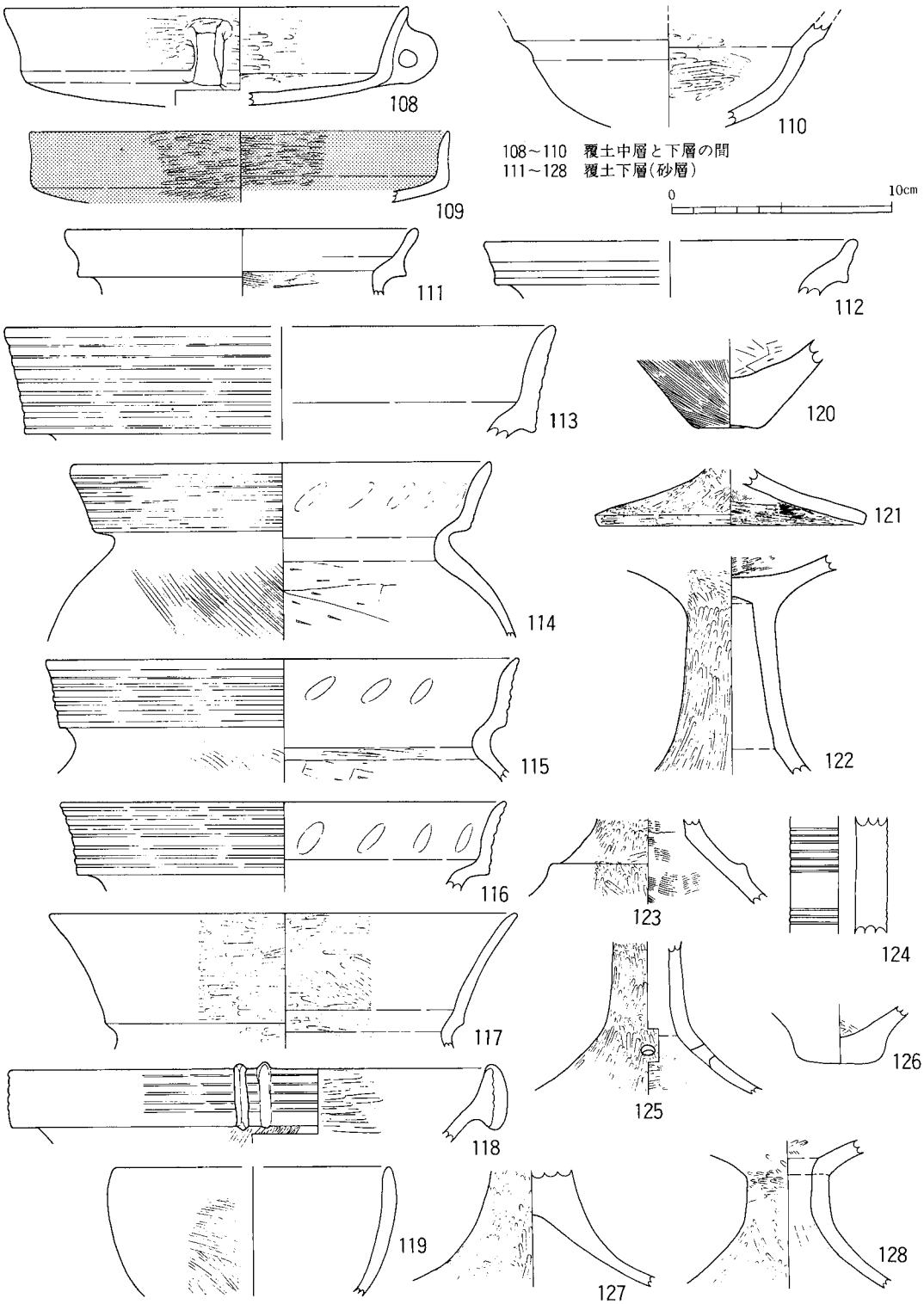
第75図　東トレンチＧ－３区１号大溝出土遺物実測図(2)（Ｓ＝1/3）

を施す。胎土中に粗い砂粒、海綿骨片を含む。81は口径18.2cmを測る。器肉は厚く、頸部から外側に大きく屈曲、口縁部は内傾気味に短くたちあがる。口縁帯外面に5条の擬凹線を施す。外面に煤付着。84は底部で、器肉は厚く、胴部はそれ程張らない印象を受ける。細かい砂粒を含む。85は壺である。にぶい黄橙色を呈し、口径11.4cm、器高13.3cm、胴部最大径14.4cmを測る。口縁部は外傾しながらのびる。外面および口縁部内面にミガキ調整を施す。砂粒を多く含む。86は口径11.4cmを測る鉢である。磨耗のためはっきりしないが内外面ミガキ調整を施すと思われる。胎土中に赤色粒を含む。87は甕底部。外面に煤付着。88は壺である。灰黄色を呈し、頸部はゆるやかに屈曲する。胴部外面にハケ方向のナデ調整、内面にヨコ方向のケズリ調整をおこない、上半に指ナデを加える。粗い砂粒を含む。89、90は壺である。89はにぶい橙色を呈し口径15.2cmを測る。口縁部下端稜状を呈し、口縁端部を小さく外反させる。胎土中に海綿骨片を含む。90は灰褐色を呈し、口径10.8cmを測る。内面にミガキ調整が残り、胎土中に海綿骨片を含む。91は壺の台部と思われる。台部は長く外側に開き、端部を平坦に面取りする。外面にミガキ調整を施す。92～95は鉢ないし壺の台部である。92は外面ミガキ調整、内面ヨコ方向ハケ調整をおこなう。微砂粒を含む。93は外面にミガキ調整をおこない、赤橙色の化粧土を塗付する。粗い砂粒を少量含む。94は明橙色を呈し、粗い砂粒を含む。95は外面はにぶい橙色を呈する。外面にミガキ調整、内面にナデ調整を施す。胎土中に海綿骨片を含む。96、97は高杯である。96は口径24.0cmを測り、体部ゆるやかに外反する。内外面ともミガキ調整を施す。全面に二次加熱による煤が付着する。海綿骨片と少量の砂粒を含む。97は淡黄橙色を呈する。外面にミガキ調整を施すが杯部内面は磨耗のため不明。胎土は砂っぽく、海綿骨片を含む。98は器台と思われる。内外面ミガキ調整を施し、胎土中に海綿骨片を含む。99～102は高杯である。99の裾部は大きく開き、四方に穿孔をおこなう。100は2孔一対の穿孔をおこない、外面にミガキ調整を施す。101は灰褐色を呈する。杯部コップ状を呈し、脚部はゆるやかに開く。全面にミガキ調整をおこなう。102は脚端部を平坦に面取りし、四方に穿孔をおこなう。外面はミガキ調整、内面は丁寧なナデ調整を施す。103は装飾器台と思われる。にぶい黄橙色を呈する。104は高杯または器台口縁部と思われる。口径29.0cmを測り、口縁端部の面取りをきちんとおこなう。磨耗のため調整不明。105はにぶい黄橙色を呈した台付鉢である。口径11.2cm、器高9.3cmを測る。体部内湾し、台部はゆるやかに開く。内外面ミガキ調整を基本とするが、体部外面下半にハケ調整、脚部との接合部分は指ナデ痕が残る。106は台付壺で口径10.2cm、胴部最大径18.8cmを測る。胴部中程で屈曲、口縁部は直立する。外面はミガキ調整、胴部内面は上からタテ方向指ナデ調整、ヨコ方向ケズリ調整、ハケ調整が認められる。107は把手付の鉢である。壁肉は薄く、口径13.0cmを測る。把手は基部のみ残存し、数不明。体部外面上半を赤彩し、胎土中に海綿骨片を含む。108～110は鉢である。108は口径18.5cmを測り、体部外反する。把手の数は不明。内外面ともヨコ方向のミガキ調整を施し、内面に化粧土を塗付する。109は赤彩の鉢である。口径19.2cmを測る。110の器肉は厚い印象を受ける。内面にミガキ調整を施す。

111～116は有段口縁の甕である。111・112の口縁部は下端が稜状に張り出し、口縁端部を丸く仕上げる。外面に煤付着。113の口縁部は若干外傾する。口縁帯外面に8条の擬凹線を施し、胎土



第76図　東トレンチＧ－３区１号大溝出土遺物実測図(3)（Ｓ＝1/3）



第77図　東トレンチＧ－３区１号大溝出土遺物実測図(4)（Ｓ＝1/3）

中に砂粒を多く含む。114は口径19.4cmを測る。口縁部外傾し、口縁帯外面に８条の擬凹線を施す。外面に煤付着。115は口径21.8cmを測る。口縁端部やや外反し、口縁帯外面に７条の擬凹線を施す。116は口径20.4cmを測る。にぶい橙色を呈し、胎土中に粗い砂粒を含む。117は鉢と考えられる。口径21.4cmを測り、口縁部は外側に開きながら長くのびる。内外面ともに細かい単位のミガキ調整をおこなう。118は口径21.0cmを測る東海系の壺である。口縁帯外面に５条の擬凹線を施した後、２本１対（もしくは３本一対）の棒状浮文を貼付するが、何対かは不明である。内面にミガキ調整を施す。また全面に橙色の化粧土を塗付する。古墳時代初頭に位置づけられる。119は鉢で口径約12cmを測る。口縁部内湾し、外面ハケ調整を施す。120は甕底部である。胎土中に粗い砂粒を含む。121は壺または鉢の台部である。裾端部を平坦に面取りし、外面にミガキ調整をおこなう。122は橙色を呈した高杯である。外面にミガキ調整を施す。123～125は高杯の脚部と思われる。123は外面にミガキ調整、内面に細かいハケ調整をおこなう。124は柱状を呈し、外面に沈線を施す。色調はにぶい橙色で、胎土中に粗い砂粒を含む。125は穿孔をおこなうが数不明。裾部はゆるやかに開き、外面にミガキ調整を施す。126は甕底部と思われる。胎土中に焼土塊を含む。127は高杯脚部である。裾部は大きく外側に開き、外面にミガキ調整をおこなう。128は器台である。外面にミガキ調整を施す。胎土中に赤色粒を含む。

包含層出土遺物（第78図）

129は甕で口径23.0cmを測る。口縁部やや外反し、胎土中に赤色粒を含む。

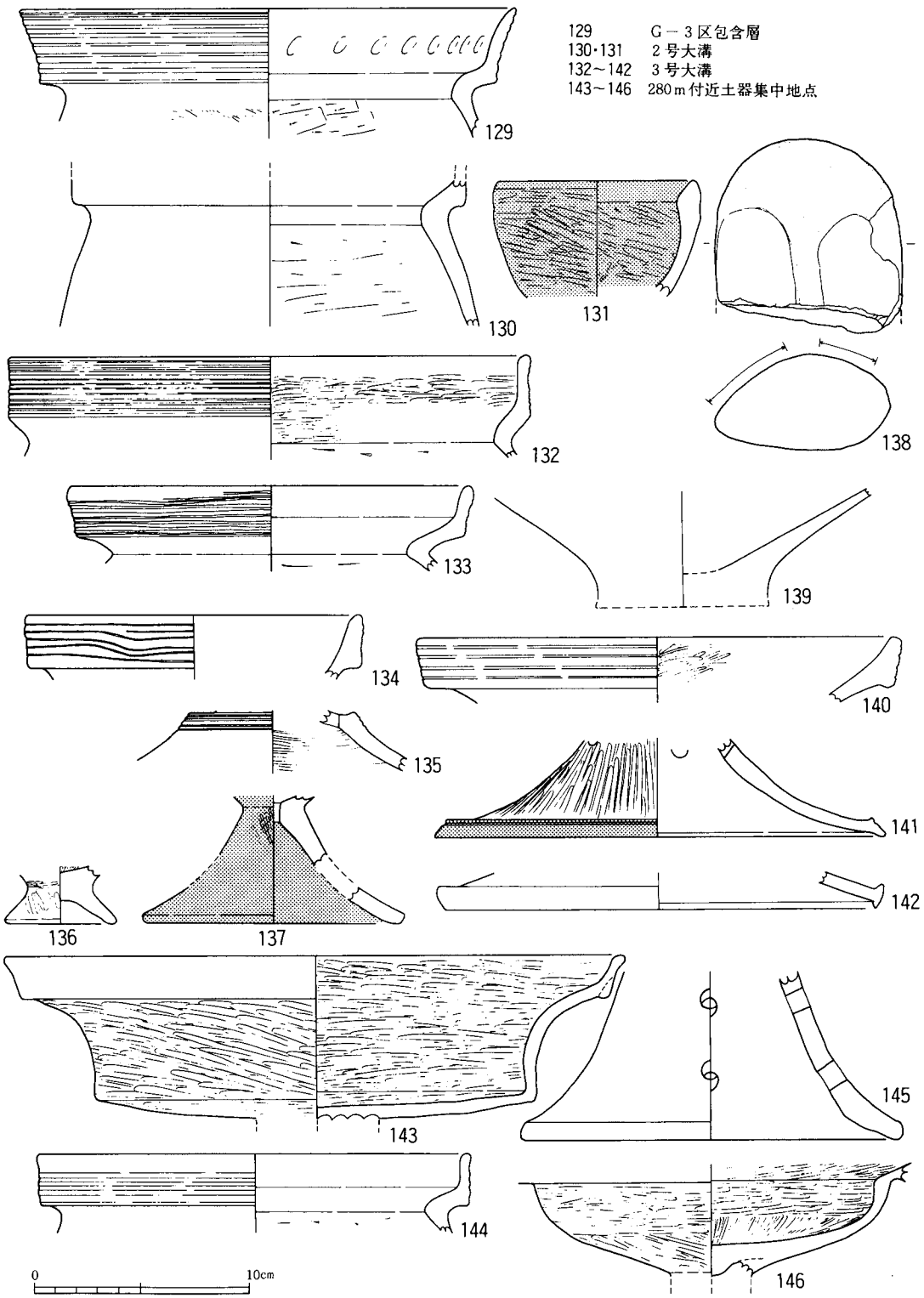
(4)　G－４区

２号大溝（第78図）

底面近くの覆土を中心に弥生時代後期の遺物が少量出土した。130は甕である。器肉は厚く、胴部はそれ程張らない。胎土中に赤色粒を含む。131は赤彩の鉢で口径9.0cmを測る。口縁部に至り器肉は厚味を増し、端部は内傾して面を取る。ミガキの単位は内面がやや粗い印象を受ける。

３号大溝（第78図）

覆土からは底面近くを中心にして、弥生時代後期の遺物が少量出土した。132～134は有段口縁の甕である。132はにぶい橙色を呈し、口径24.0cmを測る。口縁部やや内傾気味にたちあがり、内面にヨコ方向のミガキ調整を施す。133は口径18.6cmを測る。頸部から大きく外側に屈曲し、短い口縁部はやや外傾し、端部を丸く仕上げる。胎土中に細かい砂粒を含む。134は口径15.4cmを測る。壁肉は厚く、内面は頸部から口縁部へなだらかに移る。外面に煤が付着する。135は高杯脚部である。外面に４条の沈線を加える。穿孔をおこなうが数不明。胎土中に赤色粒を含む。136は鉢の台部と思われる。灰褐色を呈し、底部内面と台部外面にミガキ調整を施す。137は器台脚部である。内外面とも赤彩を施す。138は砂岩系の砥石と思われる。灰色を呈し、残存重量503.5ｇを測る。139は黄橙色を呈した壺で台部の有無は不明である。体部大きく外側に開く。胎土中に細砂粒、海綿骨片を含む。140は器台と思われる。浅黄橙色を呈し、口径約22cmを測る。口縁帯外面に彫りの深い４条の擬凹線を、また内面にミガキ調整を施す。粗い砂粒を若干含む。141、142は器台また高杯の脚部と思われる。141は脚端部を平坦に面取りし、１条の沈線を加える。外面ミガキ調



第78図　東トレンチG－3～5区出土遺物実測図（S＝1/3）

整を施し、脚端部外面のみ赤彩をおこなう。また５ケ所に穿孔をおこない、胎土中に細かい砂粒を含む。142は脚端部を上下にひきのばす。にぶい黄橙色を呈する。

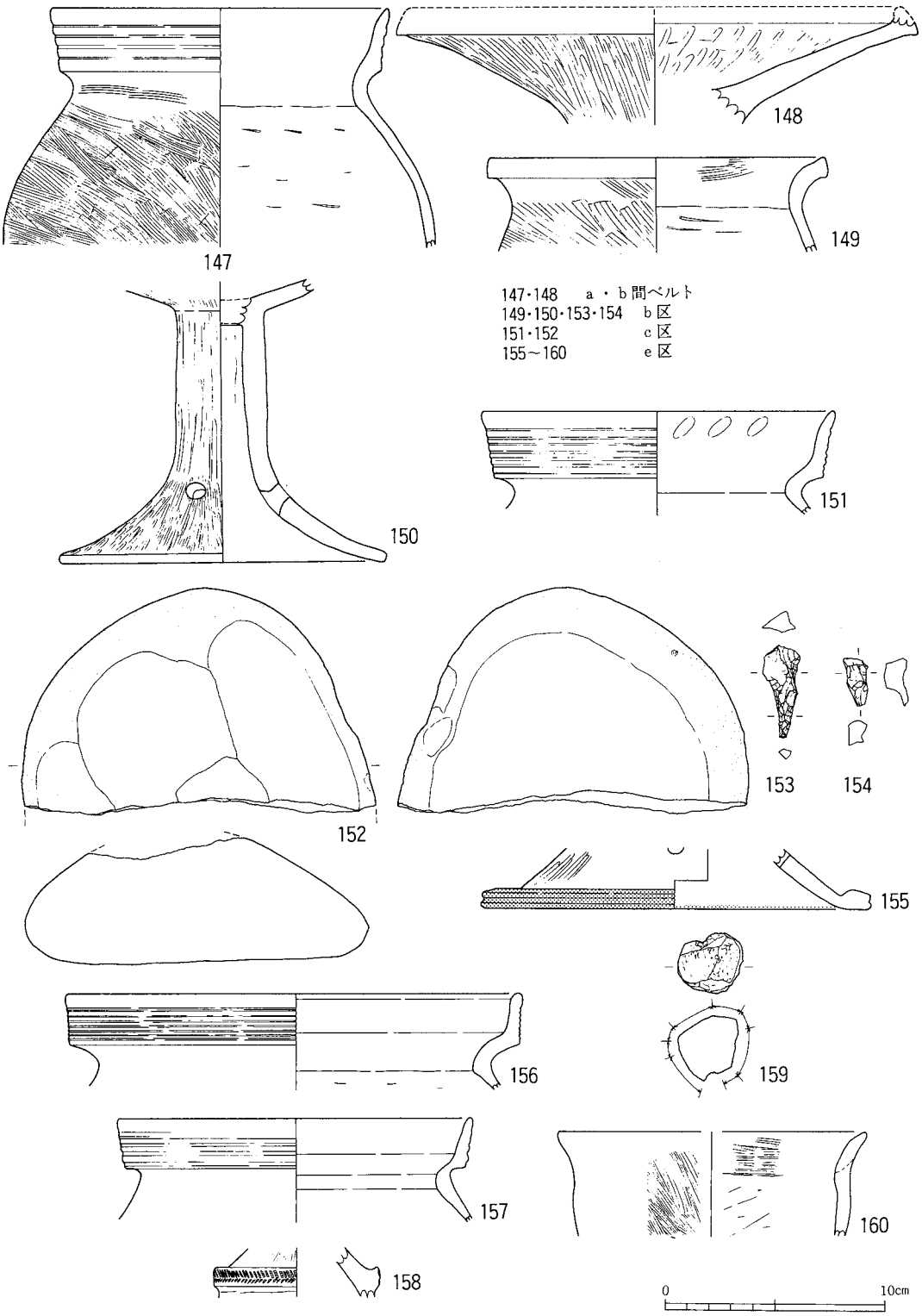
280m土器集中地点（第78図）

地山面につぶれたような状況で遺物がまとまって出土した。143は深身の高杯で口径28.8cmを測る。杯底部と体部の境は明瞭に屈曲し、体部は外反し、幅の狭い口縁帯をもつ。口縁帯外面を除き、ヨコ方向のミガキ調整を施す。144は有段口縁の甕で口径20.0cmを測る。口縁部は直立し、端部を丸く仕上げる。外面に煤付着。145は器台である。浅黄橙色を呈し、脚端部の面取りはあまい。４カ所に上下２段以上の穿孔をおこなう。粗い砂粒を含む。146は黄橙色を呈した高杯である。体部は湾曲しながらたちあがる。内外面ともにミガキ調整を施す。粗い砂粒を少量含む。

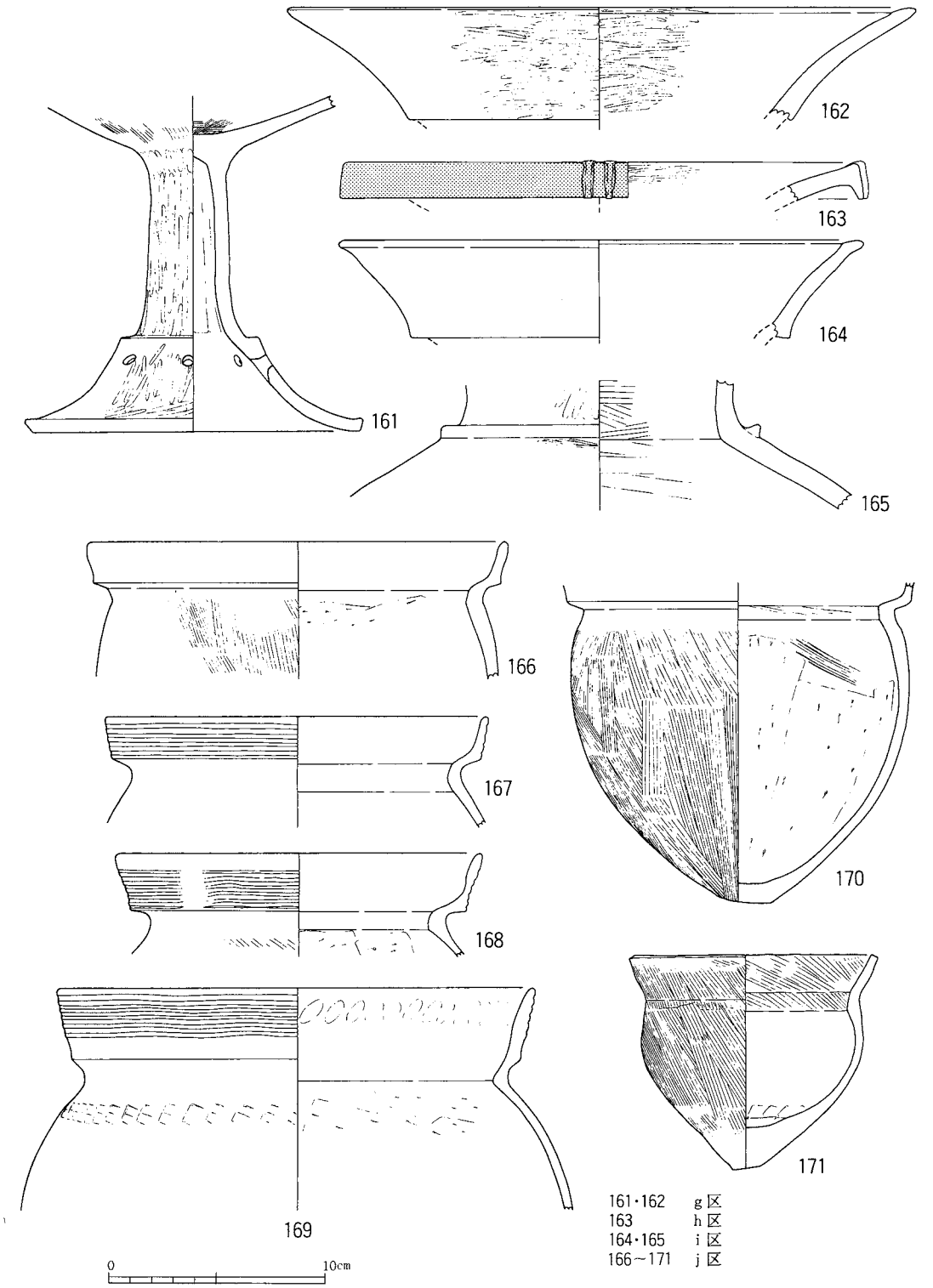
(5)　G－４、５、６区

15号溝（第79～84図）

いずれも覆土中（埋土）より出土し、底面につく遺物はない。147は甕で口径15.4cmを測る。胴部はあまり張らず、ナデ肩である。外面に煤が付着し、胎土中に赤色粒を含む。148は高杯杯部として図化したが台付壺胴部下半の可能性もある。内外面ともにミガキ調整を施し、粗い砂粒を含む。149は甕で口径15.4cmを測る。器肉の厚い口縁部は短く外反し、幅の狭い口縁帯を有する。外面に煤が付着し、胎土中に細かい砂粒を含む。150は浅黄橙色を呈した高杯である。脚部は背が高く、裾部はなだらかに開く。３ケ所に穿孔をおこない、胎土中に赤色粒を含む。151は甕である。淡黄灰色を呈し、口径16.0cmを測る。粗い砂粒を多く含む。152は両面に磨滅が認められることから砥石に使用したと考えられる。石質は泥岩であり、残存重量1245.4ｇを測る。153は輝石安山岩の石錐である。先端部を一部欠き、断面方形に面取りをおこなう。残存する長さ4.3cm、重量4.5ｇを測る。154は緑色凝灰岩で碧玉製作時の剝片と思われる。残存重量2.6ｇを測る。155は高杯脚部と思われる。脚端部を肥厚させ、端部外面に１条の沈線がめぐる。穿孔数不明。また脚端部外面に赤彩がおこなう。156、157は有段口縁の甕である。159は軽石で全面が磨滅し、砥ぎに使用されたと考えられる。重さ7.2ｇを測る。160は灰褐色を呈した甕である。口縁部はゆるやかに外傾する。外面および口縁部内面に細かいハケ調整、胴部内面にケズリ調整を施す。粗い砂粒を含む。161、162は高杯である。161は浅黄橙色を呈し、外面の一部に茶橙色の化粧土を塗付する。間隔が一定でない２孔一対の穿孔を３ケ所におこなう。外面にタテ方向のミガキ調整を施す。162は浅黄橙色を呈し、口径29.0cmを測る。内外面ともにミガキ調整を施し、胎土中に細かい砂粒を含む。163は器台と考えられ口径23.4cmを測る。口縁端部を下方に引きだし、口縁帯をつくる。また、その口縁帯外面に２本一対の棒状浮文を貼付するが、何対貼付するかは不明である。口縁帯外面に赤彩を施す。164は高杯の口縁部と思われる。口縁端部をヨコ方向に引きだす。磨耗のため調整不明。165は浅黄橙色を呈した壺である。外面にミガキ調整を施した後、突帯をめぐらす。166～171は有段口縁の甕である。166は口径19.2cmを測り、口縁帯下端の面取りをしっかりおこなう。外面に煤が付着し、胎土中に粗い砂粒を含む。167は口径17.6cmを測り、口縁部やや外傾する。外面に煤が、また口縁部内面に煮沸によるヨゴレが付着する。168は口径16.6cmを測り、口縁部やや肥

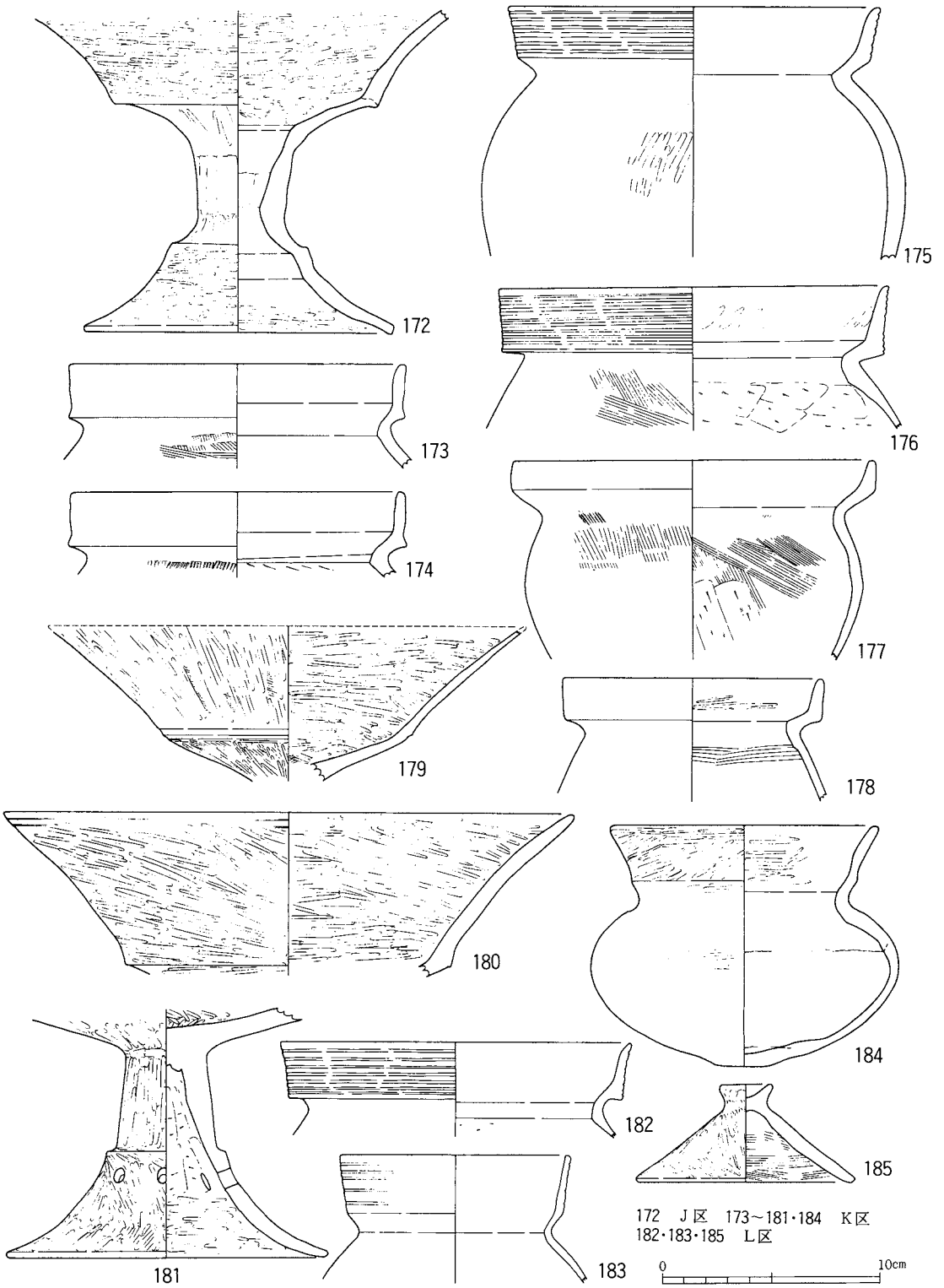


第79図　東トレンチＧ－４区15号溝出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

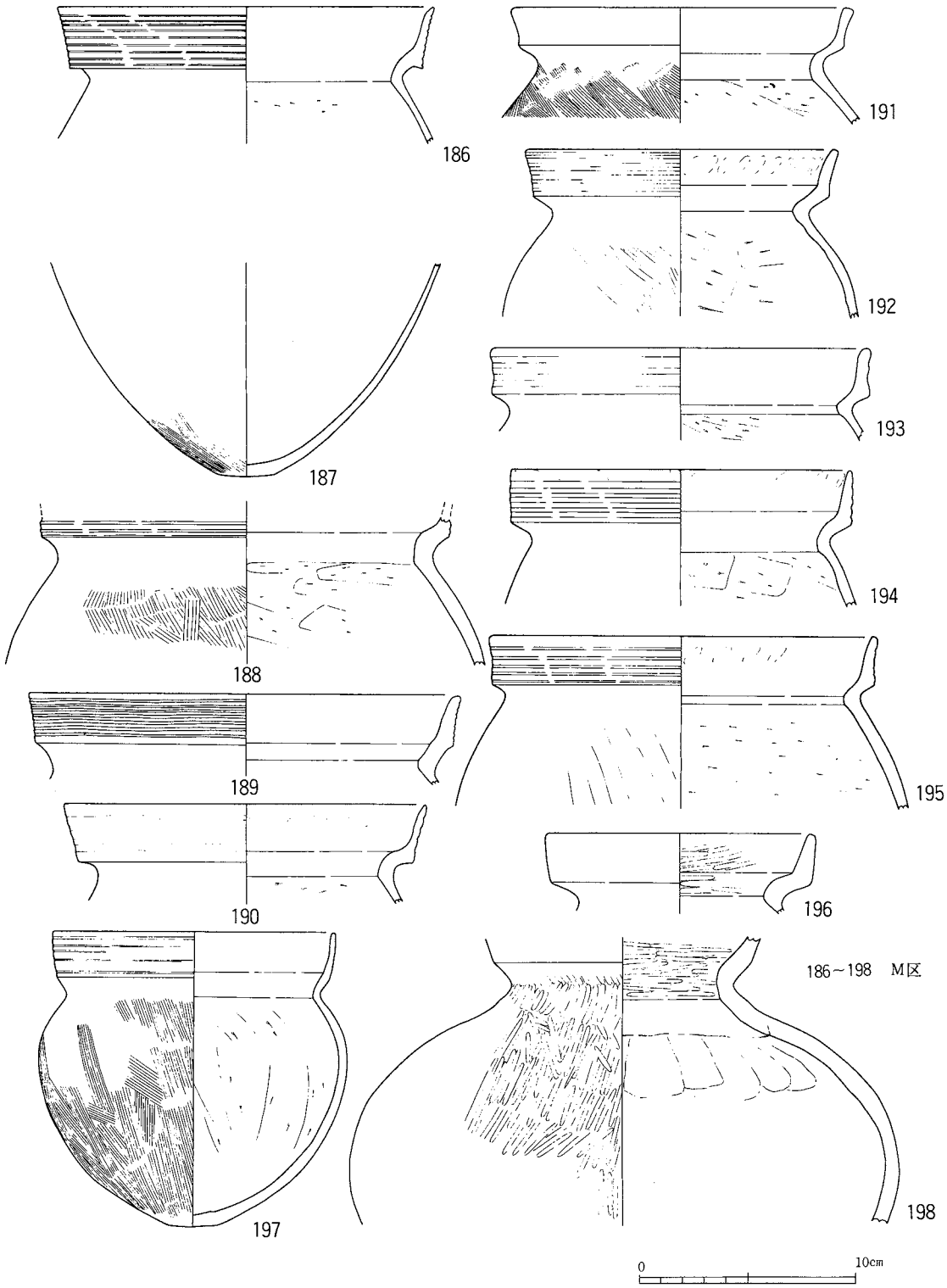


第80図　東トレンチG－4・5区15号溝出土遺物実測図（S＝1/3）

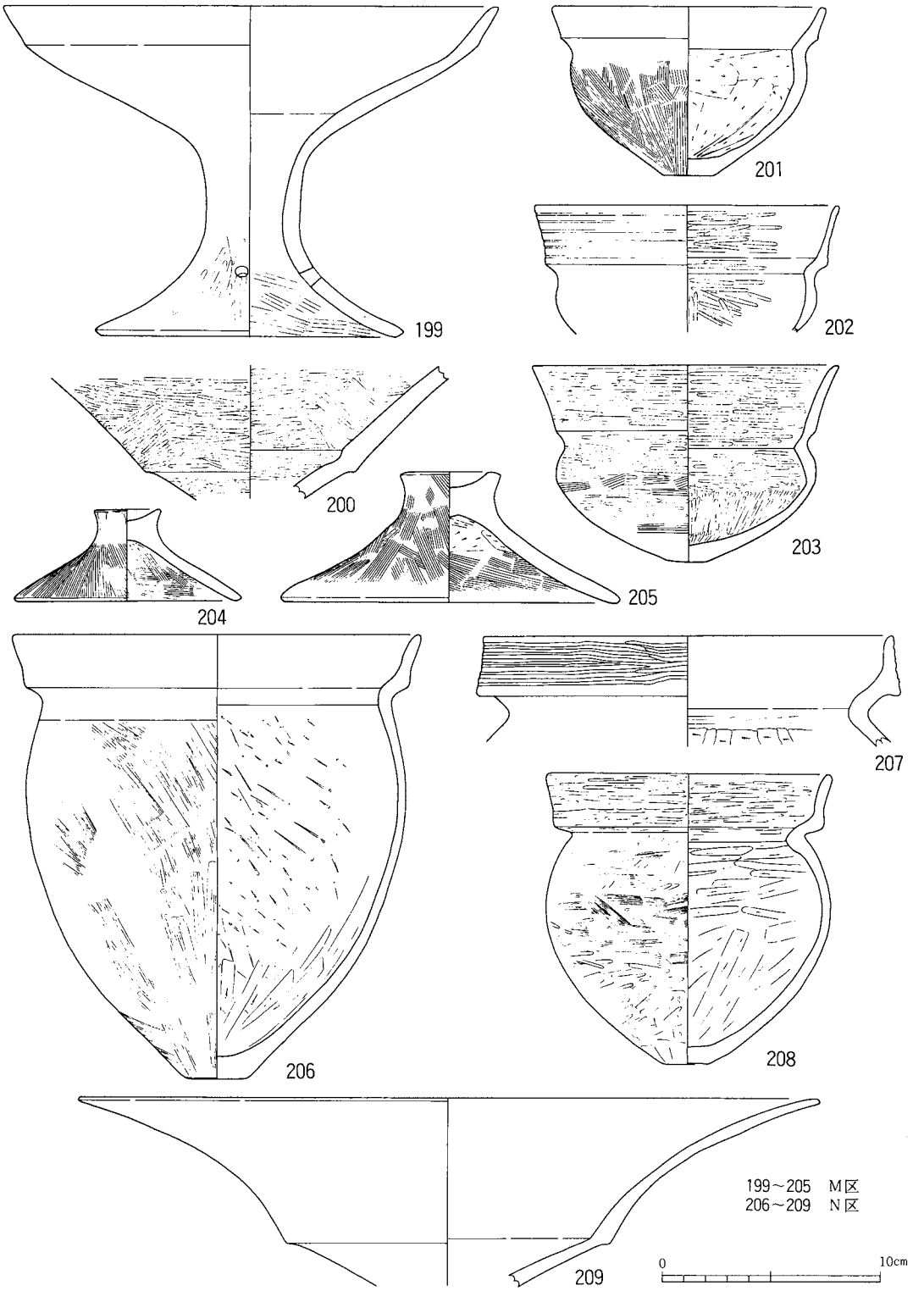
厚する。169は口径20.4cmを測る。頸部の屈曲はそれ程強くなく、有段口縁もそれ程目立たない。口縁帯内面に指頭圧痕が明瞭に残る。また胴部外面に刺突文を施す。170は外面にタテハケ調整、内面にケズリ調整を施す。外面胴部下半に煤が付着し、胎土中に粗い砂粒を含む。171は口径11.8cm、器高10.0cmを測り、底部壁肉が厚いため、腰高な印象を受ける。口縁部は外傾し、端部を平坦に仕上げる。底部外面に煤が付着し、胎土中に赤色粒を含む。172は器台である。にぶい浅黄橙色を呈し、ミガキ調整を施す。173～178は有段口縁の甕である。173、174は口径15.5cm前後を測り口縁部は直立、下端を稜状に鋭く仕上げる。外面に煤付着。175は口径17.0cmを測る。胴部の壁肉は厚く、口縁帯外面に彫りの浅い6条の擬凹線を施す。また胴部外面にミガキのような調整痕が残る。176は口縁部直立し、口縁部器肉は次第に薄くなる。外面に煤が付着し、胎土中に焼土塊を含む。177は頸部から大きく外側に屈曲し、口縁部は直立する。胴部内面上半はハケ調整、下半はケズリ調整が残る。外面に煤付着。178は口径11.8cmを測る。口縁部内面にかすかにミガキ調整痕が残る。外面に煤が付着し、胎土中に赤色粒を含む。179～181は高杯である。179は薄手で口径22cm前後を測る。杯底部と体部の境は小さく屈曲、口縁部は長くのびる。胎土中に海綿骨片を含む。180は浅黄橙色を呈し、口径26.6cmを測る。内外面ミガキ調整を施し、口縁端部外側に細い擬凹線を2条程度加えるようだ。181は脚部中位に2孔一対の穿孔を3ケ所におこなう。ミガキ調整を施し、胎土中に赤色粒を含む。182は甕で口径16.4cmを測る。灰白色を呈し、胎土中に粗い砂粒を含む。183は小型の甕で、197と類似した形態をとると思われる。赤橙色を呈し、壁肉は薄い。また口縁帯は広く、胴部はナデ肩の印象を受ける。184は浅黄橙色を呈した壺で口径11.8cm、器高11.4cm、胴部最大径14.4cmを測る。口縁部はゆるやかに外反し、外面および口縁部内面にミガキ調整を施す。砂粒を少量含む。185は灰黄色を呈した蓋で外面にミガキ調整、内面にハケ調整を施す。背の高い印象を受ける。186～195は有段口縁の甕である。186と187は接合する可能性が高い。口径17.6cmを測り、口縁帯外面に7条の擬凹線を施す。胎土中に赤色粒と粗い砂粒を含む。188は器肉が厚い。189の口縁部内面はゆるやかに屈曲する。外面に煤が付着し、胎土中に粗い砂粒を含む。190は口径16.8cmを測る。器肉の薄い口縁帯外面に彫り幅の広い4条の擬凹線を施す。粗い砂粒を多く含む。191は口径15.4cmを測る。口縁帯下端はやや膨らみをもち、口縁端部を平坦に仕上げる。浅黄橙色を呈し、粗い砂粒を含む。192は口径14.3cmを測り、口縁端部を丸くつくる。内面に煮沸によるヨゴレが残る。193は口径17.6cmを測る。口縁部は直立し、端部を丸く仕上げる。外面に煤が付着し、胎土中に粗い砂粒を含む。195は口径17.6cmを測り、口縁部やや外反、口縁帯外面に彫りの浅い5条の擬凹線を施す。外面に煤が付着する。196は壺である。淡黄橙色を呈し、口径12.0cmを測る。内面に粗いミガキ調整を施す。外面に煤が付着する。197は口径13.0cm、器高13.9cmを測る球胴形の甕である。壁肉は薄く、有段口縁状を呈する。183と形態が類似する。外面に煤が付着し、胎土中に粗い砂粒を含む。198は壺である。浅黄橙色を呈し、外面および口縁部内面にミガキ調整を施す。胎土中に赤色粒を含む。199は淡黄橙色を呈した器台で口径23.2cm、器高14.4cmを測る。脚部からなだらかに立ち上がり、口縁部で屈曲する。脚部4ケ所に穿孔をおこなう。全体に磨耗が著しく、調整のわかる脚部では外面ミガキ、内面ハケを施す。胎土中に赤色粒を含む。200は高杯と思われる。器肉は厚く、内外面ミガキ調整を施す。201は小型の甕で口径



第81図　東トレンチG－5区15号溝出土遺物実測図(1)（S＝1/3）



第82図　東トレンチＧ－５区15号溝出土遺物実測図(2)（Ｓ＝1/3）



第83図　東トレンチＧ－５区15号溝出土遺物実測図(3)（Ｓ＝1/3）

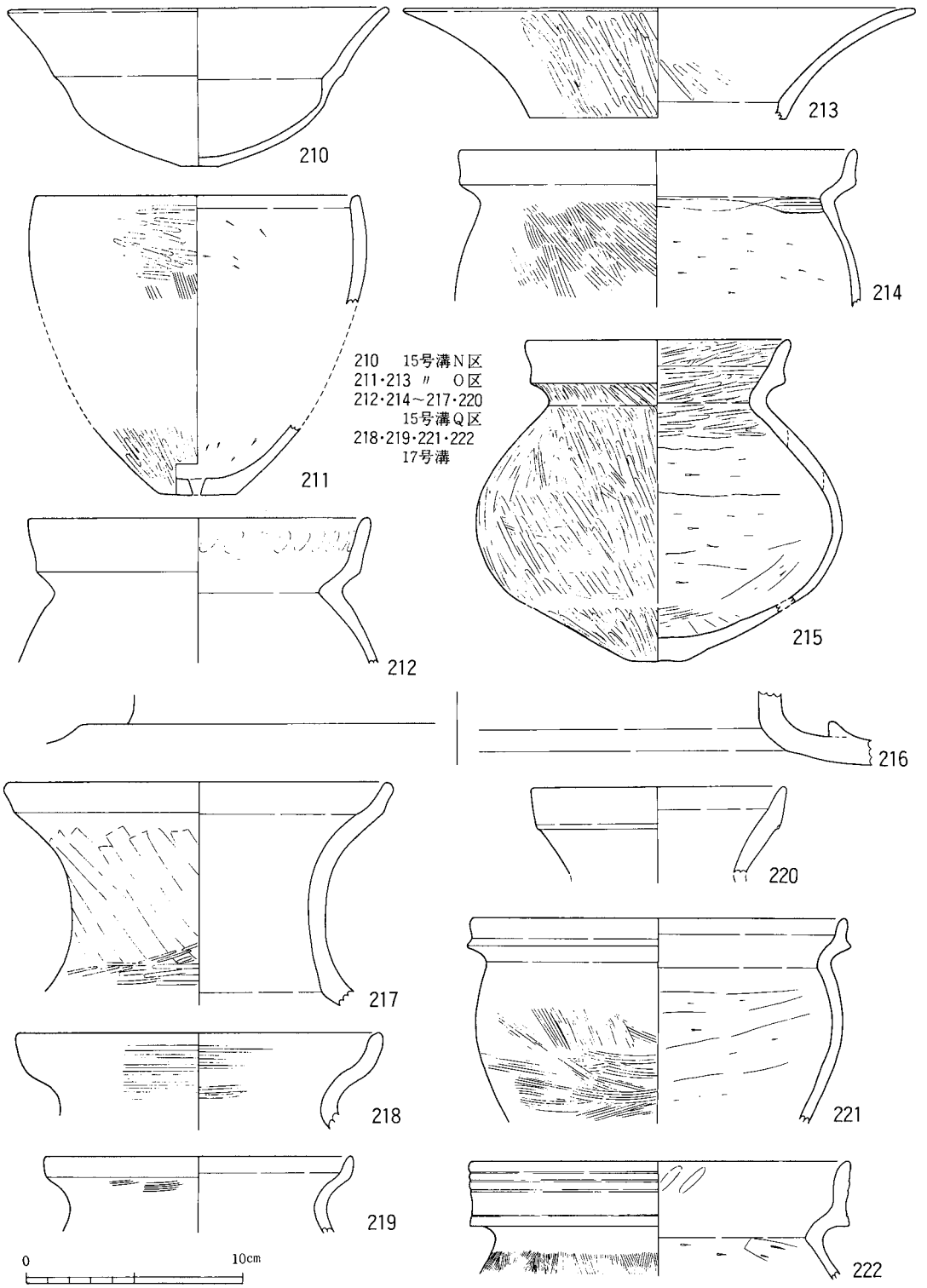
12.4cm、器高7.9cmを測る。口縁部外傾し、外面に煤が付着する。202、203は鉢である。202は口径14.0cmを測り、器肉は薄く、口縁部は長くのびる。内面にミガキ調整、口縁帯外面に擬凹線を施す。203は茶橙色を呈し、赤彩の可能性をもつ。口径14.2cm、器高9.2cmを測り、口縁部やや外反しながら、ゆるやかにのびる。内外面ともにミガキ調整を施し、胴部外面に煤が付着する。204、205は蓋である。204で口径10.6cm、器高4.3cm、205で口径15.5cm、器高6.1cmを測る。いずれも内外面ハケ調整を施し、粗い砂粒を若干量含む。また、205は煮沸によると思われる煤が口縁端部内面に約1cmの幅で付着する。206～208は有段口縁の甕である。206は胴部が張らないため背の高い印象を受け、口径18.8cm、器高20.8cmを測る。内面底部付近に煮沸によるヨゴレが残る。また外面に煤が付着する。207は口径18.8cmを測り、口縁部は内傾気味に立ち上がる。内面に炭化した有機物が付着する。208は口径12.7cm、器高13.6cmを測る。口縁部にミガキ調整を施す。外面に煤が付着し、胎土中に粗い砂粒を含む。209は高杯である。淡黄橙色を呈し、口径34cmを測る。体部はゆるやかに外反しながら口縁部に至る。内外面ミガキ調整を施す。210は鉢で口径17.5cm、器高7.4cmを測る。底径は小さく口縁部はゆるやかに外反する。磨耗のため調整不明。底部外面に熱を受けた痕跡が残る。211は底部穿孔の鉢である。口径14.8cmを測り、体部は内湾しながら立ち上がる。外面ミガキ調整、内面ケズリ調整をおこなう。212は甕で口径15.6cmを測る。口縁部外傾し、胎土中に赤色粒を含む。213は高杯で口径23.6cmを測る。口縁部は外反しながら、長くのび、内外面ともにミガキ調整を施す。胎土はキメが細かい。214は甕で口径18.2cmを測り、口縁部は短く直立する。215は壺で口径12.0cm、器高15.0cmを測り、胴部最大径は下半にある。口縁部やや外反し、一部化粧土を塗付する。口縁部～頸部内面および口縁帯を除く外面にミガキ調整を施す。また口縁部内外面に煮沸によるヨゴレが残り、胎土は細かい砂粒を含む。216、217は壺である。216は大型の壺の頸部である。にぶい黄橙色を呈し、外面に突帯をめぐらす。217は口径17.4cmを測り、口縁部で短く屈曲する。外面の調整は下から、ミガキ、板状工具によるナデ、ヨコ方向ナデとなる。また内面はナデ調整を施す。浅黄橙色を呈し、微砂粒を多く含む。220は壺と思われる。口径9.4cmを測り、口縁部下端で屈曲、口縁部は直立する。粗い砂粒を含む。

17号溝（第84・85図）

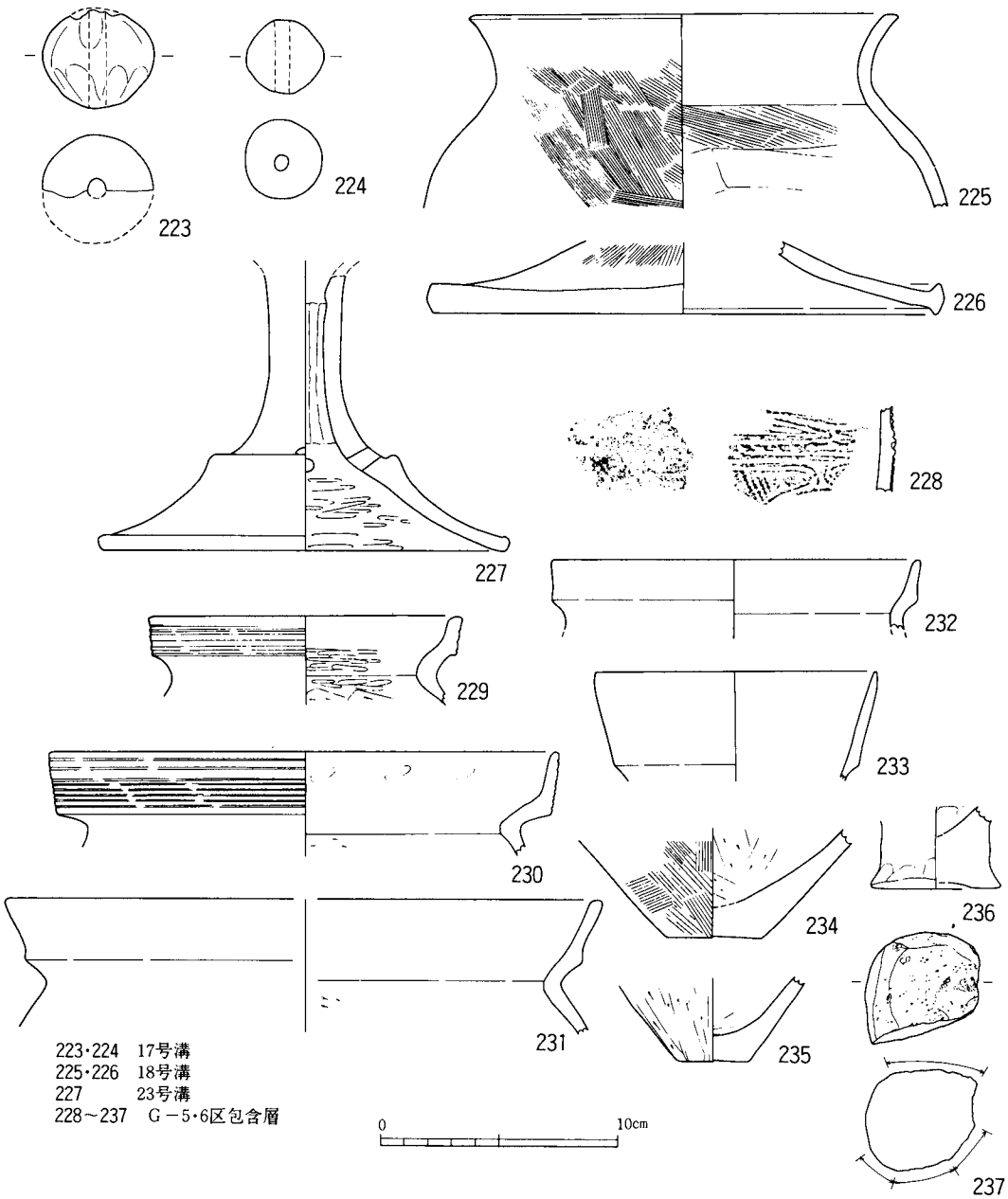
覆土中より出土し、溝底面につく遺物はない。218は壺で暗黄灰色を呈し、口径16.8cmを測る。頸部から口縁部にかけてゆるやかなカーブを描く。内外面ともヨコ方向のハケ調整をおこない、胎土中に粗い砂粒を含む。219、221、222は甕である。219は口径14.0cmを測り、口縁部下端で屈曲する。外面に煤が付着し、胎土中に粗い砂粒を含む。221は口径17.0cmを測る。口縁部は短く直立し、下端は稜状を呈する。外面に煤が付着し、胎土中に赤色粒を含む。222は口径17.4cmを測る。口縁部は直立し、胎土中に赤色粒を含む。223、224は土錘である。223は長さ4.1cm、最大径4.7cmを測る。黄橙色を呈し、胎土中に粗い砂粒を含む。224は一部欠損する。体部中程に稜をもち、長さ3.3cm、最大径3.2cm、残存重量23.4gを測る。胎土中に微砂粒を含む。

18、19号溝（第85図）

いずれも覆土中より出土した。225は明橙色を呈し、口径18.0cmを測る。頸部から口縁部へゆるやかに移り、口縁端部を平坦に仕上げる。外面は細かいハケ調整、内面は上からヨコ方向ナデ調



第84図　東トレンチG－4区15・17号溝出土遺物実測図（S＝1/3）



第85図　東トレンチG－5・6区出土遺物実測図（S＝1/3）

整、ハケ調整、ケズリ調整を施す。226は器台脚部と思われる。脚端部を上下につまみ上げる。胎土中に粗い砂粒を含む。

23号溝（第85図）

227は覆土中より出土した器台または高杯である。4ケ所に穿孔をおこない、脚端部内面にミガキ調整を施す。外面は磨耗のため調整不明。胎土中に細かい砂粒を多く含む。

包含層出土遺物（第85図）

228は天王山系の土器である。にぶい褐灰色を呈し、外面は縄文を施した後、沈線と刺突文で加飾する。胎土中に海綿骨片を含む。天王山系の土器は松任平野で初例と思われる。229～232は甕である。229は口径13.0cmを測り、器肉は厚い。頸部内面にヨコ方向のミガキ調整を施す。外面に煤が付着する。230は口径21.0cmを測る。口縁部は直立し、外面に煮沸によるヨゴレが残る。粗い砂粒を若干量含む。231は口径25cm前後を測る。口縁部内面の屈曲は目立たない。胎土中に赤色粒を含む。232は口径15.0cmを測る。233は壺と思われる。口径11.8cmを測り、調整不明。234、235は底部である。外面の調整は234がハケであるのに対して、235はケズリとなる。236は壺類の台部と思われ、磨耗が著しい。粗い砂粒を少量含む。237は灰白色の軽石である。表面が磨滅し、砥石に使用されたと考えられる。残存重量22.0ｇを測る。

第４節　南トレンチ（横江館跡）

１．調査の概要

調査は横江町の集落北側の水田部分に東西方向に設置される排水路予定部分で実施され、第３節で述べた東トレンチ南端と直交する位置にある（第86図）。周辺の地形は調査区東側に北東方向にのびる微高地が存在し、調査区では西側にむかって緩やかに地山面が下がる。周辺の標高は水田面で12.4～12.6ｍを測る。

調査区の基点は東トレンチ主軸線の延長線上で、東トレンチ基点より南側1.24ｍの地点に設定した。調査区主軸線は東トレンチ主軸線と直交し、Ｎ-90°-Ｅを測る。また、調査区は農道等で掘り残した箇所があり、その分割に従い東からＡ～Ｄ区に細分した。

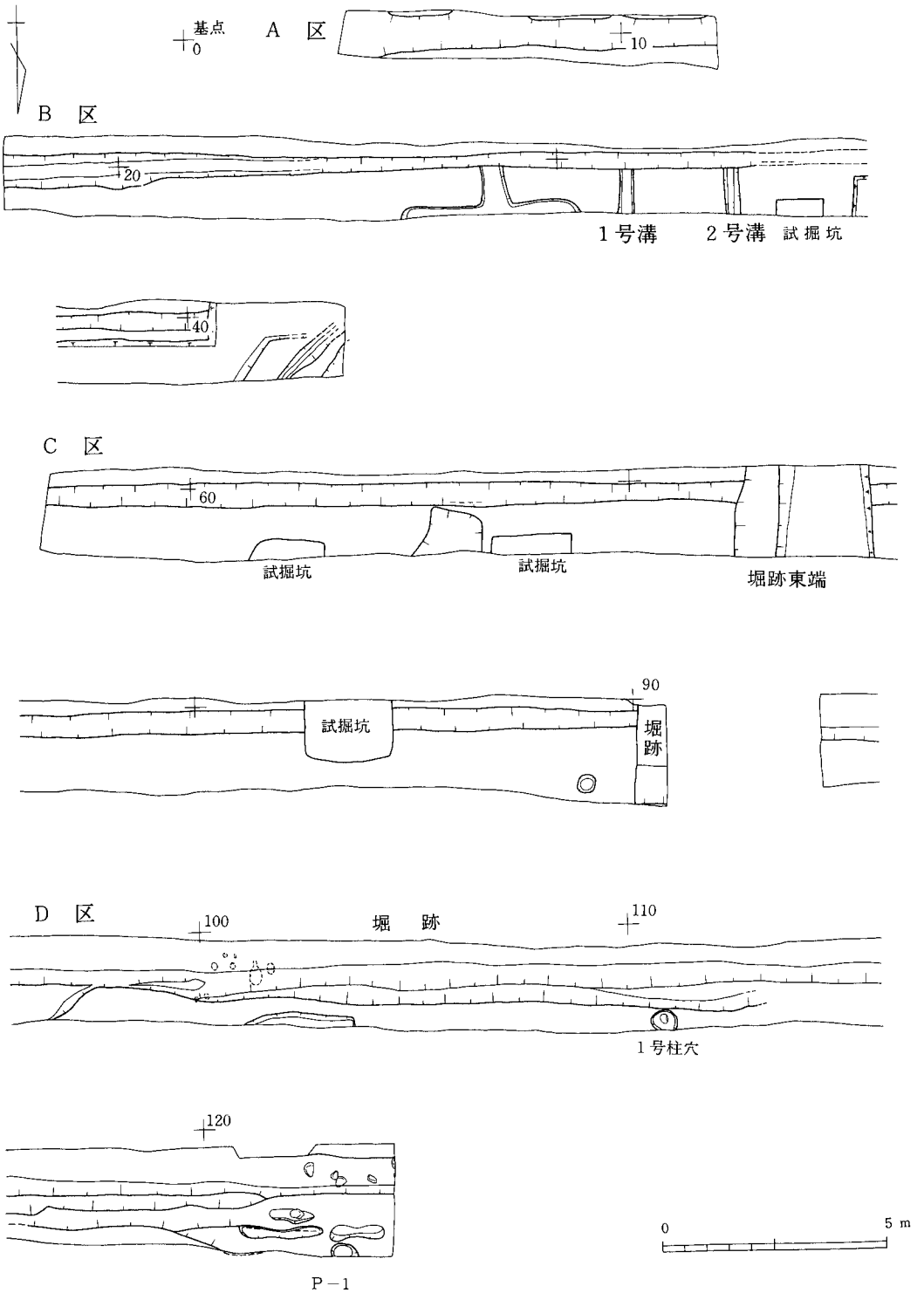
基本土層層序は上層から第１層農道敷設時の盛土、第２層旧耕土（濁灰色粘質砂）、第３層地山（濁灰黄色～灰色砂質土）となる（第87図）が、調査区幅が限られたことに加え、既存の排水路や過去の耕地整理等で土層の変化が著しく十分に整理しきれていない。また包含層は第２層と第３層の間に存在すると考えられるが、ほとんど残存しなかった。

調査の結果、Ｃ区西側～Ｄ区にかけて、調査区と並行して西方向に流れる上幅２ｍ以上の堀跡を検出し、堀跡覆土中より14世紀後半を中心とする遺物が出土した。第７章で後述するとおり、調査区周辺に館跡の存在を示す小字名が残っていることから、館跡に類する遺跡に伴う堀跡と考えられる。

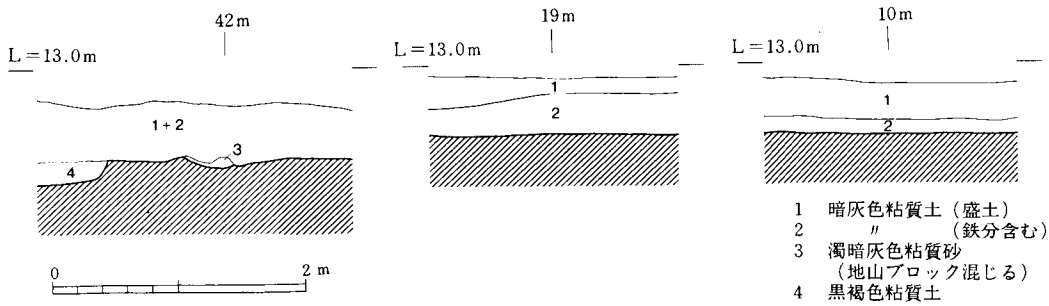
２．遺構（第86～89図）

Ａ、Ｂ区　調査区に並行して西側に流れる既存の排水路および地山面のわずかな起伏を検出しただけで、明確な遺構は存在しない。排水路覆土中より近・現代を中心にした遺物が出土した。

Ｃ、Ｄ区　Ｃ区73ｍ付近を東端にする堀跡が検出された。調査範囲が限られ全体を明らかにできないが、堀跡はほぼ東西方向を主軸とし、平成２年度調査で確認された部分を東端と考えれば、長さ約70ｍを測る。また上幅は２ｍ以上（調査区幅で折り返して４ｍ以上）、深さはＤ区で約1.1ｍを測る。Ｃ区で検出された堀跡東端肩部は緩やかな斜面となり、深さも比較的浅い。またＣ区堀跡東端の南側水田部をボーリング棒で調査したところ、堀跡覆土と同様な土層が検出できた。このことから堀跡東側で南北方向、北側に流れる自然河川と接合し、そこから西側にのびる堀跡に水を引き込んだ可能性を指摘できる。Ｄ区123～125ｍ付近では、20～30ｍの円石が堀跡肩部で地山に埋め込んだように認められ、また堀跡底面にも落ちている。円石が出土した範囲の堀跡北側斜面がテラス状を呈し、堀跡に平行する溝状遺構（覆土は黒褐色土および地山ブロックを含む暗灰褐色土）が検出したことから、護岸等の何らかの施設が存在したと考えられる。堀跡の覆土は粘性を帯びた灰褐色～黄灰色土が自然堆積した後、濁暗灰褐～濁暗灰色土で埋められている。



第86図　南トレンチ全体図（S＝1/150）



第87図　南トレンチA・B区北壁土層断面図（S＝1/60）

3．遺物（第90図）

A～C区

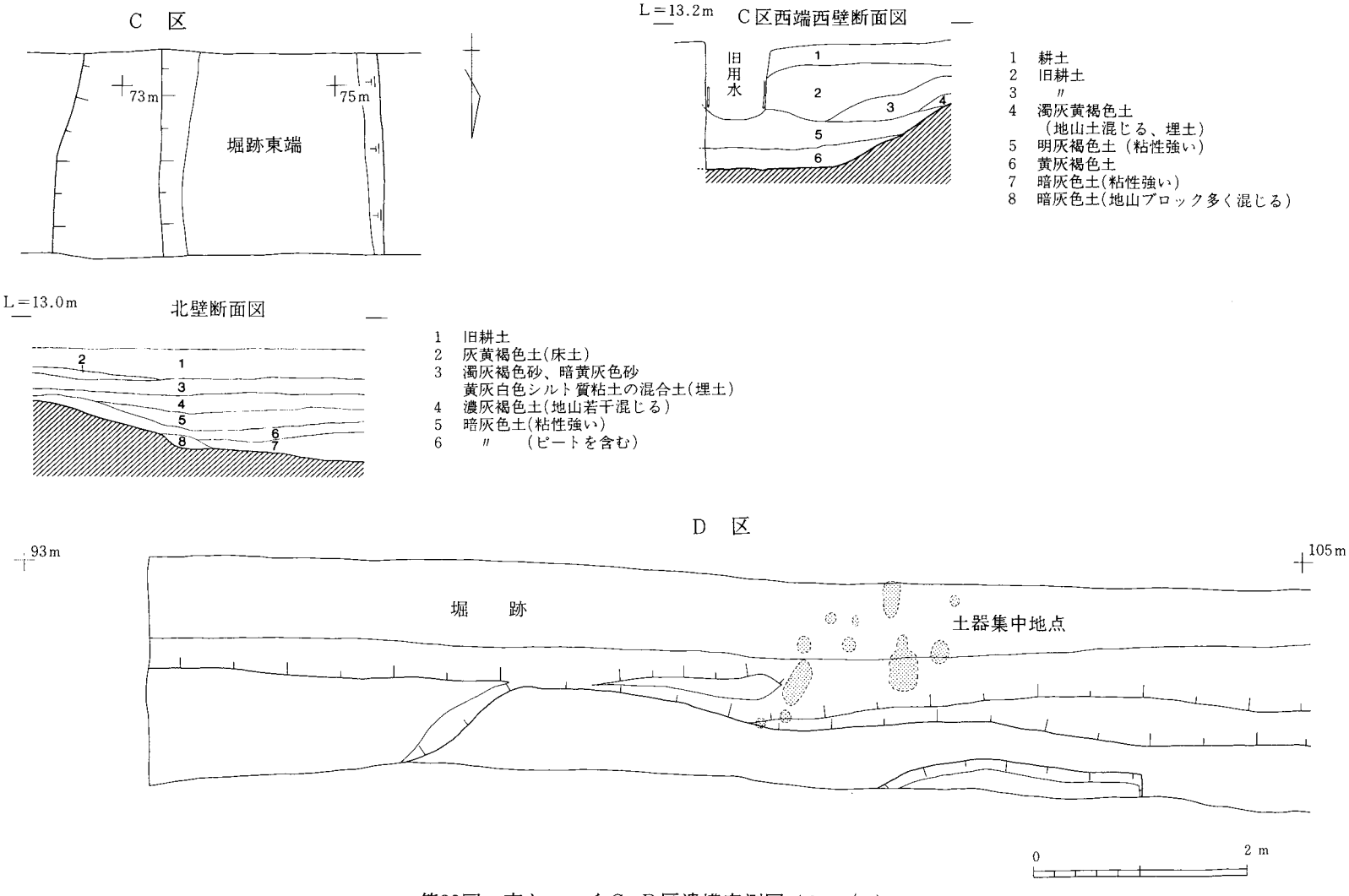
図化しなかったが、既存の排水路覆土中より近・現代を中心とする遺物が出土した。

D区

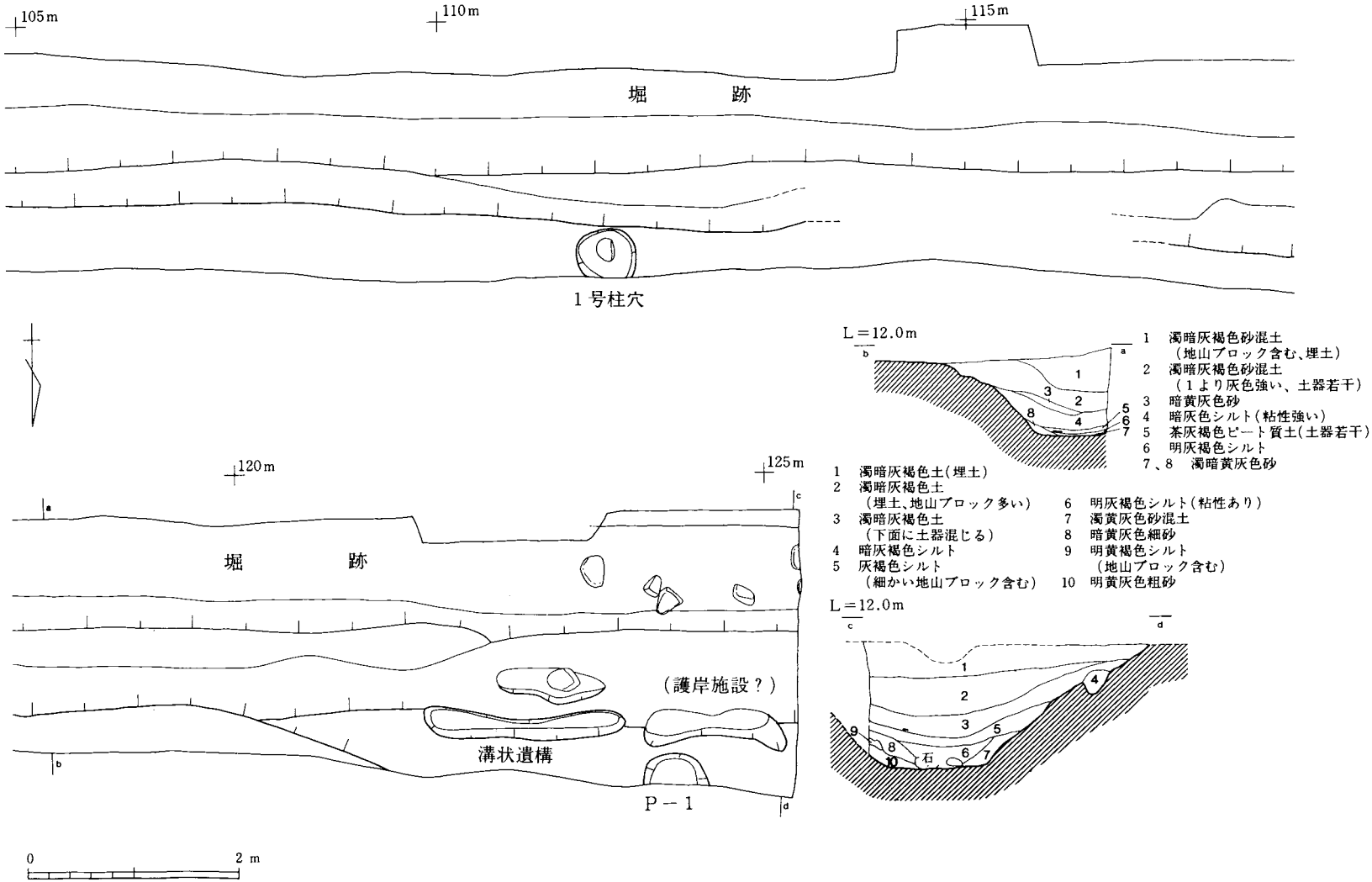
堀跡の自然堆積と考えられる覆土中より中世の遺物が出土した。中でも基点から100～101mにかけての覆土中からは写真図版39で見るように調査区北側（館跡内部？）から一括廃棄された状況で土師質皿などが集中して出土した。出土した遺物は堀底面より15～20cm程度上であり、第89図土層断面a－bライン第4層（粘性の強い暗灰色シルト）中に大部分が含まれる。一括性の高い好資料といえよう。また、D区埋土より下の他の土層中からも遺物が出土したが、量はそれ程多くなく、小片が多い。

238は基点より94～96m堀跡覆土中（層位不明）より出土した瀬戸焼天目茶碗で黒色の鉄釉を施す。口径11.3cm、器高6.1cm、台径3.8cmを測る。体部やや丸味をもち、口縁端部は屈曲、高台は輪高台でそれ程目立たない。素地は粉っぽく、灰白色を呈する。15世紀中頃～後半に位置づけられる。

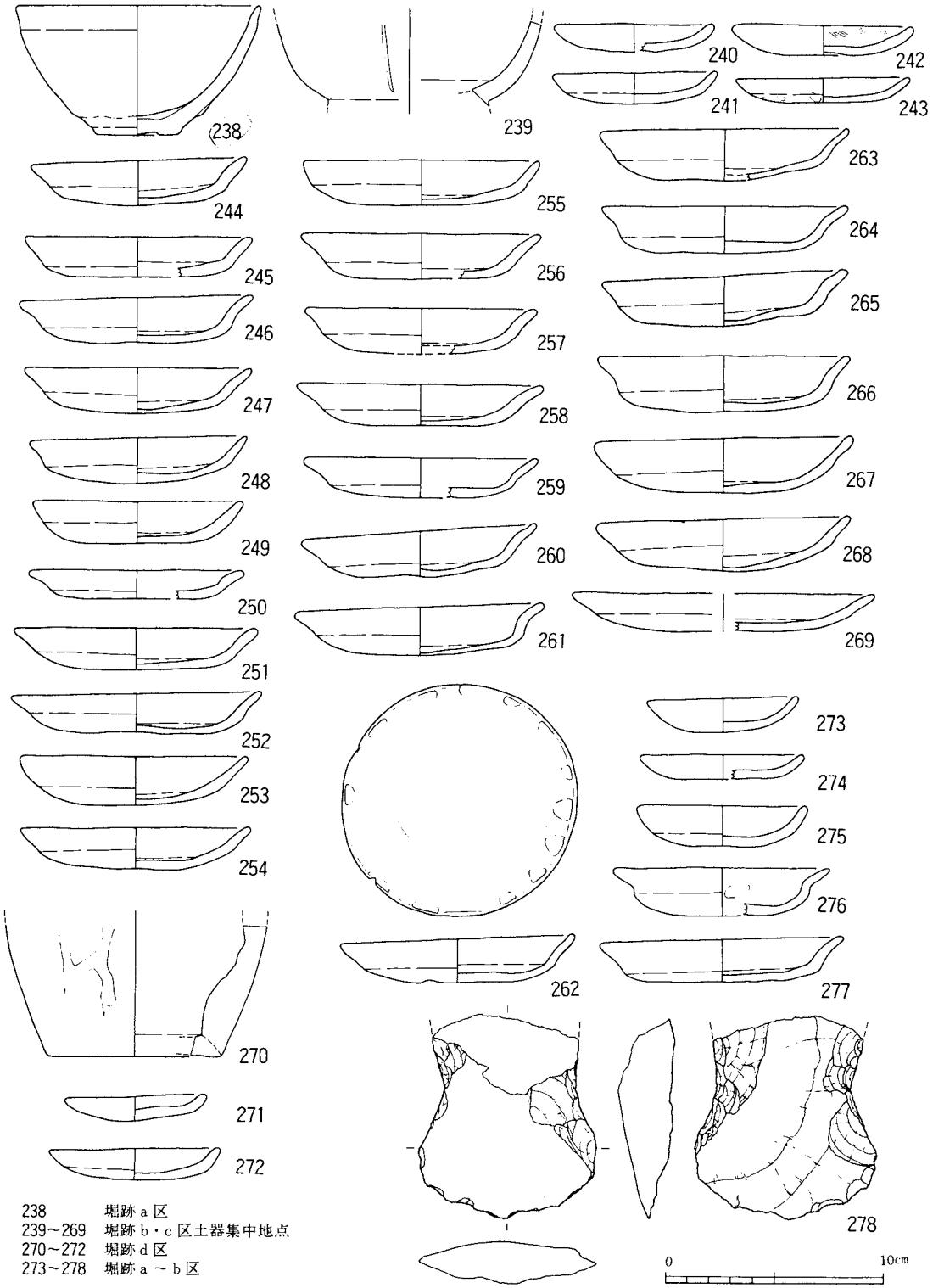
239～269は先述した遺物集中地点から出土したものである。239は青磁碗で外面に蓮弁文が残る。素地は灰色で精緻、施釉はオリーブ灰色である。15世紀前半代に位置づけられる。240～269は非ロクロの土師質皿で241、242、274が灰白色を呈するのを除き、にぶい灰黄色～明灰黄色の色調をもつ。口径法量から3法量に分類でき、240～243は口径7～8cm（Ⅰ類）、244～245および248～250は口径10cm前後（Ⅱ類）、246、247、251～268は口径10.5～12cm（Ⅲ類）を測る。ただし、Ⅱ類とⅢ類の法量分化は明確でなく、連続的な印象を受ける。269は径不明だが、Ⅲ類より口径が大きくなる可能性をもつ。Ⅰ類は口縁部に一段のヨコナデ調整を施し、丸底風につくる。また242の体部内面にヨコナデ調整時に使用した織物状の痕跡が残る。Ⅱ、Ⅲ類は器肉は薄く、全て口縁部に一段のヨコナデ調整を施し、ナデ調整の強弱により244、252のように体部屈曲するタイプと249、253のように屈曲の弱いタイプに分けられる。また262のように口縁部に指頭圧痕が残るものもあり、口縁部を成形した後、ヨコナデをおこなったと考えられる。253にのみ口縁部に灯明皿に使用した際のタール状付着物が残る。なお、239の示す年代と土師質皿の示す年代は若干時期の差



第88図 南トレンチC・D区遺構実測図（S＝1/60）

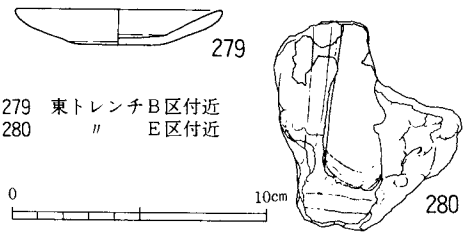


第89図　南トレンチD区遺構実測図（S＝1/60）



238　　堀跡ａ区
239～269　堀跡ｂ・ｃ区土器集中地点
270～272　堀跡ｄ区
273～278　堀跡ａ～ｂ区

第90図　南トレンチＤ区出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）



第91図　東トレンチ周辺表採
遺物実測図（S＝1/3）

をもつが、出土層位が20cm前後の厚さをもった自然堆積であり、それ程矛盾をきたさないと思われる。

270～272は基点より105m以西の堀跡覆土中より出土した（層位不明）。270は堀跡肩部より出土した瀬戸焼灰釉瓶類底部である。底径8.2cmを測り、素地は浅黄橙色で粉っぽい印象を受ける。淡オリーブ灰色の釉を施す。271、272は117m付近堀跡底面近くより出土し、先述Ⅰ類に準ずる。271で口径6.5cm、272で口径7.7cmを測る。

273～278は堀跡覆土または包含層から出土した。273～275は先述Ⅰ類に準ずるが、275は口径7.6cm、器高2.0cmを測るため身の深い印象を受ける。276はⅡ類に準ずるがヨコナデ調整が強いため体部の屈曲が目立つ。277はⅢ類に準ずる。278は堀跡覆土底面近くより出土した打製石斧である。図でいえば下が頭部である。石質は緑灰色の火山礫凝灰岩で撥形を呈すると思われる。

なお図化しえなかったがD区包含層より珠洲焼甕（吉岡康暢氏編年Ⅴ期）、加賀焼甕等が出土した。

調査区周辺表採遺物（第91図）

279は口径7.4cmを測る土師質皿である。色調はにぶい橙色で口縁部肥大し、外側に開く。280は土師質の遺物でにぶい黄灰色を呈する。全面に二次加熱の痕跡があり、胎土は緻密で海綿骨片を含む。内面に蓮弁状の型をとった痕があり、鋳型の可能性をもつ。

5．小結

最後に限られた範囲の調査であるが、横江古屋敷遺跡の展開について述べたい。ただし平成2、3年度に今回の調査区東側に隣接して松任市教育委員会が調査を実施しており、今後見直す箇所も少なからず存在すると思われ、あくまで限られた範囲での所見であることに留意されたい。なお、松任市教育委員会調査区を含めた概略図を第92図で示したが、これを含めて本文の記述に関して金山弘明氏には有益な御教示をいただいた。深く感謝したい。

まず主な遺構の性格について整理してみるが、4号大溝は自然河川と考えられ、4号大溝以南には弥生時代後期～終末の住居跡等の遺構が検出できないことから、居住域の南側を画する大溝の役割をもつと考えられる。また、人工的な造成と考えられる1号大溝以北でも松任市教育委員会調査区を含めて、同様なことが認められ、集落の北側を画する大溝と考えられる。すなわち、居住域は1、4号大溝の間（南北で距離約60～70m）となり、1、4号大溝は西念・南新保遺跡で見られるような「環濠」的性格を有していたと考えられる。

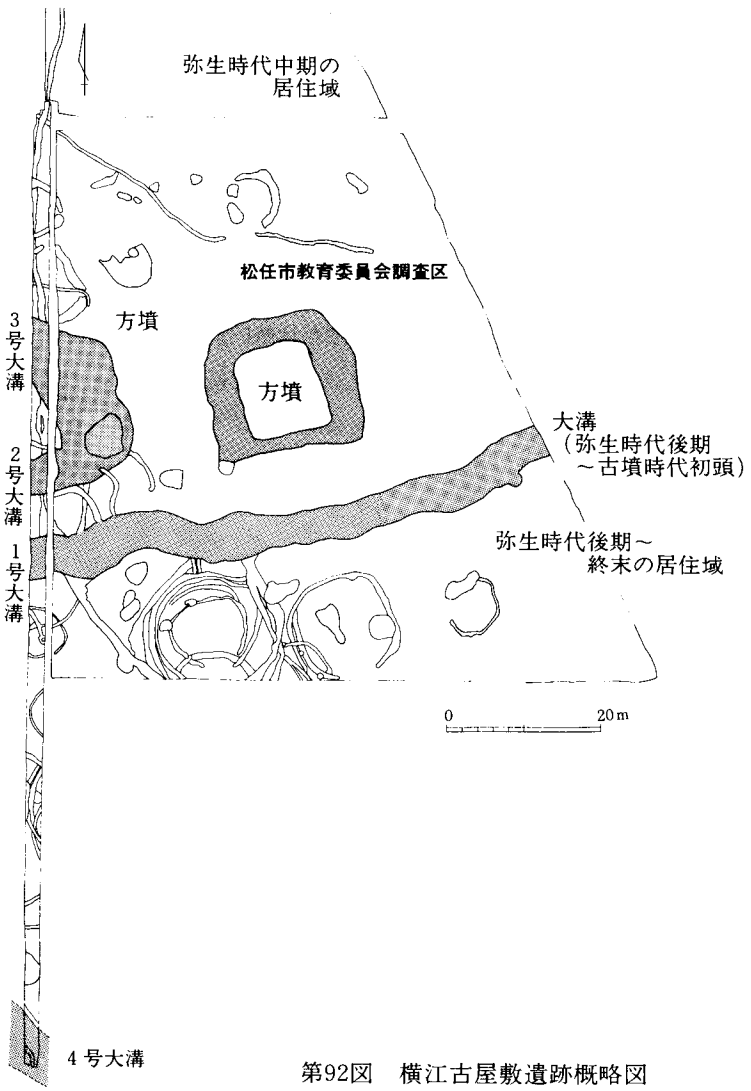
次にG－1～3区の居住域で検出された環状を呈する溝についてだが、いわゆる「周溝を有する建物」の周溝と考えられる。周溝を有する建物については楠　正勝[7]、南　久和[8]氏をはじめとする研究がある。その中で周溝を有する建物は弥生時代中期後半～古墳時代前期まで確認され、低湿地に立地する平地式住居跡と考えられている。この「周溝を有する建物」は周溝および周溝に囲まれた住居等の形態、集落全体の中での占める位置等で性格的、時期的に分類、位置づけられ

ていくであろうが、現在はそこまで至っていない。

南久和氏による平面形態での分類に従えば、本遺跡の周溝は「細深タイプ」のみが検出される特徴を有し、土砂の採取も一つの目的とするような「広浅タイプ」は存在しない。この「細深タイプ」の県内での類例としては、金沢市新保本町東遺跡、桜田・示野遺跡、松任市八田小鮒遺跡等があげられる。また、本遺跡の周溝はその規模で大小２分類でき、大型タイプは直径12～14m、小型タイプは６～７ｍを測る。本遺跡では一般的な竪穴住居跡や堀立柱建物跡が存在せず、「細深タイプ」のみで構成され、少なくとも性格の異なると思われる大小２タイプに分類できる特徴をもつといえよう。「周溝を有する建物」については、一般的な住居跡、共同作業所のような集落の中心的な建物、玉造り工房、もがり屋、倉庫等の性格が考えられているが、少なくとも本遺跡の小型タイプは10・13号溝のつくる周溝を有する建物の中央部に焼土が確認されたことからも、一般的な住居跡の可能性が高いように思われる。今後、類例をまって検討していく必要があろう。

また居住域の北側に位置する３、４号大溝は、幅が広く、覆土中に遺物をほとんど含まない。松任市教育委員会の調査を考えあわせれば、御経塚シンデン遺跡[9]と類似した形態をもつ方形の墳墓と考えられる。また、その北側の20～22号溝も方形を呈しており、四隅の切れた方形の墳墓の可能性をもつ。

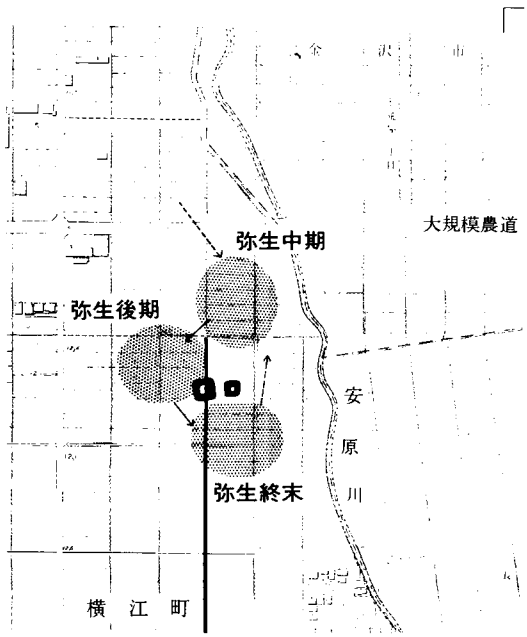
次にそれぞれの時期について考えてみたい。４号大溝、９号溝は覆土中より弥生時代終末を下限とする遺物が出土し、それ以前に機能している。１号大溝は下層出土遺物の中に第77図118の東海系の壺が存在し、古墳時代初頭には土砂の堆積が始まっている。居住域は少量の遺物しかなく、断定はできないが弥生時代終末を下限にすると考えられる。３、４号大溝は弥生時代後期を中心とする遺物が覆土中より少量出土している。覆



第92図　横江古屋敷遺跡概略図
（松任市教育委員会調査区と合成）

土の切りあいから15号溝より新しく、平面形態を考えあわせれば古墳時代初頭の方墳の可能性が高い。15号溝は居住域よりやや古い様相を示す遺跡が溝埋土中より出土しており、弥生時代後期を中心に終末を下限とした時期に位置づけられる。あくまで推測だが、調査区外15号溝西側に弥生時代後期を中心にする遺構が展開していると思われ、方墳周溝（3、4号大溝）に自然堆積した遺物はその流れこみと考えられる。

以上のことから横江古屋敷遺跡は①弥生時代中期（松任市教育委員会調査区北側に集落が存在。）→②弥生時代後期（本調査G-4、5区の西側に集落移動。）→③弥生時代終末（本調査区で検出された南北を画する大溝の形成およびその中への集落の移動、15号溝埋める？。）→④集落の廃絶・移動（少なくとも1号大溝は機能している。）→⑤古墳時代初頭（方墳の出現、1号大溝土砂堆積始まる。）→⑥古墳時代初頭以降（1～4号大溝に自然堆積が始まる。）というように展開すると整理可能である。また、弥生時代終末の集落と古墳時代初頭の墓域は時期的には併存しないが、1号大溝を挟んで位置的に重複せず、何らかの土地利用の規制が働いているように思われる。その理由としては、④と⑤の時期が比較的近接し、古墳時代初頭の方墳を造成した母集団と弥生時代中期～終末まで同地域で連綿と生活を続けた集団との間に何らかの関連がある可能性が高い。もしそうであれば、松任市旭遺跡群のように、中核的な地位を占める集団が当地域に存在したとも考えられる。なお、古墳時代初頭以降の集落の位置だが、比較的近接した微高地上に立地していると予想できる。[10]



第93図　横江古屋敷遺跡の集落の展開概略図

註

(1) 清水隆久『横江史』石川県松任市字横江町　1961

(2) 当センターが実施した分布調査で、東トレンチ西側の道路脇の水田部でも河川跡が検出された。同一の河川跡の可能性をもつ。

(3) 栃木英道氏より、把手は1ヶ所であるとの御教示を得た。

(4) 大溝掘削後、水の流れをよくするため二次的に掘られたと考えられる。

(5) 平成元年度松任市教育委員会調査区にその続きと思われる溝が検出されている（第92図参照）。

(6) 方墳周溝に伴う掘りこみと考えられ、周溝の掘削時の起伏、もしくは周溝内埋葬土坑の可能性をもつ。現状では判断しかねる。

(7) 楠　正勝「第4章　まとめ」『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』金沢市・金沢市教育委員会　1989

(8) 南　久和「第5章　おわりに」『金沢市新保本町東遺跡』金沢市教育委員会・中島製紙株式会社・本田　肇・アラガキ不動産　1991

(9) 『定型化する古墳以前の墓制』埋蔵文化財研究会　1988

(10) 金沢市教育委員会による上荒屋遺跡第1～3次発掘調査により、77棟の建物が確認され古墳時代前期に属する集落が存在することが明らかとなった。このことから、一見希薄にみえる古墳時代の遺跡の分布も、さらに北側および東側の様相が明らかになることで、一変する可能性を多いにもっているといえよう。

第７章　平成２年度調査　（横江館跡）

第１節　調査の概要

平成２年度調査は横江町集落北側に東西方向に設置される排水路予定部分（長さ約140ｍ）を対象に、平成２年10月22日～11月５日にかけて実施した。調査区は平成元年度調査南トレンチの西側延長線上にある。また調査区南側が事業区域外で、北側は田面工事が昨年度に終了していたため、調査区幅約１ｍの限られたものとなった。

調査区周辺の地形は、平成元年度調査区から引き続き西側に向い緩やかに傾斜し、調査区西端で南北方向に設置された排水路付近が微低地となっている。現在の水田面での標高は12.1～12.3ｍを測る。

調査区の基点は、調査区東側の道路西側肩部に設定し、主軸線は排水路中心線に一致、Ｎ-90°-Ｅを測る。また農道等のため掘り残した部分等で、西から順にＦ～Ｈ区に細分している。

基本土層層序（第95図）は、上層から第１層耕土、第２層床土、第３層地山（黄灰色砂質土）となり、部分的に第２層と第３層の間に灰黄色砂質土が堆積している。また、70～84ｍ付近は南北方向の河川跡、103ｍ以北は沼状地形となっており、複雑な土砂の堆積が認められる。

調査の結果、堀跡１条、落ちこみ３ヶ所、溝４条、土坑１基、ピット等を検出した。そのうち、調査区西端で検出された堀跡は、平成元年度調査で確認された堀跡の西端にあたると考えられる。なお、包含層より数片の遺物が出土したが図化できる個体はなかった。

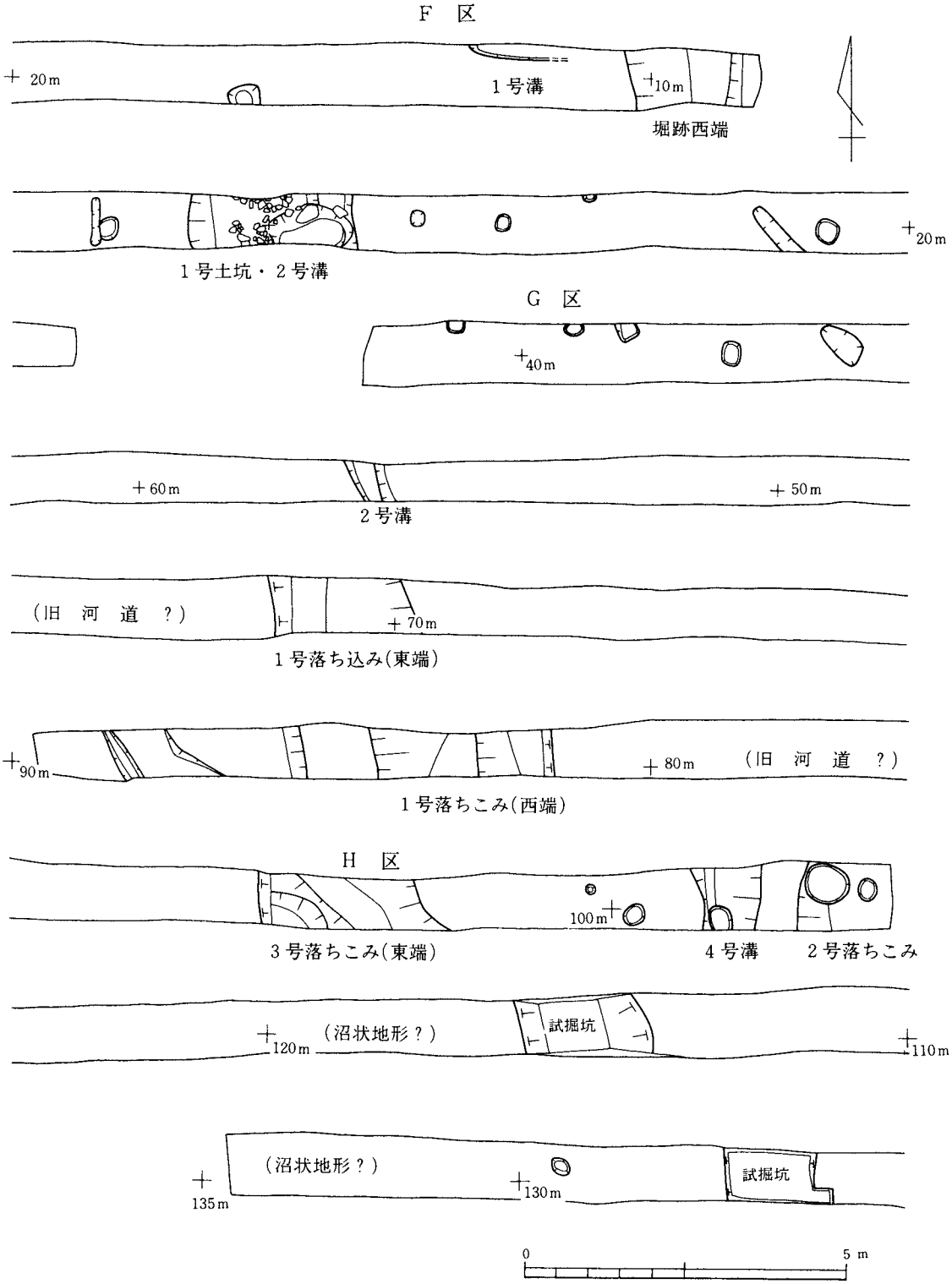
第２節　遺構（第94～97図）

堀跡　平成元年度調査で確認した中世の堀跡西端と考えられる。その場合、堀跡は長さ約70ｍを測る。深さは約140㎝を測る。肩部はしっかりとしており、斜面中位で傾斜が緩やかになる。覆土は上層から暗灰褐色土と黄褐色砂の混合土（埋土）、暗灰褐色土（自然堆積）となる。出土遺物なし。

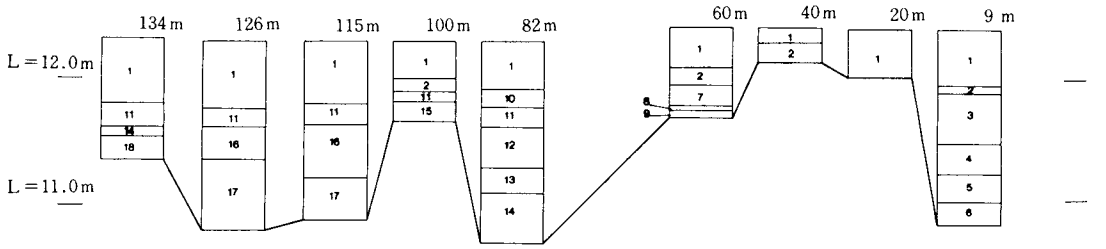
１号落ちこみ　Ｇ区で検出した。調査区幅が狭く、調査区側壁が崩落したため、東西方向の肩部を検出するにとどめた。南北方向に流れ、上幅約14.6ｍ、深さは東側で約0.8ｍ、西側で約1.1ｍを測る河川跡と思われる。。両肩部とも立ち上がりはしっかりとしており、人間の手が加わっているとも考えられる。横江館跡を取り囲む堀の一部を構成していた可能性をもつ。

２号落ちこみ　Ｈ区東端で検出した緩やかな地山面の落ちである。深さ約20㎝を測り、覆土は灰色粘質土の単層。なお、Ｐ－２は落ちこみが埋まった後に、掘りこまれている。

３号落ちこみ　Ｈ区103ｍ以西で調査区西端まで続いている。東側肩部斜面（Ｈ区付近）は緩やかな傾斜をみせ、深さは106ｍ付近で約90㎝、134ｍ付近で約50㎝を測る。覆土は粘質土が厚く自然堆積した後、濁黄茶色粘質砂で埋められる。調査区南側の水田は現在でもトラクターがはまるほど地盤が弱く、その範囲も広いことから沼状地形を呈すると考えられる。出土遺物なし。

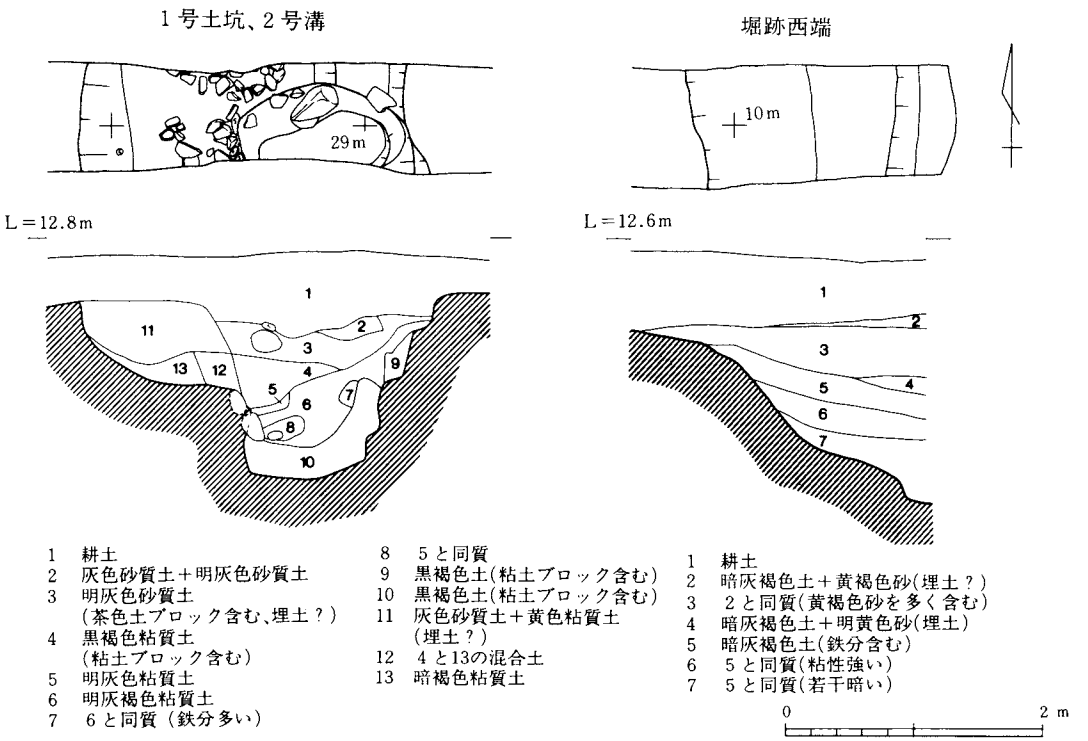


第94図　調査区全体図（S＝1/150）



1　耕土
2　暗灰褐色土＋黄褐色砂(床土)
3　暗灰褐色土＋明黄色砂(埋土)
4　暗灰褐色土(鉄分含む)
5　〃　(粘性強い)
6　〃　(若干暗い)
7　灰黄色砂質土
8　〃　(キメが細かい)
9　灰色砂レキ土(埋土)
10　濁灰茶色砂質土
11　濁黄茶色粘質砂
12　濁黄茶色粘質土(埋土)
13　12と同質(若干暗い、埋土)
14　灰色粘質土(植物遺体含む)
15　暗灰色粘質土
16　灰褐色粘質土
17　暗灰褐色粘質土

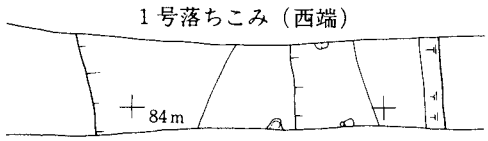
第95図　南壁土層柱状図

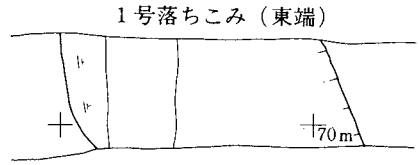


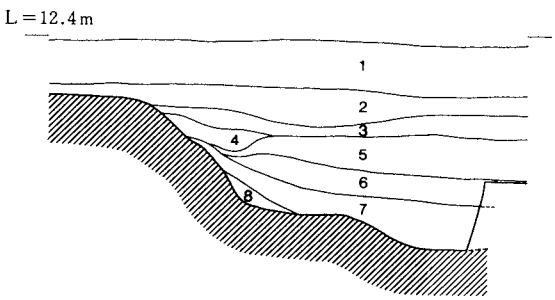
1　耕土
2　灰色砂質土＋明灰色砂質土
3　明灰色砂質土
(茶色土ブロック含む、埋土？)
4　黒褐色粘質土
(粘土ブロック含む)
5　明灰色粘質土
6　明灰褐色粘質土
7　6と同質（鉄分多い）
8　5と同質
9　黒褐色土(粘土ブロック含む)
10　黒褐色土(粘土ブロック含む)
11　灰色砂質土＋黄色粘質土
(埋土？)
12　4と13の混合土
13　暗褐色粘質土

1　耕土
2　暗灰褐色土＋黄褐色砂(埋土？)
3　2と同質(黄褐色砂を多く含む)
4　暗灰褐色土＋明黄色砂(埋土)
5　暗灰褐色土(鉄分含む)
6　5と同質(粘性強い)
7　5と同質(若干暗い)

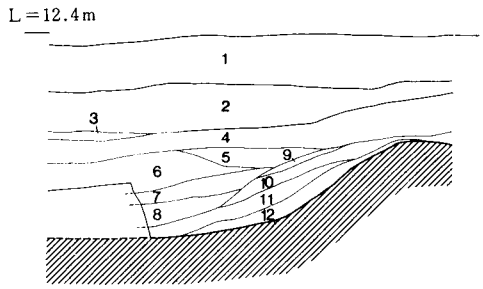
第96図　遺構実測図(1)（S＝1/60）



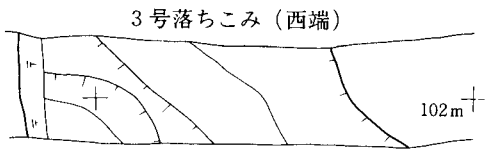


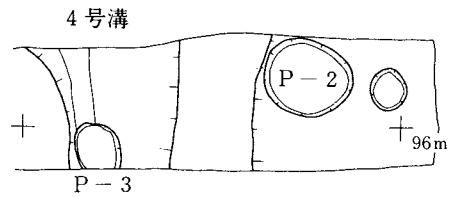


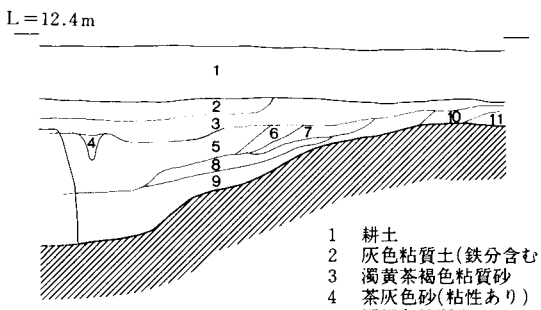
1　耕土
2　濁灰茶色砂質土
3　濁黄茶色粘質砂
4　灰色粘質土(鉄分含む)
5　濁黄茶色粘質土(地山ブロック含む、埋土)
6　5と同質(若干暗く、地山ブロックの含み少ない)
7　灰色粘質土(植物遺体、小石含む)
8　7と地山の混合土



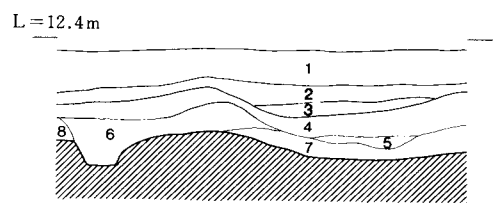
1　耕土
2　濁灰茶色砂質土
3　濁黄茶色粘質砂(埋土、地山ブロック含む)
4　3と同質だが粘性少ない
5　3と同質だが若干暗い
6　灰色粘質土
7　明灰色砂質土
8　黒灰色粘質土(細砂含む)
9　灰色粘質砂
10　灰色砂(2～5cm大小石含む)
11　10と同質だが粘性強い
12　明灰色砂







1　耕土
2　灰色粘質土(鉄分含む)
3　濁黄茶褐色粘質砂
4　茶灰色砂(粘性あり)
5　灰褐色粘質土
6　5より若干暗い
7　濁黄灰色粘質土(鉄分含む)
8　濁暗灰色粘質土(　〃　)
9　暗灰色粘質土(粘性強い)
10　濁暗茶褐色粘質砂
11　暗灰色粘質土



1　耕土
2　灰色砂質土＋黄色粘質土ブロック(床土)
3　2より黄色粘質土ブロックを多く含む(床土)
4　濁暗茶褐色粘質砂
5　濁黄色砂質土
6　茶灰色粘質砂
7　灰色粘質土
8　暗灰色粘質土

0　2m

第97図　遺構実測図(2)（S＝1/60）

1号土坑　H区30m付近で検出され、やや崩れた楕円形を呈する。耕土直下から掘られており、かなり新しい時期の遺構と考えられる。東西方向で最大幅約180cm、深さ約150cmを測り、角張った石を含む土で一度に埋められている。出土遺物なし。

1号溝　F区東側で検出した浅い溝である。堀跡に流れ込むと考えられ、深さ約20cmを測る。覆土は濁暗褐色土の単層で、出土遺物なし。

2号溝　F区で検出し、1号土坑に切られる。南北方向に流れ、幅約250cm、深さ30～35cmを測る。東側肩部は中位で傾斜が緩やかになり、テラス状を呈する。覆土は上層より角張った石を多く含む埋土、暗褐色粘質土となる。出土遺物はない。

3号溝　G区88m付近で検出した。幅約100cm、深さ20～30cmを測り、底面西側が一段深くなる。2条の溝が重なりあっていると考えられ、覆土は濁暗灰色粘質土および灰色砂質土である。出土遺物なし。

4号溝　H区98m付近で検出した。2号落ちこみより新しく、南北方向に流れる。幅80～110cm、深さ20～30cmを測り、覆土は茶灰色粘質砂の単層である。出土遺物なし。なおP－3は4号溝が埋まった後に掘られている。

第3節　小　結

平成元年、2年度にわたる調査の結果、南トレンチで東西方向の長さ約70m、(南側1号落ちこみまで含めれば約140m）上幅4m以上（調査区幅で折り返した場合）の堀跡が検出された。この遺構の存続時期は出土遺物からみて、14世紀後半～15世紀代と考えられる。

堀跡の規模、性格については調査範囲が極めて限られており、速断は難しいが以下若干の考察を加えてみたい。県内で本遺跡と同程度の規模をもつ中世の堀跡の検出例は県営ほ場整備事業等に係る発掘調査が激増した松任平野を中心にして近年増加している。例えば松任平野では宮保館跡、宮保光明寺跡、笠間賢徳寺跡、宮永保治川遺跡、長池キタバシ遺跡、小川遺跡などが挙げられるが、遺跡全体の規模・性格まで言及できるものはそれ程多くない。13世紀および15世紀の遺物が出土した宮保館跡は南北約67m×東西約58mを測る「方形単郭館」に復元可能で、担当者は慎重な意見ながらも在地領主との関連で捉えられている。また鎌倉～室町時代の20余条の溝や多数の掘立柱建物、土坑、井戸、墓が検出された宮永保治川遺跡は、この地域が林氏の庶流宮永氏の所領であり、その居館の可能性をもつと考えられている。[1] このような例から見れば、松任平野では本遺跡も含め、一定規模の堀跡をもつ遺跡は単なる一般的な村落とは考えにくく、寺社等も含めた館跡に類する性格をもつ遺跡と考えるのが妥当と思われる。

本遺跡周辺には宮下与真氏の御教示および『横江史』によれば、「ヒガリボリ」「タチボリ」「ニシボリ」の、また調査区北側に「タチ」「カイバ」等の小字名が存在することもその傍証となろう。「ニシボリ」がやや離れ調査区内では堀跡が検出されていないものの、単純に方形に堀が巡らない複数の郭をもつ館跡に類する遺跡も県外では検出されており、大きな矛盾はないと考えられる。

文献から見てみると『尊卑文脈』の中の林氏系図から加賀の在地領主である林氏第四代の林六

郎光明の五男基光（横江七郎基光）が横江に移り、以降三代にわたり居住したことがわかる。浅香年木氏の研究によれば、横江七郎基光は12世紀から13世紀初頭に活躍した人物と考えられ、その子孫と本遺跡は何らかの関連をもつとの想定もできる。

いずれにしても館跡に類する性格をもつ本遺跡の位置づけは、北野博司氏が指摘しているように松任平野で15世紀を中心にして館跡に類する性格をもつ遺跡群（本遺跡、宮保館跡、宮保光明寺跡、笠間賢徳寺跡がある。また宮永保治川遺跡では15世紀を中心とする時期に従来の堀跡と主軸線を異にする堀跡が検出されている。）を出現させる歴史的背景を視野に入れて考える必要がある。現在のところ県内の館跡に類する遺跡については、その定義、分類、分布、歴史的位置づけ等未解決な問題が多く残されている。本稿が不十分な内容ながらも、その解決の一助になれば幸いである。

註

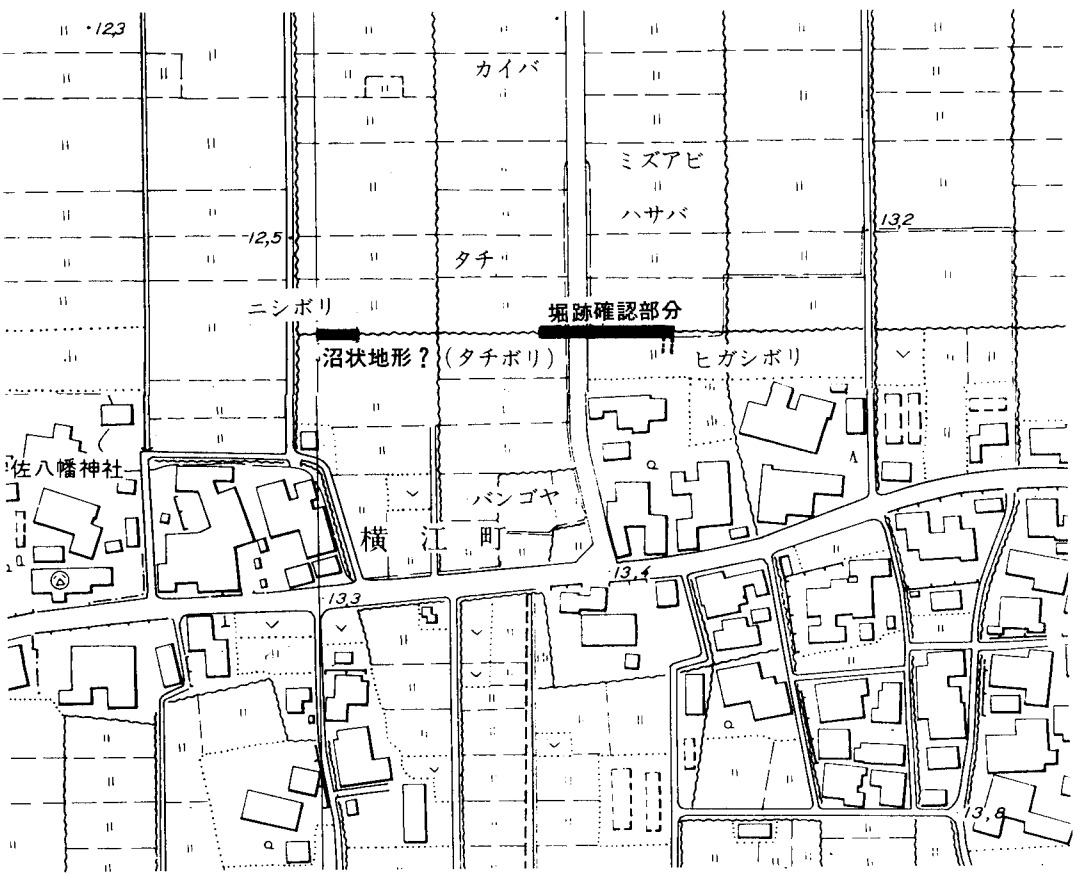
(1) 松任市教育委員会木田清氏より御教示いただいた。

引用・参考文献

浅香年木『古代地域史の研究』法政大学出版局　1978

北野博司・三浦純夫『宮保遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター　1991

清水隆久『横江史』石川県松任市横江町　1961



第98図　横江館跡周辺の小字名（『横江史』に一部加筆）（S＝1/2500）

図　　版

図版1　昭和61年度調査その1

(1)　遺跡遠景（北西から）

(2)　南調査区全景（南から）

図版2　昭和61年度調査その2

(1)　南調査区第2号溝（北から）

(2)　南調査区第4号溝（南から）

図版3　昭和62年度調査その1

(1)　包含層掘り下げ状況（西から）

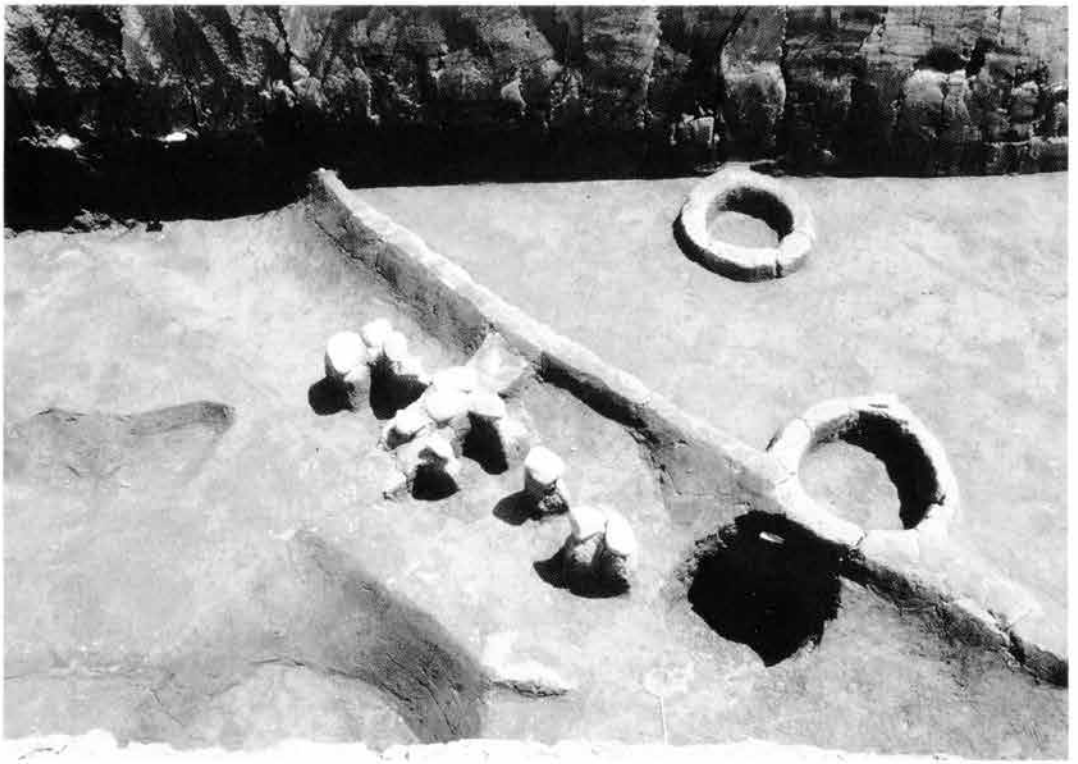
(2)　遺構検出状況（西から）

図版4　昭和62年度調査その2

(1)　遺構掘り下げ状況

(2)　3号溝他完掘状況

図版5　昭和62年度調査その3



(1)　5号溝完掘状況

(2)　7号溝完掘状況

図版6　昭和62年度調査その4

(1)　1号住居跡掘り下げ状況（西から）

(2)　1号住居跡遺物出土状況

(1)　拡張区作業状況（西から）

(2)　1号住居跡拡張状況（東から）

図版8　昭和62年度調査その6

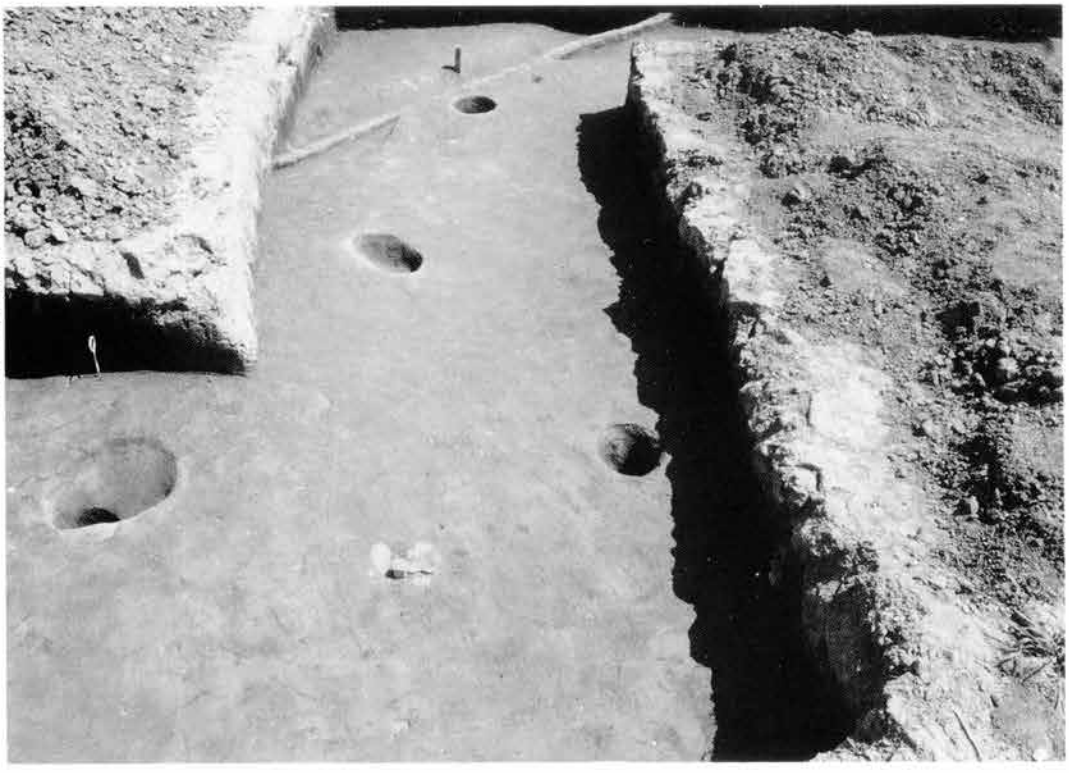
(1)　1号土坑他完掘状況（西から）

(2)　1号土坑土層断面

(1)　1～8区完掘状況（西から）

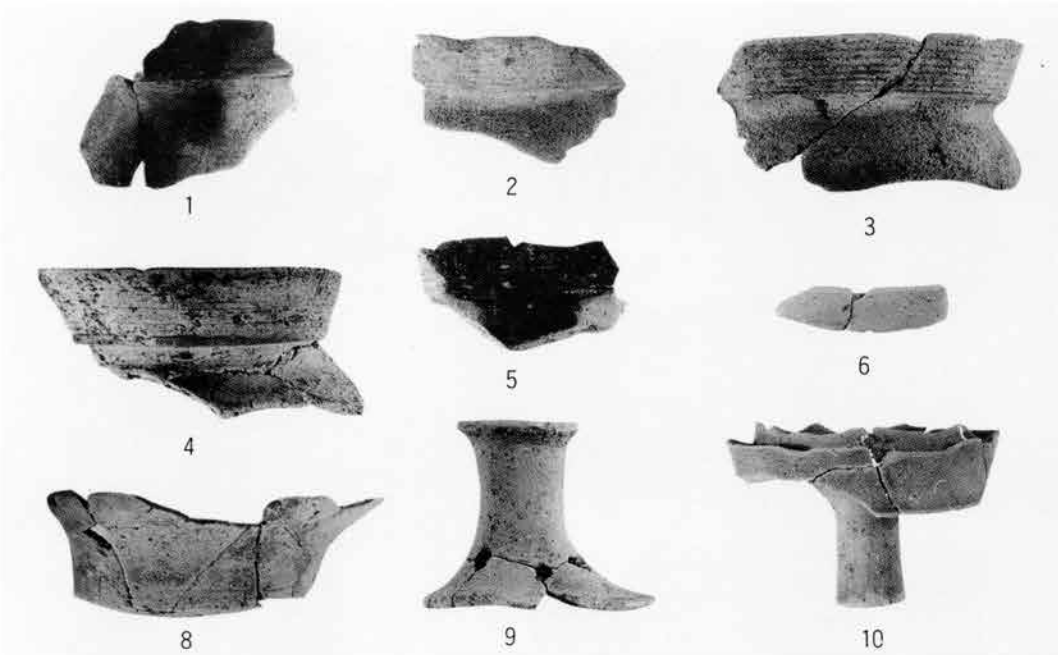
(2)　1～8区完掘状況（東から）

図版10　昭和62年度調査その8

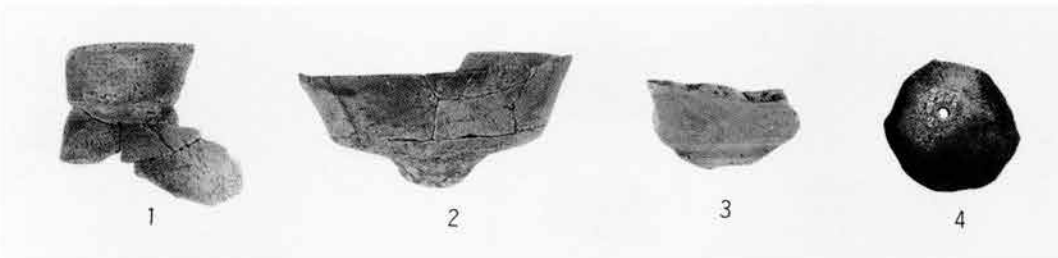


(1)　9区完掘状況（南から）

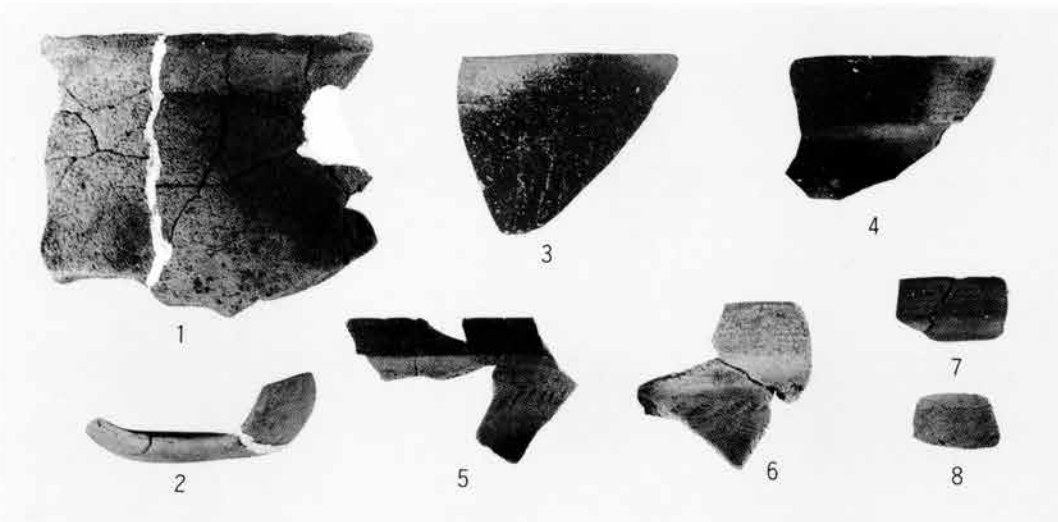
(2)　10・11区完掘状況（東から）



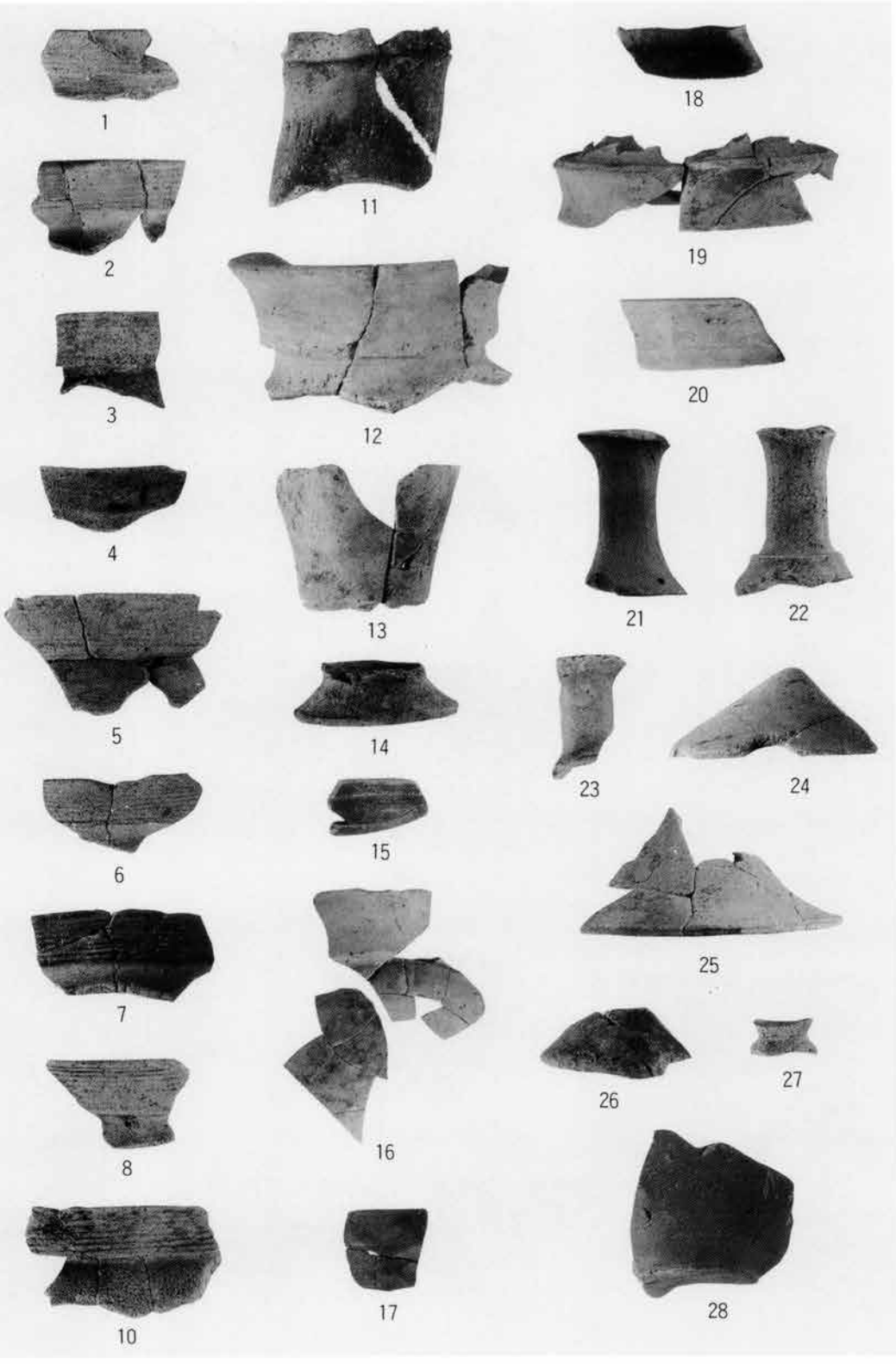
(1)　出土遺物1（第14図　1～10）



(2)　出土遺物2（第16図　1～4）



(3)　出土遺物3（第18図　1～8）



(1)　出土遺物４（第19･20図　１～28）

図版13　昭和63年度調査その1

(1)　横江C・横江荘遺跡周辺の航空写真(平成元年撮影)

図版14　昭和63年度調査その2

(1)　昭和63年度の発掘地点遠景（東南東から。1991年7月撮影）

(2)　横江荘荘家跡地点と上荒屋地区（東南から。1991年7月撮影）

(1)　横江Ｃ遺跡１～３トレンチ遠景（北東から）

(2)　横江Ｃ遺跡２トレンチ　ＳＸ１（南から）

(1)　横江C遺跡4トレンチ　SK1（北から）

(2)　横江C遺跡5トレンチ　SB1（南から）

(1)　横江C遺跡2トレンチSX1発掘風景（南から）

(2)　同、2トレンチSX1土器出土状況（南々東から）

(3)　同、1トレンチSK2（南から）

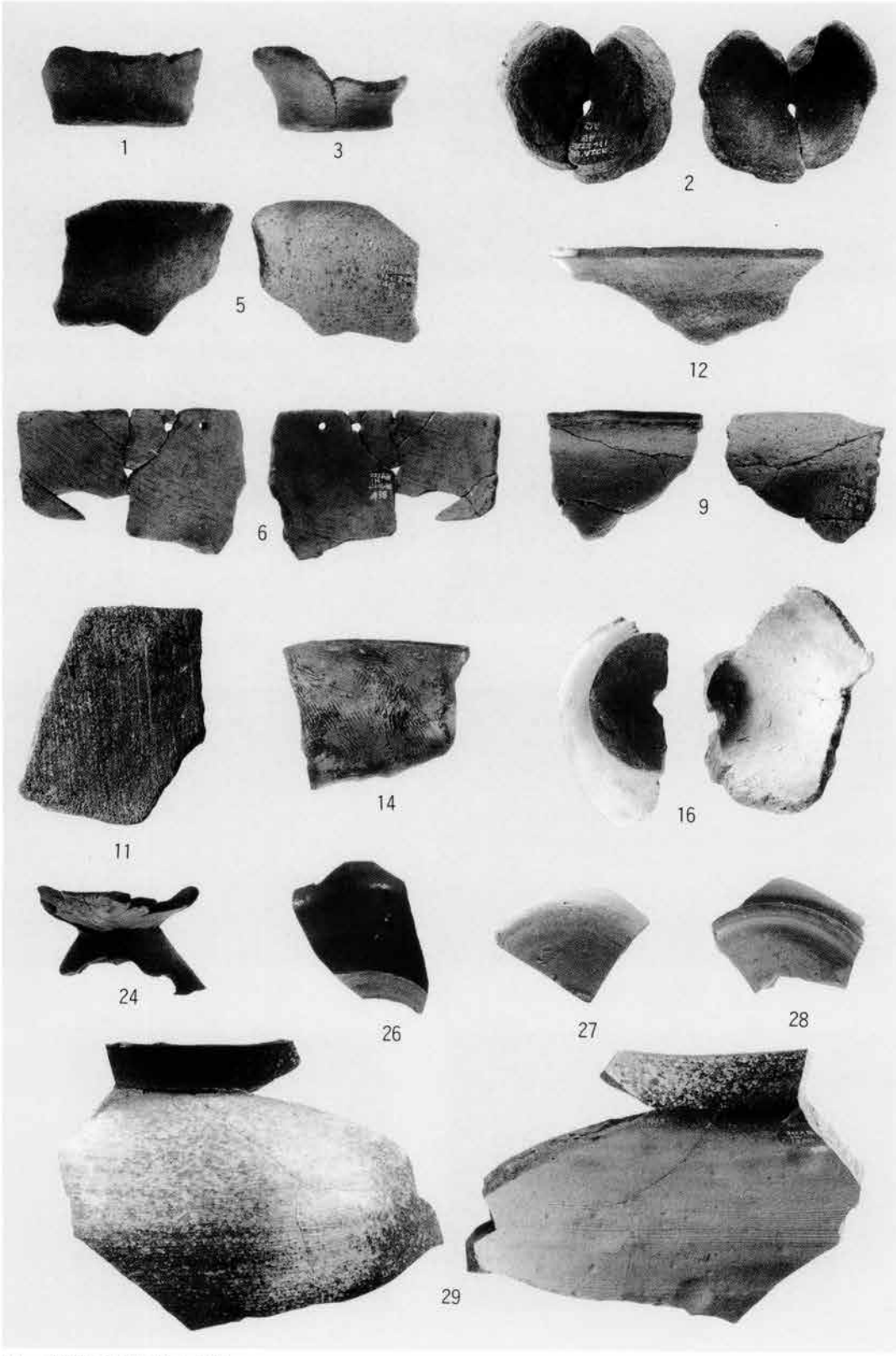
(4)　同、1トレンチSK4（東から）

(5)　同、5トレンチ発掘風景（南から）

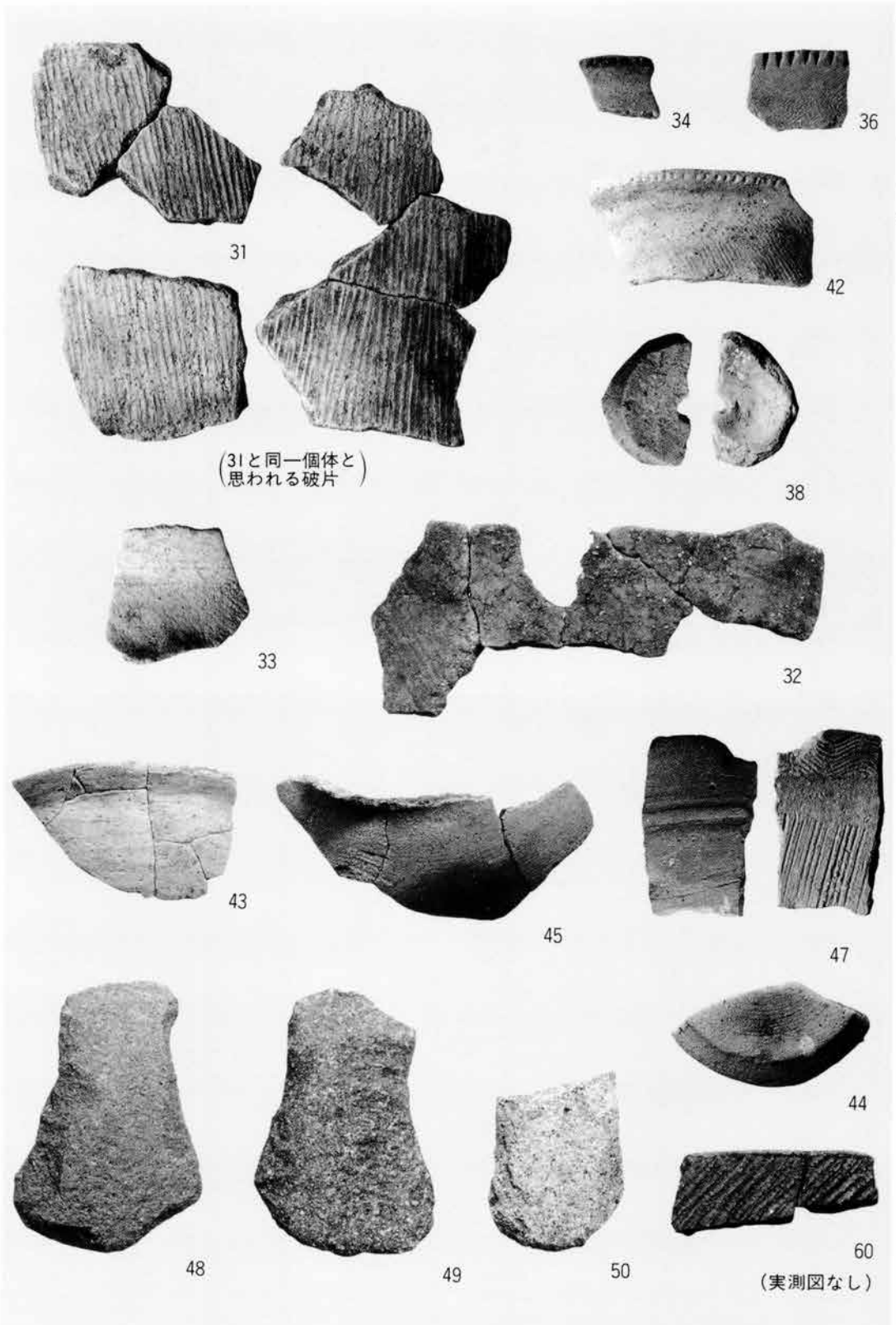
(6)　同、5トレンチSB1（東から）

(7)　同、7トレンチ表土掘削状況（南から）

(8)　同、6トレンチ表土掘削状況（南から）

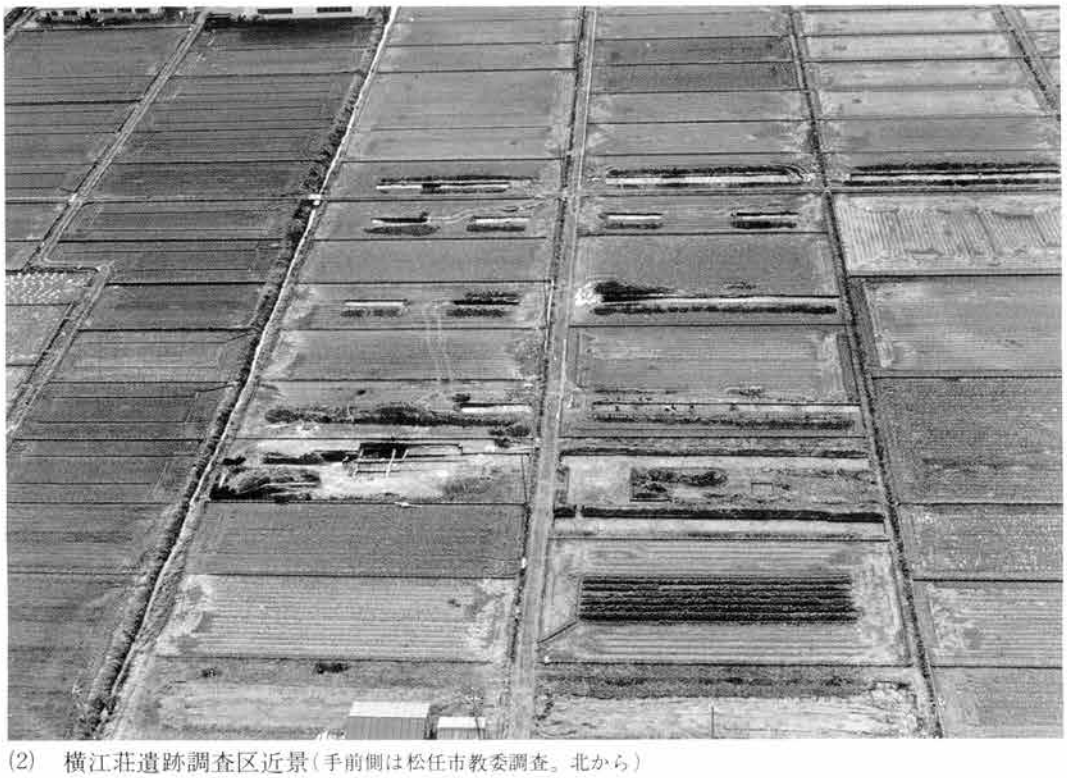


(1)　横江C遺跡出土遺物1



(1)　横江C遺跡出土遺物2

(1)　横江荘遺跡調査区周辺の航空写真（東西から）



(2)　横江荘遺跡調査区近景（手前側は松任市教委調査。北から）

(1)　横江荘遺跡 1 トレンチ遺構検出状況（東から）

(2)　横江荘遺跡 2 トレンチ遺構検出状況（西から）

(1)　横江荘遺跡 3トレンチ遺構検出状況(西から)

(2)　横江荘遺跡 4トレンチ遺構検出状況(東から)

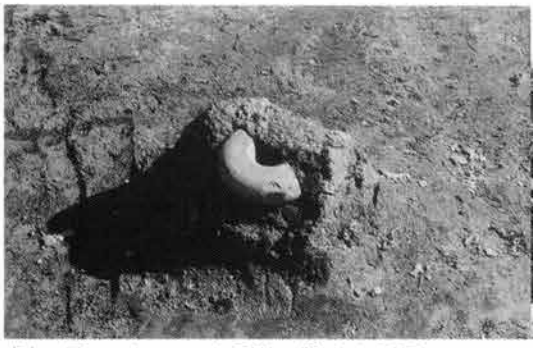
(1)　横江荘遺跡 5トレンチ遺構検出状況（西から）

(2)　横江荘遺跡 6トレンチ遺構検出状況（東から）

図版24　昭和63年度調査その12

(1)　横江荘遺跡表土掘削作業

(2)　同、2トレンチ遺構精査・断ち割り作業



(3)　同、2トレンチ環状石器出土状況

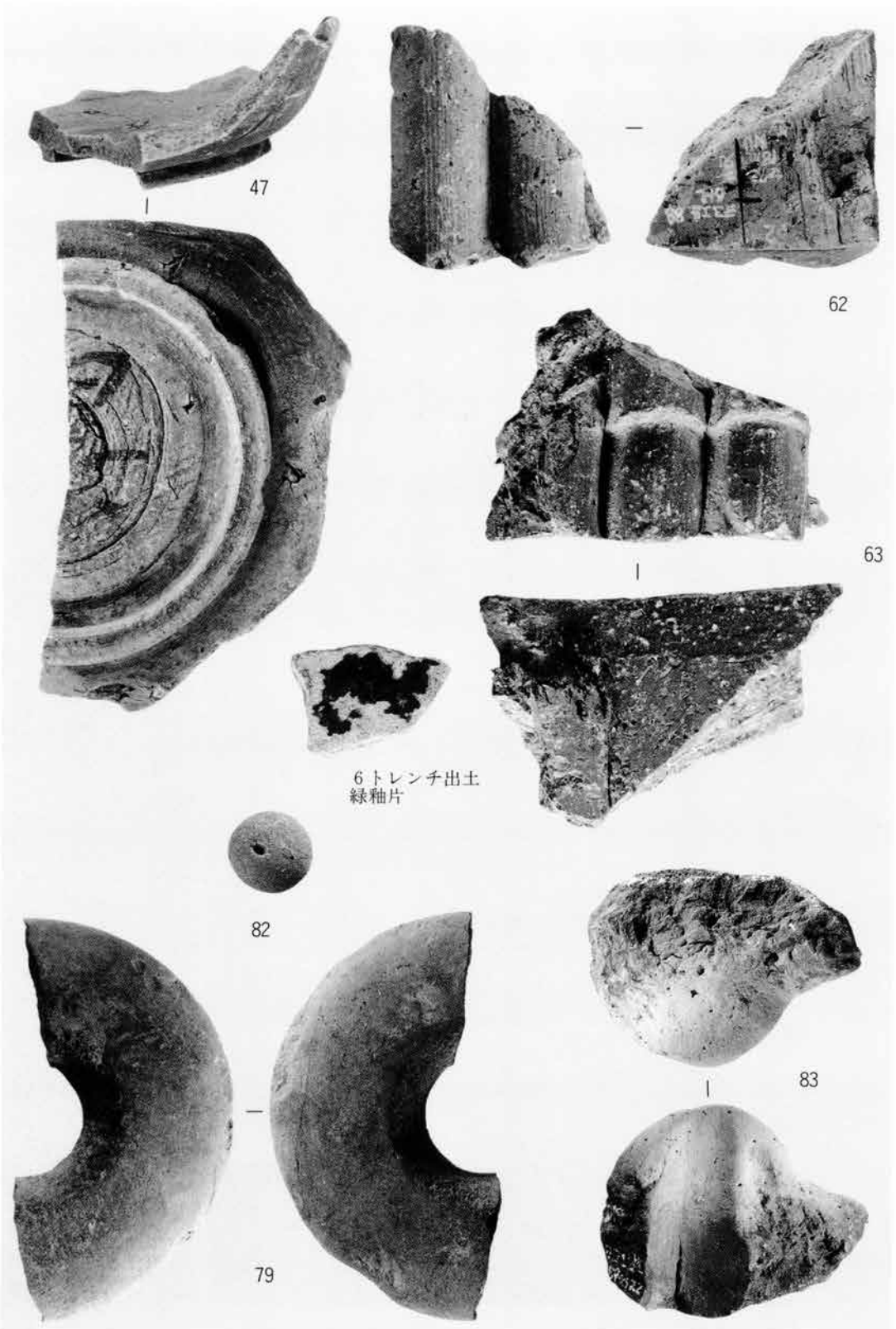
(4)　同、雪中での作業風景

(5)　同、1トレンチ西端断ち割り

(6)　同、5トレンチ北壁

(7)　同、埋めもどし作業

(8)　同、埋めもどし作業



(1)　横江荘遺跡出土遺物

(1)　西トレンチ完掘状況（北から）

(2)　東・南トレンチ航空写真（北から）

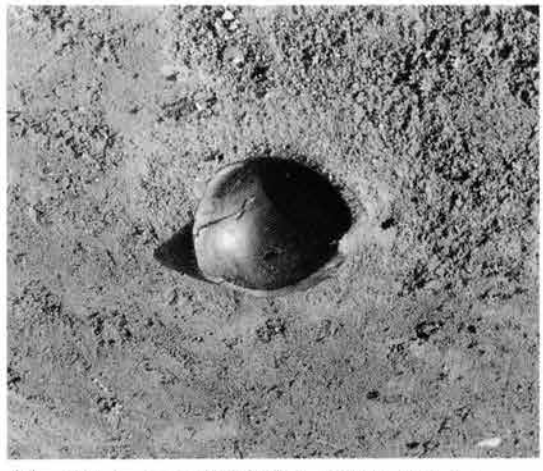
(1)　東トレンチA・B区完掘状況（南から）

(2)　東トレンチB区1号室状遺構完掘状況（南から）

(1)　東トレンチ表土掘削風景

(2)　東トレンチB区完掘状況（南から）

(3)　東トレンチC区完掘状況（南から）



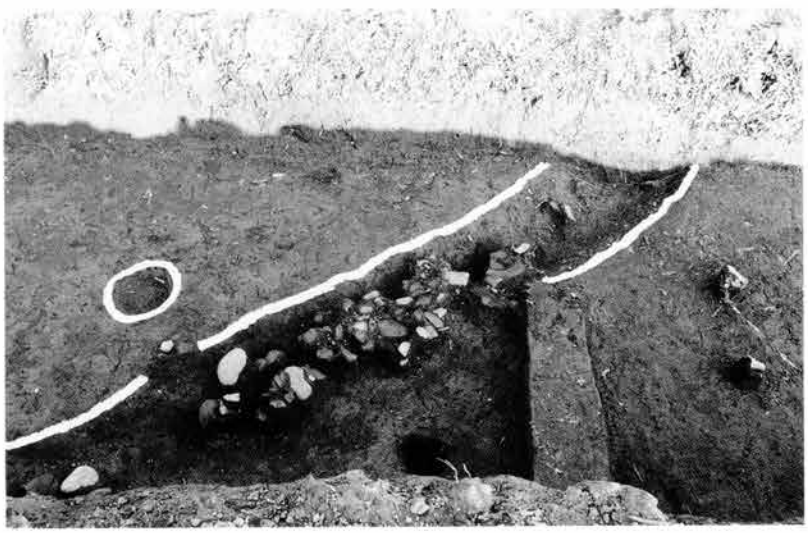
(4)　東トレンチD区漆椀出土状況（東から）

(5)　東トレンチE区完掘状況（南から）

(6)　東トレンチF区完掘状況（北から）

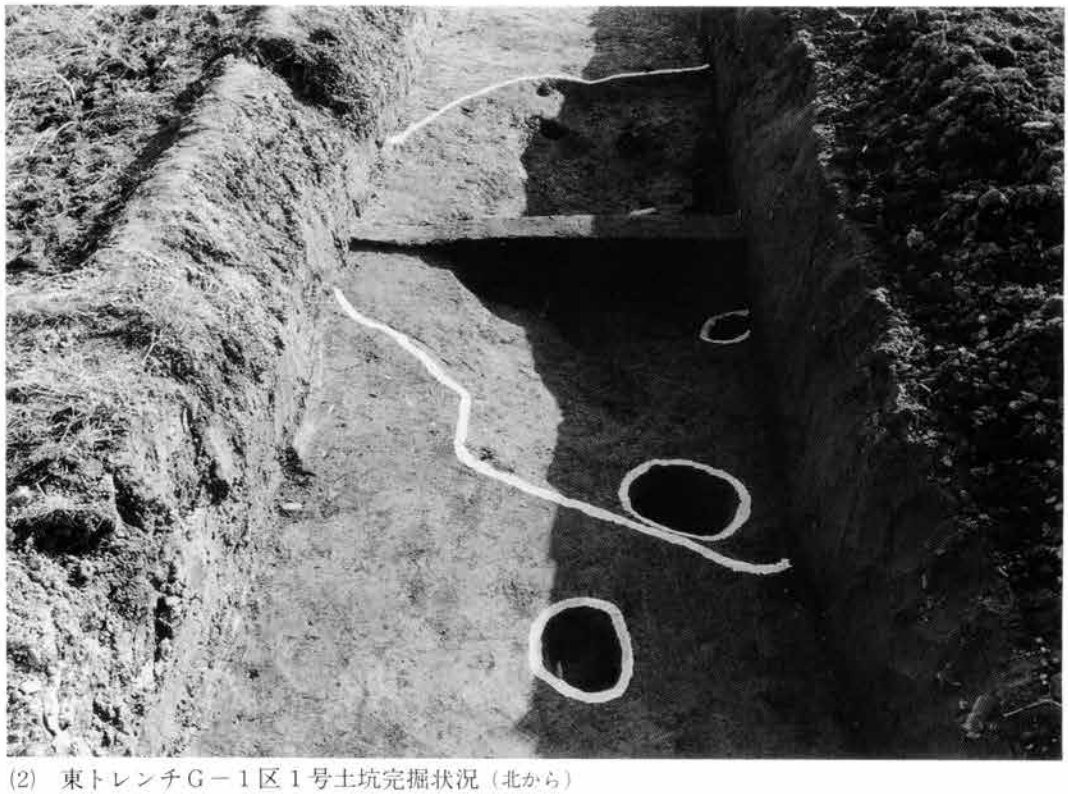
(1)　東トレンチG－1区
4号大溝完掘状況
（南から）

(2)　同　　上（東から）



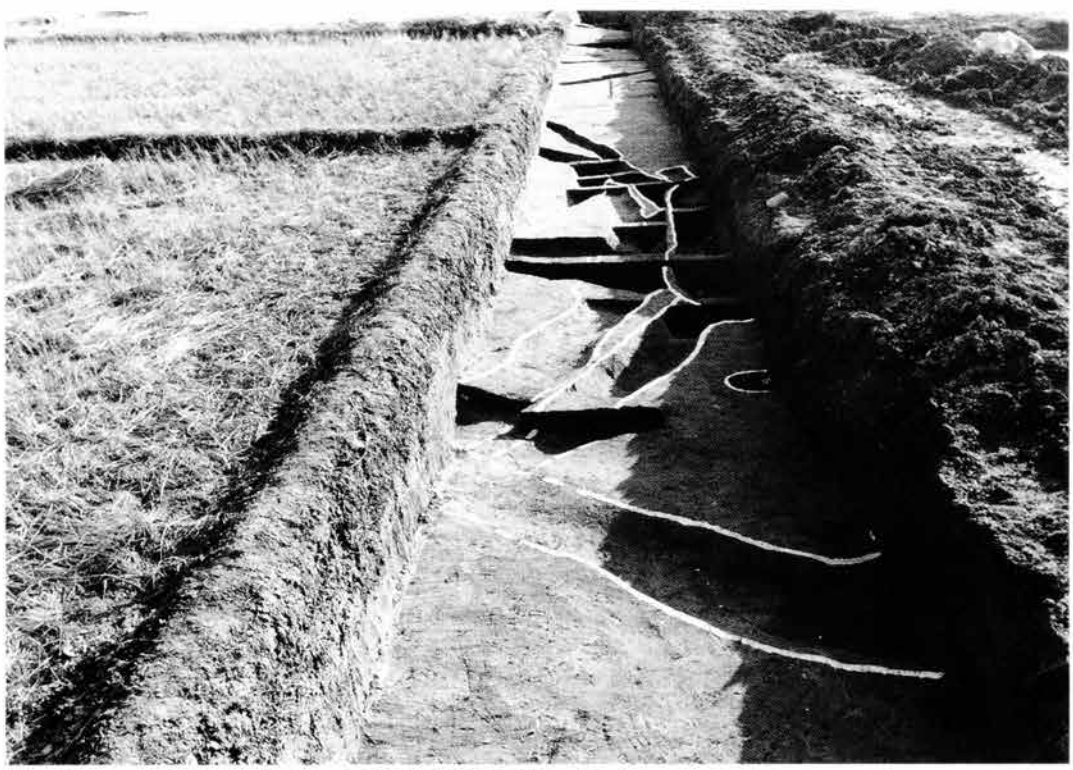
(3)　東トレンチG-1区
9号溝遺物出土状況
（東から）

(1)　東トレンチG－1区 9号溝完掘状況（北から）



(2)　東トレンチG－1区 1号土坑完掘状況（北から）

(1)　東トレンチG－1区1・2号溝完掘状況（北から）



(2)　東トレンチG－2区3～7号溝付近完掘状況（北から）

(1)　東トレンチG－2・3区8号溝完掘状況（北から）

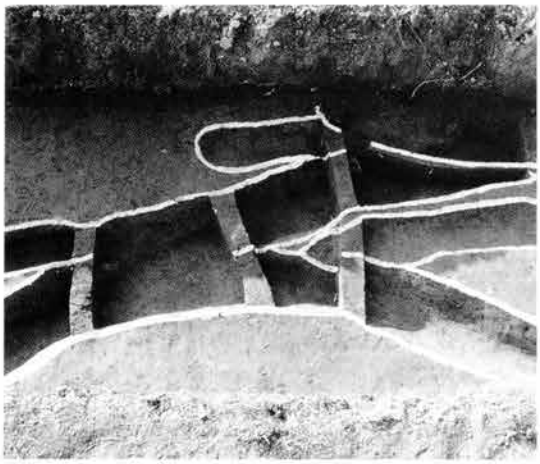
(2)　東トレンチG－3区10～13号溝完掘状況（北から）

(1)　東トレンチG－3区1号大溝遺物(下層上面)出土状況(北から)

(2)　東トレンチG－3区1号大溝完掘状況（東から）

(1)　東トレンチＧ－３区１号大溝完掘状況（北から）

(2)　東トレンチＧ－４区２号大溝完掘状況（南から）



(1)　東トレンチG－2区3～6号溝（東から）

(2)　東トレンチG－2区8号溝（北から）

(3)　東トレンチG－3区1号大溝遺物出土状況（東から）

(4)　同　　左　（北から）

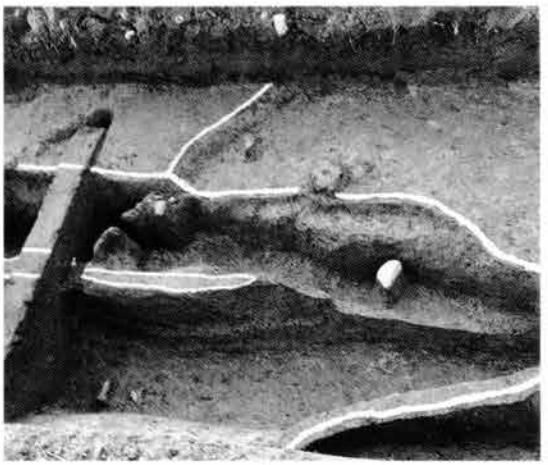
(5)　東トレンチG－4区2号大溝（北から）

(6)　東トレンチG－4区24号溝（東から）

(1)　東トレンチＧ－４・５区３号大溝完掘状況（北から）

(2)　東トレンチＧ－６区15号溝付近完掘状況（北から）

(1)　東トレンチG－4区15･17号溝（南から）



(2)　東トレンチG－4区280m土器集中地点（東から）

(3)　東トレンチG－5区15･18号溝（南から）

(4)　東トレンチG－5区15･18号溝（北から）

(5)　東トレンチG－6区15号溝遺物出土状況（北から）

(6)　東トレンチG－6区15号溝（北から）

(1)　南トレンチ
B区完掘状況(西から)

(2)　南トレンチ
D区作業風景

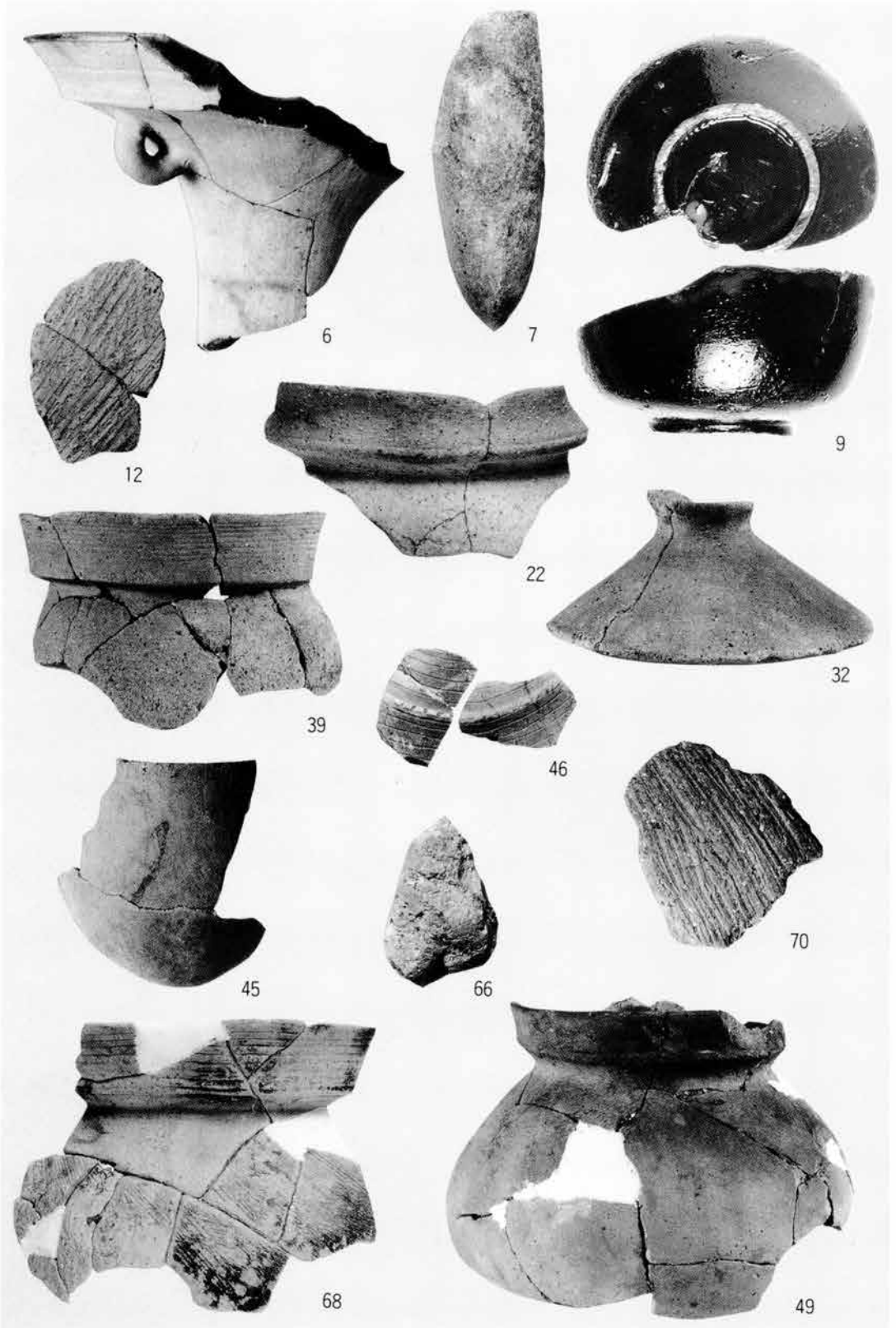
(3)　南トレンチD区
掘跡西端土層断面

(1)　南トレンチC区堀跡東端検出状況（西から）

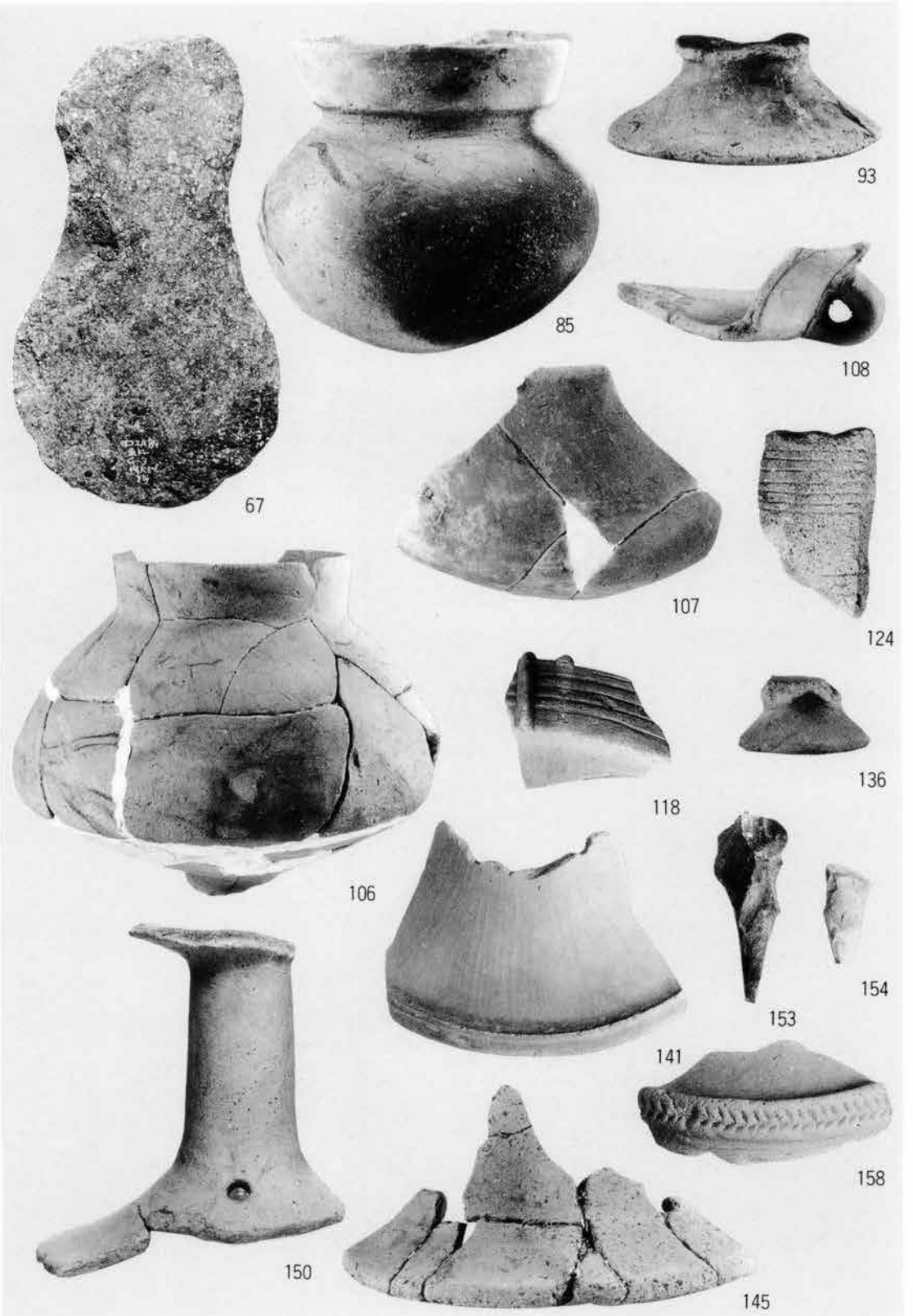
(2)　南トレンチD区堀跡遺物出土状況（西から）

(1)　南トレンチD区堀跡完掘状況（西から）

(2)　同　　上　（東から）

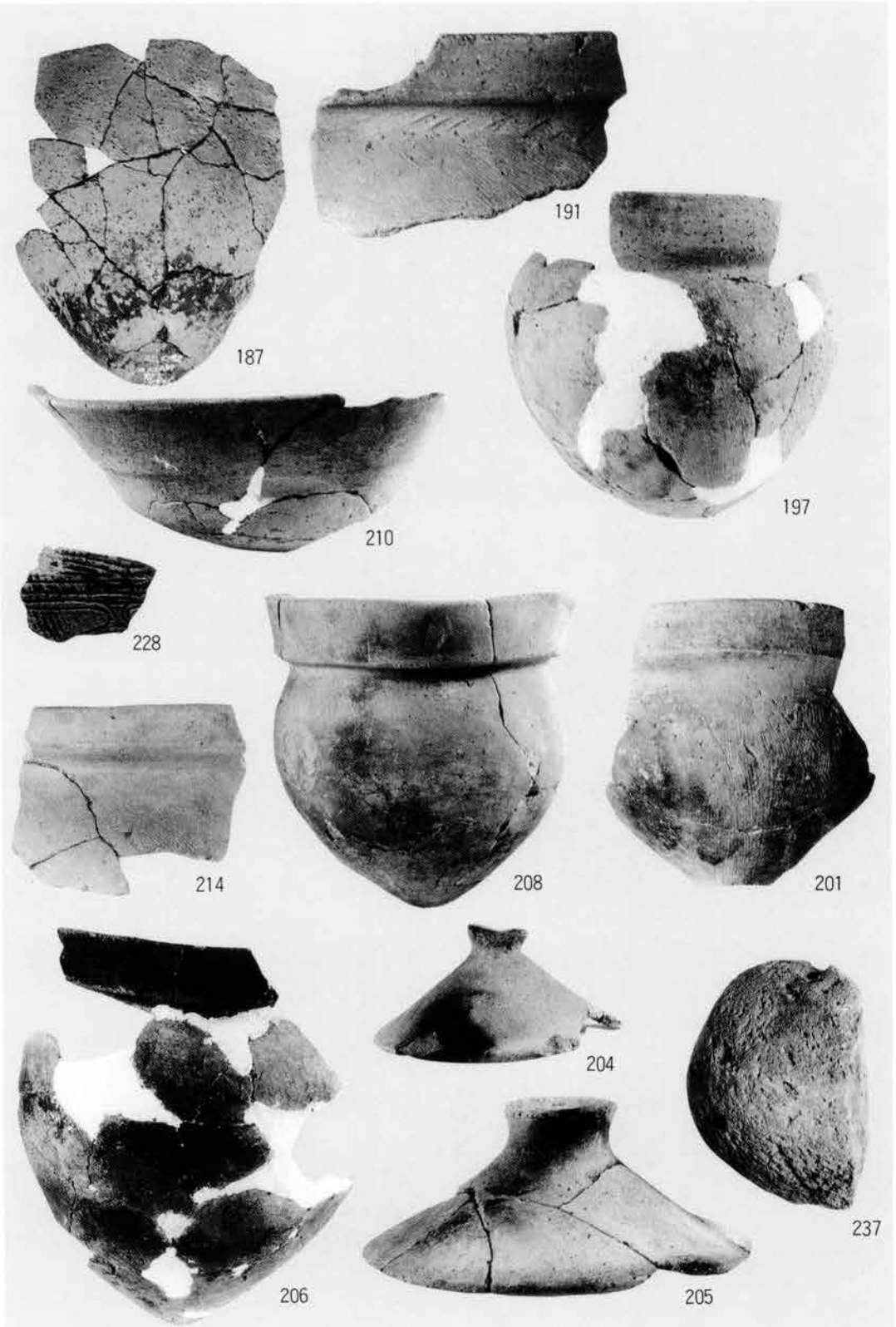


(1)　東トレンチ出土遺物１（縮尺不同）

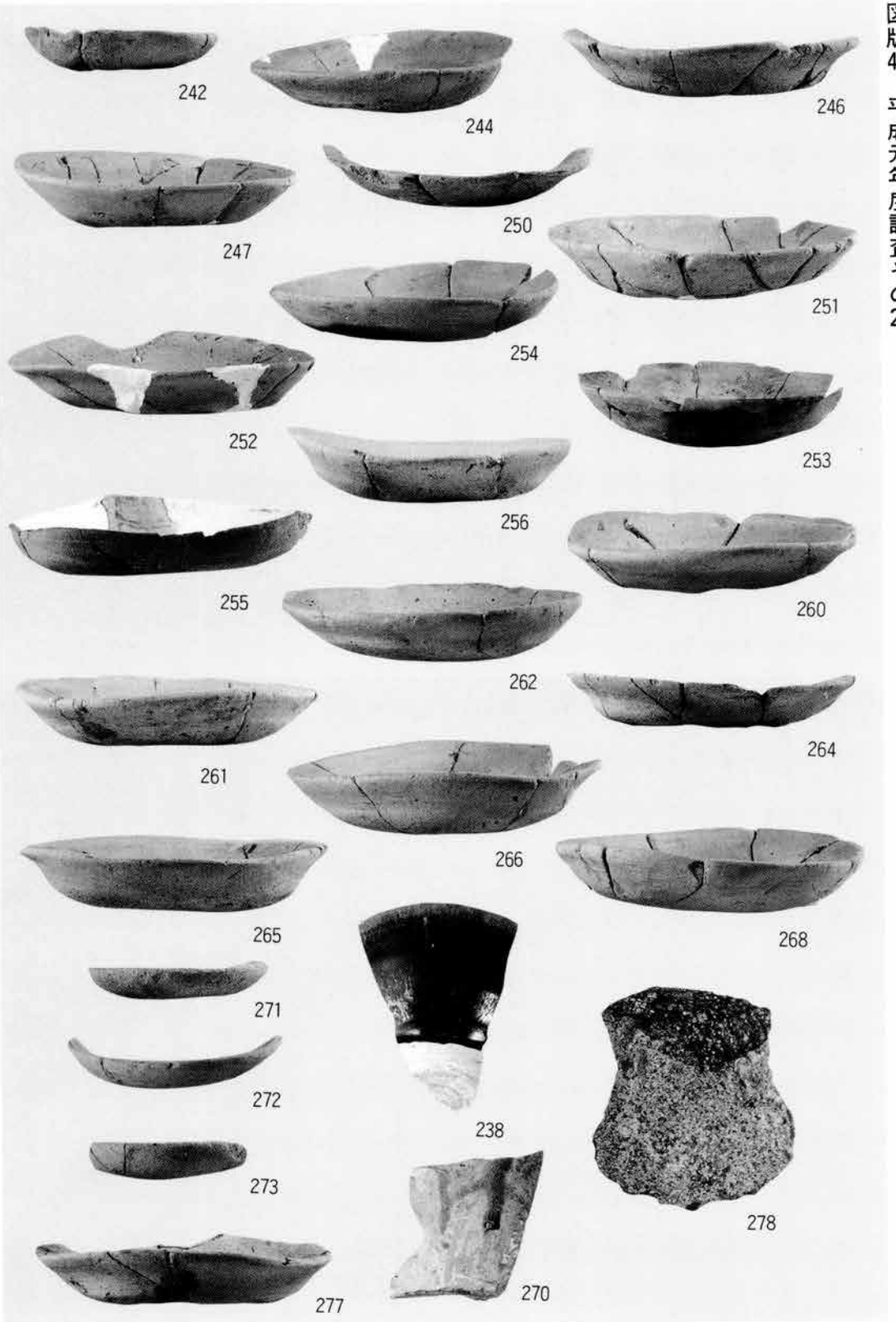


(1)　東トレンチ出土遺物２（縮尺不同）

(1)　東トレンチ出土遺物３（縮尺不同）



(1)　東トレンチ出土遺物４（縮尺不同）



(1)　南トレンチ出土遺物（縮尺不同）

(1)　調査区全景航空写真（北から）

(2)　調査区全景図（東から）

図版47　平成2年度調査その2

(1)　完掘状況（東から）

(2)　F区堀跡東端完掘状況（北から）

図版48　平成2年度調査その3

(1)　表土掘削状況

(2)　F区1号土坑
完掘状況
（北から）

(3)　H区完掘状況
（東から）

横　　江

平成 4 年 3 月 30 日 印刷・発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町 4 丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番㈹

印　　刷　北國書籍印刷株式会社

©石川県立埋蔵文化財センター　1992